

河川 2 (Fig.145) 河川 2 は E 地区の北端部に沿って、東から西へ流れている。後述する F 地区の河川 5 と同一流路の可能性があるが、地区境付近で上層に時期の新しい河川が重複しているので推定の域を出ない。E 地区の北東端では、次項で述べる河川 3 が上部に重複している。

河道の幅は、河川 3 等との複雑な重複関係があることや、調査区の外側に本来の流域が予想されることなどから、不明である。調査区内で知り得た最大幅は、約 6 m である。深度も同様に正確なものではないが、約 1.5m を測る。

検出面は、E 地区内においては茶褐色系のシルト（基本層序の第Ⅳ層、マンガン斑がかなり密集している）、もしくは明黄褐色粘質土（基本層序の第Ⅲ層）の上面である。堆積層は砂礫で構成されているが、ほとんどが灰褐色を呈する砂礫層である。ただし、下部には薄いシルト層をはさんで、灰色～青灰色の砂礫層が若干存在する。

遺物は、かなりローリングを受けた状態のものが出土しているが、最下層から、手持ちヘラケズリを施した須恵器の小型塊が出土しており、河川 2 の形成時期は 5 世紀の中頃に比定される。

河川 3 (Fig.145) 河川 3 は E 地区の北東端部で検出されているが、かなり極端な蛇行をしているために流域のほとんどが調査区の外側にある。しかも、前項の河川 2 と同様に上層に時期の新しい河川が重複しているので、本来の河川 3 の堆積物というものはほとんど残存していない。

河道の幅も、河川 2 と同様の複雑な重複関係があることや、調査区の外側に本来の流域が予想されることなどから、不明である。調査区内で知り得た最大幅は、約 7 m である。深度も同様に正確なものではないが、約 1.5m を測る。

検出面についても、河川 2 と同様に茶褐色系のシルト（基本層序の第Ⅳ層、マンガン斑がかなり密集している）、もしくは明黄褐色粘質土（基本層序の第Ⅲ層）の上面である。堆積層は砂礫で構成されているが、ほとんど河川 2 に削剥されていて詳細は不明である。ただし、下部の灰色～青灰色の砂礫層は若干ではあるが遺存している。

遺物は、磨滅していく細部がよく観察できないものが多いが、最下部の砂礫層から出土したものなどから、河川 2 とほぼ同時期の 5 世紀の中頃に形成されたと考えられる。

河川 4 (Fig.145,154) 河川 4 は E 地区の 3 E ～ 4 E トレーナーで検出されている。3 E トレーナーでは、前述した河川 2 と河川 3 の上部で重複して貢流している新しい時期の河川に、4 E トレーナーでは、河川 2 に切られている。

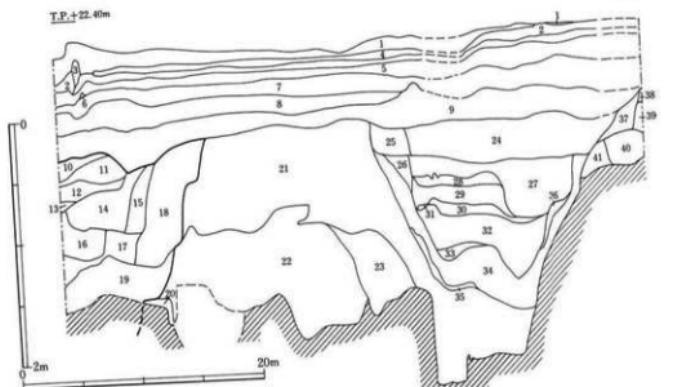
河道の幅は約 4 m を測り、その深度は検出面から約 1.3m を測る、比較的小規模な流路である。

E 地区の北側壁面の断面図 (Fig.154) によれば、層番号 15 (灰色砂礫)、16 (暗灰色砂)、17 (暗灰色シルト)、18 (茶褐色砂礫)、19 (オリーブ灰色砂) が残された堆積層にあたる。層番号 21～23 は河川 2 の堆積層であり、24～35 は河川 2 より 3 を切る新しい時期の河川堆積物である。

他の河川との重複関係がない部分では、検出面となっているのは基本層序の第Ⅳ層（灰褐色シルト、マンガン斑が濃密に含まれる）上面である。

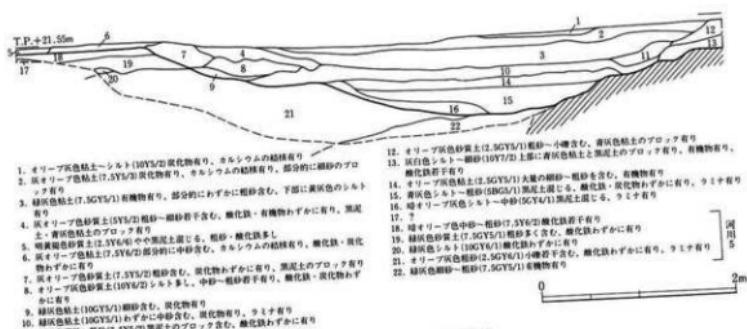
これらの河川はすべて層番号 9 の下層で検出されていることがわかる。つまり、上層が堆積する過程で顕著な削平が行われていなければ、同一遺構面上での検出という点において、これらの河川に同時期性があると考えられる。河川 4 の下層は縄文時代晚期頃の河川と重複していることなどを勘案すると、遺物は確認されていないが、弥生時代～古墳時代中期の間にその形成時期を求めるべきである。また、同一面で検出された溝には須恵器などと混じって、庄内期の土器も含まれ、さらに限定できる可能性がある。

## 1. 河川



1. 地土  
2. 砂地土  
3. 2の地土上、現代の畔  
4. 旧畔上  
5. 旧畔上  
6. 黄褐色砂土、砂粒有り、酸化鉄有り、堅くしまる。畔の土  
7. 茶褐色砂質土 基本地土上、砂粒の降下多し、網状の酸化鉄非常に多い。  
8. 喀灰色粘土 硅酸を含む。網状の酸化鉄有り  
9. ?  
10. 喀灰色粘土 小礫若干有り、酸化鉄斑状に有り  
11. 黄褐色シルト ラミナ有り  
12. 黑灰色粘土 砂粒若干有り  
13. 黑灰色粘土 砂粒多し  
14. ?  
15. 黄褐色粘土 酸化鉄有り  
16. 黄褐色砂 地中一中砂  
17. 喀灰色粘土 砂粒有り、弱透視  
18. 茶褐色砂土 酸化鉄有り、地中一細砂、ラミナ有り、水平に10cm  
19. オリーブ色砂土 シルト混入、地中一細砂、ラミナ有り、水平に10cm  
サンドしている。下部は喀灰色粘土、その下は輝屈  
20. 黄褐色土 地上部は喀灰色粘土、その下は喀灰色粘土、その下は青灰色  
21. 喀灰色シルト 地中一細砂、泥化物など含む、水平堆積  
22. 黄褐色土 下部の堆積多し、水平堆積。下部は青灰色  
23. 黄褐色 地下で鐵を含む、斜面積  
24. 黑灰色粘土、粗砂をわずかに含む、網状の酸化鉄若干有り、斑点状の酸化鉄  
が上部と中部に間接的有り  
25. 喀灰色粘土、砂粒上部多  
26. 黄褐色 地中一細砂、砂粒を含む  
27. 黑褐色砂土、有機土、上部に粗砂多し、淡青灰色シルト、青色粘土等のブ  
ロックをわずかに有り、泥化物有り  
28. オリーブ色シルト、ラミナ有り  
29. 黑褐色粘土、有機土、オリーブ色シルト、暗青褐色土のブロック有り  
30. 黑褐色シルト シルトを多く含む。ラミナ有り、網状酸化鉄わずかに有り  
31. 黄褐色シルト 泥化水成土  
32. 暗青灰色シルト、ラミナ有り、黑褐色有機土混じり、中砂一細砂のブロック  
有り  
33. 黄褐色シルト 酸化鉄若干有り  
34. 黄褐色砂  
35. 黄褐色粘土  
36. ?  
37. 暗青色シルト 斜面積の酸化鉄のしき(根掛による)有り  
38. 黑褐色粘土 こまかいマンガン粒、斑点状の酸化鉄若干有り  
39. 黄褐色粘土上  
に斜面積にまきまきのマンガン粒、斑点状の酸化鉄若干有り  
40. 喀灰色粘土 斑点状の酸化鉄若干有り、ラミナ、泥化物有り  
41. 喀灰色粘土 斜面積の酸化鉄有り

Fig. 154 E地区 河川4断面 (縮尺変換縦1/40・横1/400)



1. オリーブ色粘土シルト (10YS/2) 泥化物有り、カシラムの結構有り  
2. 黄褐色粘土 (17.5YS/2) 泥化物有り、カシラムの結構有り、部分的に細砂のブロ  
ック有り  
3. 黄褐色粘土 (5GY5/1) 泥化物有り、部分的にわずかに粗砂含む、下部に黄褐色のシルト  
有り  
4. 黄褐色シルト (5GY5/1) 斜面積一細砂粗粒一粗砂有含む、酸化鉄、有機物わずかに有り、黒泥  
土、青灰色シルトのブロック有り  
5. 黄褐色粘土 (3.5Y6/2) 地中一粗砂有  
6. 黄褐色粘土 (17.5Y6/2) 斜面積上部に粗砂含む、粗砂、酸化鉄多  
7. オリーブ色砂質土 (7.5YS/2) 泥化物有り、カシラムの結構有り、酸化鉄、泥化  
物わずかに有り  
8. オリーブ色砂質土 (7.5YS/2) シルト多し、地中一粗砂若干有り、酸化鉄、泥化物わず  
かに有り  
9. 黄褐色粘土 (10GY5/1) 泥化物有り、泥化物有り  
10. 黄褐色粘土 (10GY5/1) わずかに半砂含む、泥化物有り、ラミナ有り  
11. 白褐色砂質土 (7.5Y5/2) 黒色土のブロック含む、泥化物含む  
12. 黄褐色砂質土 (7.5GY5/1) 泥化物有り、泥化物含む  
13. オリーブ色粘土 (2.3GY5/1) 粗砂一中砂含む、青褐色粘土と黑色土のブロック有り、  
酸化鉄若干有り  
14. オリーブ色粘土 (2.3GY5/1) 地中一粗砂一粗砂を含む、灰褐色  
15. 黄褐色シルト一粗砂 (10Y7/2) 地上に青褐色粘土と黑色土のブロック有り、ラミナ有り  
16. 黄褐色砂質土 (7.5GY5/1) 泥化物有り、泥化物含む  
17. 喀灰色砂質土 (7.5GY5/1) 泥化物有り、泥化物含む  
18. 喀灰色シルト (7.5GY5/1) 泥化物有り、泥化物含む  
19. 緑褐色砂質土 (7.5GY5/1) 泥化物有り、泥化物含む  
20. 緑褐色砂質土 (7.5GY5/1) 泥化物有り、泥化物含む  
21. オリーブ色砂質土 (5GY5/1) 泥化物有り、泥化物含む  
22. 黄褐色砂質土 (7.5GY5/1) 泥化物有り

Fig. 155 F地区 河川5断面

河川 5 (Fig.145,155) 河川 5 は F 地区の中央部 (15F トレンチの一部と 16F トレンチ) を北東から南西方向に貫流して E 地区に至っている。奈良時代以降の河川によって上部が浸食されているため、本来の堆積層はほんのわずかに名残を留めているに過ぎない。

河道の幅は、最大で約 9 m、最小で約 6 m を測る。深度は検出面から、約 1 m を測る。

検出面は、黄橙色～暗茶褐色を呈する粗砂あるいはシルト層の上面で、基本層序の第Ⅳ層に該当する。

河川内の堆積物は、断面図 (Fig.155) の層番号 18 (暗オリーブ色中砂～粗砂)、19 (緑灰色砂質土)、20 (緑灰色シルト)、21 (オリーブ灰色粗砂)、22 (緑灰色細砂～粗砂) がそれにあたる。

遺物からは、形成時期を確定することができなかった。しかし、河川 5 の埋没直後、その上部に後述する溝 24 が形成されている。このことから、溝 24 の遺物から推定される時期、すなわち布留期の前半代以前に河川 5 が流れていったことが類推される。換言すれば、河川 5 の形成時期は古墳時代の初頭に求められるということである。

河川 5 はその流量が最大に達した時期には、E 地区にまで到達しており、河川 2 につながっていた可能性があると記述した。しかし、E 地区では深度もずいぶん浅くなっていること、河川 2 の最終堆積物に包含されていた遺物が古墳時代中期のものであることなどを考えると、やはり不確定な要素が多い。

河川 5 は比較的短期間に、15F トレンチに破壊堆積物を供給して自らの流れを止める。



Fig.156 F 地区 河川 6 断面

河川 6 (Fig.145,156) 河川 6 は F 地区の 9F、10F、12F、14F の各トレンチで断片的に検出されている。本来的に同一の流路であったという確証はないが、日々の検出状況、検出面や堆積層が非常に類似しているので一括した。北東から南西方向の調査区外へ出て、旧陶器川に合流する。

河道の幅は、12F トレンチでは約 3.7m を測る。深度は最も深い部分で約 2 m を測る。

検出面は、基本層序の第Ⅳ層で、暗灰黄色砂質土（上部にマンガン粒あり）の上面で、堆積層は、断面図 (Fig.156) の層番号 7 (明黄褐色砂)、8 (黄灰色砂)、10 (明黄褐色シルト)、11 (緑灰色粘土)、12 (明オリーブ灰色粘土)、13 (緑灰色粘土～シルト)、14 (暗オリーブ灰色粘土)、15 (暗オリーブ灰色砂) である。下部の堆積層 (10～15) は各トレンチで普遍的に見られる。遺物の詳細は不明であるが、検出面が河川 5 などと同一面であるので古墳時代前期に形成されたと考えられる。

## 1. 河川

河川 7 (Fig.145) 河川 7 は、F 地区の 15F トレンチで検出されている。基本的には河川 5 と同一方向から流入してきているが、河川 5 の形成した破堤堆積物に遮られ、ほぼ直角に方向を転換している。そして、蛇行した先の河川 6 の上層を浸食して、調査区外へと流れている。河川 6 との重複における先後関係はさほど明確ではなく、概ね同時期に流れていたと考えられる。

河道の規模は、河川 5 とはほぼ同じで、最大幅約 9m、最小幅約 6m、深度約 1m を測る。

検出面は、他の F 地区内の古墳時代河川と同様に、基本層序の第Ⅳ層である。しかし、やや微視的に見ると、河川 7 は河川 5 の形成時期に起きた大規模な洪水によって、あるいは河川 5 によってもたらされ、数次にわたる小規模な堆積作用を繰り返した粗砂～シルト層の上面から検出されており、付近では最新の流路であることがわかる。

遺物は、堆積層の最下部で 6 世紀代の須恵器が出土しており、河川 7 の形成時期は古墳時代後期にあたる。これは、河川 5 等との重複関係からわかる時期とも矛盾しない。後述する河川 8 の上層が、この時期にあたることから、その一支流である可能性も考えられる。

河川 8 (Fig.145, 157, 197, 198) 河川 8 は G 地区から F 地区へ、ほぼ東西方向に流れている。検出された状況では、西へ行くにしたがって規模が大きくなり、バチ形に開いて調査区外へ展開してゆく。上部には、奈良時代以降の河川および沼底堆積、中・近世の河川が、下部には弥生時代河川、縄文時代河川というふうに多数の重複関係が認められる。

河道の幅は、最小で約 10.5m、最大で約 23.7m を測る。深度は、上部約 0.8m 程度が奈良時代以降の河川および沼底堆積となっているため、それを除くと約 0.9m。検出面からの最大値は約 2.1m を測る。

堆積層は、基本的に上下 2 層に分割できる。断面図 (Fig.157) では、18 (灰オリーブ色粗砂)、19 (灰色シルトブロック混じり砂礫)、20 (灰オリーブ色疊混じり粗砂)、21 (緑灰色極細砂)、22 (オリーブ灰色シルト)、25 (灰色疊混じり粗砂) が上層にあたり、そして、23 (灰白色粗砂) のみが下層にあたる。

上部の堆積層には、6 世紀代の須恵器が含まれている。また、下部の堆積層では 5 世紀代の須恵器が出土している。この上下 2 層は、互いに砂疊層であるため、層理面の認定は困難であったが、それぞれの遺物が出土する位置が堆積層底部であり、間に無遺物の粗砂層を挟むので遺物群としての時期の一括性は確実に認められる。3G トレンチでは、南側肩部斜面に庄内期の土器がまとまって出土している。

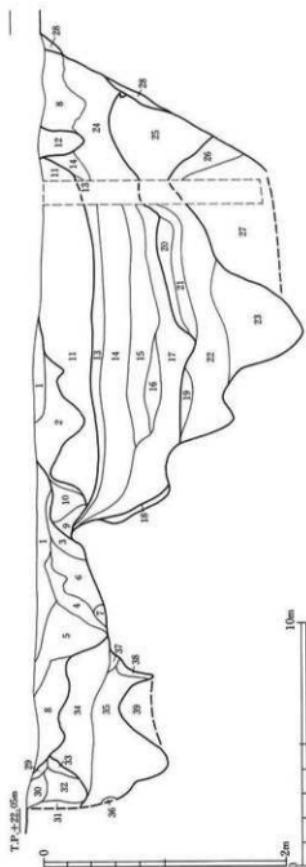
上層が完全に埋没してしまう前には、10G トレンチ、12G トレンチの 2ヶ所でしがらみが営まれている (Fig.197, 198)。これらのしがらみは近接する溝に導水する施設として、古墳時代以降、当調査区内で開発が活発化する兆候を示している。

河川 9 (Fig.145) 河川 9 は、H 地区の 1H トレンチと 2H トレンチにまたがって検出された、北東から南東方向へ流れれる比較的大規模な流路である。しかし、隣接する G 地区では、検出されておらず、調査区外の北東側にあって東西に長く伸びる段丘に沿って、石津川へ合流すると考えられる。

河道の幅は約 20m を測る。検出面からの深度は約 3m を測るが、下部は弥生時代から縄文時代にいたる時期の河川と重複しており、また、上部は飛鳥時代にまでその時期が下る可能性があるので、純粋な古墳時代の河川堆積がどの程度の厚さを持っていたのかは、現状では明確ではない。

検出面は、基本層序の第Ⅴ層上面にあたり、場所によってやや異なる部分もあるが、黒褐色シルト層と灰オリーブ色シルト層の上面である。

堆積層の最上部付近では、肩部に密接して小規模な水田遺構が検出されている。



1. 長さ47m、幅1.5mの土堤。堤頂部に土手状の堤防があり、土手下部は斜面で、斜面の堤防より、土手下部プロックが不規則に入り、よりやや長い土手状の堤防の上部に沿った堤防があり、堤防の上部に沿った堤防より、土手下部プロックが尾を尾に連続する。
2. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
3. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
4. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
5. リーフ形状により、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
6. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
7. リーフ形状により、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
8. エンドリフ形状により、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
9. エンドリフ形状により、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
10. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
11. 不規則な形状の堤防がある。
12. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
13. リーフ形状により、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
14. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
15. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
16. エンドリフ形状により、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
17. エンドリフ形状により、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
18. リーフ形状により、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。

19. 長さ3.5mの土手状の堤防があり、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
20. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
21. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
22. リーフ形状により、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
23. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
24. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
25. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
26. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
27. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
28. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
29. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
30. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
31. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
32. リーフ形状により、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
33. リーフ形状により、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
34. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
35. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
36. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
37. エンドリフ形状により、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。
38. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。

39. 土手下部プロックは、T57(57/1)よりT57(57/2)の間に位置する。

Fig. 157 G地区 河川8断面（縮1/40・横1/200）

## 2. 前期の遺構

1976年に堺市教育委員会が関西電力の変電所建設とともに、G地区の隣接地を発掘調査された。この時に大量の畿内第V様式期から庄内期にかけての土器が出土している。検出された遺構は南北方向に流れる自然流路等で、後述する溝30にこの自然流路があたる可能性が非常に高い。

この調査成果に基づいて、当調査区でも当該期の遺構が多く検出されるものと期待したが、調査区内の西側、A～D地区においては皆無、E～G地区でも溝が数条と土坑が数基という希薄なものであった。

調査が進行する過程で、調査区内的自然科学的な統計成果が蓄積されると、こうした状況も当然のことと理解されるようになった。すなわち、古墳時代前期の段階ではいまだ人間生活に適さない不安定な環境であり、それを遺構という考古学的な事象からも裏付けられるということである。

ただし、幸いにもこれらの溝30をはじめとする溝群や土坑などの遺構は、埋土に大量の土器を包含していた。中には遺構の重複関係など、層位学的な見地からも、非常に緻密な当該期の土器研究に貢献できそうなものも存在しており興味深い。

### 1) 土坑

**土坑39(Fig.158,159)** 土坑39はG地区の2Gトレント南東側で検出されている。前述した河川8の南側にひろがる微高地に立地している。検出面は基本層序の第V層(青灰色シルト)上面であるが、河川8へ向かってやや落ち込んだ部分に黒灰色の粘土～シルトが堆積している部分に位置する。

平面プランは、明確に輪郭を確認できた段階では不整形な円形を呈しており、規模は最大径で約0.85mを測る。遺存していた深さは約0.25m程度を測る。断面の形状は、東側は遺構の壁面と底面が比較的明確に分離できるようあるが、西側部分ではなだらかな斜面ですりばち状に底面にいたる。埋土は、概ね上下2層に分離できる。

上層は断面図(Fig.159)によれば、層番号1の灰色粘土(青灰色シルトと暗灰色シルトのブロックを含む)と、2のオリーブ灰色細砂混じりシルト(灰色粘土ブロック若干含む)である。遺物はこの上層にのみ含まれている。下層は層番号3の灰色シルト(微砂との互層)、4の黒色シルト、5の灰色シルト、6の黄灰色細砂ブロックであるが、遺物は含まない。

検出時に遺構の輪郭がきわめて不明確であったこと、検出面より上位で土器だけがまとまって出土していることを勘案すると、本来の遺構の深度は現状より深かったものと推測される。

堆積層を詳細に検討すると、下層部分は遺構の埋土というよりは、むしろ自然堆積である可能性が考えられる。

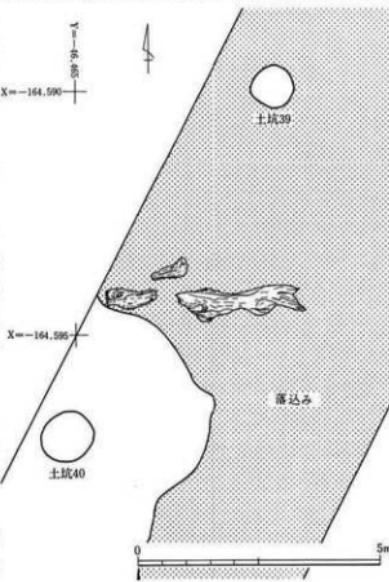


Fig. 158 G地区 土坑39・40平面

土坑40(Fig.158,160) 土坑40はG地区の2Gトレーナ東南部で検出されている。前述した土坑39とは約7m離れているが接した位置にある。規模やプランも極めて類似している。

検出面は基本層序の第V層(青灰色シルト)であり、土坑39同様、河川8に隣接した南側の微高地上に位置している。

平面プランは、長径で約1.2m、短径で約1mを測り、やや不整形な円形を呈している。遺存した深さは、約0.25mを測る。断面形状はすりばち

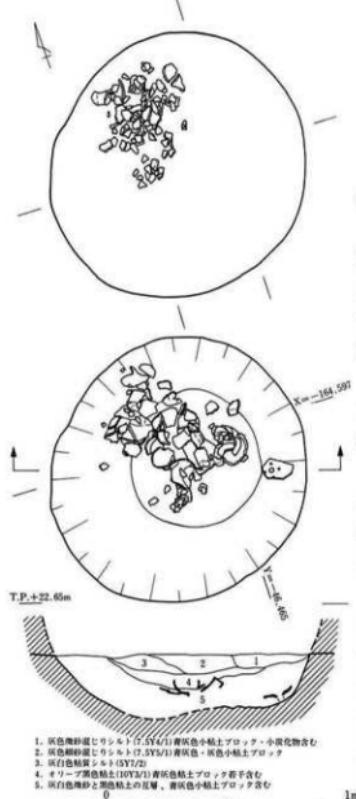


Fig.160 G地区 土坑40  
遺物出土状況および断面

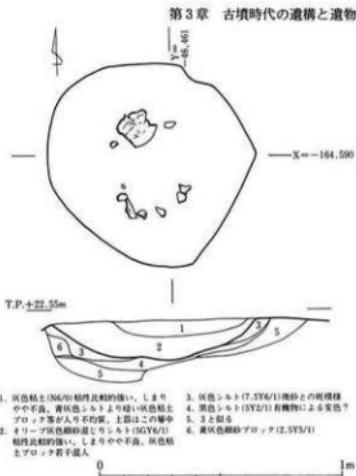


Fig.159 G地区 土坑39  
上層遺物出土状況および断面

状を呈する。

埋土も土坑39と同じく上下2層に分離できる。断面図(Fig.160)によると、層番号1の灰色微砂混じりシルト(青灰色粘土ブロック、炭化物を含む)、2の灰色細砂混じりシルト(青灰色、灰色粘土ブロックを含む)、3の灰白色粘質シルト、4のオリーブ黑色粘土(青灰色粘土ブロック含む)が上層にあたり、5の灰白色微砂(黒色粘土との互層、青灰色粘土ブロック含む)が下層にあたる。

遺物は、基本的には下層にのみ包含されているが、土坑39でも見られたように検出面より上位で、この遺構に伴うと考えられる土器が出土している。おそらく本来は現状より深い遺構であったと考えられる。

土坑39と土坑40の遺構としての機能は、現在のところ明確ではない。しかしながら、調査区外の南側に居住域が想定され、河川8に隣接する立地や、3Gトレーナの河川斜面での土器の出土状況などを勘案すると、まず第1に井戸として使用されていた可能性、第2にはいわゆる「水際の祭祀」にまつわる遺構である可能性が考えられる。

## 2. 前期の遺構

### 2) 溝

古墳時代前期の遺構の中で、溝は主たる位置を占める。時期が中期に至っても同様の状況が見られ、河川とのかかわりから、当時の生活には欠かせないものであったことが推測される。ただ、中期の溝群と大きく異なる点は、まだ前代の溝と同様に自然流路を再利用したものや、新たに掘削したものなどが混在しており、雑然とした印象を免れないところである。

溝群の分布は、現在の陶器川を境にして東側に限られ、西側ではまったく見られない。これは当時の自然環境が西側では不安定で、旧石津川の影響が大きかったことを裏付けている。東側においても、特に溝の集中して分布するのはF地区である。前述したような河川5が自らの堆積物によって流路を埋めてしまうと、次の河川7も蛇行して調査区内の自然堤防等を乾燥させる結果となった。こうして、しばらくの間は人間の生活空間として利用できたのである。

時期的には、出土した土器から、庄内期から布留期の前半にかけてのものがある。これらの土器群には、すでに庄内期に入っているにもかかわらず、伝統的な畿内第V様式の形態を保持したものが多く含まれ、畿内社会の中で和泉がどのような位置にあったのかを類推させる。また、いわゆる布留0期に特徴的な菱形土器なども散見され、非常に重要な資料である。

溝20(Fig.145,147) 溝20はF地区の1Fトレンチで検出され、北東から南西方向へほぼトレンチの全長を縱断して流れている。

北端部は溝24との重複部分で途切れしており、南端部は溝19との重複部分で終わっている。両端部ともにそれぞれ重複する溝に切られており、溝20は、溝19と溝24に先行することがわかる。

溝の全長は約60mを測り、幅は南側に行くに従って広がっており、南端付近で約1.8m、中央部分で約1.3m、北端付近で約0.8mを測る。深度は平均して約0.4m程度を測る。

検出面は、基本層序の第IV層～第V層の上面である。溝の南側から中央部にかけては第IV層の黄褐色砂礫混じリシルト層が検出面となり、中央部から北側にかけては第V層の上部が鉄分の沈着によって変色した黄橙色粘土層が検出面となっている。

検出面の標高は、北端付近でT.P.+22.4m、中央部分でT.P.+22.35m、南端付近でT.P.+22.1mを測る。ただし、溝の底面の標高は全長を通じて比較的一定しており、検出面の高さだけで流れの方向を断定することはできない。河川等の他の流路が南西方向へ流れていることなどから、同一方向を指向していると類推するのみである。

埋土は、大きく上下2層に分割される。断面図(Fig.147)の溝20-aでは、層番号6の褐色砂質土、7の褐色砂礫、8の暗褐色粘土が上層にあたり、1の褐灰色粘土(マンガン粒含む)、2～4のオリーク黑色粘土、5の灰色粘土、9の暗褐色砂、10～11の褐灰色粘土、12の礫(直径1～2cm)が下層にあたる。溝20-bでは、層番号1の褐灰色シルト質粘土、2の褐灰色砂質粘土、3～4の黒褐色粘土が上層にあたり、5～6の黒褐色砂質粘土、7の黒褐色粘土(砂礫含む)が下層にあたる。溝20-cでは、層番号1の黄灰色砂質粘土、2の褐灰色砂質粘土(マンガン粒含む)、5の褐灰色粘質土が上層にあたり、3の黒褐色粘質土(マンガン粒含む)、4の褐灰色粘土(炭化物含む)、6の灰色粘質土(砂礫含む)、7の黄灰色粘質土、8の灰褐色砂、9の褐灰色粘質土、10の黄灰色粘質土(砂礫含む)が下層に該当している。堆積層の下位に砂礫を含むことから、当初は相当量の流水があったものと考えられる。

遺物は溝の底部に集中して出土しているが、磨滅が著しく詳細は不明である。

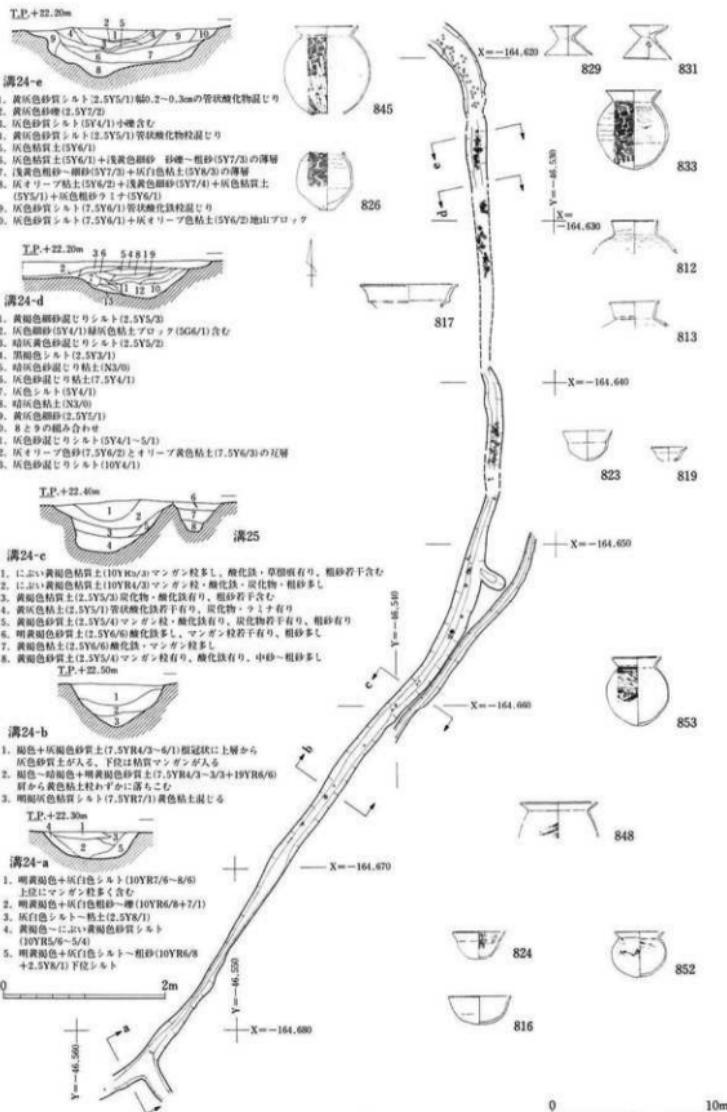


Fig. 161 F地区 満24出土土器分布と主な出土遺物

## 2. 前期の遺構

溝21(Fig.145,147) 溝21は、F地区の1Fトレンチ、7Fトレンチ、15Fトレンチで検出されている。溝20に平行する流路で、北端部は河川7と重複しているが、河川7を越えて対岸にまた出現し、調査区外へ抜ける。ほぼ中央部では後述する溝23に切られている。また、南端部では南へほぼ直角に曲がっており溝20に合流している。溝20との重複関係は明確ではなく、同時期に機能していたと考えても大過ない。

さて、溝の規模であるが、まず、全長は約75m程度を測る。溝の幅は南に行くに従って細くなり、北側付近で約1m、中央付近で約0.7m、南側付近で約0.8mを測る。深度は北側部分で約0.25m、中央付近で約0.5m、南側で約0.2mを測る。

断面の形状は、北側付近と南側付近ではすりばち状を呈しており、中央部付近では壁面と底面が明確に分離出来る台形を呈している。なお、溝23との重複部分は最も規模が大きい。

検出面は、前述した溝20と同様に基本層序の第IV層～第V層の上面であり、溝の南側から中央部にかけては、第IV層の黄褐色砂礫混じりシルト層、中央部から北側にかけては、第V層の上部が鉄分の沈着によって変色した黄橙色粘土層が検出面となっている。

検出面の標高は、北側部分でT.P.+22.0m、中央部分でT.P.+21.8m、南側部分でT.P.+21.7mを測る。溝の底面は中央部で深く、両端部へ向かうと浅くなっている。

埋土は、上部が主として褐灰色砂質土（マンガン粒を含む）で構成され、最下層に砂礫が堆積している。堆積物の詳細も前述した溝20と近似しており、流量も豊富であったことが推定される。

溝22(Fig.145) 溝22はG地区の16Gトレンチの南半部で検出されている。トレンチの中央部で2条に分流し、Y字状を呈する。片方の支流は北へ向かい、溝20と溝21が合流する地点にとりつく。もう一方の支流は、北西方向へ向かい、溝19と重複して終わる。

検出面は、基本層序の第IV層の上面であり、黄褐色砂礫混じりシルト層がそれにあたる。

規模は比較的小さく、前述した溝20などの大型ですりばち状の偏平な溝群と比較して、断面の形状がV字状を呈するものである。埋土は他の溝と大差ないが、最下層の砂礫はあまり多くない。

溝24(Fig.145,161) 溝24はF地区の1Fトレンチ、2Fトレンチ、15Fトレンチ、16Fトレンチで検出されている。トレンチ南側部分では北東方向へ向かっているが、中央部分で急に北へと進路を変えて、溝21へ合流している。途中、河川5が形成した破堤堆積物の上を通過している。

総延長は約75mにおよぶ。溝の幅は、北側部分で約1.8m、中央部分で約1.2m、南端付近で約1mを測る。深度は、南側で約0.3m、中央部で約0.5～0.6mを測る。北側部分ではまた浅くなっていく。

検出面は、前述した溝群と同様に基本層序の第IV層～第V層の上面であり、溝の南側から中央部にかけては第IV層の黄褐色砂礫混じりシルト層、中央部から北側にかけては、第V層（青灰色シルト）の上部が鉄分の沈着によって変色した黄橙色粘土層が検出面となっている。

検出面の標高は、概ねT.P.+22.1m付近で大きな変化はない。溝の底面も同様である。

溝の埋土は、断面図(Fig.161)の溝24-cを例にとると、黄灰色および黄褐色の粘土と砂質土の互層であり、マンガン粒が大量に含まれている。最下層には砂礫を多く含む層が存在する。

遺物は非常に多く、溝の全域にくまなくといってよいほど分布している。平面図(Fig.161)を見ると、その土器分布が良く理解できよう。ちなみに土器実測図は出土位置に概ね対応するように配置しており、以下の図面にはすべてこの方式を利用している。出土した遺物の多くは土師器で、磨滅のため詳細がわかるものはわずかであった。時期的には、布留期の前半にあたるものと考えられる。

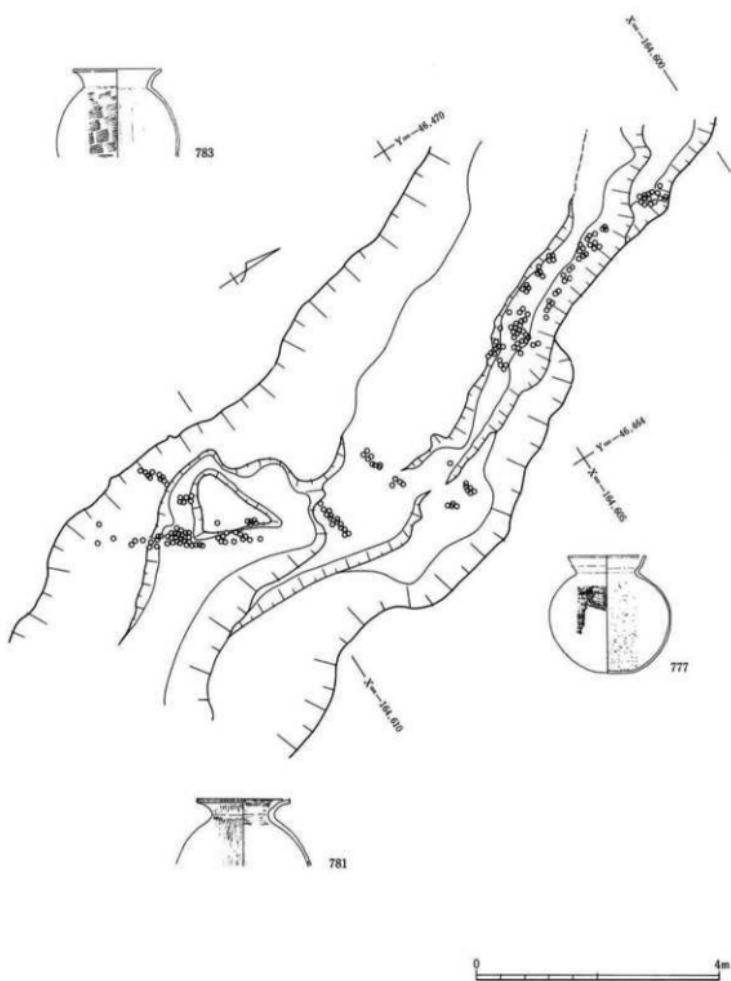


Fig. 162 G地区 溝30-b 出土土器分布(1)と主な出土遺物

## 2. 前期の遺構

溝25(Fig.145,161) 溝25はF地区の2Fトレンチ、15Fトレンチ、16Fトレンチで検出されている。2Fトレンチから16Fトレンチへ移行する部分で、鉤形に折れ曲がって、溝24の中央部分と密着して併流している。

検出面は、溝24と同様に基本層序の第Ⅳ層～第Ⅴ層の上面である。溝の南側から中央部にかけては第Ⅳ層の黄褐色砂礫混じりシルト層、中央部から北側にかけては、第Ⅴ層（青灰色シルト）の上部が鉄分の沈着によって変色した黄橙色粘土層が検出面となっている。

検出面の標高は、概ねT.P.+22.3m付近で全長の中では大きな変化はない。溝の底面も同様である。

溝の総延長は、約38mを測り、幅は約0.6m程度を測る。断面の形状は、鋭い逆三角形をなす。断面図(Fig.161)の溝24-cの右側部分が溝25にあたる。埋土は、層番号6の明黄褐色砂質土（マンガン粒、粗砂多く含む）、7の黄褐色粘土（マンガン粒多く含む）、8の黄褐色砂質土（粗砂含む）である。

溝26(Fig.145) 溝26はF地区の15Fトレンチ北東端部分で検出された。比較的規模の小さな流路である。調査区外の東側から伸びてくる微高地状の高まりの先端部分に形成されており、前述した河川7へと流れ込んでいる。

検出された長さは約4m程度で、幅は約0.5m程度を測る。検出面は基本層序の第Ⅳ層～第Ⅴ層で、溝の先端部分は第Ⅴ層に該当するが、東側へ行くにしたがって第Ⅵ層に変わる。

この溝26は、その立地条件等から、G地区の溝31と同一流路の可能性が考えられる。

溝29(Fig.145,148) 溝29はG地区の2Gトレンチで検出された。土坑40との重複関係が認められ、溝が土坑40を切る。遺物は土坑付近でのみ出土しており、溝に伴っていない可能性もある。

溝の幅は、最大で約1m、最小で約0.75mを測る。遺存した深度は0.2～0.3m程度を測る。検出面は基本層序の第Ⅴ層（青灰色シルト）上面であり、標高はT.P.+22.6m付近である。

溝の埋土は、断面図(Fig.148)では、層番号1のオリーブ黒色シルト、2の暗灰黄色シルトブロック混じり細砂、3の黒色シルトである。最下層は粗砂を含む。

溝30(Fig.145,148,162～164)溝30はG地区の2Gトレンチ、5Gトレンチ、12Gトレンチ、13Gトレンチ、14Gトレンチにまたがって検出されている。先端は河川8と重複している。

溝の規模であるが、総延長は約50mにおよび、幅は最大で約5m、最小で約2.2mを測る。

検出面は、基本層序の第Ⅳ層（黄灰色シルト、鉄分とマンガン斑の沈着が著しい）上面である。

断面図(Fig.148)によれば、断面の形状はすりばち状で、比較的大規模な流路である。埋土は基本的に上下2層に分離できる。また、溝30-a、30-bの両画面によって明らかなように溝30自体が2時期の溝で構成されていることがわかる。平面図(Fig.162)の東側底面に浅く細い落込みがあるが、これが断面図の時期の新しい溝の底部である。出土した遺物から、古い方の溝は庄内期、新しい方の溝は布留期に該当することが明らかである。

埋土は、断面溝30-bにおける層番号1の灰色細砂混じりシルト、2の灰白色細砂混じりシルト、3の灰色粗砂ブロック混じりシルト、4の灰色粗砂、5の灰色極細砂（灰色シルトとの互層）が布留期の溝埋土であり、層番号6にぶい黄褐色細砂混じりシルト、7の黄褐色細砂混じりシルト、8、9の黒褐色細砂混じりシルト、10の灰色細砂混じり極細砂、11の褐灰色細砂混じりシルト、12の灰色シルト、13の灰色細砂混じりシルト、14のオリーブ黒色シルト、15の黒色シルト、16～19の灰色シルト、20の暗オリーブ灰色シルト、21の灰色シルト、22の暗オリーブ灰色シルト、23の黒色有機質シルト、24の白色シルト、25の緑灰色シルト、26の灰色シルト混じり細砂が庄内期の溝埋土である。



Fig.163 G地区 溝30-a出土土器分布(2)と主な出土遺物

これらの堆積物の中で、布留期の溝は明らかに人為的な掘削によって形成されたような様相を呈しているが、庄内期の溝内では多少異なる様相が見られる。基本的に断面-bにおける層番号9、10にのみ、土器が包含されており、この上位にも下位にも土器は認められない。この土器を包含する層を合わせて6～12までが上層となる。層番号14より下位は植物遺体、炭化物などを大量に含み、シルトの薄層が重なり合っている。これらを下層とする。下層は上層に比べて自然堆積である可能性が極めて高い。すなわち、すりばち状の自然流路がまず形成され、それを利用するかたちで庄内期の溝が形成される。そしてこれが埋没した後、布留期に人為的に掘削し、再利用したと考えられる。

## 2. 前期の遺構

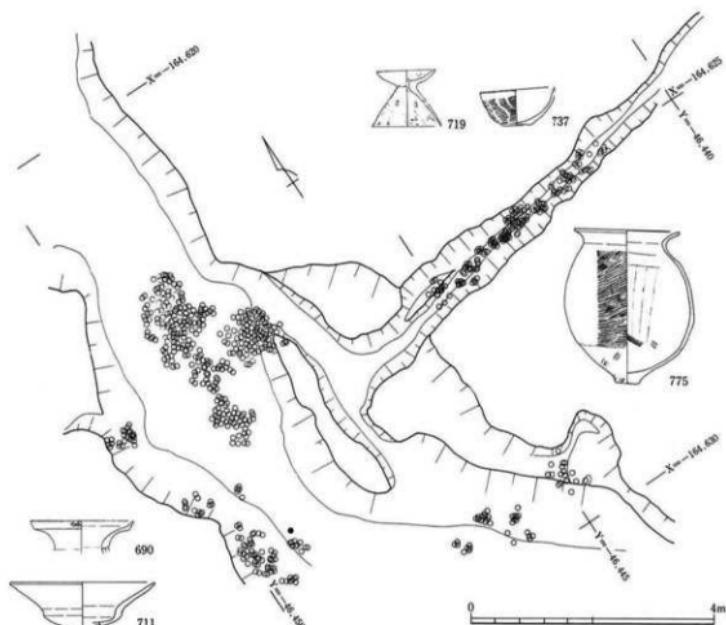


Fig. 164 G地区 溝30および溝32出土土器分布(3)と主な出土遺物

溝31(Fig.145,148) 溝31は、G地区的12Gトレンチで検出されている。規模は極めて小さいもので、検出された長さは約6.6mを測り、幅は約0.8m、遺存した深さは約0.2mを測る。

検出面は、基本層序の第V層（青灰色シルトがやや土壤化して汚れた色調を呈する）の上面である。前述した溝30が河川8と合流した地点から、分流して自然堤防上の高まりを西へ進んでいる。

F地区側では、同じ自然堤防上に溝26が存在し、両者の諸状況が類似することから同一の溝である可能性是非常に高い。埋土は、灰色系のシルトで構成されている。

溝32(Fig.145,148,164) 溝32は、G地区的14Gトレンチで検出され、前述した溝30に直交して合流している。検出面は基本層序の第IV層（黄灰色シルト、マンガン粒を大量に含む）の上面である。

検出された部分での長さは約14m、幅は最大で約1.7m、最小で約0.7mを測る。遺存した深さは平均で約0.4m程度を測る。

埋土は、断面図(Fig.148)の層番号1の褐灰色砂質シルト、2の灰褐色シルト、3の灰黄褐色シルト、4の黄灰色シルト質粘土である。

溝30との合流地点は、ちょうど布留期の溝が重複している部分なので、庄内期の溝との切り合い関係が明確ではない。ただし、出土している土器が庄内期に該当することや、溝30の下層では土器が出土していないことから、少なくとも溝30の庄内期の溝と同一時期に機能していた可能性はある。

この溝は調査区外の東側の地形的に高い部分から流入しており、集落の存在がそこに想定される。

### 3. 中期の集落

古墳時代中期に入ると、前期には人間の生活域とは成り得なかった、現在の陶器川左岸側にも遺構が形成される。特にC地区を中心とした、巨大な自然堤防上に展開される集落は、小阪遺跡の歴史上に初めて現れる直接的な生活空間として、大変意義深い。

さらにここで出土する土器群は、単に日本列島内に留まらず、朝鮮半島との交渉を裏付ける資料として注目すべきものが多い。住居もさまざまな形態のものが検出されており、遺存状態の良いものについては、廃棄の状態、上部構造の復元等、建築史上からも興味深い資料となっている。

集落としての空間内には、その他多くの廃棄土坑や溝群が存在し、ここでは、それらの有機的関連ができるだけ明確にしていきたい。ただ、自然堤防が高く、後世の耕作に伴ってその上部が削平されてしまっており、包含層は遺存していない。このため、遺構群は本来の深度を保持しておらず、同一面での検出という現象のみですべてを推し量らねばならない点が惜しまれる。

#### 1) 壊穴住居

壊穴住居1 (Fig.165) 壊穴住居1はC地区の13Cトレーニング南端部分で検出されている。

検出面は基本層序の第III層（黄褐色粘質土）の上面で、後述する壊穴住居2、3も同様である。

隅丸方形のプランを有し、現代の搅乱によって南東部分を欠失し、南西の一角を河川1への段差によって欠失しており、本来の床面積のうち、4分の1程度が遺存していた。

遺存した壊穴壁面は、北西側、南東側とともに長さ約3mを測る。南東側の壁面に沿って、幅約15cmの溝が2m程度の長さにわたって検出された。これは壁溝と考えてよからう。遺存した壁高は、約12cmを測る。堆積していた埋土は茶黒色の粘質土であるが、下層には炭化物を多く含んでいた。

床面にはピットが9基確認された。その径は約20~30cmを測り、遺存した深さは約10cm程度と比較的浅いものであった。したがって、主柱穴は確定できなかった。

床面には頗著な貼り床はなかったが、P1周辺に土器と炭化物、若干の焼土が見られた。しかし、上部構造物に関する建築部材等はいっさい検出されなかった。



Fig.165 C地区 壊穴住居1 平面と主な出土遺物

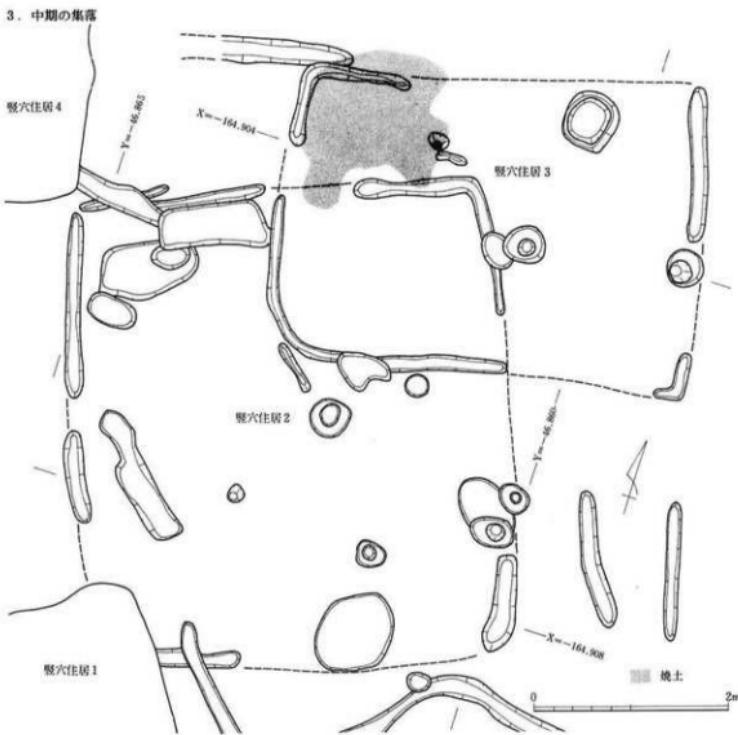


Fig. 166 C地区 壊穴住居2・3平面

壊穴住居2 (Fig. 166) 壊穴住居2はC地区の13Cトレンチで検出されている。

平面プランは長方形で、短辺は約4m、長辺は約4.8mを測る。遺存状態が非常に悪く、埋土等はまったく残っておらず、検出されたのは壊穴の壁溝のみである。

壁溝はいずれも深度が浅く、断続的にしか検出されていない。最も長く検出されたのは西側のもので約1.5mを測る。北東隅の壁溝はL字形に連続して遺存していた。

壁溝の区画内には、大小10基程度の浅いピットが存在するが、主柱穴は確定できなかった。南西の隅部分を前述した壊穴住居1に切られている。

壊穴住居3 (Fig. 166) 壊穴住居3はC地区の13Cトレンチで検出されている。

平面プランは長方形で、短辺は約2.5m、長辺は約3.5mを測る。遺存状態が非常に悪く、埋土等はまったく残っておらず、検出されたのは壊穴住居2と同様壊穴の壁溝のみである。

壁溝はいずれも深度が浅く、断続的にしか検出されていない。最も長く検出されたのは南西隅のもので約3mを測る。北西隅と南西隅はコーナー部分も遺存している。

壁溝の区画内には、大小5基程度の浅いピットが存在するが、主柱穴というには程遠いものばかりであった。北西隅には炭化物と焼土が堆積していた。壊穴住居2との先後関係は明確ではない。

堅穴住居4 (Fig.167,168,169) 堅穴住居4はC地区の13Cトレンチ、27Cトレンチ、28Cトレンチで検出されている。

検出面は基本層序の第III層で黄褐色の粘質土層（マンガン粒を多く含む）上面である。

平面プランはほぼ正方形を呈し、1辺は約3mを測る。ただし、北東隅はややいびつな形状である。

遺存状態は比較的良好、深さ約20cm程度が残っていた。埋土は断面図(Fig.169)の層番号1の茶黒色粘土（黄褐色粘質土ブロック含む）と2の黒灰色粘土（黄褐色粘質土のブロック、焼土、炭化物を含む）がそれにあたる。層番号3の灰色粘土（黄褐色粘質土ブロック含む）は、貼床の可能性がある。最大で6cm程度が遺存していた。

住居内には、多数の巨大な木根痕による搅乱が認められる。この木根痕は、住居内の埋土のうち、下層の上面から切り込んでおり、住居の廃絶後に生育した樹木のものであると推定される。

この貼床の上には多数の炭化材、焼土が遺存していた(Fig.167)。炭化材は、最大のもので長さ約70cm程度、幅は10cm程度を測る。概して、土圧で本来の厚みを無くし、偏平になっている。

これらはすべて建築部材である。後述するが、主柱穴と考えられるビットのうち、南側の柱穴の真上に位置して遺存した炭化材は、ビット内の柱痕跡と同サイズで、棟持柱である可能性が考えられる。

焼土は貼床上で検出されているので、決して、上部構造物が燃焼し床面に燃え落ちて、貼床自体が焼土と化したものではない。その分布の粗密を見ると、堅穴の壁面に沿っている傾向があり、この住居には壁が存在し、その壁には薄く粘土が貼られていた可能性が考えられる。

床面上には主柱穴と考えられるビットが2基検出されている。P1は1辺約22cmの方形の掘方を持ち、遺存した深さ約11cmを測る。この掘方底面に直径約7cm、深さ約36cmの柱痕が残されている。P2は短辺約10cm、長辺約30cmの長方形の掘方を持ち、遺存した深さは約23cmを測る。この掘方底面に直径約10cm、深さ約45cmの柱痕が残されていた。その他、床面には大小3基のビットが検出されているが、遺存した深さが極端に浅く、柱穴とは呼びがたいものである。P1の直上には土師器の高杯が、その壊部だ

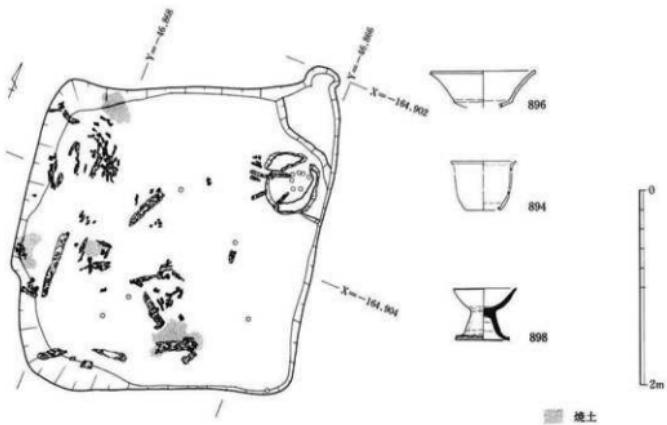


Fig.167 C地区 堅穴住居4床面検出状況と主な出土遺物

### 3. 中期の集落

けを裏返しに伏せて埋置されてあつた。

東側壁面中央部から少し北側に、壁面に接近して、竈が検出されている。近畿地方の検出例としては珍しく、上部は若干削平を受けており、天井部が消失しているものの、両壁は立ち上がりのほとんどを遺存していた。竈は、東側壁面に対して約45度程度南東へ向かって配置されている。焚口付近はやや床面よりも落ち込んでおり、燃料に供されたと考えられる数本の炭化木が、放射状に使用されたままの状態を保って検出されている。竈本体の外形法量は、最大幅が約73cm、奥行きが約53cmを測る。内側の法量は焚口で幅約31cm、内部中央で幅約28cm、奥行きが約43cmを測る。壁体は、北側のものが最大幅約22cm、南側のもので最大幅約16cmを測る。高さは最大で約16cmが遺存していた。

壁を構成する土は、断面図(Fig.168)によると層番号4の暗灰色粘土、5の黄褐色粘土(ブロ

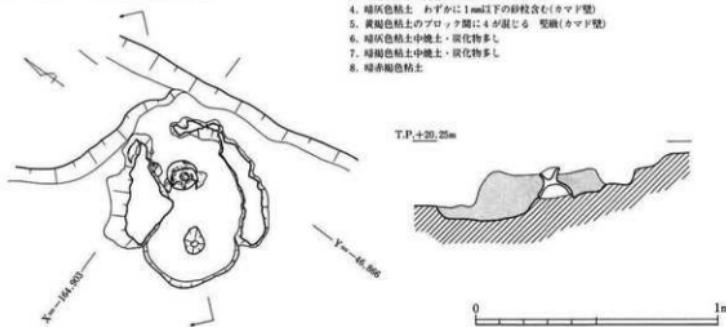
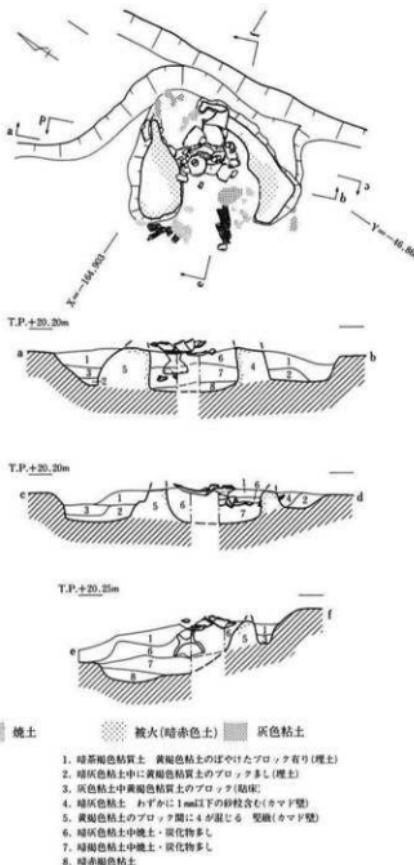


Fig.168 C地区 坪穴住居4竈施設 平面および断面

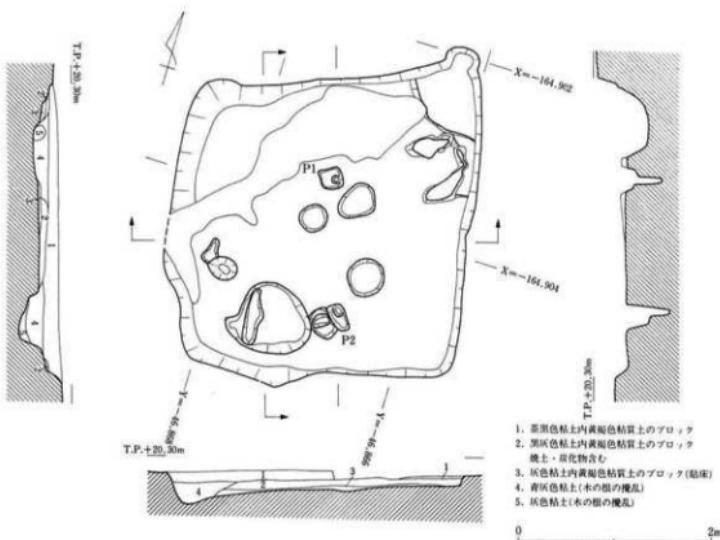


Fig.169 C地区 壓穴住居4基底面ピット群および断面

ック状、暗灰色粘土ブロック含む)である。これらは非常に堅歯であるが、北側の壁体ではその製作過程で土器片を混和させている部分が認められた。両壁体の内側は、暗赤褐色に変色しており、被火していたことを証明している。

竈内には、須恵器の高杯が倒立した状態で置かれていた。この須恵器は、ほとんどナデ技法のみで調整されており、定型化した須恵器とは一線を画するものである。さらにこの上に、土師器の高杯の坏部のみが伏せてあった。これらの土器には被火した痕跡が認められない。おそらく、住居あるいは竈を廃棄する際に、何らかの祭祀行為として残していくものであろう。

竈本体の後ろ側には、高さ約12cm程度の段がある。この段は北西隅にかけて遺存しており、ベースとなっている黄褐色の粘質土を削り出して作られている。そして北西隅の竈穴壁面には、直径約30cm程度の半円形の掘り込みがある。竈の主軸はこの北東隅を意識して傾けられていると推測され、削り出された段は煙道の名残りで、その半円形の掘り込みが住居への煙出しであったと考えられる。

さて、前述したようにP1の上部に残されていた高杯や、竈内の土器のあり方を勘案すると、この住居は天災によって焼失したのではなく、むしろ人為的に廃棄したものと考えるのが妥当であろう。竈内の土器が火を受けていないのは、竈の天井部分が崩落して偶発的に守られた可能性が考えられる。

竈穴住居4は、その重要性を鑑みて、海砂で養生した後に埋め戻し、永久保存した。

3. 中期の集落

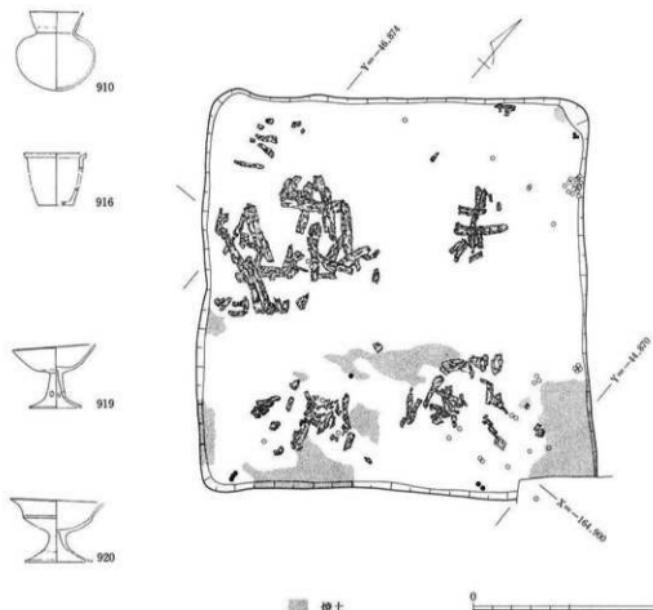


Fig. 170 C地区 堪穴住居 5床面検出状況と主な出土遺物

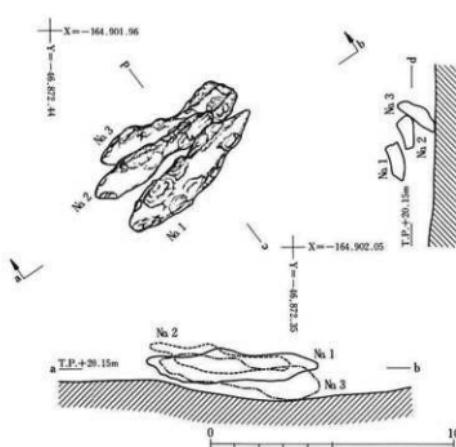


Fig. 171 C地区 堪穴住居 5鉄鏃出土状態

豈穴住居 5 (Fig. 170~172) 堪穴  
住居 5は、C地区の27Cトレンチ、  
28Cトレンチで検出されている。

検出面は基本層序の第Ⅲ層で黄褐色の粘質土層（マンガン粒を多く含む）の上面である。

平面のプランは1辺が約4mの正方形を呈する。遺存した堪穴の深さは約12~17cmを測る。

全体の遺存状態はあまり良くなく、貼床もわずかに最大4cm程度の厚さが残っていたにすぎない。

住居内の埋土は、断面図 (Fig. 172) の層番号1の茶褐色粘質土（マニガン粒を多く含む）、2の茶黒色粘土（炭化物、焼土を含む）である。

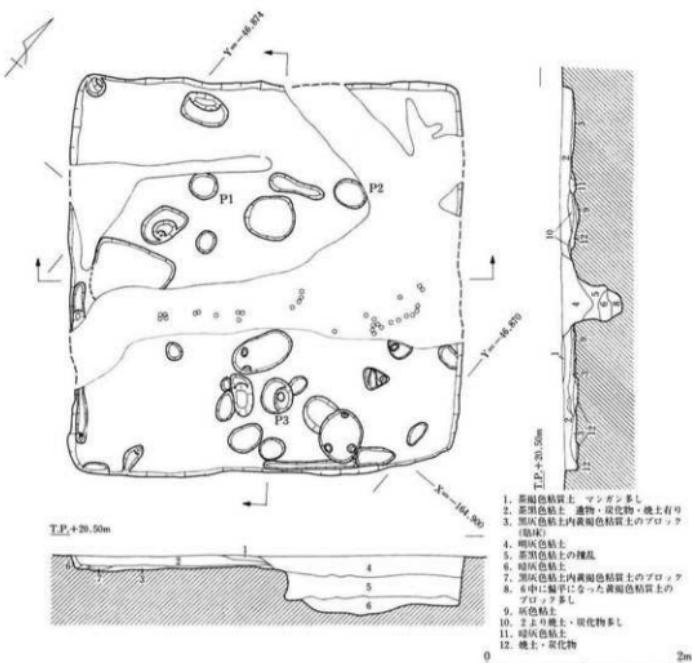


Fig.172 C地区 壓穴住居5柱穴・基底面ピット群および断面

ここでも木根痕が大きく分布しており、住居内の堆積物を擾乱している。ただし、上部がかなり削平されているにもかかわらず、木の根がその成長過程で土器を引きずり込み、多数が木根痕内部に遺存していた。樹木自身の生育時期が、集落の廃絶期とそう離れていないということも幸いして、これらの土器群には、後世の混入物は一切含まれておらず、すべてこの住居に伴うものと考えられる。

南東壁面と南西壁面に沿って、全長約1m、幅約10cm、深さ約5cmを測る小さな溝が検出されており、壁溝であると考えられる。

床面上には、ピットが大小合わせて10基以上検出されたが、深度が極めて浅いので主柱穴を確定するにはいたらなかった。ただし、P1とP2は規模がほぼ同等で、しかも住居内の対称的な位置に検出されており、対向する位置に同じようなピットを想定すれば4本柱となる。また、P3は掘方の深度こそ約5cmを測るに過ぎないが、柱痕部分が直径約20cm、深さ約25cmを測り、規模からすれば主柱穴と成り得る。しかし、どちらも積極的な根拠に乏しいことに変わりはない。

床面上には、炭化木と焼土がかなりの密度で検出されている。炭化木は比較的遺存状態が良く、長さ約50cm前後、幅約10cm程度を測る部材が、折り重なるように検出された。住居内の東南側にはP3を中心とするように、求心性を帯びやや細い炭化木の一群が検出されており、おそらく垂木に該当する部材

### 3. 中期の集落

であろうと考えられる。これらに直交する細かい炭化物は、小舞にあたる可能性がある。北東半部分には、互いに直交して重なるやや太い炭化木が二群検出されており、合掌を構成する部材あるいは棟構造そのものの可能性が考えられる。こうしたことから、あえて上部の構造物を復元すると、方形の寄棟造りで屋根が2段構成になっており、屋根重木が一気に頂部まで伸びない。つまり4本の主柱で方形の棟を組み、その上に切妻形の合掌を置くといった様式にならうか。

焼土は床面の東南半部分に多く、特に東南隅に集中していた。しかし、この周辺に竈施設や炊事に関する遺構は検出されておらず、竪穴住居4同様に土壁の存在も考えておく必要がある。

床面の遺物としては、土器類などの他に鉄鎌が4点出土している(Fig.171)。そのうち、3点については住居内の南隅にまとまって出土している。これらは、長頸式鉄鎌の初現的形態を持つもの等、古墳時代中期初頭の初期須恵器や甲冑における新留技法導入段階に特徴的な鉄鎌群で、集落内の竪穴住居出土の土器群との時期的な併行関係に齟齬はないものと考えられる。古墳に埋納される遺物の相対的編年には大きく寄与する重要な資料と成り得る。

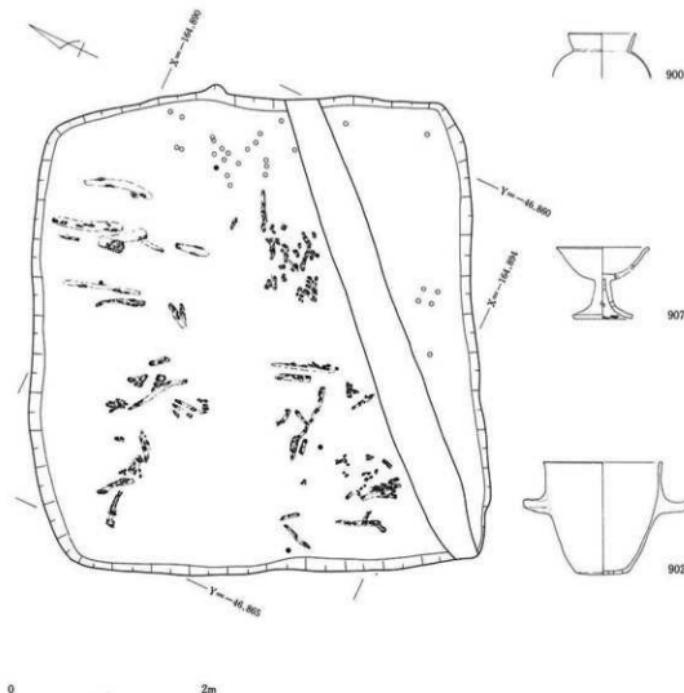


Fig.173 C地区 竪穴住居6床面検出状況と主な出土遺物

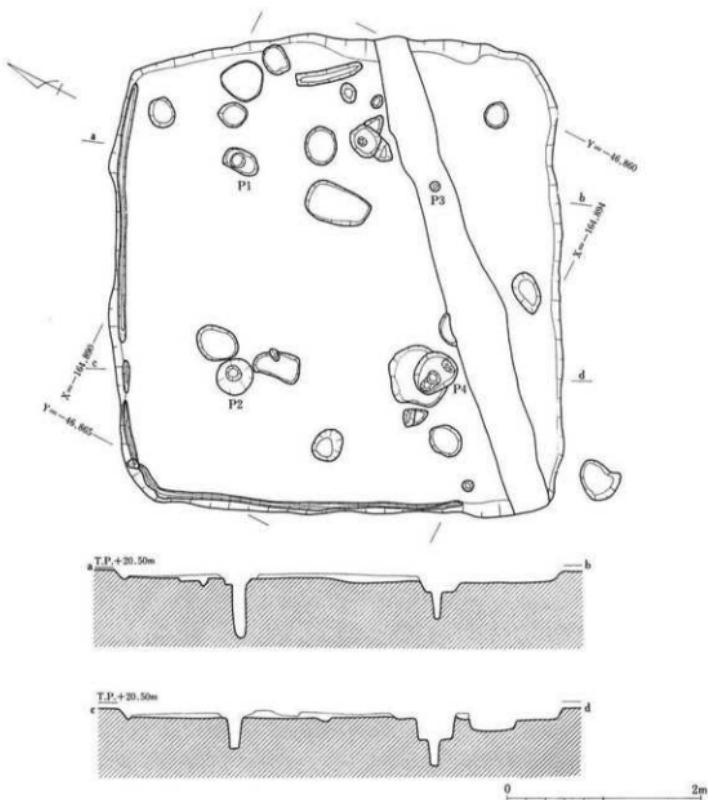


Fig.174 C地区 壺穴住居6床面柱穴および断面

壺穴住居6 (Fig.173～175) 壺穴住居6は、C地区の29Cトレンチ付近で検出されている。

検出面は基本層序の第III層で黄褐色の粘質土層（マンガン粒を多く含む）上面である。

平面プランは、短辺約4.54m、長辺約4.85mを測りほぼ正方形を呈する。遺存した壺穴の深さは、約15cmを測り、厚さ5cm程度の貼床が存在する。

住居内の埋土は、断面図(Fig.175)では、層番号1の暗褐色粘質土（黄褐色粘土ブロック含む）、2の暗褐色粘質土（上層よりわずかにブロック土が不明確）、3の茶黒色粘土（マンガン粒、炭化物を含む）である。

北西側壁面、南西側壁面には、両壁面のはば全長に沿って、幅約4～8cm程度、深さ約5cm程度の溝が検出されており、明らかに壁溝と考えられる。また、北東側壁面の中央部分で壁面からやや離れて、幅約10cm、長さ約70cmの溝が検出されている。北東側壁面が中央付近で膨らみを持ったいびつな形状を

### 3. 中期の集落

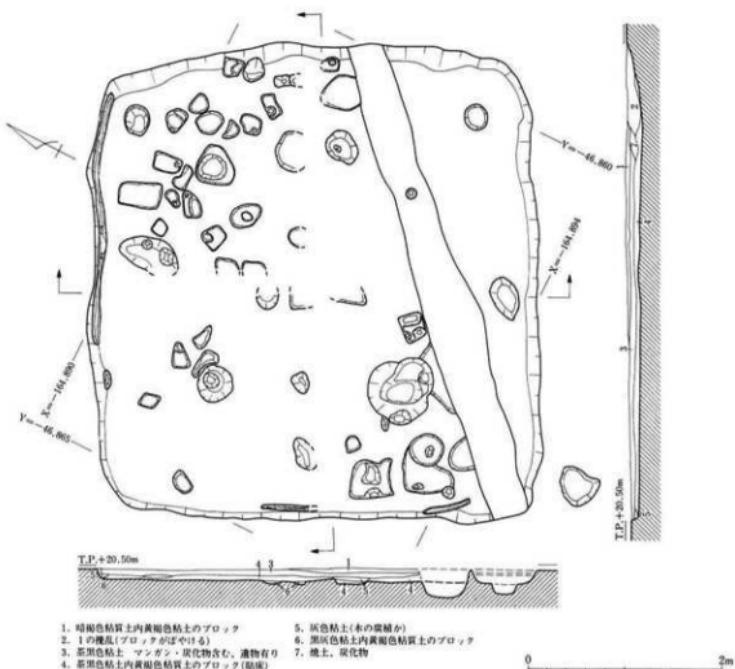


Fig.175 C地区 堪穴住居6基底面ピット群および断面

呈していることから、本来はこの溝が壁溝で、廃絶後に壁面が崩れて変形したものと考えられる。

床面上には、大小のピットが約15基程度検出されている。これらは他の堪穴住居と同様に非常に深度の浅いものがほとんどである。ただし、P 1～P 4は掘方、柱痕とともに明確で、その配置からもこれが主柱穴である可能性が高い。P 1は長辺約40cm、短辺約30cm、深さ約11cmを測る楕円形の掘方を持ち、掘方底面には直径約14cm、深さ約65cmの柱痕が検出されている。P 2は直径約35cm、深さ約7cmの円形の掘方を持ち、掘方底面には直径約15cm、深さ約37cmの柱痕が検出されている。P 3はトレンチの境界部分に位置したため、断面観察用の側溝で掘方を欠失してしまった。しかし、掘方底面にあった柱痕は直径約12cm、深さ約44cmが遺存していた。P 4は直径約40cm程度、深さ約27cmの円形の掘方を持ち、掘方底面で直径約13cm、深さ約52cmの柱痕が確認されている。この他、貼床除去後に多くのピットを確認しているが、形状は不整形で浅く、堪穴掘削時の工具痕かと考えられる。

床面では、若干の焼土と炭化木が検出されているが、遺存状態はあまり良くない。炭化木は小片ばかりで、明確に部材を特定できるようなものはなかった。ただし、木質の繊維の方向から類推すると、やや中央付近への求心性がうかがわれる。また、長さ約10cm、幅と厚さ約4cmの台形の粘土塊が2点出土しており、土器作りに関する資料として注目に値する。

## 2) 堀立柱建物

**堀立柱建物1 (Fig.176)** 堀立柱建物1はC地区の13Cトレンチ東半部で検出されている。

検出面は基本層序の第III層で黄褐色の粘質土層（マンガン粒を多く含む）の上面である。南北部分を木根痕によって搅乱されている。2間×2間の総柱建物であり、柱間は多少ばらつきがあるが約1.5m～1.8mを測る。各柱穴は、掘方を持ち、掘方底面に柱痕を残すものと、柱の大きさをあまり上回らない掘方だけのもの2種類に分離できる。前者のタイプは平均すると掘方の直径約30cm、深さ約10cm程度で、柱痕の直径約15cm、深さ約45cm程度である。後者は平均して直径約20cm、深さ約50cm程度である。南北列中央の柱穴のみが、深さ約12cmと浅いので、柱穴としては疑問視される。

**堀立柱建物2 (Fig.177)** 堀立柱建物2はC地区の15Cトレンチ西半部で検出されている。

検出面は基本層序の第III層で黄褐色の粘質土層（マンガン粒を多く含む）上面である。建物範囲のはんどの部分が木根痕等で搅乱されているために、断面図ではあたかも柱が抜き取られたかのように見える。2間×2間の総柱建物であり、柱間は多少ばらつきがあるが約1.7m～2mを測る。各柱穴は、柱の大きさをあまり上回らない掘方だけのもので、平均すると掘方の直径約22～46cm、深さ約63～75cm程度を測り、円形を呈する。最も北側の柱穴列にはすべて柱痕の木質が遺存していた。南西隅の柱穴では、直径約10cm、深さ約4cmの柱が沈み込んだ痕跡を検出している。

**堀立柱建物3 (Fig.178)** 堀立柱建物3は、C地区的30Cトレンチで検出されている。

検出面は基本層序の第III層で黄褐色の粘質土層（マンガン粒を多く含む）上面である。

2間×2間の総柱建物であり、柱穴はすべて長方形の掘方を持ち、それぞれ明確に柱痕が検出されている。柱間は約2m～2.3mの中間に収まる。

各々の柱穴の規模のうち、最大のものは柱穴8である。柱穴8は長辺約1.2m、短辺約0.5m、深さ約0.7mを測る掘方を持ち、掘方の中央に直径約15cm、深さ約80cmの柱痕が検出されている。

また、最小のものは、柱穴2である。柱穴2は長辺約1m、短辺約0.4m、深さ約0.7mを測る掘方を持ち、西側の掘方壁に接して、直径約16cm、深さ約75cmの柱痕が検出されている。

柱穴1は、掘方の深度を柱痕の深度が大きく上回り、堀立柱建物3の柱穴中では特殊である。

掘方の埋土は、基本的には茶黒色粘土（黄褐色粘土ブロック含む）で構成されており、これは柱痕内でも同様である。ただし、柱痕内の埋土には炭化物が大量に含まれ、また、その最下部では柱の木質が

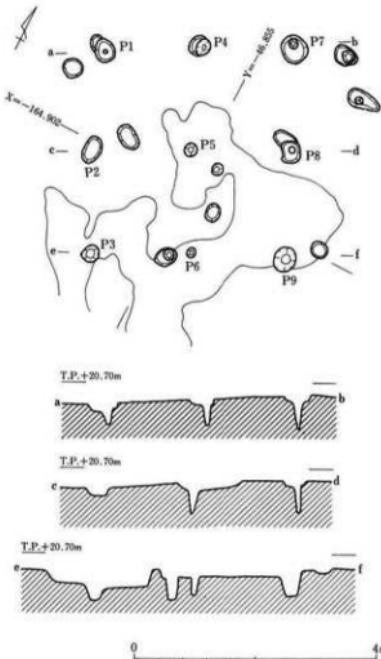


Fig.176 C地区 堀立柱建物1 平面および断面

### 3. 中期の集落

腐朽したためか暗灰色粘土となっている。断面図(Fig.178)によると、柱の何本かは抜き取られた痕跡がある。竪穴住居4の竪内の土器遺存状態などを勘案すると、廃棄された可能性が高い。

中期の集落内では、掘立柱建物3のみが長方形の掘方を持ち、規模も若干ではあるが他の建物に優越している。立地条件も自然堤防の先端部分にあり、示唆的である。

**掘立柱建物4 (Fig.179)** 掘立柱建物4はI地区の5 Iトレンドで検出されている。

検出面は、南側の伏尾丘陵斜面に形成されている崖錐性堆積の疊層(疊混じりの堅緻な灰白色シルト)上面にあたる。基本層序にあげた第Ⅰ層から第Ⅴ層とい

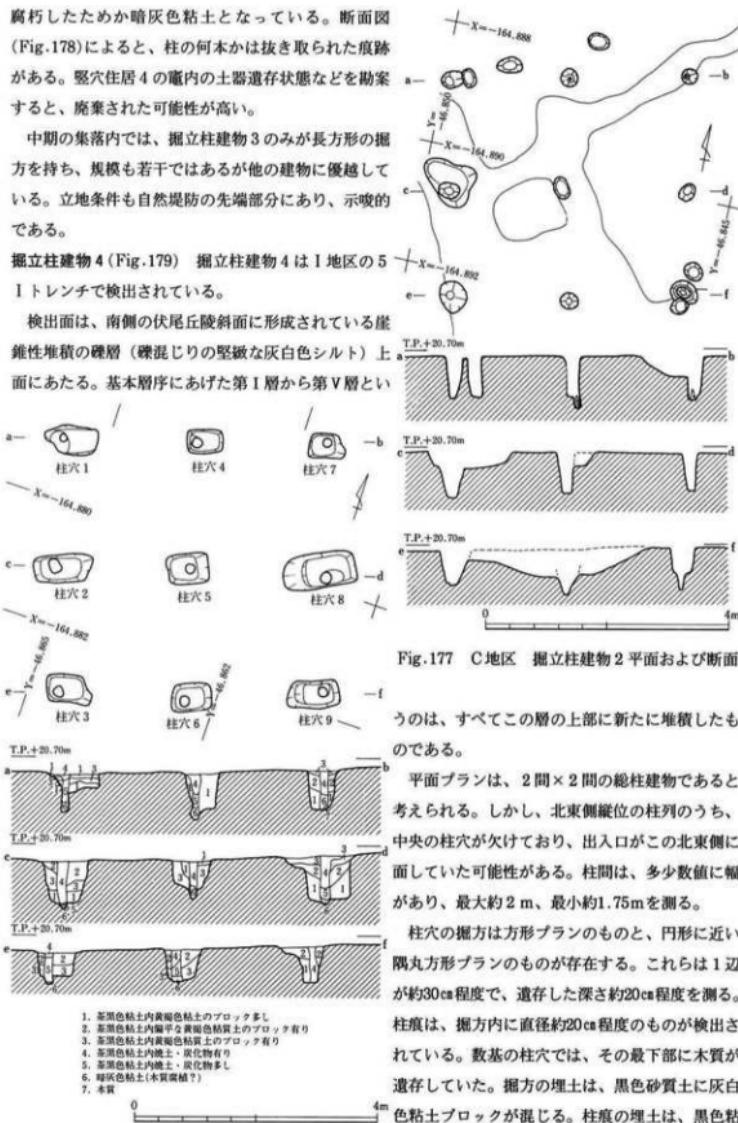


Fig.177 C地区 掘立柱建物2平面および断面

うのは、すべてこの層の上部に新たに堆積したものである。

平面プランは、2間×2間の純柱建物であると考えられる。しかし、北東側縦位の柱列のうち、中央の柱穴が欠けており、出入口がこの北東側に面していた可能性がある。柱間は、多少数値に幅があり、最大約2m、最小約1.75mを測る。

柱穴の掘方は方形プランのものと、円形に近い丸方形プランのものが存在する。これらは1辺が約30cm程度で、遺存した深さ約20cm程度を測る。

柱痕は、掘方内に直径約20cm程度のものが検出されている。数基の柱穴では、その最下部に木質が遺存していた。掘方の埋土は、黒色砂質土に灰白

色粘土ブロックが混じる。柱痕の埋土は、黒色粘

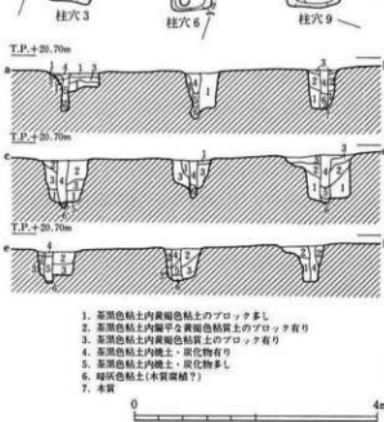


Fig.178 C地区 掘立柱建物3平面および断面

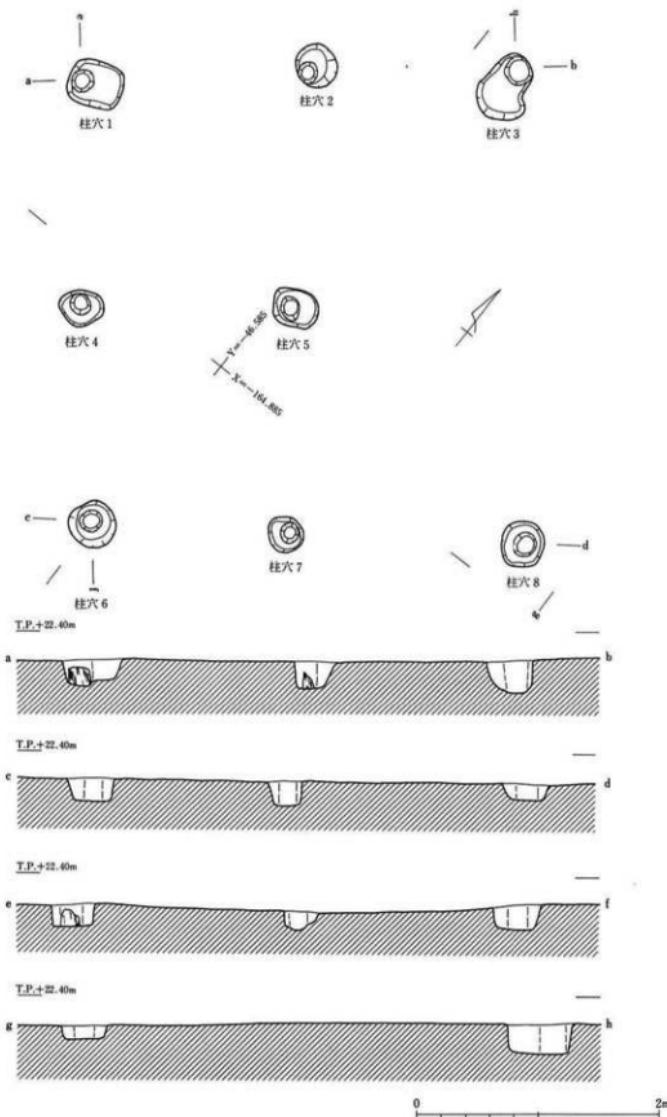


Fig.179 I 地区 据立柱建物 4 平面および断面

### 3. 中期の集落

#### 3) 平地住居

平地住居1 (Fig. 180) 平地住居1は、C地区の14Cトレンチ、15Cトレンチで検出されている。

検出面は基本層序の第III層で黄褐色の粘質土層（マンガン粒を多く含む）上面である。

検出されているのは、幅約20cm程度の溝である。この溝は周溝状に巡り、長辺約8.85m、短辺約4.3mの長方形プランを呈している。長辺の溝は北に約1.5m程度突出している。

また、南側の短辺の溝は一部で途切れている。溝の中では数個所で小さなビットが検出されている。

周溝内部の平面には、中央を縦断するよう直径約35cm、深さ約50cm程度の柱穴が4基検出されている。柱間は約1.55m～1.83mを測る。

上部構造については、周溝とその底面のビットから、壁立ちであった可能性がある。中央の柱穴列が棟持ち柱であると仮定すれば、切妻形式の壁立ち建物を想定できる。

平地住居2 (Fig. 181) 平地住居2は、C地区の15Cトレンチで検出されている。検出面は基本層序の第III層で黄褐色の粘質土層（マンガン粒を多く含む）の上面である。

検出されているのは、平地住居1と同様に幅約20cm程度の溝である。この溝は周溝状に巡り、長辺約5m、短边約3.7mの長方形プランを呈している。また、南側の短辺の溝は中央部で約80cm程度が途切れている。溝の中には、四隅と東南側長辺に1個所、小さなビットが検出されている。周溝の南西側長辺の外側にも、隣接して小さなビットが検出されている。

周溝内部の平面には、全く遺構が検出されなかった。周囲の遺構の遺存状況を見ると、削平を受けていたとしても、本来的に遺構は無かったものと推測される。したがって、上部構造は、極めて単純なものが考えられる。

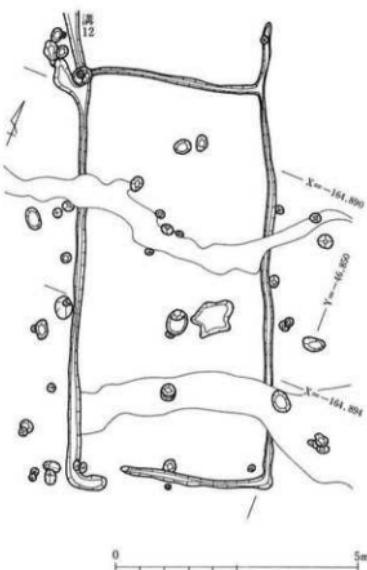


Fig. 180 C地区 平地住居1平面

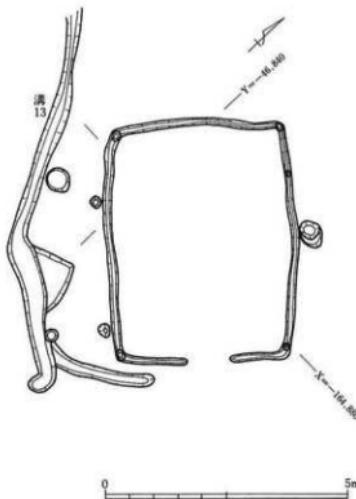


Fig. 181 C地区 平地住居2平面

## 4) ピット

古墳時代中期のピット群は、C地区の集落域とI地区の崖錐性堆積疊層面に集中している。C地区の集落域では約150基が、また、I地区では約90基のピットが検出されている(Tab.30~32)。これらのピット群は、規模も形状も種々複雑で、検出位置にも統一性が欠けるので、ピットそれぞれの、さらに周辺の遺構との有機的関連については、全くといってよいほど不明である。

埋土については、やや画一性が見られる。C地区に分布するものは、基本的に茶黒色の粘質土をその埋土としている。この茶黒色粘質土は、他の古墳時代中期の遺構埋土と共通する。

C地区内ではこの他に暗灰色粘質土を埋土とする一群があるが、これらは弥生時代以前か、奈良・平安時代以降の遺構埋土と共通するので、同一面で検出されたものではあるが、時期の異なるピットの可能性を考えておかねばならない。

I地区に分布するものは、基本的に黒褐色の粘質土を埋土としている。この黒褐色粘質土は、C地区での茶黒色粘質土と本質的には同等で、古墳時代中期に特徴的な遺構埋土と言える。

また、I地区内では、他に黄灰色シルトを埋土とする一群もある。これらについてもC地区と同様に同一面で検出しているが、時期の異なるピット群である可能性も考えられる。

これらのピットに遺物等が含まれることは極めてまれであり、ほとんどが土器の小破片である。

C地区で検出されたP18では、埋土の上層で、外面に平行タタキを施す土師質の甕がほぼ完形で出土している。埋土は茶黒色粘質土、黒褐色粘質土で構成されている。また、このピットの底部は木根痕に搅乱されているが、ちょうどその部分で人頭大の甕、須恵器の甕口頸部、土師器の甕上半部、韓式系の小型平底鉢などが出土しており、他のピットとは異なった様相を呈している。

Tab.30 古墳時代ピット一覧表(1)

No.	調No.	発No.	地 区	時 期	形 状	具 体	規 格	深 度	埋 土	備 考
1	M-P20	P313	Offg3	中期以降	円	20	20	晴 底		
2	M-P19	P312	Offg3	中期以降	不 積	32	32	13.5	晴 底	調2を切る
3	M-P21	P311	Offg3	中期以降	円	36	36	16.5	晴 底	調2を切る
4	M-P17	P310	Offg2	中期以降	円	56	56	15.6	茶 黒	調2を切る
5	S-P15	P299	Offg3	中期以降?	円	50	43	5.3	茶 黑	調3を切る
6	S-P11	P298	Offg3	中期以降?	円	24	21	34.5	?	調3を若干切る
7	M-P1	P296	Offg10	中期以降	円	26	20	35	茶 黑	調3との関係からスエー-3II隣か
8	P-P54	P142	N910	中期?	円	46	32	16.2	晴 底	
9	P-P60	P147	N919	中期?	円	15	14	15.1	茶 黑	
10	P-P60	P150	N919	中期?	円	15	15	10.5	茶 黑	
11	P-P60	P151	N919	中期?	円	21	18	16.5	茶 黑	
12	P-P65	P152	N919	中期?	円	29	29	9.5	茶 黑	
13	P-P65	P148	N919	中期?	円	14	14	5.1	茶 黑	
14	P-P65	P149	N919	中期?	円	15	13	9.2	茶 黑	
15	P-P65	P153	N918	中期?	円	21	18	29	茶 黑	
16	P-P67	P154	N918	中期?	円	23	22	12.9	茶 黑	
17	P-P71	P158	N918, Offg8	中期?	円	53	50	32.3	茶 黑	
18	P-P79	P141	Offg8	中 期	円	59	53	17.5	茶 黑, 晴底	韓式系甕, 土器片, 人頭大縁
19	P-P80	P142	Offg8	中 期	円	25	25	6.5	茶 黑	
20	P-P85	P155	Offg8	中 期?	円	29	27	5.3	茶 黑	
21	P-P89	P156	Offg8	中 期?	円	34	14	5.2	茶 黑	柱腰5の解くずれ
22	P-P92	P159	Offg8	中 期?	円	25	20	13.6	茶 黑	
23	P-P51	P138	Offg8	中 期?	不 積	60	32	4.7	茶 黑	柱腰5の解くずれ
24	P-P50	P137	Offg8	中 期?	円	?	?	?	茶 黑	
25	P-P53	P140	Offg7, Offg8	中 期?	縦 円	33	22	10.6	茶 黑	
26	P-P41	P132	N918	中 期?	玄 円	59	38	14.2	茶 黑内黄褐	
27	P-P29	P150	N918	中 期?	晴 状	68	19	11.5	晴 底	
28	P-P27	P128	N918	中 期?	円	?	?	?	茶 黑	
29	P-P27	P128	N918	中 期?	円	14	12	7.5	茶 黑	
30	P-P26	P127	N918	中 期?	円	15	15	13.3	茶 黑	
31	P-P25	P126	N917	中 期?	縦 円	78	60	16.5	晴底, 茶 黑	
32	L-P50	P223	N917, N918	中 期?	円	20	17	7	茶 黑	
33	L-P51	P224	N917	中 期?	円	38	36	5	茶 黑	
34	L-P57	P225	N917	中 期?	縦 円	28	17	5	茶 黑	
35	L-P56	P223	N917	中 期?	縦 円	39	30	5	茶 黑	
36	L-P51	P225	N917	中 期?	円	28	25	5.5	茶 黑	
37	L-P22	P226	N917	中 期?	縦 円	24	17	5	茶 黑	
38	L-P23	P227	N916	中 期?	不 積	31	17	4.5	茶 黑	
39	L-P40	?	N916	中 期?	不 積	60	42	4.6	茶 黑	軽穴住居2内
40	L-P18	P243	Offg6	中 期?	円	30	25	2.5	茶 黑	圓柱建物1の柱穴を切る?
41	L-P15	P241	Offg6	中 期?	円	21	20	4	茶 黑	
42	L-P61	P239	Offg6	中 期?	円	18	18	14	茶 黑	圓柱建物1の範囲内
43	L-P63	P240	Offg6	中 期?	縦 円	30	20	6	茶 黑	圓柱建物1の範囲内

## 3. 中期の集落

Tab.31 古墳時代ピット一覧表(2)

44	L-P67	P242	Q9a6	中期?	円	42	17	50	系 黒	
45	L-P9	P234	N9j6	中期?	円	38	36	3	系 黑	獨立建物1の柱穴に施る
46	L-P10	P238	O9a6	中期?	円	37	16	4	系 黑	柱穴に施る建物1の柱穴
47	L-P13	P238	O9a5	中期?	円	37	16	4	系 黑	柱穴に施る建物1の柱穴
48	L-P59	P255	O9a5	中期?	円	17	14	11	系 黑, 銀灰	独立建物1の範囲内
49	L-P60	P236	O9a5	中期?	円	30.5	20	11	系 黑, 銀灰	独立建物1の範囲内
50	L-P48	P221	N9j6	中期?	円	28	25	12.7	系 黑	独立建物1の範囲内
51	L-P45	P219	N9j6	中期?	円	25	20	4.2	系 黑	
52	L-P1	P218	N9j6	中期?	円	45	19	19.7	系 黑	
53	L-P2	P218	N9j6	中期?	方	35	18	8	系 黑	
54	K-P1	P214	N9j5	中期?	方	13	12	16	系 黑	
55	K-P1	P215	N9j5	中期?	方	27	20	12	系 黑	
56	D-P2	P162	N9b5	中期?	円	30	19	3	系 黑	
57	D-P2	P163	N9i9	中期?	円	21	19	9	系 黑	
58	D-P2	P164	N9i9	中期?	機	30	21	20	系 黑	
59	D-P1	P161	N9i9	中期?	機	7	7	7	系 黑	調査の肩くずれ?
60	C-P1	P160	N9i9	中期?	円	43	28	28	系 黑	
61	C-P2	P20	N9g9	中期?	不 積	18	18	3.5	系 黑	
62	C-P2	P21	N9g9	中期?	円	31	31	25	系 黑	調査
63	C-P2	P25	N9g9, b9	中期?	円	36	25	25	系 黑	
64	C-P24	P26	N9b9	中期?	円	22	22	3	系 黑	
65	C-P25	P26	N9b9, b9	中期?	円	30	29	4	系 黑	
66	C-P26	P20	N9g9	中期?	圓	38	30	4	系 黑	
67	C-P15	P15	N9g9	中期?	圓	22	21	20	系 黑	
68	C-P12	P21	N9g8	中期?	円	19	17	28	系 黑	柱穴? D68, 71, 72, 73と関連?
69	C-P19	P28	N9b8	中期?	円	22	18	45	系 黑	柱穴? D68, 71, 72, 73と関連?
70	C-P20	P28	N9b8	中期?	不動 2段	36	34	19	系 黑	柱穴? D68, 71, 72, 73と関連?
71	C-P15	P22	N9g8	中期?	不動 2段	25	18	30	系 黑	柱穴? D68, 69, 71, 72, 73と関連?
72	C-P14	P23	N9g8	中期?	円 2段	30	30	30	?	柱穴? D68, 69, 71, 72, 73と関連?
73	C-P15	P26	N9b8	中期?	円	20	14	40	系 黑	柱穴? D68, 69, 71, 72, 73と関連?
74	C-P15	P26	N9b8	中期?	円	24	24	24	系 黑	
75	C-P16	P25	N9b8	中期?	円	30	30	7	系 黑	
76	C-P3	P12	N9g8	中期?	不 積	24	20	2	系 黑	
77	C-P4	P13	N9g8	中期?	円	20	20	2	系 黑	
78	C-P6	P15	N9g8	中期?	円	18	16	4	系 黑	
79	C-P5	P14	N9g7, g8	中期?	円	22	22	4	系 黑	
80	C-P9	P14	N9g7, g8	中期?	不 積	20	15	30	系 黑	
81	C-P9	P15	N9g7, g8	中期?	不 積	19	19	20	系 黑	
82	C-P10	P19	N9g7, g8	中期?	不 積	32	32	3	系 黑	
83	C-P7	P16	N9g7	中期?	円	25	20	5	系 黑	
84	C-P6	P17	N9g7	中期?	円	20	20	6	系 黑	
85	P-P17	P111	N9b7	中期?	機	52	38	11.8	系 黑	
86	P-P2	P116	N9i7	中期?	半 機	61	35	4.9	系 黑	
87	P-P2	P117	N9i7	中期?	半 機	31	31	10	系 黑, 銀灰	柱穴? 特徴あり
88	K-P28	P110	N9i5	中期?	半 機	23	23	25	系 黑, 内系 黑	方形石碑状遺構2の内側
89	K-P27	P209	N9i5	中期?	不 積	70	64	15	系 黑, 内系 黑	
90	K-P46	P204	N9i5	中期?	半 機	37	32	?	銀灰	土坑3内
91	K-P49	P205	N9i5	中期?	?	20	17	23	系 黑, 地場	土坑3内
92	K-P47	P203	N9i5	中期?	半 機	25	22	7	銀灰	土坑3内
93	K-P33	P203	N9i5	中期?	機	30	22	19	系 黑, 内系 黑	
94	K-P34	P200	N9i5	中期?	機	30	27	7	系 黑, 内系 黑	
95	K-P25	P194	N9i6	中期?	機	27	24	1	系 黑	
96	K-P23	P192	N9i6	中期?	円	28	24	14	?	P97に切られる
97	K-P24	P193	N9i6	中期?	円	22	12	42	系 黑, 銀灰	P96を切る
98	K-P64	P197	N9i5	中期?	円	27	26	36	系 黑	
99	K-P26	P198	N9i5	中期?	半 機	48	32	5	系 黑	
100	K-P22	P199	N9i5	中期?	半 機	39	35	5	系 黑	
101	K-P24	P200	N9i5	中期?	不 積	38	38	5.5	系 黑	
102	K-P26	P208	N9i4	中期?	円	30	28	3	系 黑	
103	K-P35	P207	N9i4	中期?	方	38	32	3.5	系 黑, 内系 黑	
104	K-P28	P196	N9i5	中期?	半 機	30	24	3	系 黑	
105	K-P27	P195	N9i5	中期?	不 積	38	30	4	系 黑	
106	K-P22	P191	N9i5	中期?	円	22	21	4	系 黑	
107	K-P24	P192	N9i5	中期?	半 機	24	35	5.3	系 黑	
108	K-P21	P188	N9i5	中期?	半 機	50	45	5	系 黑	
109	K-P20	P189	N9i5	中期?	円	32	31	7	系 黑	
110	P-P9	P101	N9b6	中期?	円	34	28	57.7	系 黑, 銀灰	柱穴?
111	P-P7	P99	N9b6	中期?	不 積	44	37	14.7	系 黑, 銀灰	柱穴? 底に移行
112	P-P6	P98	N9b6	中期?	半 機	74	35	31	系 黑, 内系 黑	柱穴?
113	P-P5	P99	N9b6	中期?	方	35	28	59.1	系 黑, 内系 黑	柱穴?
114	P-P4	P104	N9b5	中期?	円	27	18	40	系 黑, 内系 黑	柱穴?
115	P-P7	P105	N9b5	中期?	円	25	11	40	系 黑, 内系 黑	柱穴?
116	P-P14	P106	N9b5	中期?	円	10	10	7.9	系 黑, 内系 黑	柱穴?
117	K-P22	P190	N9i5	中期?	不 積	41	28	4.5	系 黑	木棺3の底くずれ?
118	K-P19	P187	N9i4	中期?	半 機	26	24	6	?	
119	K-P59	P184	N9i4	中期?	不 積	10.5	10	24	系 黑	平地住居2に隣接? P120と同様
120	K-P60	P183	N9i4	中期?	半 機	12	10	13	系 黑	平地住居2に隣接? P120と同様
121	K-P61	P182	N9i4	中期?	半 機	20	17	17	銀灰	方形容狀遺構1の内側
122	K-P53	P182	N9i4	中期?	円	26	26	10.9	暗窓内系 黑	調査の肩くずれ?
123	P-P1	P93	N9b5	中期?	機	30	15	6	系 黑, 内系 黑	
124	O-P48	P90	N9b6	中期?	機	33	15	6	系 黑, 内系 黑	
125	O-P49	P91	N9b6	中期?	円	35	19	6	系 黑, 内系 黑	土器部?
126	O-P45	P87	N9b6	中期?	円	16	18	17	系 黑	
127	O-P46	P88	N9b6	中期?	円	14	6	系 黑	土器部?	
128	O-P15	P92	N9b6	中期?	円	30	25	6	系 黑, 内系 黑	
129	O-P16	P93	N9b6	中期?	円	25	22	10	系 黑, 内系 黑	
130	O-P61	P95	N9b6	中期?	円	25	22	9	系 黑, 内系 黑	
131	O-P60	P96	N9b6	中期?	不 積	25	20	9	系 黑, 内系 黑	
132	C-P1	P10	N9i6	中期?	円	22	20	7	系 黑	
133	K-P15	P181	N9b3, N9b4	中期?	円	20	18	22	?	
134	K-P16	P182	N9b3, N9b4	中期?	円	22	20	15	系 黑	
135	K-P18	P175	N9b3	中期?	円	27	25	35	系 黑, 内系 黑	P137, 140と並ぶ
136	K-P53	P171	N9b3	中期?	円	25	21	4	系 黑, 内系 黑	P135, 140と並ぶ
137	K-P5	P170	N9b2	中期?	円	26	26	33	系 黑, 内系 黑	P135, 140と並ぶ

Tab.32 古墳時代ピット一覧表(3)

138	K-P4	P169	N552	中後期	銅 円	50	44	2	不 無	
139	K-P5	P165	N553	中後期	銅 円	22	19	2	不 無	
140	K-P6	P168	N553	中後期	銅 円	50	38	54.1	馬伏シ賞馬	馬腹器片 P135, 137と並ぶ
141	K-P7	P166	N552	中後期	銅 円	22	17	3	不 無	
142	K-P5	P167	N552	中後期	銅 円	32	16	4	不 無	踏込み 1を切る
143	P-9	な し	N5610	中~後期	円	29	28	20	黑	
144	P-10	な し	N5610	中~後期	円	35	31	54.1	馬シルト	
145	P-11	な し	N5610	中~後期	円	30	28	9.2	灰	
146	P-12	な し	N5610	中~後期	円	27	20	17.7	灰	
147	P-13	な し	N5610	中~後期	円	27	20	17.7	灰	
148	な し	な し	N5618	中~後期	不 無	2	2	2	?	
149	な し	な し	N5618	中~後期	円	2	2	2	?	
150	な し	な し	N5617	中~後期	円	?	?	?	?	
151	な し	な し	N5617	中~後期	円	60	60	7.8	馬伏シルト	
152	な し	な し	N5617	中~後期	円	35	28	2.5	馬伏シルト	
153	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	50	30	9	馬伏シルト	
154	な し	な し	N5617	中~後期	円	25	21	4.8	馬伏シルト	
155	な し	な し	N5617	中~後期	円	30	30	5.1	馬伏シルト	
156	な し	な し	N5617	中~後期	円	38	30	7.3	馬伏シルト	
157	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	50	30	2.8	馬伏シルト	
158	な し	な し	N5617	中~後期	円	30	28	10.2	馬伏シルト	
159	な し	な し	N5617	中~後期	円	27	24	2.4	馬伏シルト	
160	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	50	23	2.3	馬伏シルト	
161	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	55	30	6.3	馬伏シルト	
162	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	30	28	5.6	馬伏シルト	
163	な し	な し	N5617	中~後期	円	28	25	4.4	馬伏シルト	
164	な し	な し	N5617	中~後期	円	30	23	4.6	馬伏シルト	
165	な し	な し	N5617	中~後期	円	36	30	5.9	馬伏シルト	
166	な し	な し	N5617	中~後期	円	25	24	1.6	馬伏シルト	
167	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	50	31	1.7	馬伏シルト	
168	な し	な し	N5617	中~後期	銅円	110	28	4	馬伏シルト	
169	な し	な し	N5617	中~後期	円	?	28	?	馬伏シルト	
170	な し	な し	N5617	中~後期	円	?	?	?	馬 無	
171	な し	な し	N5617	中~後期	不 無	?	?	?	馬 無	
172	な し	な し	N5617	中~後期	不 無	?	?	?	馬 無	
173	な し	な し	N5617	中~後期	不 無	?	?	?	馬 無	
174	な し	な し	N5617	中~後期	不 無	?	?	?	馬 無	
175	な し	な し	N5617	中~後期	円	?	?	?	馬 無	
176	な し	な し	N5617	中~後期	円	?	?	?	馬 無	
177	な し	な し	N5617	中~後期	円	?	?	?	馬 無	
178	な し	な し	N5617	中~後期	円	22	20	16.1	馬 無	
179	な し	な し	N5617	中~後期	円	30	20	11	馬 無	
180	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	45	27	3.2	馬 無	
181	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	41	20	9.2	馬 無	
182	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	40	30	10.6	馬 無	
183	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	42	26	9.4	馬 無	
184	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	48	33	11.5	馬 無	
185	な し	な し	N5617	中~後期	円	40	32	9.1	馬 無	
186	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	50	23	8.8	馬 無	
187	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	48	27	7.7	馬 無	
188	な し	な し	N5617	中~後期	円	45	35	19.2	馬 無	
189	な し	な し	N5617	中~後期	円	40	30	10.9	馬 無	
190	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	50	30	10	馬 無	
191	な し	な し	N5617	中~後期	円	40	30	9.5	馬 無	
192	な し	な し	N5617	中~後期	円	50	50	9.8	馬 無	
193	な し	な し	N5617	中~後期	円	30	25	6.2	馬 無	
194	な し	な し	N5617	中~後期	円	29	27	9.7	馬 無	
195	な し	な し	N5617	中~後期	円	40	30	5.8	馬 無	
196	な し	な し	N5617	中~後期	不 無	60	45	7	馬 無	
197	な し	な し	N5617	中~後期	円	40	40	8.4	馬 無	
198	な し	な し	N5617	中~後期	円	64	50	15.8	馬 無	
199	な し	な し	N5617	中~後期	円	53	45	23.3	馬 無	
200	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	60	20	8.8	馬 無	
201	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	55	30	11	馬 無	
202	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	31	31	7.7	馬 無	
203	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	50	30	7.1	馬 無	
204	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	55	30	9	馬 無	
205	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	50	28	9.5	馬 無	
206	な し	な し	N5617	中~後期	円	30	30	10.3	馬 無	
207	な し	な し	N5617	中~後期	円	29	20	6.7	馬 無	
208	な し	な し	N5617	中~後期	長銅円	128	27	4.3	馬 錫	
209	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	50	27	12.1	馬 錫	
210	な し	な し	N5617	中~後期	不 無	100	49	8.1	馬 錫	
211	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	55	45	15.7	馬 錫	
212	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	40	22	8.2	馬 錫	
213	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	40	35	6.9	馬 錫	
214	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	30	27	9.7	馬 錫	
215	な し	な し	N5617	中~後期	円	32	30	6.8	馬 錫	
216	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	21	20	5.1	馬 錫	
217	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	58	40	7	馬 錫	
218	な し	な し	N5617	中~後期	円	30	20	3.3	馬 錫	
219	な し	な し	N5617	中~後期	不 無	50	37	10.4	馬 錫	
220	な し	な し	N5617	中~後期	円	35	30	8.6	馬 錫	
221	な し	な し	N5617	中~後期	円	30	27	9.3	馬 錫	
222	な し	な し	N5617	中~後期	円	28	22	6.3	馬 錫	
223	な し	な し	N5617	中~後期	銅 円	52	20	7.6	馬 錫	
224	P-18	P-18	M665	中~後期	円	25	21	21	馬 錫	
225	P-17	P-17	M665	中~後期	円	36	26	15.7	馬 錫	
226	P-16	P-16	M665	中~後期	円	32	28	13.5	馬 錫	
227	な し	な し	M612	中~後期	円	40	30	8.7	馬 錫	
228	な し	な し	M612	中~後期	銅 円	40	27	7.5	?	
229	な し	な し	M612	中~後期	銅 円	55	40	10.2	?	
230	な し	な し	M612	中~後期	銅 円	50	25	5.5	?	
231	な し	な し	M612	中~後期	円	78	70	8.2	?	

### 3. 中期の集落

#### 5) 土坑

古墳時代中期の土坑は、C地区の集落域でのみ検出されている。検出面は基本層序の第III層（黄褐色粘質土、マンガン粒を多く含む）の上面である。

各土坑は、規模や平面プランにかなりの差が認められる。また、搅乱を受けていたり、削平されて埋土のほとんどを欠失したりしており、本来の姿を復元するのは容易なことではない。しかしながら、そのような最悪の遺存状態にもかかわらず、これらの土坑群は多くの遺物を埋土中に包含している。遺物はほとんどが土器であるが、須恵器、土師器をはじめとして、韓式系土器など、その器種や器形も非常に多岐にわたっている。土坑群が分布しているのは、集落内の住居群に北面する広場のような空間であり、前述したような出土遺物の様相における共通性を勘案すると、その本来的な機能が、廃棄土坑としての性格を持つことが推定される。以下では土器の出土状況が明らかなものについて触れておく。

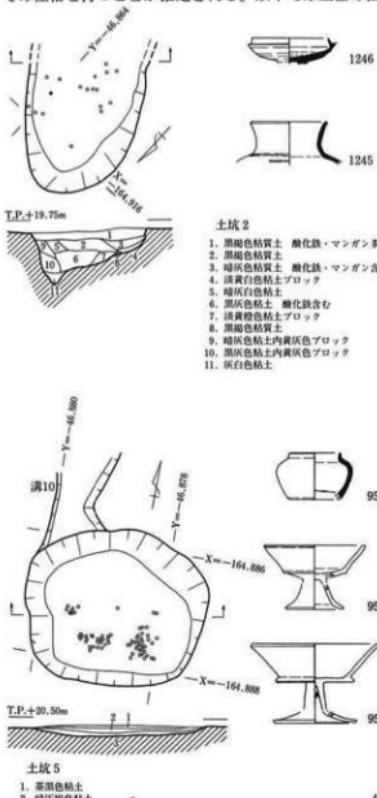


Fig. 182 C地区 土坑 2.5 平面および断面と主な出土遺物

**土坑 2 (Fig. 182)** 土坑 2 は、集落内で最も深度があり、遺構埋土の遺存状況が良かった。

しかし、遺構は南側が調査区外にあるため、その全容を知ることはできなかった。遺存した規模は、長軸、短軸ともに約 2 m を測り、深さ約 0.8 m を測る。

埋土は基本的に上下 2 層に分割できる。断面図によれば、層番号 1 が上層に当り、2~11までが下層に当る。下層が当該期の堆積層であり、黄褐色粘質土と暗灰色系の粘土で構成される。

遺物は上下両層から出土しているが、下層では小破片が多く、図示できなかった。なお、上層は時期の異なる堆積層なので後節で触れる。

**土坑 5 (Fig. 182)** 土坑 5 は、不整形な円形を呈するもので、直径約 2.8 m を測る。深さは最大で約 26 cm、最小で約 14 cm を測り、平坦な底部を持つが、南側へ向かって傾く。

埋土は、上層が茶黒色粘土、中層が暗灰褐色粘土、下層が黄褐色粘土の 3 層で構成されている。これらの堆積層はそれぞれ薄いもので、なだらかなレンズ状の堆積状況を見せてている。

出土遺物はほとんどが下層に含まれており、遺構の底面に貼り付いているものが多い。須恵器では肩部の張る平底の短頸壺が出土している。この短頸壺の形態は、その故地を想起させる。

土師器では大小 2 タイプの高壺が出土している。

**土坑 8 (Fig. 183)** 土坑 8 は、平面プランが卵形を呈する。規模はその長軸が約 3.7 m を測り、

短軸が約2.5mを測る。深さは、最も深い部分で約22cmを測る。

埋土は、単一層で、茶黒色粘質土である。埋土中には、炭化物や焼土塊が大量に含まれていた。

出土遺物は、粉々な小破片がほとんどであるが、土坑内の全域にくまなく分布しており、その出土量は後述する土坑19に次いで多い。

須恵器では、手持ちヘラケツリを施した小型鉢、高环の坏部などが出土している。土師器では、大小2タイプの高坏の他に、山陰系の甕の口頭部、腹などが出土している。また、韓式系土器では平底鉢なども出土しており、遺物の内容は多様である。

**土坑14(Fig.183)** 土坑14は、不整形な円形を呈する。規模は、最大の幅が約3.8m、最小の幅が約3.2mを測る。深さは、最小で約10cm、最大で約16cmを測る。土坑の底面は、比較的平坦であるが、底面と壁面の区別が明瞭で、本来の深度が現状よりかなり深いものであったことを類推させる。

埋土は単一層で、茶黒色粘質土であり、大量に炭化物を含んでいる。遺物は、底面近くに集中して

いた。口頭部に突帯状の張り出しを持つ須恵器の短頸壺や、韓式系の平底鉢などが出土しているが、一部の土器は、後述する溝11の出土遺物との接合関係を持つ。

**土坑15(Fig.183)** 土坑15は、不整形な方形の平面プランを持つ。北辺が長さ約2.3m、東辺は長さ約2.4m、南辺は長さ約2m、西辺は長さ約2.4mを測る。

西辺の中央部では、辺に直交した、長さ約0.4m、幅約0.2mの突出部分がある。

埋土は単一層で、茶黒色粘質土である。遺物は希少であり、ほとんどが小破片であったために図示することができず、詳細も不明である。

**土坑19(Fig.184)** 土坑19は、木根痕等にかなり搅乱されており、全体の形状を捉えにくいが、かろう

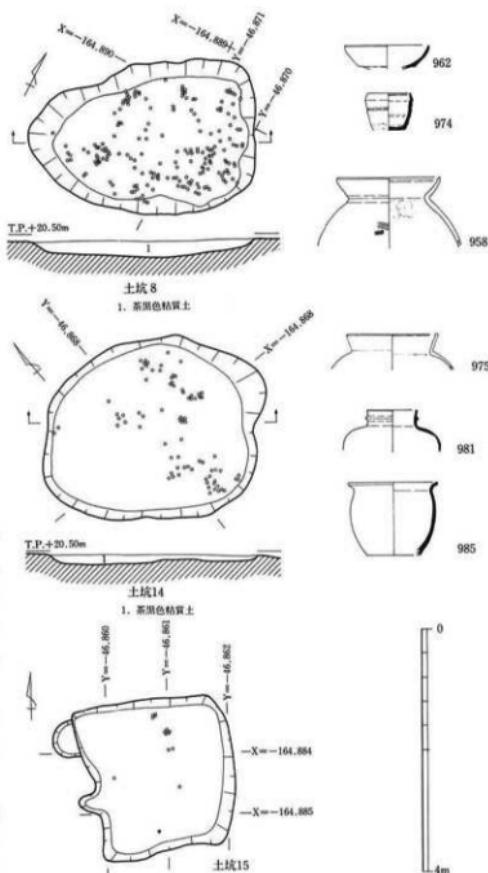


Fig.183 C地区 土坑8.14.15平面および断面と主な出土遺物を持つ須恵器の短頸壺や、韓式系の平底鉢などが出土しているが、一部の土器は、後述する溝11の出土遺物との接合関係を持つ。

3. 中期の集落

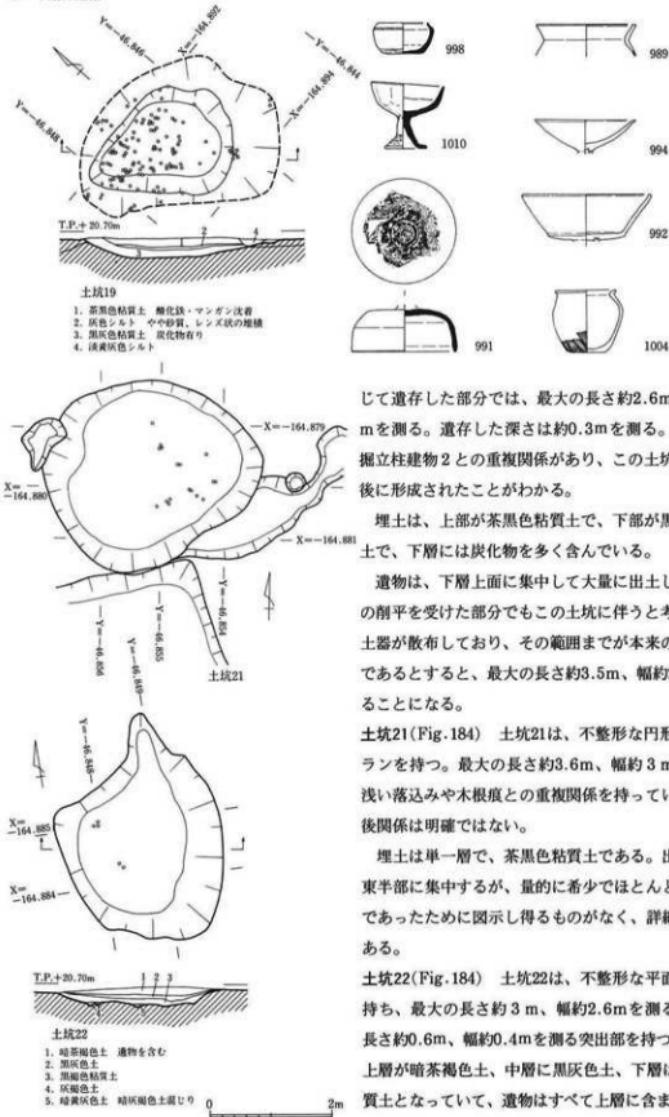


Fig.184 C地区 土坑19, 21, 22平面および断面と主な出土遺物

じて遺存した部分では、最大の長さ約2.6m、幅約2mを測る。遺存した深さは約0.3mを測る。前述した掘立柱建物2との重複関係があり、この土坑が建物の後に形成されたことがわかる。

埋土は、上部が茶黒色粘質土で、下部が黒灰色粘質土で、下層には炭化物を多く含んでいる。

遺物は、下層上面に集中して大量に出土した。上部の削平を受けた部分でもこの土坑に伴うと考えられる土器が散布しており、その範囲までが本来の構造規模であるとすると、最大の長さ約3.5m、幅約2.5mを測ることになる。

**土坑21(Fig.184)** 土坑21は、不整形な円形の平面プランを持つ。最大の長さ約3.6m、幅約3mを測る。浅い落込みや木根痕との重複関係を持っているが、先后関係は明確ではない。

埋土は単一層で、茶黒色粘質土である。出土遺物は東半部に集中するが、量的に希少ではほとんどが小破片であったために図示し得るものなく、詳細は不明である。

**土坑22(Fig.184)** 土坑22は、不整形な平面プランを持ち、最大の長さ約3m、幅約2.6mを測る。北側に長さ約0.6m、幅約0.4mを測る突出部を持つ。埋土は、上層が暗茶褐色土、中層に黒灰色土、下層は黒褐色粘質土となっていて、遺物はすべて上層に含まれていた。出土した遺物は、極めて少量かつ小破片のみで、図示し得るものなく、詳細は不明である。

土坑35(Fig.185) 土坑35は、集落域の最東端に位置し、後述する井戸と隣接している。

平面プランは、長椭円形を呈する。規模は、最大の長さ約4.4m、幅約3mとかなり大きなものである。しかし、上部はかなり削平を受けているようであり、遺存した深さは約16cmと深い。

埋土は單一層で、茶黒色粘質土である。出土遺物には、井戸の土器と接合関係を持つものが多い。

須恵器の無頬壺は、後述する溝23のものと近似している。

#### 6) 溝

古墳時代中期の溝は、B地区、C地区、E地区で検出されており、特にC地区的集落域には多くの溝が集中している(Fig.144,186)。これらの溝群は、古墳時代前期の溝群とは異なり、その断面形状が非常に画一的である。それは逆三角形であったり、逆台形、そして2段掘りといった、極めて人工的な形状を呈している。

さて、集落域での溝群は、その立地条件から2種類のパターンを読み取ることができる。

まず、第1のグループは、河川1や旧石津川と平行して、その間の巨大な自然堤防上で東西方向に検出される溝1、2、3の一群である。

そして、第2のグループは、河川1の両岸に形成された自然堤防上に位置しており、地形的な高低差に直交して検出される溝4・6、5・7、8、9、10、11、15の一群である。

これらの溝群の底部レベルが、流水の方向を示す指標となるならば、矢印で図示したように各溝が流れていることになる。この流水の方向は、上述した溝群の各グループに直接対応している。

第1のグループは、東から西へ流れている。これらは河川1からの導水を意識しているものと考えられる。第2のグループは、自然堤防の頂部を分岐点として、その両側へ流れている。これらは河川1や後述する谷状の地形に向かっての排水を意識しているものと考えられる。

詳細は後述するが、第2のグループの溝からは実際に河川1へ排水されており、その堆積物が河川内で検出されている。そして遺物を包含している量は、第2のグループが圧倒的に多く、第1のグループでは極めて少量の遺物しか出土していない。

こうした集落域周辺の溝群に見られる諸状況からは、以下のようなことが推測される。

まず、溝群には排水施設と導水施設としての2つの機能を考えられるということである。集落域から河川1の対岸へ渡った比較的広い部分には、具体的な遺構は何も検出されていないが、導水施設としての第1のグループの溝群があり、耕作地、あるいは水を必要とする何らかの施設が形成されていた可能性が考えられる。そして、第2のグループの溝群が集落内での排水施設として役割を担っていたとすれば、溝4~7の一群の存在をもって、その南側調査区外に新たな集落の存在を想定することが可能となるのである。

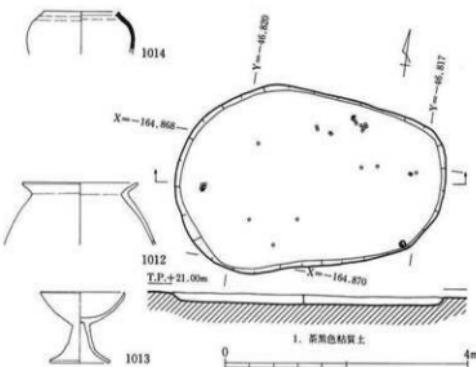


Fig. 185 C地区 土坑35平面および断面と主な出土遺物

### 3. 中期の集落

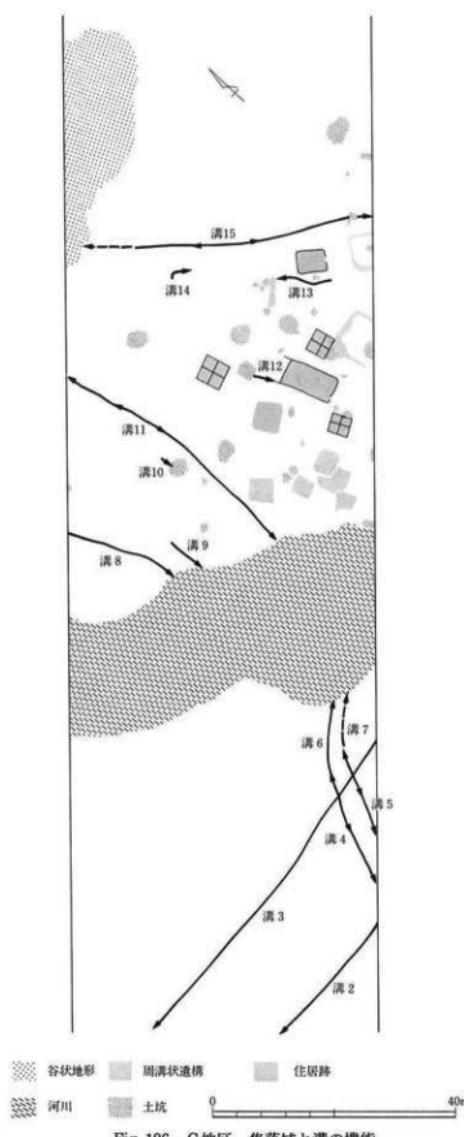


Fig. 186 C地区 集落域と溝の機能

溝 1 (Fig. 144, 146) 溝 1 は B 地区の 1B トレンチ、2B トレンチを横断するように検出されている。検出面は基本層序の第Ⅳ層（暗茶灰色粘土～シルト）の上面である。

溝の規模は比較的大きなもので、幅が平均で約 0.75m を測り、深さが平均で約 0.9m を測る。

埋土は、断面図 (Fig. 146) よると、かなり細かいブロック状の堆積層で構成されていた。上部は黄灰色系の砂質土で構成され、下部付近は灰褐色系の粘土で構成されている。これらの堆積層の状況を詳細に見ると、他の溝群とは異なる様相で、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

溝 2 (Fig. 144, 146, 186) 溝 2 は B 地区の 3B トレンチ、4B トレンチ、C 地区の 12C、17C トレンチで検出されている。検出面は、基本層序の第Ⅲ層（黄褐色系の粘質土）上面である。

溝の規模は、西側で幅約 0.32m、深さ約 0.22m を測り、中央部分で幅約 0.28m、深さ約 0.25m を測り、東側では幅約 0.38m、深さ約 0.23m を測る。検出された長さは約 40m 程度で、北西端部は途中で消失している。溝の埋土は、断面図 (Fig. 146) よると、西側と中央部では近似した様相を呈しており、上部が暗褐色土で構成され、下部が黄褐色土で構成される。東側の埋土はやや土色が異なり、C 地区の溝群と同様の黒茶色粘土（マンガン粒含む）で構成される。

溝3 (Fig.144,146,186) 溝3はB地区の3Bトレンチ、C地区の12Cトレンチ、17Cトレンチ、18Cトレンチ、19Cトレンチ、20Cトレンチ、21Cトレンチで検出されている。検出面は、基本層序の第III層（黄褐色系の粘質土）上面である。東側は河川1の西岸のやや低い部分で検出されており、幅約0.5m、深さ約0.5mを測る。断面形状はややバチ形を呈する。この部分では溝4～7と交錯しているが、重複の前後関係は明確ではない。中央部では、幅約1m、深さ約0.7mを測る。断面形状は上部が薄く開いた逆台形である。西側はほぼ同様である。埋土は基本的に暗茶褐色粘土である。遺物は酷似した法量を持つ須恵器の壺などが完形で出土している。

溝4・6 (Fig.144,146,186) 溝4と6は、C地区的12Cトレンチで検出されている。

検出面は、基本層序の第III層（黄褐色系の粘質土）上面から、河川1への落込み上である。

遺存した長さ約30mを測り、幅約0.35m、深さ約0.4mを測る。東側端部は、河川1の肩部へ直結して開口している。埋土は、茶黒色粘土の單一層で構成されていて、断面形状は逆台形を呈する。

埋土の茶黒色粘土は、開口部から河川1の斜面に流れ込み、堆積している。

溝5・7 (Fig.144,146,186) 溝5と7は、C地区的12Cトレンチで検出されている。

検出面は、基本層序の第III層（黄褐色系の粘質土）上面から、河川1への落込み上である。

遺存した長さ約15mを測り、幅約0.35m、深さ約0.35mを測る。東側端部は、河川1の肩部の手前の段状に落ち込んだ部分で止まっている。埋土は、茶黒色粘土の單一層で構成されていて、断面形状は逆台形を呈する。溝4・6と比較すると若干小規模である。

溝8 (Fig.144,146,186,187,188) 溝8はC地区的5Cトレンチ、6Cトレンチ、26Cトレンチ、27Cトレンチで検出されている。検出面は、基本層序の第III層（黄褐色系の粘質土）上面である。規模は、幅約0.6m、深さ約0.65mを測る。断面形状は逆台形を呈し、河川1へ開口する部分では大きくその幅を広げる。埋土は黒灰色系の粘質土であるが、炭化物を多量に含んでいる。

溝9 (Fig.144,186) 溝9はC地区的27Cトレンチで検出されている。

検出面は、基本層序の第III層（黄褐色系の粘質土）上面である。

規模は、極めて小規模なものである。検出された長さは、約2m程度に過ぎない。断面形状は半円形を呈しており浅いものである。

溝10 (Fig.144,182,186) 溝10はC地区的28Cトレンチで検出されている。溝10は土坑5と重複関係にあって、土坑5に切られている。

溝11 (Fig.144,146,186,189,190) 溝11はC地区的5Cトレンチ、6Cトレンチ、9Cトレンチ、27Cトレンチ、28Cトレンチで検出されている。

検出面は、基本層序の第III層（黄褐色系の粘質土）上面である。

検出された長さは約45mを測り、南西側端部は河川1右岸肩部に取り付いている。幅は最大で約1mを測り、最小で約0.6mを測る。深さは約0.55mを測る。

立地的には、河川1右岸の自然堤防上にあり、集落域の北西端部を画す位置で検出されている。

埋土は、上層が茶黒色粘土、下層は黒灰色粘土で構成されている。断面の形状は逆台形を呈する。

溝11からは大量の土器が出土している。出土層位は、中央付近では埋土の上部、両端部分では埋土の下部に該当する。これらの土器は、非常に多くの完形品を含んでいる。また、破片となったものの中には、同じ溝11内でも相当の距離をおいて接合関係を持つものが多い。

特に溝の中央部分で出土した蓋壺の一群は、ほとんどが完形品であり、壺身は壺身のみ、壺蓋は壺蓋

### 3. 中期の集落

のみで同じ向きに重ねられていた。そして、その坏身の上に勾玉が置かれていた。

他には、特筆すべき遺物として、須恵質の當て具が挙げられる。これは無文の當て具であり、把手は斜めに付くタイプのもので、土器の肩部付近の内面を成形する際に使用するものである。

當て具は近年にその類例が増したが、概して木製で同心円の刻みを持ち、このような須恵質で無文という初期の段階の當て具の例は珍しい。朝鮮半島に同様の例が見られるようである。

さて、以上のような諸状況を勘案すると、この溝11は、位置的にも集落の先端にあって、排水の機能を持つ主要な溝であったことがわかる。出土遺物の中で、広域に破片として散布しているものは、こうした集落存続期に廃棄されたと考えられる。

また、完形品の一群は、その出土状況からも、通常の廃棄とは異なる理由で溝内に投棄されたと考えられ、勾玉の存在からも、集落の廃絶段階で何らかの祭祀的な行為が行われたと推測される。

こうした集落廃絶の段階で行われる一連の祭祀行為が、齊一的に様々な遺構内でその遺存状況に現れるということは、遺構群の同時期性を示唆している可能性がある。

いずれにしても、溝11出土の須恵器で、一括性のある蓋坏の一群は、小阪遺跡における古墳時代中期集落の最終段階にあたり、その時期を示す資料として重要なものである。

溝12(Fig.144,180,186) 溝12は、C地区の30Cトレンチで検出されている。前述した平地住居1北西端で重複しており、溝12が平地住居1に先行するものであることは確実である(Fig.180)。

かなり小規模な溝で、長さ約2m、幅約0.8mを測る。

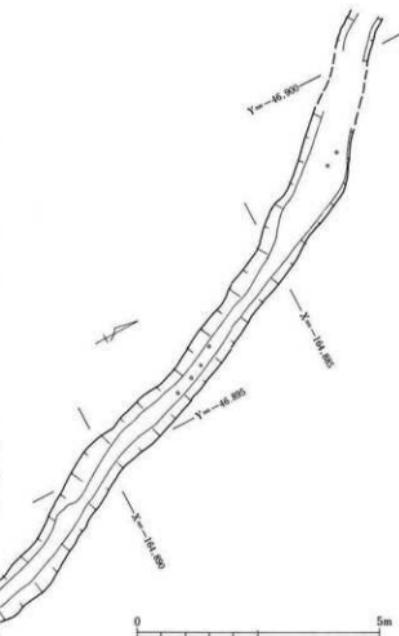


Fig. 187 C地区 溝8出土土器分布

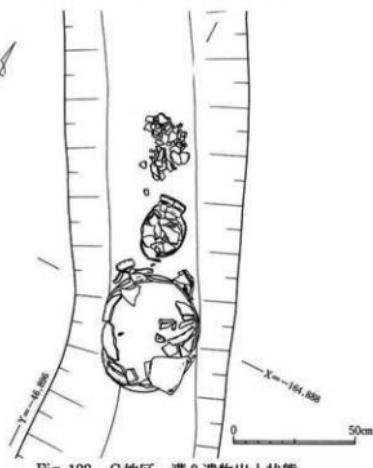


Fig. 188 C地区 溝8遺物出土状態

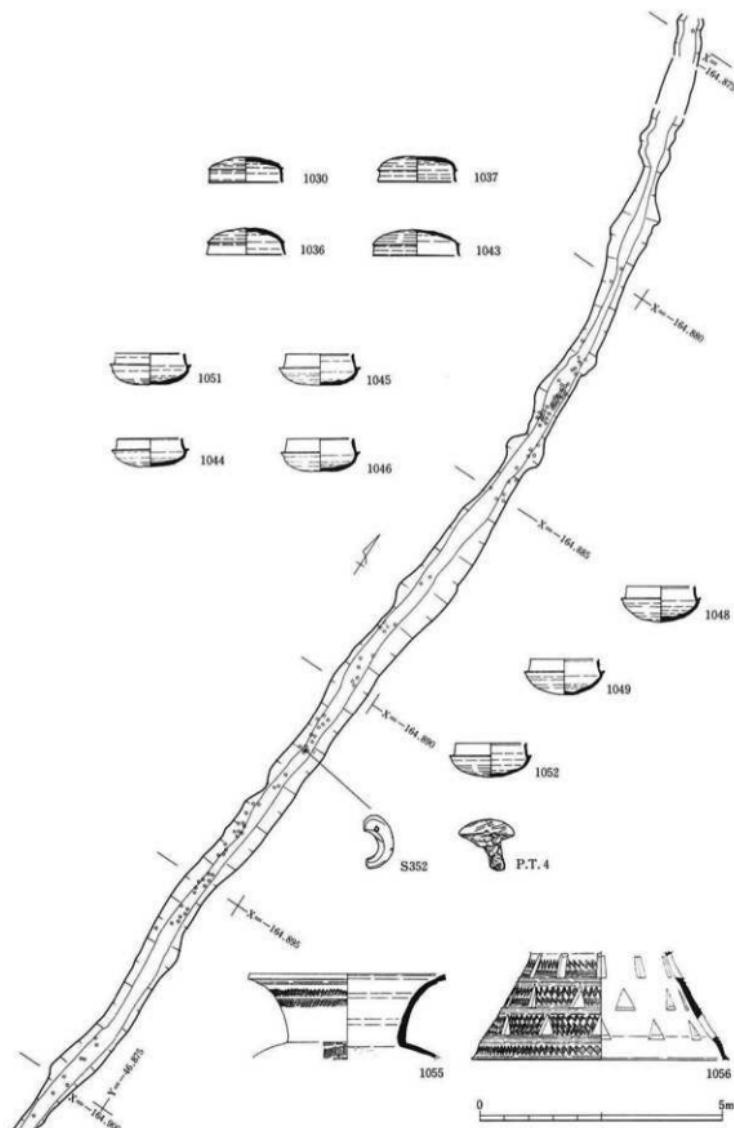


Fig. 189 C地区 溝11出土遺物分布と主な出土遺物

### 3. 中期の集落

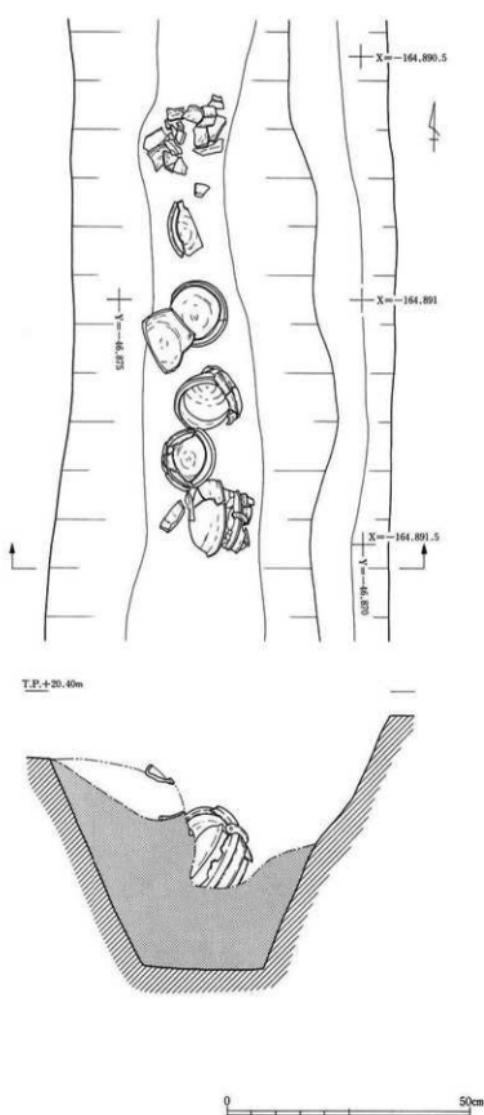


Fig.190 C地区 溝11勾玉出土状態

溝13(Fig.144,181,186) 溝13は、C地区の15Cトレンチで検出されている。前述した平地住居2北西側に近接して位置する。溝の北端部は土坑に切られ、南端部は新しい時期の溝に切られている。遺存した長さ約6m、幅約0.4mを測る。

溝14(Fig.144,186) 溝14は、C地区の30Cトレンチで検出されている。L字形に屈曲しているが、遺存した部分があまりに少なく、どのような遺構に伴うものかは不明である。遺存した長さは約4.5mを測り、幅は約0.5mを測る。

溝15(Fig.144,146,186) 溝15は、C地区の9C、15C、33C、34Cの各トレンチで検出されている。

検出面は、基本層序の第Ⅲ層(黄褐色系の粘質土)上面である。検出された総延長は約40mを測る。幅は約0.65mを測り、深さは約0.4mを測る。断面の形状は基本的に逆台形で、上部が浅く広がる、2段掘りのものである。溝内の埋土は、上層が黒褐色粘質土で構成され、下層が黒色粘土か灰色粘土で構成されている。この溝は集落域の東側に位置し、溝11とともに集落域を画するものである。

溝17・19(Fig.145,146,147,191)

溝17・19は、E地区の1E、3E、4E、5E、F地区の1F、7F、16Fの各トレンチで検出されている一連の溝である。

検出面は、基本層序の第Ⅲ層(黄褐色系の粘質土)～第Ⅳ層(灰褐色系のシルト、マンガン粒が集中する)の上面である。規模

は、長さ約80mを測り、幅約1.2m～1.7mを測る。埋土は基本的に暗黒褐色粘質土である。出土遺物は須恵器が主であるが、庄内期の土器も含まれ、前期の溝を再利用している可能性もある。北西に隣接した溝16は、小規模で詳細は不明である。

溝18(Fig.145,146,191) 溝18は、E地区の4E、5Eトレンチで検出されている。

北東端部でL字状に屈曲して、溝17に合流している。その重複関係は不明である。検

出長は約30m、幅は約0.6m、深さは約0.25mを測る。断面形状は、浅い逆台形を呈し、埋土は基本的に黒褐色～暗黄褐色粘質土である。

#### 7) 方形周溝状遺構

方形周溝状遺構1 (Fig.192) 方形周溝状遺構1は、C地区の15Cトレンチで検出されている。検出面は、基本層序の第Ⅲ層(黄褐色系の粘質土)上面である。周溝は、最大の幅約1.5m、最小の幅約1mを測り、遺存した深さは約0.1m程度を測る、比較的浅いものである。

コの字状に屈曲した周溝は、東側の溝が調査区外へ、西側の溝が途中で途切れており、全体の3分の2が検出されている。周溝の内法は、1辺が約6.5m程度である。埋土は茶黒色粘質土である。

削平のためか、中央部分には何も検出されなかったが、古墳の周溝であると考えられる。

方形周溝状遺構2 (Fig.192) 方形周溝状遺構2は、C地区の15Cトレンチで検出されている。検出面は、基本層序の第Ⅲ層(黄褐色系の粘質土)上面である。周溝は、最大の幅が約1.2m、最小の幅が約0.4mを測り、遺存した深さが約0.1m程度を測る浅い逆台形のものである。

コの字状に屈曲した周溝は、東西の両溝とともに調査区外へ続いており、全体の約半分が検出されている。周溝の内法は、1辺が約5m程度を測り、方形周溝状遺構1よりもやや小規模である。

埋土は茶黒色粘質土で、方形周溝状遺構1と同様に古墳の周溝であると考えられる。

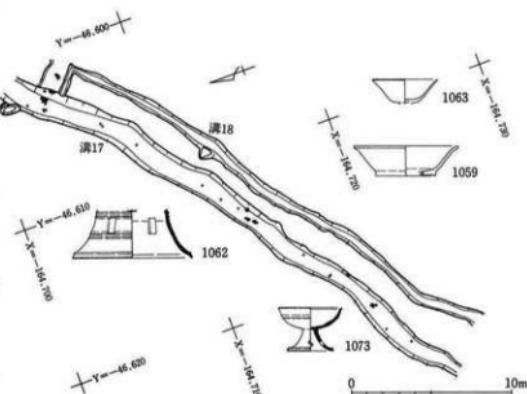


Fig. 191 E地区 溝17.18出土  
遺物分布と主な出土遺物

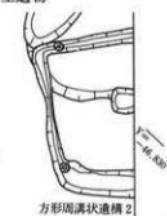
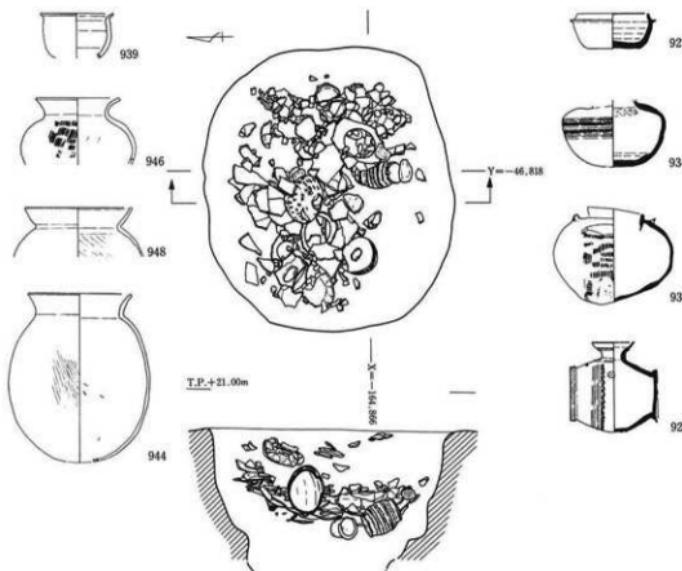


Fig. 192 C地区 方形周溝状  
遺構1.2平面

3. 中期の集落



T.P.+21.00m

T.P.+21.00m

1. 明灰褐色砂質土。マンガン・酸化鉄有り。シルト混じり緑土と黒灰色粘質土のブロック有り
2. 暗灰褐色粘土。1より色調暗い。黒灰色粘質土のブロック多し
3. 黒灰色粘質土。上部附近に酸化物含む
4. 黒灰色粘質土。青灰色粘土のブロック含む
5. 植物遺体のようすものか
6. 青灰色シートの複数に黒灰色粘土のブロックを含む
7. 黄褐色粘質土。黄褐色粘土と黒灰色粘質土との複合土



Fig.193 C地区 戸井1平面・断面と主な出土遺物

## 8) 井戸(Fig.193)

古墳時代中期の集落内で唯一の井戸1は、C地区の15Cトレーニング東端部で検出されている。検出面は、基本層序の第III層（黄褐色系の粘質土）上面である。平面の形状は楕円形のプランを持ち、長径約1.2m、短径約1mを測る。深さは約1.1mを測る。断面の形状から、2段掘りであることがわかり、下部はほぼ円形で、その直径は約0.4mを測る。堆積層は上部と下部の2層に分割することができる。断面図の層番号1の明灰褐色砂質土と2の暗灰褐色粘質土が上層にある。やや浅いすりばち状の堆積状況を呈しており、出土した土器はそのほとんどが2の中に含まれていた。下層は層番号3と4の黒灰色粘質土、5の植物遺体、6青灰色シルト（黒灰色粘土ブロック含む）である。層番号7は壁面が使用中に崩落したものと考えられる。これらの状況から、井戸としての利用が不可能になってから、土器が投棄されて、土坑群と同じように使用された可能性がある。出土した土器のうち、須恵器には土釜型の杯身などが含まれ、初期段階の高藏寺地区に特徴的なものが多い。なお、壁面には掘削時の工具痕が遺存していた。

## 9) 木根痕(Fig.194)

前述してきたように、古墳時代中期の集落域で検出される遺構は、木根痕に搅乱されていないものが無いぐらいである。集落廃絶後に付近が森林化していたのであろうか。

これらは一見すると、埋土の土質や土色、土器を多量に包含している等、溝などと取り違える要素が多い。しかし、平面的には放射状に枝分かれしていく求心部（幹？）を持つ上、進行方向や深さに規格性がない。しかも埋土は、遺構の埋土と基本層序の第III層がブロック状に混在したもので、木根痕の芯の部分には、木質が腐朽した後の灰色粘土が存在する場合が多い。

この木根痕に含まれる土器は、すべて遺構との重複関係が認められる部分でのみ出土している。

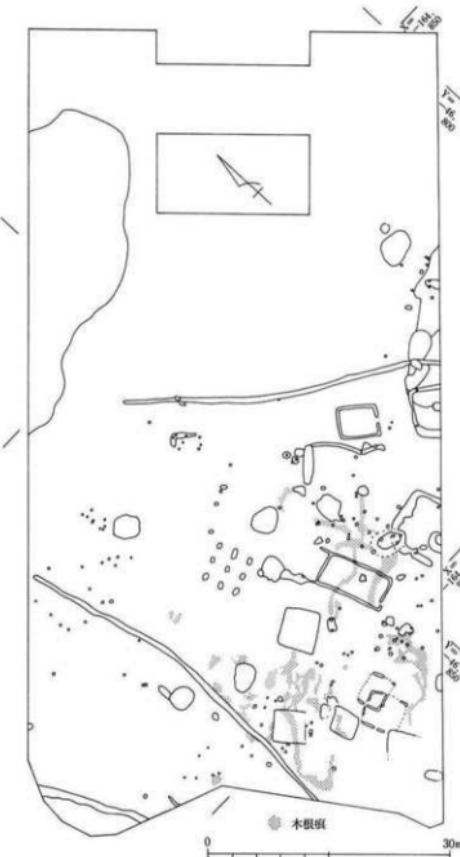


Fig.194 C地区 木根痕

#### 4. 中期～後期の遺構

### 4. 中期～後期の遺構

#### 1) 灰原(Fig.195,196)

灰原は、H地区の2Hトレンチ北東端部で検出されている。須恵器窯によって形成された、広範囲の廃棄物層である。窯本体は、調査区外の崖面に露出しているもので、今回の調査時に1基が確実に確認されているほか、以前に行われた分布調査では2基が存在するとされている。断面の形状を見ると、被火した粘土がドーム状に半円形を呈しており、天井部が完存している可能性が高く今後の調査が期待される。

灰原はこの窯体の方向を扇の要とし、南東方向へ幅約35mの半円形を呈して広がっている。

検出面は、基本層序の第Ⅳ層（青灰色シルト）の上面であるが、H地区は調査前にはほとんど全体が原ノ池に水没していたため、本来的には、G地区以西の第Ⅴ層と同じ範疇に含まれるものであるかどうか判断できない。

灰原の堆積層は、その上部を原ノ池築造時から今日までに相当量浸食されている。浸食を免れて遺存した厚さは最大で約1.6mを測る。灰原の堆積を除去した後の地形は、北西から南東へ傾斜するもので、灰原範囲の最大長約15mの間に比高差約1mを測る。

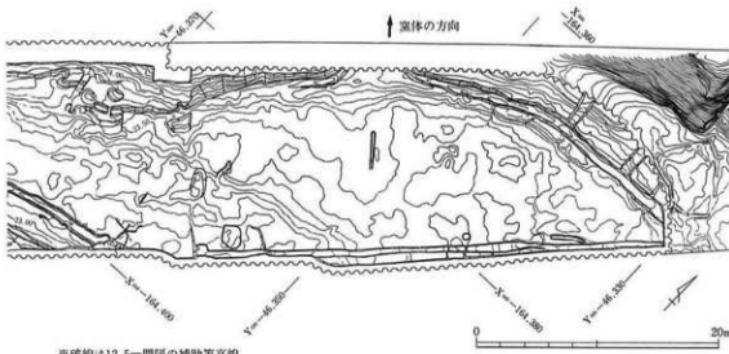


Fig.195 H地区 灰原除去後の地形

T.P.+26.00m

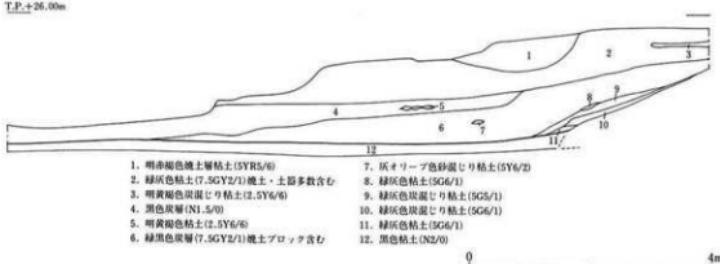


Fig.196 H地区 灰原断面

巨視的にみると灰原の堆積は、上、中、下層に分割できる。断面図(Fig.196)によれば、層番号1～3が上層にある。これらは粘土層であるが、非常に多くの炭化物と焼土を含む。出土した土器はその多くがここに含まれる。層番号の4～5は中層にあたり、基本的には黒色の炭化物層である。層番号6～11(緑灰色粘土～シルト)は、灰原形成以前の堆積層が再堆積したものであろうと考えられる。

堆積層内から出土した大量の土器には、その分布にほとんど偏在性が見られない。ただし、甕等の若干の器種に片寄りがあり、焼成時に器種が選択されていた可能性を示唆している。比較的容易に時期を特定できる蓋杯に限って、この灰原の操業期間を推測すれば、量的にそのピークが3回程度あることがわかる。すなわち、TK216型式(I型式2段階)～TK208型式(I型式3段階)頃の時期、MT15型式(II型式1段階)頃の時期、TK10型式(II型式2～3段階)頃の時期である。これらの土器に関しての器種構成等の情報は、サンプルを抽出して分析し、その概略を後項に記した。

## 2) しがらみ(Fig.197, 198)

しがらみは、G地区の10Gトレーニチ、12Gトレーニチで河川8の最終埋没層に伴って検出されている。

10Gトレーニチで検出されたしがらみは、比較的遺存状態が良かった。構造的には、非常に単純なもので、長さ3m程度の枝をはらった自然木を横倒しに流路に直交して置き、その周囲に先端部を尖らせるように加工した、長さ約70cm程度、直径約10cm程度の杭を配置している。

これらの杭は、古墳時代中期の土器群が含まれている最下層の砂礫に打たれている。また、しがらみ全体を埋没させている砂礫層には、後期の土器が含まれており、その存続時期が推定される。

しがらみが設定されている部分の少し手前には、後述する溝33が開口しており、溝内出土土器の時期関係などからも、溝33に導水するための役割をこのしがらみが担っていたと考えられる。

12Gトレーニチで検出されたしがらみは、遺存状態が悪く、数本の杭が砂礫中に打たれていたのみである。出土層位は、10Gトレーニチと同様である。

10Gトレーニチで検出されたしがらみ直前の河底部では、多数の須恵器がまとまって出土している。これらの土器群には、完形品が多く、特殊な器形も含まれている。時期的には、いわゆる定型化前後に位

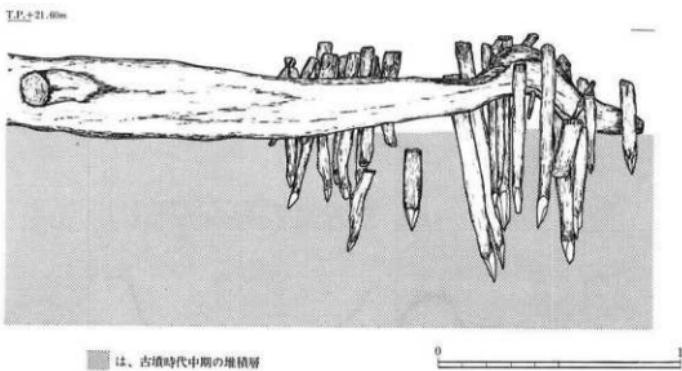


Fig. 197 G地区 河川8内しがらみ立面

4. 中期～後期の遺構

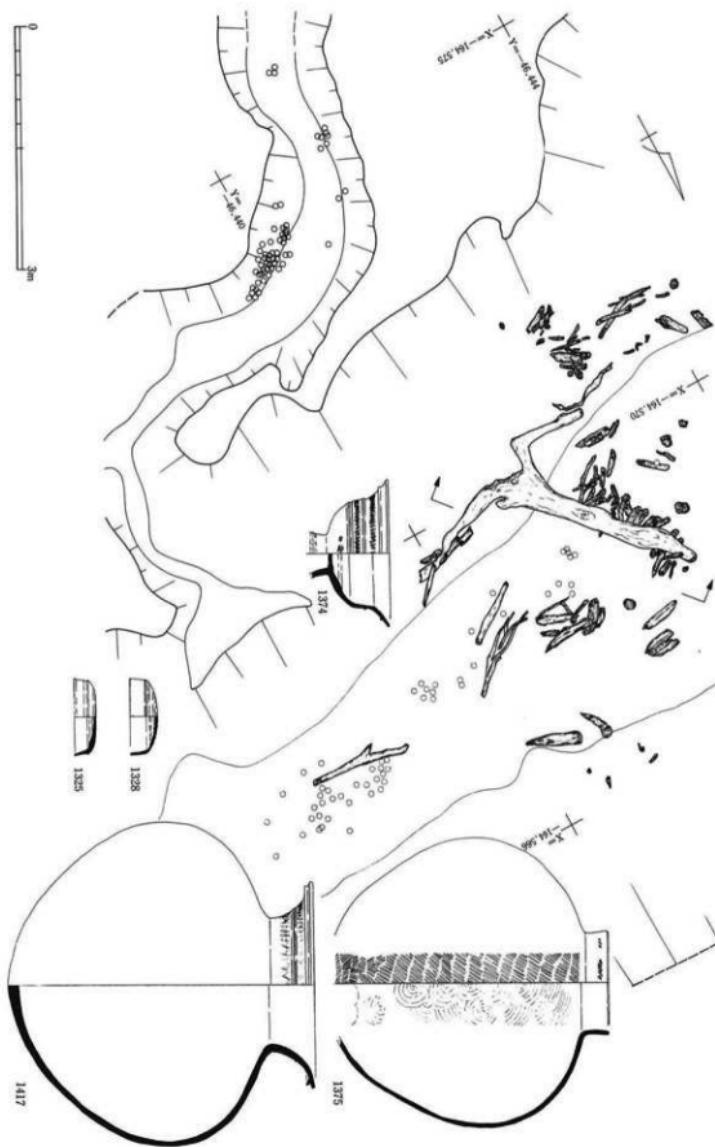


Fig.198 G 地区 河川 8 内しがらみ・溝33出土遺物分布と主な出土遺物

置づけられる一群であろう。

### 3) 土坑

土坑2(Fig.182) 土坑2はC地区の集落域で検出されている。南側は形状が不明である。

遺存した部分での規模は、長軸、短軸とともに約2mを測り、深さ約0.8mを測る。

埋土は上下2層に分割でき、層番号1の黒褐色粘質土が当該期の堆積層である。出土土器からわかる時期は、古墳時代後期前葉である。

土坑36、37、38(付図2) これら3基の土坑は、D地区の9Dトレンチ中央部で、東西に並んで検出されている。

最も西側に位置する土坑36は、ほぼ円形の平面プランを持つ。直径は約0.7m程度を測る。深さは約0.2m程度を測る。埋土は灰色粘質土である。

中央部分の土坑37は、不整形な平面プランを持つ。規模は、最大長で約3.2mを測り、深さは約0.3mを測る。埋土は灰色粘質土である。

土坑37からは、須恵器が数点出土している。これらは主として古墳時代後期のものであるが、溶着資料や、焼け歪みのあるもの、焼成不良のものを含んでいる。

そして、最も東側に位置する土坑38は、不整形な梢円形を呈する。規模は、最大長約4.2mを測り、深さ約0.1mを測る。埋土は灰色粘質土である。遺物は、土器の小片がわずかに出土している。

### 4) 溝

溝23(Fig.145,147) 溝23は、F地区の7Fトレンチ中央部で検出されている。

検出面は、基本層序の第IV層（黄褐色砂礫混じりシルト）～第V層（青灰色系の粘土）上面である。

検出長は約7mを測る。半円形に調査区内をかすめており、全容は不明である。深さは約0.8mを測り、幅は約1.7mを測る。

断面形状はすりばち状で、断面図(Fig.147)の層番号1～10までが当該溝の埋土である。出土遺物は、須恵器の無頬壺と小型の鉢である。

溝27(Fig.145,147) 溝27は、G地区の1Gトレンチ、2Gトレンチ、11Gトレンチ、12Gトレンチで検出されている。検出面は、基本層序の第V層（青灰色シルト）上面である。総延長は、約80mにおよぶ。幅は両端部が細く、中央部が太くなっている、最大で約1.7m、最小で約0.5mを測る。深さも両端部が浅く、中央部で深くなっている、最大で約0.8m、最小で約0.2mを測る。埋土は、灰色系のシルトで、粗砂の薄層を中間に挟む場合が多い。断面形状は不整形なすりばち状を呈している。河川8に平行し、後述する溝28を通じてつながっているが、導排水の機能については不明である。

溝28(Fig.145,148) 溝28は、G地区の12Gトレンチで検出されている。検出面は、基本層序の第V層（青灰色シルト）上面である。溝27に直交し、河川8と連結している。幅は最大で約4mを測り、深さは約1.1mを測る。埋土は、灰色系のシルトで構成されている。

溝33(Fig.145,146,198) 溝33は、G地区の10Gトレンチで検出されている。検出面は、基本層序の第V層（青灰色シルト）上面である。

検出長は約7m程度を測り、幅は約1.4mを測る。深さは約0.8mを測る。

埋土は、断面図(Fig.146)によれば、層番号1～2の黒褐色粘土が当該期の堆積層にあたる。下層には、溝の底部に貼り付いて、古墳時代中～後期に属す須恵器の坏身が出土しており、河川8下層と同様の時期であることがわかる。しがらみと同時に形成された導水施設であると考えられる。東南側の壁

#### 4. 中期～後期の遺構

面で庄内期の土器が出土しているが、付近の庄内期の包含層が流入したものと推定される。

溝34(Fig.145) 溝34は、H地区の2Hトレンチで検出されている。河川9の右岸に接して長さ約16mにわたって流れている。幅は約1.6mを測る。埋土は緑灰色系のシルトで構成されており、河川9の河岸に自然現象として形成されたもの可能性もある。

溝35(Fig.145,148) 溝35は、H地区の2Hトレンチで検出されている。

検出された部分では、長さ約48m、幅約1.8mを測り、深さ約0.3mを測る。埋土は黄褐色シルトであり、断面の形状はほぼ半円形を呈する。東側半分は河川9の右岸に接して検出されており、中央部でや屈曲して西側部は調査区外へ流れている。河川9に接している部分は、錯綜した堆積状況を呈しており、溝35の輪郭も非常に不明確であった。

溝36(Fig.145,148) 溝36は、H地区の1Hトレンチ、2Hトレンチで検出されている。

検出された部分では、長さ約80m、幅約0.8mを測り、深さ約0.25mを測る。埋土は黒褐色砂混じり粘土であり、断面の形状はほぼ半円形を呈する。大きな弯曲を描いて、調査区内を横断している。河川9とはほとんど接することはない。2Hトレンチ部分では、前述した溝35と重複しており、詳細は不明である。ただし、溝35に先行する溝であることは間違いない。

溝37(Fig.145,148) 溝37は、H地区の1Hトレンチで検出されている。幅約5.5m、深さ約1.3mを測る。河川9の左岸に隣接しており、埋土も自然堆積に近い様相を見せている。遺物は弥生から古墳時代までのものを含む。

#### 5) 水田(Fig.199)

この水田遺構は、H地区の2Hトレンチで検出されている。河川9の右岸中央部付近で、肩部斜面を若干利用するように形成されており、ある程度河川9が埋没した後に、その砂礫層の平坦面上に位置する。

水田面は畦畔によって区画された、2筆分が検出されている。一方は幅約1.8m、長さ約4mの長方形を呈し、もう一方は幅約2m、長さ約5mを測る。畦畔は高さ約0.2mを測り、幅約0.5m程度を測る。

畦畔や水田土壤を構成しているのは黒褐色シルトであり、非常に多くの有機質を含んでいる。この水田遺構からは遺物は出土していない。しかししながら、その検出面が前述した溝群や灰原と同一面であるということ、河川9の最終堆積物との間に精良な堆積層を挟むことなどを勘案すると、古墳時代後期にあたる時期に形成されていた可能性が高い。ただし、その存続期間については極めて短いものと推定される。

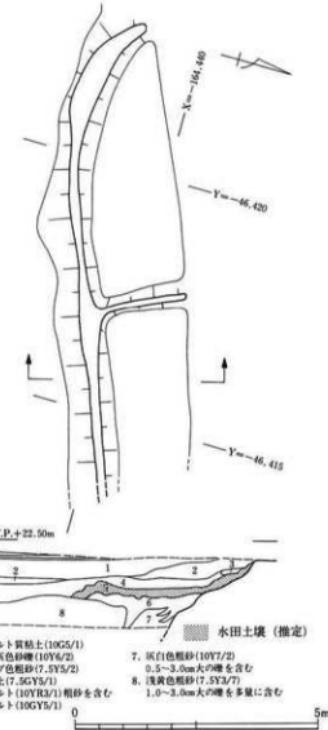


Fig. 199 H地区 水田平面および断面

## 5. 前期の遺物

古墳時代前期の遺構は、先の項でも述べたように、小阪遺跡のなかでも検出される地域が限定されている。それは、F地区およびG地区南半の地域である。また、古墳時代前期の河川は確認されていないものの、古墳時代中期～後期の河川8内からも、古墳時代前期の遺物が出土しており、ほぼ同一個所を流れていたと考えられる。

G地区の南東からF地区の北西にかけて張り出す尾根状の先端部にあたり、遺構が土坑数基および溝数条のみと希薄なものであることと考えあわせれば、この時期の集落の縁辺部と考えられる。

なおこの時期の遺物包含層は、後世の削平のためにほとんど残存しておらず、わずかに、古墳時代中期～後期の河川8の左岸肩部（3Gトレンチ・10Gトレンチ）で、この時期の土器群が斜面に貼り付くように検出され、包含層の名残と考えられる。

古墳時代前期の遺物は、大きくは、庄内期と布留期の2時期に区分でき、土器および石器等がコンテナにして約30箱出土している。

庄内期に属するものとしては、G地区的溝30-a、溝32、河川8左岸肩部土器群1、2出土の遺物がある。布留期に属するものとしては、G地区的土坑40、溝30-b、F地区的溝24出土の遺物があり、G地区的河川8等はその両者を含むものである。

以上、主な遺構等から出土した遺物の概略を述べたが、上述以外の他地域では、後世の包含層からわずかではあるがこの時期の遺物が出土している。

さらに後述するが、古墳時代中期以降の河川8、奈良平安時代河川等から多くの古墳時代前期の遺物が検出されることから、さほど遠くないG地区南東の尾根上に、古墳時代前期の集落があった可能性が考えられる。

以下、遺構毎に遺物を記述してゆく。

### 1) 土坑

遺物が出土する土坑は1基のみで、G地区的土坑40は、上部が削平されており、上層からは瓦器塊の小片が出土するが、遺構の重複による混入と考えられる。遺物は、下層から土器のみが出土する。直口壺の口縁部1点、塊形高环の脚部1点、甕3点の計5点である。甕は口縁部をつまみ出すもので、外面に指ナデおよび指頭圧痕を施し、内面に指ナデおよびヘラケズリを施す。器壁も厚く粗雑な作りである。3点共に、外面に煤が付着し、内面に炭化物が付着する。布留期以降とも考えられ、若干時期幅のある土器である。

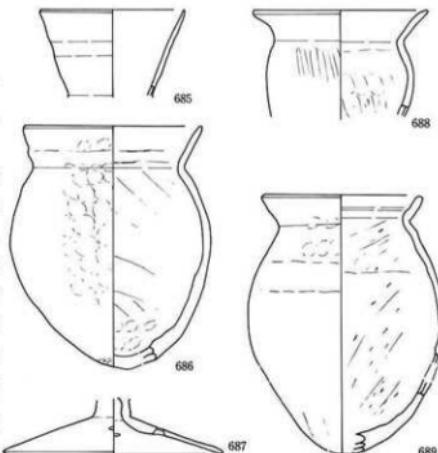


Fig. 200 G地区 土坑40出土遺物

5. 前期の遺物

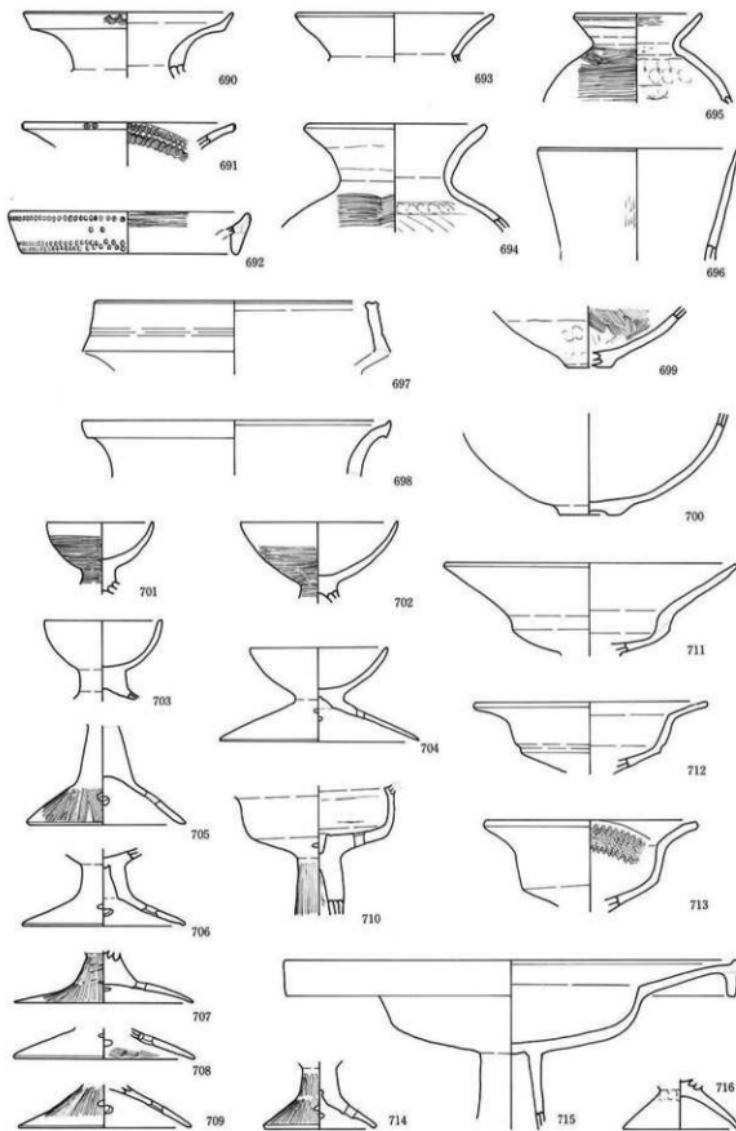


Fig. 201 G地区 溝30-a出土遺物(1)

## 2) 溝

実測可能な遺物の出土した溝は、G地区の溝30-32、F地区の溝24で、他は無遺物か土師器の小片をわずかに含む溝が数条ある。

## 溝30

溝30は、遺構の項でも述べたように、庄内期の溝30-aが埋った後、再掘削した布留期の溝30-bが検出されている。

i 溝30-a 溝30-aから出土した遺物は、口縁部が残存する破片および完形品を1個体として、309個体が出土している。その器種構成は、Tab.33の通りである。

Tab.33 溝30-a 出土土器機種構成

在地率(%)	壺	壺	壺	壺	高杯	脚台	その他	計
(%)	(37.9)	(9.1)	(2.6)	(5.8)	(5.8)	(2.3)	(1.9)	(97.4)
生駒西麓産	39	-	-	-	-	-	-	39
(12.6)	(12.6)							(12.6)

壺の占める割合が全体の7割であり、その中でも生駒西麓産のいわゆる「庄内壺」が、壺のなかで2割弱を占めている。次いで壺が1割弱を占め、鉢・高杯・壇・器台の類は1割にも未だない器種である。その他の遺物としては、飯蛸壺が4点、手培り形土器が2点出土している。

壺は、在地産の弥生第V様式を受け継ぐ粗い叩き目を施すものが大半を占める。体部内面の調整はほとんどのが、縦方向か斜め方向のハケメ状のナデを施す。口縁部は、短く外反するものと、斜め上方に伸びるもの(761.764.771)がある。底部は突出した平底のもの(766.775)と、わずかに突出する平底をもつものの(762.765)と、平底のもの(764.767)がある。(744~746.749)は、生駒西麓産の「庄内壺」をまねた在地産のもので、(746)は、右下がりの叩き目を施している。生駒西麓産の壺には、口縁端部が面をもつものの(768.770)と、わずかに立ち上がり面をもつもの(747.748.750.751.769)がある。

壺には、広口壺・二重口縁壺・長頸壺がある。広口壺は無文のもので、小型の(695)、中型の(693.694)、大型の(698)があり、体部外面は横方向のハケメ(694)か、ヘラミガキ(695)を施し、体部内面は指押さえか指ナデを施す。粘土紐の難ぎ目を顕著に残す。体部は球形と思われ、底部は突出した平底(699)か、中央部がわずかに凹むものである(700)。二重口縁壺には、小型(690.691.692)と大型(697)がある。高杯には、小型で塊形の坏部をもつものと、皿状の坏部から屈曲して斜め外方に伸びる口縁部をもつものがある。塊形のものは、内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。(710)は、坏底部の4方に円孔を穿ち、内面中心部に径1.0cm、深さ1.7cmの円孔を穿つ。特殊な高杯としては、大型で、浅い皿状の坏部に屈曲して斜め外方に大きく開く口縁部の端部がわずかに立ち上がり、垂下し外端面をもつ(715)がある。器台には、浅い台部をもつ小型の(717~722)と中型の(723)がある。前者には、口縁端部が丸みをもつものと、わずかに立ち上がり面をなすものがある。後者は、浅い皿状の台部に口縁部下端に粘土紐を1本難ぎ足し、中空の脚柱に、裾広がりの脚台をもつ。口縁部に棒状浮文上刻み目3本1対を6ヶ所に施し、その間に籠描きの鋸歯文を施す。壇には小型のものがあり、内寄する口縁部をもつ(724)と斜め上方にわずかに伸びる口縁部をもつ(726.727.729)と、外反する口縁をもつ(725.728)がある。わずかに上げ底ぎみの底部をもつものと、丸底のものがある。鉢には、小型のもの(733~740)と、大型のもの(742.743)があり、小型のものには、直口で弥生第V様式を受け継ぐ形のものが多い。(740)は、体部外面にカゴ目を残す。大型のものは、外反する口縁部をもち、片口のものがある。(742)は口縁部内外面ヘラミガキを施す。(743)は外面叩き目、内面ヘラミガキを施す。その他には、飯蛸壺があり、(732)はより小型のものである。手培りは図示しえなかったが、鉢部と覆部の口縁部破片が出土している。

## ii 溝30-b

5. 前期の遺物

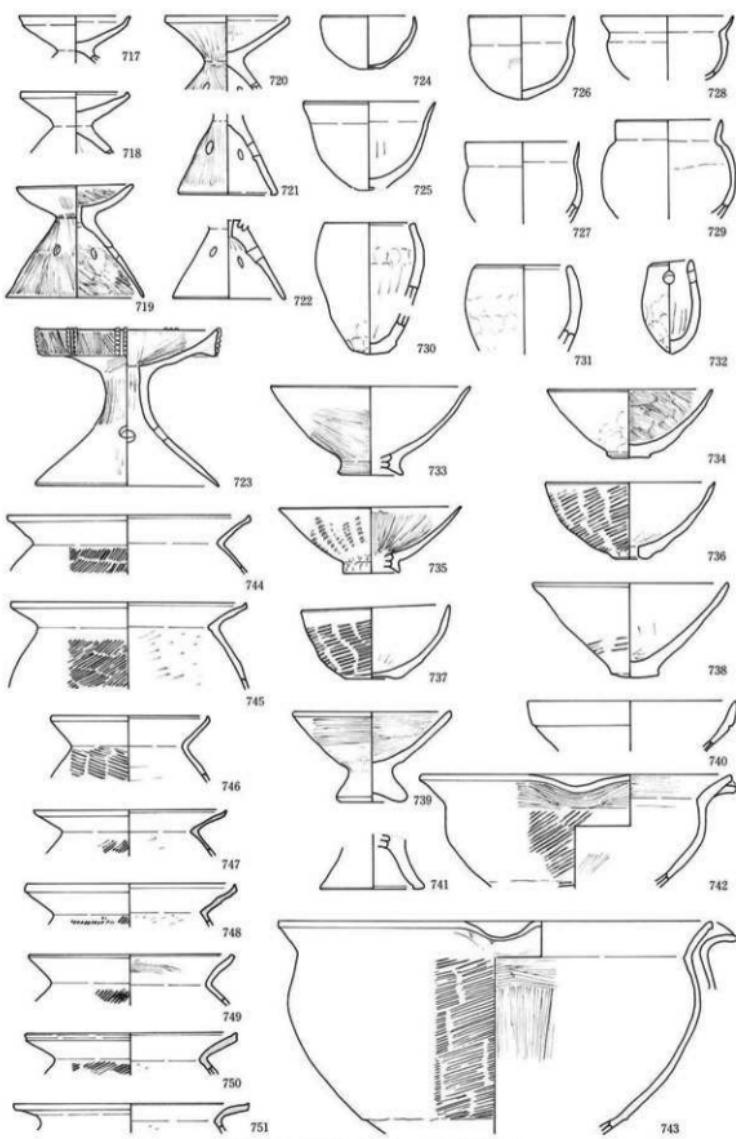


Fig. 202 G地区 溝30-a出土遺物(2)

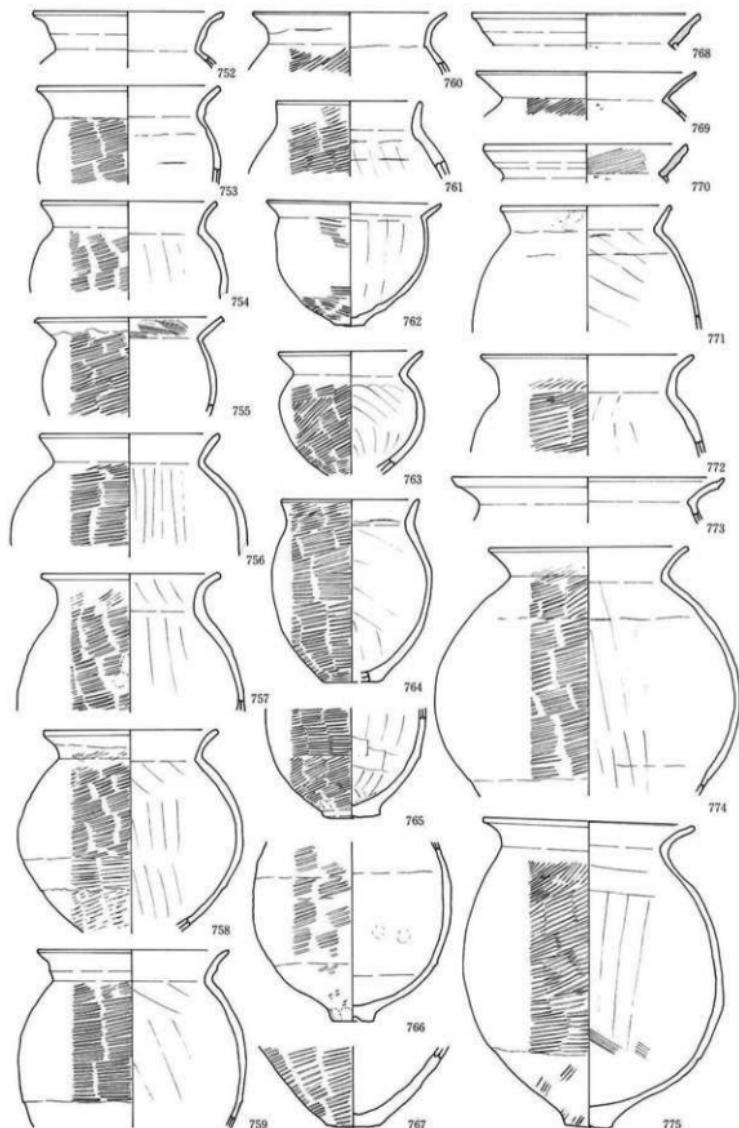


Fig.203 G地区 溝30-a出土遺物(3)

## 5. 前期の遺物

溝30-aが埋った後に再掘削された溝で、溝30-aの遺物を多く含んでいる。

土器の出土量は少なく、そのほとんどが、庄内期に属するものである(778~783)。

布留期に属する土器としては、(776.777)の甕が出土するのみである。前者は、わずかに内弯ぎみに斜め外方に伸びる口縁部の端部が丸みをもつものである。後者は、斜め外方へ内弯ぎみに伸びる口縁部の端部内部がわずかに肥厚する。くの字状に屈曲する頸部に球形の体部・丸底である。体部外面ハケメ、内面ヘラケズリを施している。両者ともに、内外面に媒が付着している。

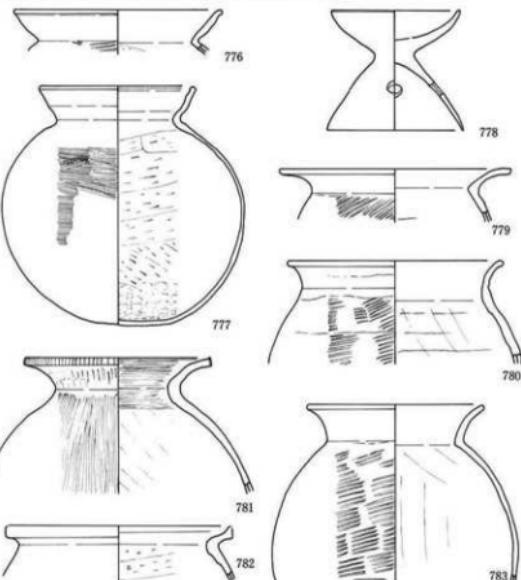


Fig. 204 G地区 溝30-b出土遺物



Fig. 205 G地区 溝30と河川8との合流点出土遺物

なお、溝30と河川8の合流点に、巨木の根株にひっかかるようにあった溝埋土と同様の黒褐色土の中にこの時期の土器が若干出土している。

コンテナにして2箱分であり、直口壺(784)・壺底部(796)、甕(785~788.794)、器台(789.790.793)、高杯(795)、鉢(791.792)等がある。

## 溝32

G地区的14Gトレンチで、溝30と直交する形で検出された溝で、土器のみがコンテナに約2箱出

土した。

小破片が多く、実測可能なものもわずかであり、詳細は不明である。

壺・甕・高坏・塊・器台等があり、他に手焼りがある。

溝30-aと同時期と考えられる。

#### 溝24

溝24出土の遺物は土器のみで、コンテナにして約5箱分である。小破片のものが多く、全体に磨滅しているものであり、調整等不明な点が多い。壺・甕・鉢・器台等がある。

壺には、わずかに口縁部が外反するもの(811.813.814)と、わずかに外方へ立ち上がるもの(812)、大型の二重口縁壺(817)がある。(812)の壺の体部内外面に、粘土紐の堆ぎ目を顯著に残す。壺の底部には、わずかに突出する

もの(830.835)と、丸底のもの(828.836)がある。二重口縁壺は、緑泥石を含む紀伊産のものである。

甕には、在地産の甕と、生駒西麓産のいわゆる「庄内甕」があり、後者が約1/3を占める。在地産の甕には、粗い叩き目を施す弥生第V様式系の甕(826.833.834)と、庄内甕の影響を受けた外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をなすもの(841.845)、内弯ぎみに伸びる口縁部の端部内面が肥厚せずにおわるもの(849.854.859.862)、口縁端部内面がわずかに肥厚するもの(853.857.863.864)等がある。(845)は、庄内甕と同様に、細かい叩き目を施した後縦方向のハケメを施している。(848.859)は、体部外面斜め方向のハケメを施し、(853.854.856~858)は横方向のハケメを施す。体部内面はヘラケツリするものが大半を占める。(853)は、体部外面肩部に押捺文を1個施す。(852)は、小型の甕で偏平な体部に丸底のもので、内外面ともにハケメを施す。(851)は、短く斜め外方に伸びる口縁部の下端に粘土紐を一本付け加えることにより口縁部を肥厚させている。

生駒西麓産の甕には、大きく外反する口縁部に、口縁端部がわずかに立ち上がり面をなすもの(841.842.846.847)と、口縁端部が面をなすもの(840)、口縁部が内弯ぎみに斜め外方に開き、口縁端部が尖りぎみにおわるもの(843)がある。

鉢には、小型で塊形のもの(815.816)、小型で内弯ぎみに斜め外方に伸びる口縁部をもつものの(822~824)、二重口縁をもつものの(818)、外反する口縁部をもつ中・大型のもの(820.825)、ミニアチュアのもの(819.821)等がある。調整は、(824)の内面にハケメを残すのみで、他は不明である。

高坏は、脚柱部が1点のみあり(827)、その全容は不明である。

器台は、小型のもので、皿状の坏部をもつもの(831.832.837.838)と、筒形のもの(829)がある。

庄内期の溝30-aと同様に、甕が全体量の大半を占め、次いで鉢が1割弱を占める。他の器種はわずかなものである。

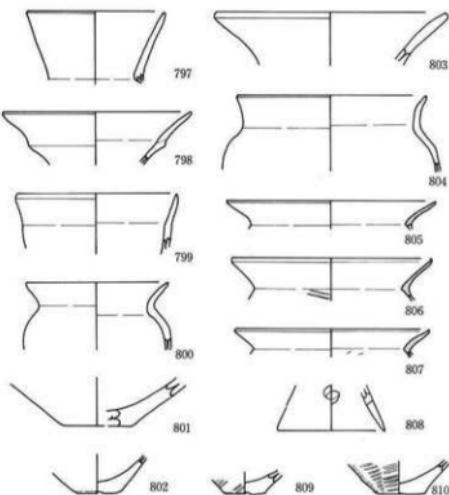


Fig. 206 G地区 溝32出土遺物

5. 前期の遺物

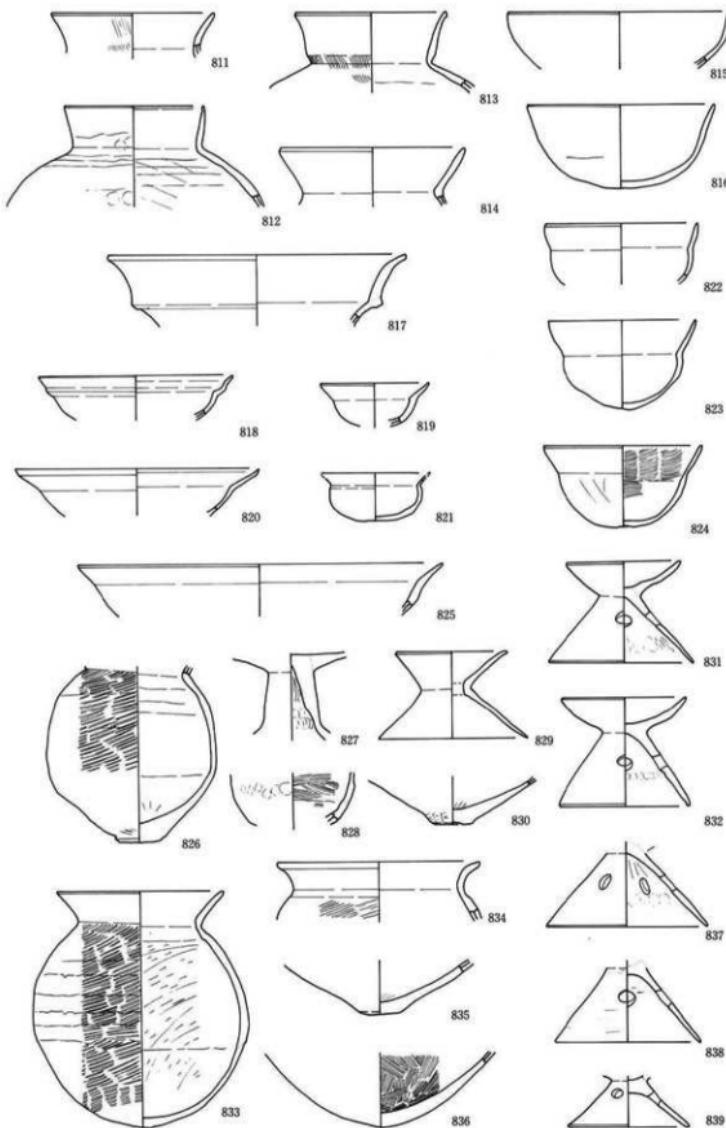


Fig. 207 F 地区 溝24出土遺物(1)

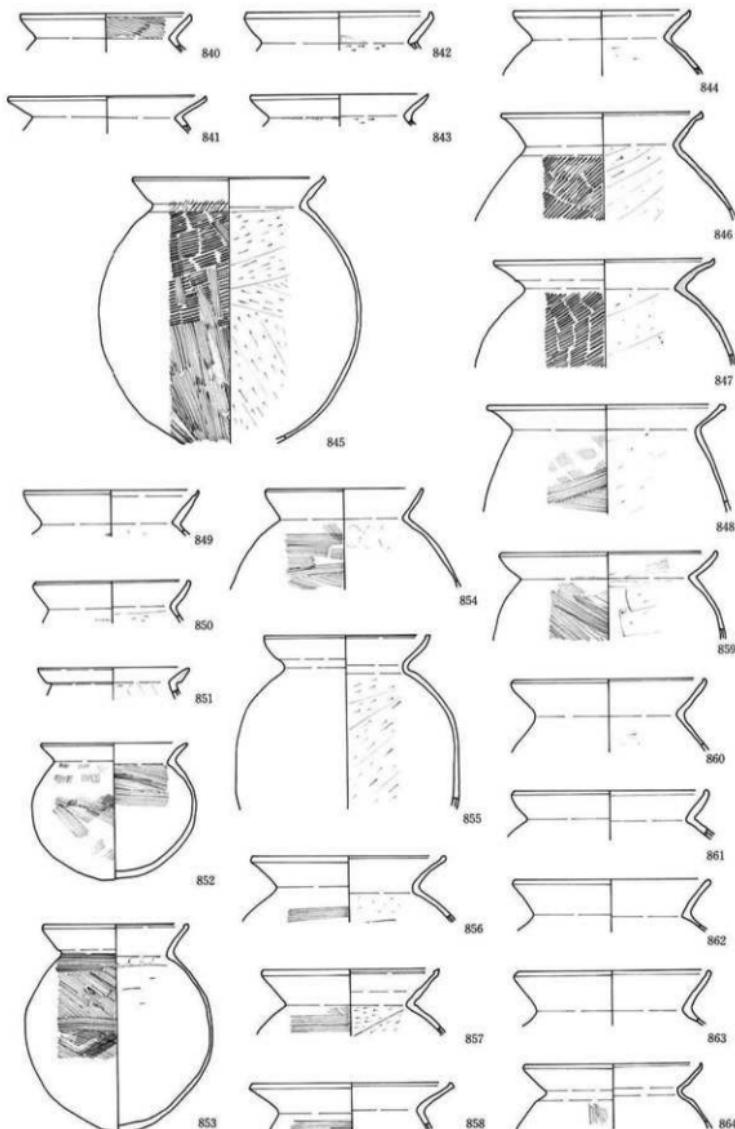


Fig. 208 F地区 溝24出土遺物(2)

5. 前期の遺物

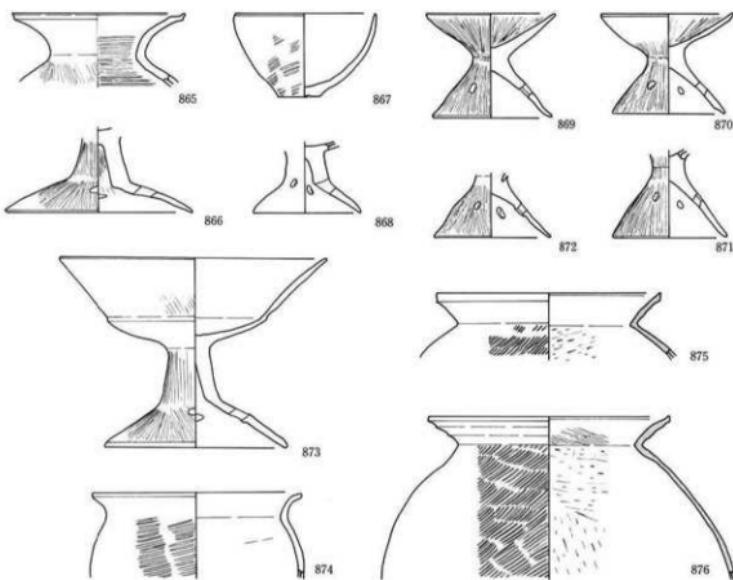


Fig.209 G地区 河川8左岸肩部遺物群1出土遺物

3) 河川

河川8左岸肩部遺物群1 (Fig.209)

前述したように、G地区の3Gトレンチの河川8左岸肩部で検出された土器群で、実測可能な土器が12点あり、他は土器片がわずかに出土している。

壺・甕・高坏・鉢・器台がある。

壺は、広口壺が1点あり、短い筒状の頸部に外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をなす。内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す(865)。

甕には、弥生第V様式系の粗い叩き目を施す在地産の甕(874)と、生駒西麓産の庄内甕(875,876)がある。

高坏には、坏部が塊形のもの(866)、皿状の坏部に屈曲し斜め外方へ大きく開く口縁部をもつもの(873)、小型のもの(868)がある。

器台は、小型のもので、台部は浅い逆三角形状で、脚部は内湾ぎみに外方へ開く。脚径より口径が大きくなり不安定である。台部内外面および脚部外面は縦方向のヘラミガキを施す。脚部の3方に円孔を穿つ(869~872)。

鉢は、小型で直口のもの(867)で、わずかに突出する平底である。体部外面は粗い叩き目を施す。

以上の土器と同様な一群が、10Gトレンチでも検出されたが、実測可能なものは無く甕の体部破片か高坏の脚柱等がわずかにある。

河川8遺物群2 (Fig.210)

9Gトレンチの河川8の底部で検出された土器群である。完形品やそれに近い破片がわずかではある

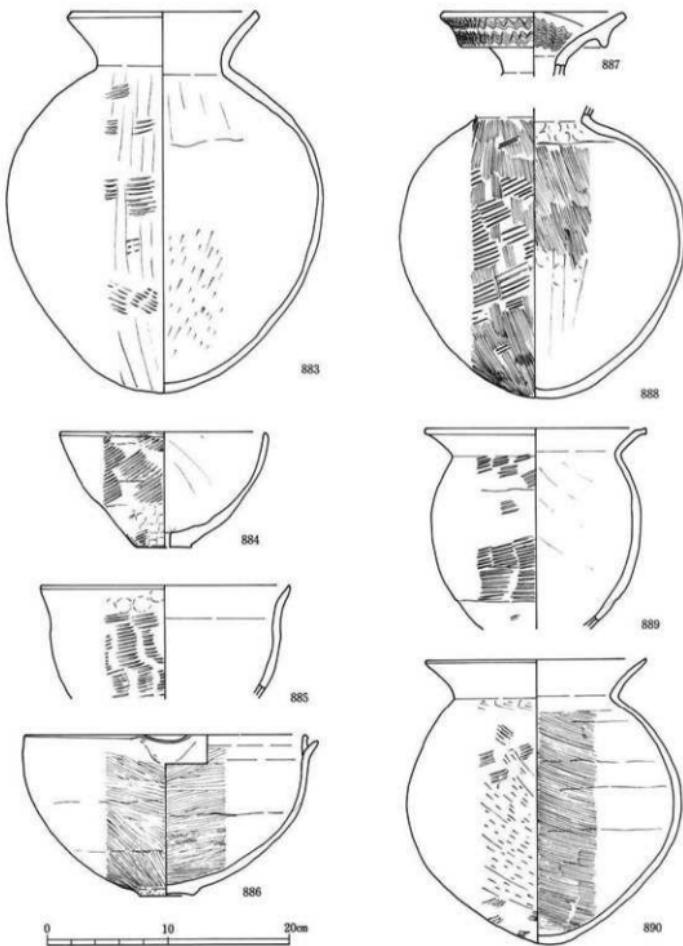


Fig. 210 G地区 河川8遺物群2出土遺物

が出土した。

壺3点、甕2点、鉢3点の計8点である。壺には、広口壺と二重口縁壺がある。(883)は、斜め外方へ開く口頭部の端部が面をもち、やや縦長の体部に丸底のものである。体部の調整は、外面平行叩き目後ハケメ状ナデを施し、内面は、上半ナデ、下半ヘラケズリを施す。(888)は、口頭部を欠損するが前者と同様の形態をもつと思われる。体部の調整は、外面平行叩き目後ハケメ、内面上半ハケメ、下半ヘラケズリ状のナデを施す。(887)は、口頭部破片で筒状の頭部に、外反し屈曲してさらに外反する口縁

5. 前期の遺物

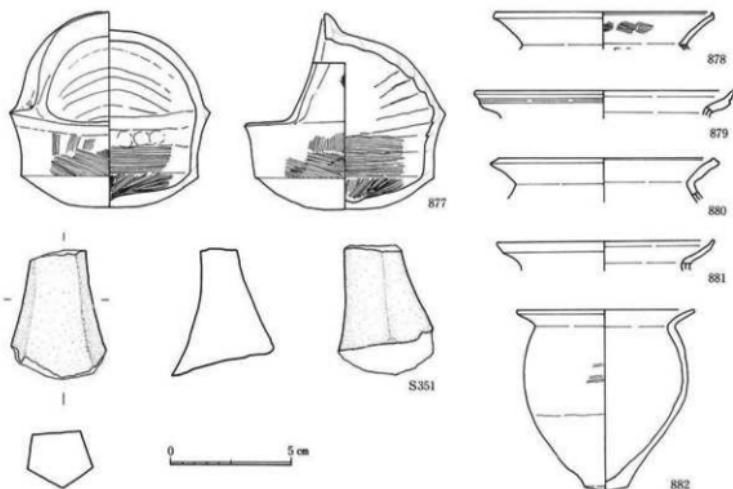


Fig. 211 15G レンチ 溝30、各地区上部包含層出土遺物 (S351のみ縮1/2)

部の端部が面をもち、屈曲部に断面三角形の粘土紐を一本付加する。口縁部内面および口縁部外端面に波状文を施す。鉢には、直口のものと、外反する口縁部をもつものがある。(884)は、直立する口縁部の端部が丸みをもち、塊状の体部に平底のもので、底部中央に円孔が穿たれる。体部の調整は、外面平行叩き目、内面ハケメ状ナデを施す。(886)は、直立する口縁部の端部が丸みをもち、半球状の体部に、わずかに上げ底ぎみの突出した底部をもつ片口のものである。体部の調整は、内外面ともにヘラミガキを施す。(885)は、短く外反する口縁部の端部が丸みをもち、塊状の体部をもつ。体部の調整は、外面平行叩き目、内面ナデを施す。体部内外面に煤および炭化物が付着する。甕には、弥生第V様式系のもの(889)と、庄内系のもの(890)がある。前者は、外反する口縁部に縦長な体部をもつ。体部の調整は、外面平行叩き目、内面ハケメ状ナデを施す。後者は、外反する口縁部の端部が丸みをもち、「く」の字状に屈曲する頸部の内面が稜をもち、球形の体部に尖りぎみの底部をもつ。体部の調整は、外面平行叩き目後へラケズリ、内面ハケメを施す。内外面に煤が多量に付着する。

Fig. 211の(877, S 351)は、F地区とG地区の境目の15G レンチの溝30から出土した遺物である。(877)は、手焼り形土器である。鉢部は、直口の口縁部に皿状の体部をもち平底ぎみの丸みをもつ底部である。覆部の端部は、粘土紐を1本継ぎ足し拡張し外端面をもつ。鉢部内外面ハケメを施し、覆部外面ハケメおよびナデ、内面粘土紐の継ぎ目を顕著に残す。(S 351)は、砥石で、両端を欠損し断面五角形の砂岩製のものである。

他に、小阪遺跡の上部包含層から出土した古墳時代前期の遺物が若干ある。(878)はI地区、(879~81)はA地区、(882)はE地区出土のものである。(878)は、角閃石を多量に含む生駒西麓産のいわゆる庄内甕である。(879~881)は、弥生第V様式系の甕で、いずれのものも、表面磨滅が著しく、調整不明である。

## 6. 中期の遺物

古墳時代中期の遺物は、C地区の集落域から出土したものと、その近くを流れる河川1から出土したものであり、遺構から出土した遺物としては、この時期のものが大半を占める。

遺物には、土器・石器・木器・鉄器等があり、他に、粘土の塊や土製品等もある。コンテナにして約200箱の出土量である。なお、わずかに残存していた包含層や木根痕内からも出土している。

以下、遺構毎に記述していく。

### 1) 積穴住居

積穴住居は、C地区で6棟検出された。そのうちの2棟は重複していたが、そのほとんどが削平を受け、遺物は出土していない。他の積穴住居からは、土器等が出土している。ほとんどのものが土師器で占められる。

#### 積穴住居1 (Fig.212)

積穴住居1から出土した遺物は、土器のみである。土師器の高壺1点、小型平底鉢1点、瓶1点の計3点が床面から出土している。

高壺は、浅い塊形の壺部に斜め外方に開く口縁部をもち、口縁端部が丸みをもつ(891)。小型平底鉢は体部下半から底部を残すもの(892)で、両者ともに表面磨滅のため調整は不明である。瓶は、口縁部が直口のもので、口縁端部が内外面にわずかに肥厚し上端面をもつ。把手と底部中央は欠損する。体部下半の外面に格子叩き目を残す(893)。

#### 積穴住居4 (Fig.213)

積穴住居4から出土した遺物は土器のみである。土師器の高壺3点、小型平底鉢2点、須恵器の高壺1点の計6点である。

床面から出土した土器には(894、895、897)があり、かまど内から出土したものは(896、898、899)がある。

土師器の高壺には、浅い壺部から斜め外方へ伸びる口縁部をもち、口縁端部が面をもつ(897)、浅い壺部から屈曲して斜め外方へ大きく開く口縁部をもち、口縁端部が面をもつ(896)があり、他に脚台部がある(899)。須恵器の高壺は完形(898)である。浅い塊形の壺

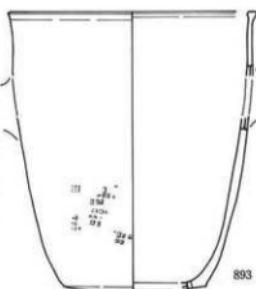
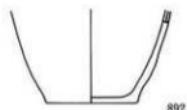


Fig. 212 C地区 積穴住居1  
出土遺物

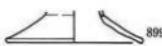
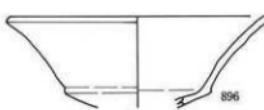
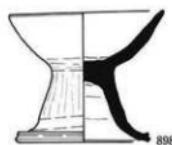
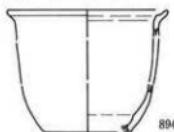


Fig. 213 C地区 積穴住居4 出土遺物

5. 前期の遺物

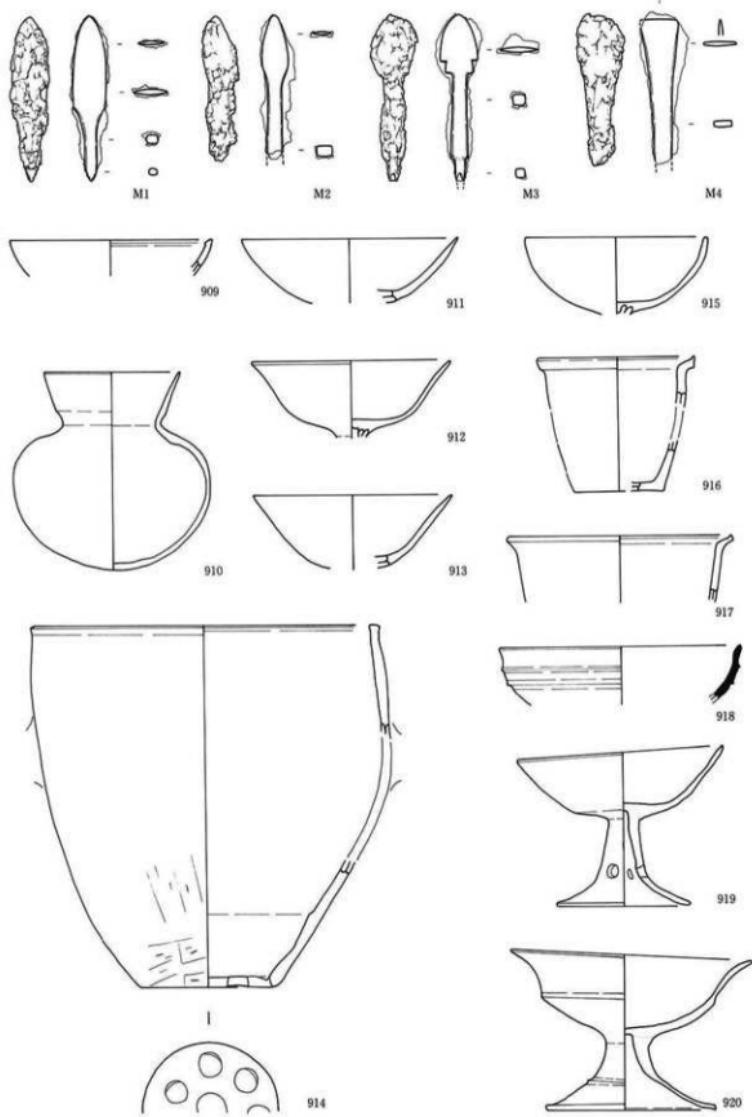


Fig. 214 C地区 積穴住居5出土遺物 (M 1~4は縮1/2)

部に斜め外方に開く口縁部の端部が丸みをもつ。裾広がりの中空の脚柱部に、さらに裾広がりの脚台部の端部がわずかに上・下に拡張し凹面をもつ。口縁部内外面と坏部内面および脚台端部内外面は回転ナデを施し、坏底部内面不整方向のナデを施し、指頭圧痕および粘土紐の維ぎ目を残す。坏底部外面、横方向のナデを施し、指ナデを残している。脚柱部外面に縦方向の指ナデ、脚柱部内面に横方向のナデを施し、指頭圧痕を残し、粘土紐の維ぎ目を2本残す。脚台端部の約1/3位が淡黄褐色をし、他は灰青色でやや焼きの甘い、器壁の厚い粗雑な作りである。小型平底鉢(894)は、短く外反する口縁部の内面が凹面をなし、端部が丸味をもつもので、体部は裾すぼまりで、平坦な底部をもつ。体部の調整は表面磨滅のため不明である。底部内面、体部との境目に強い回転ナデを施す。(895)は、底部破片である。

#### 堅穴住居5 (Fig.214)

堅穴住居5から出土した遺物には、土器と鉄器がある。土器は土師器がほとんどを占め、須恵器の実測可能なものは高坏(918)の1点にすぎない。土師器には、壺1点、甕1点、高坏6点、瓶1点、小型平底鉢2点の計11点がある。床面に伴う土器は、(910.913.914.916.917.919.920)である。住居址を横切る木根痕内からは、(909.911.912.915.918)が出土している。瓶は、床面と木根痕の両者から出土しており、木根痕内出土の土器が住居址に伴うことが実証された。

甕は口縁部のみで、内寄ぎみに開く口縁部の端部の内面がわずかに肥厚し内傾する面をもつ(909)。甕は完形品である(910)。斜め外方に開く口縁部の端部が尖りぎみに終わり、やや偏平な体部に丸底のもので、器高と体径がほぼ同じである。高坏の(919.920)が完形品である。浅い坏部から斜め外方に大きく開く口縁部をもつもの(911~913.919)、塊形のもの(915)、浅い坏部から屈曲し外反する口縁部をもつもの(920)がある。(920)は、中空の脚柱部から裾広がりに開く脚台部の端部が面をもち、脚台部との境目に凸線文を1条巡らしている。瓶は、直口の口縁端部がわずかに内外方に肥厚し上端面をもち、平底のものである(914)。体部下半外面にヘラケズリを施す。底部中央に径2cm、周囲に径15cmの円孔を7個穿っている。小型平底鉢は2点ともに、短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をなすものであり、(917)はやや大型のものである。

須恵器の高坏(918)は、無蓋のもので浅い塊状の坏部からわずかに外反する口縁部の端部が丸みをもつ。口縁部下に凸線文を2条巡らしている。

鉄器は4点出土しており、總て鎌である。M1は、柳葉式のもので鎌身中央部が内寄しないものである。M2は、長頸式で頸部が約1/3欠損し鎌身部と頸部の境目は明瞭でない。M3は、同じく長頸式であるが、二段の闊をもつ。頸部は比較的短く、初現の形態を示す。M4は、概報時にノミ工具としたが方頭式のいわゆる、斧箭鎌に含まれるものと思われる。頸部と鎌身部との境目が無いものである。M1~3は、南角で固まって出土したものである。

#### 堅穴住居6 (Fig.215)

堅穴住居6から出土した遺物には、土器と粘土の塊がある。土器には、土師器の甕1点、瓶2点、高坏5点、小型平底鉢1点の計9点がある。他に、土師器・須恵器の小破片が若干ある。

なお、床面からは、粘土の塊が2点出土している。砂礫の混入していない淡黄褐色の細粒の粘土で、2点共にはば同じ大きさで、そのうちの1点は214gを測る(P.T.3)。

瓶の2点が柱穴の埋土から出土する以外は、住居址の埋土からの出土である。

甕は、口縁部から体部上半の破片で、斜め上方に伸びる口縁部の端部が丸みをもつ。内外面共に表面磨滅のため調整は不明である(900)。瓶は2点ともに直口の口縁部の上端が面をもち、裾すぼまりの体

6. 中期の遺物

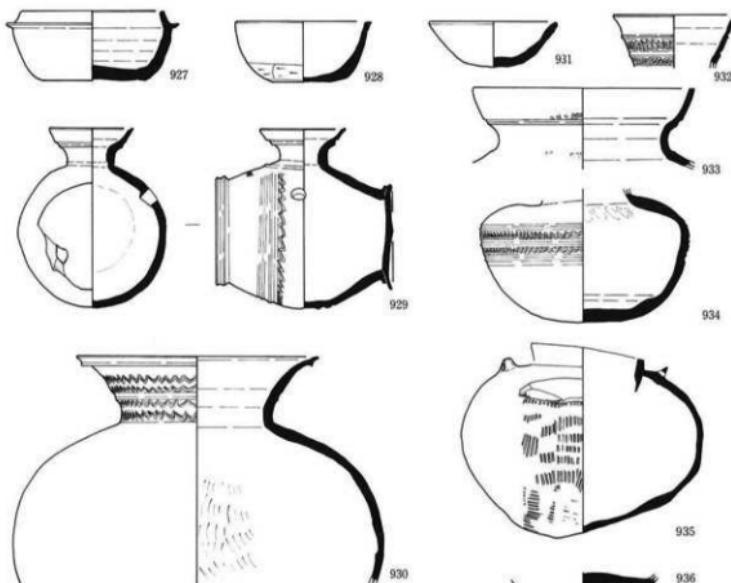


Fig. 217 C地区 井戸1出土遺物(1)

甕には、内弯ぎみに斜め外方に開く口縁部の端部内面が肥厚し上端面をもつ(948.949)、内弯ぎみに斜め外方に開く口縁部の端部内面がわずかに凹面をなす(947)等の布留系の甕がある。体部外面はハケメ(949)を施し、内面は指押さえ(947)および指ナデ(947~949)を施す。(938)は、口頭部を欠損し球形の体部に丸底のものである。体部の調整は外面ハケメ、内面ヘラケズリを施す。他に、口縁部が外反するもの(944.945.946.950)がある。(944)は完形品で縦長な体部に丸底のもので、やや長胴化の傾向を示す。体部の調整は、外面縦方向のヘラミガキ状のナデを施し、内面下半にヘラケズリを施す。外面に煤が付着している。(946)は、やや肩の張る体部である。体部の調整は、外面平行叩き目を施し、内面ナデを施す。外面に煤が付着する。須恵器の影響を受けた土器器である。(945)は、外反する口縁部の端部が面をもち、頸部内面に稜をもつ。体部内面にヘラケズリを施す。(949)の甕は、出土時点では完形であったが、磨滅・剥離が著しく体部下半が接合不可能なため、実測図は体部上半までの図しか示していない。

高环は、浅い环部に斜め外方に開く口縁部の端部が丸みをもち、中空の脚柱部から裾広がりの脚台部をもつもので、口径が脚台径より大きいものである(942.943)。内外面の調整は表面磨滅のため不明である。

小型平底鉢は、短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をなし、ややふくらむ体部のもの(939)で、(940)と同様の底部がつくと思われ、円板状の底部を欠く。口径が器高より大きいや横長なものである。体部外面の調整は表面磨滅のため、不明である。

以上の土器器に加え、甕の口縁部の小片が2点出土している。

須恵器の坏身は、どがま型のもので、口縁部の立ち上がりがやや斜め内方へ伸び、上端部は面をもつ。

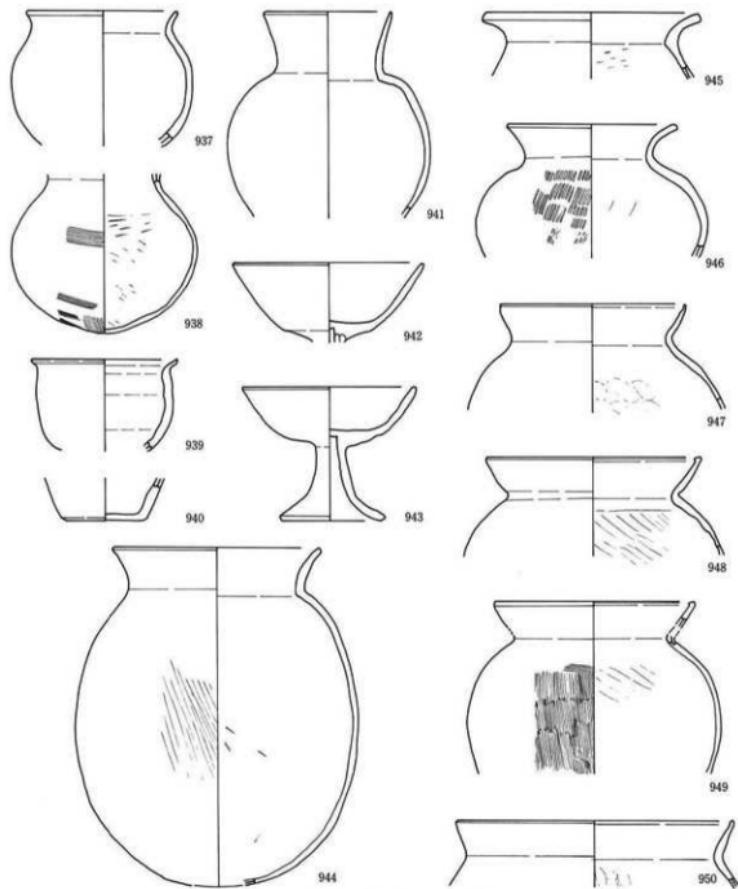


Fig.218 C地区 井戸1出土遺物(2)

受け部はわずかに斜め外方に伸び、端部が尖りぎみにおわる。坏部は、裾すぼまりで平底のもの(927)である。底部中央に厚味があり、口径が器高の2倍である。底部外面の調整は、ナデを施す。淡灰色および淡黄褐色を示す焼きの甘いものである。

壺には、広口壺(930)、二重口縁壺(933)、直口壺(932)、双耳壺(935)がある。広口壺は、外反する口縁部の端部が丸みをもち、口縁端部下に凸線文を1条巡らし、その際の回転ナデにより口縁部内面が凹面をなす。頸部に波状文帯間凸線文を1条巡らすが、下方の波状文が凸線文上に施される部分が多く消されてしまっている。体部外面は、丁寧なスリケシが施され、内面は同心円文当具痕後、半スリケシが施される。二重口縁壺は、短い頸部から外反し屈曲してさらに斜め上方に伸びる口縁部の上端が面をも

## 6. 中期の遺物

つ。口縁部の屈曲部上に凹線文を1条巡らし、口縁端部に波状文を施す。体部外面は平行叩き目を施す。淡灰色をした焼きの甘いものである。直口壺は口頸部破片で、斜め外方に開く口頸部をもつ。口頸部外面に凸線文2条および波状文2帯を交互に施す。この土器は井戸の下層から出土しており、上部包含層出土のものと接合した。双耳壺は、焼け歪みが著しく、口縁部が中に落ち込んでいる。体部外面肩部に他の破片が接着している。口縁部は短く立ち上がり上端面をもつ。体部はやや偏平で丸底である。肩部の相対する2方に耳がつく。耳は四角形で端部を鏝切りし、上方から円孔を穿つ。体部内面指ナデを施す。

他に壺の口縁部を欠損するものがある(934)。体部に凸線文と波状文を交互に施す。

鉢は小型のもので、口縁端部が外方へわずかに肥厚し内傾する面をもつ。塊形の鉢部に平底のもの(928)と、斜め外方に伸びる口縁部に丸底のもの(931)があり、前者の底部外面は静止ヘラケズリを施し、後者は指ナデを多用する。

扈は樽型扈で、体側部の一部を欠損する。筒状の頸部に、外反し屈曲してさらに斜め外方に伸びる口縁部の端部が内傾する段をもつ。体部中央が最大径をもち、体側部の径の1.5倍を示し、体側端部近くに凸線文を1条ずつ巡らす。体部に凸線文2条・波状文2帯を交互に施し、肩部に円孔を穿つ。

以上の土器の中で、他の遺構出土の土器と接合するものがある。(930.938.940)は土坑1と、(942)は土坑18と、(939)は包含層とある。

### 4) 土坑

遺物の出土する土坑はC地区で5基ある。他の遺構や上層の包含層の土器と接合する例がままある。

#### 土坑5 (Fig.219)

土坑5から出土した土器には、土師器の高杯2点、榙・甕各1点、須恵器の短頸壺、瓦質甕各1点の計6点である。

土師器の高杯は2点ともに完形に近く、皿状の坏部から屈曲して斜め外方に伸びる口縁部をもつ。中空の脚柱部に裾広がりの脚台部をもつ。口縁部および脚台部とともに、(952)は端部が丸みをもち、(951)は面をもつ。榙は、短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり凹面をなし、裾すぼまりの体部をもつ。体部上半に凹線文を1条巡らし、把手を欠損する(954)。甕は大型の二重口縁のもので、口縁端部内面が肥厚し、上端面をもつ(955)。

須恵器の短頸壺は、短く直立する口縁部の端部が丸みをもち、肩の張る体部に、平底のものと思われる。体部外面下半にナデを施し、体部内面底部との境目に指頭圧痕を残す。暗紫褐色を示す(953)。

瓦質の甕は、短い筒状の頸部に外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を1条巡らす。体部外面の調整は平行叩き目を施し、内面上半指ナデを施す。淡灰褐色の須恵器の生焼けかと思われるような残りの悪い土器である(956)。

#### 土坑8 (Fig.220)

土坑8から出土した土器は、土師器が多く、須恵器との割合は5：1を示す。小破片が多く完形のものは(974)の小型の鉢のみである。

土師器の甕には、布留系のもので、内弯ぎみに斜め外方に伸びる口縁部の端部が内方へ肥厚し、面をもつもの(957.958)と、二重口縁をもつもの(959)がある。(959)の体部の外面は、ハケメを施し、内面は(958)と同様に指頭圧痕を残す。

壺には小型で、直口のもの(963)と、短頸壺(964)がある。

高杯には、塊形のもの(965)と、斜め外方に開きわずかに外反する口縁部をもつ(966.967)がある。他



に脚部のみ残存しているものがある(968~970)。

小型の壺(960)は底部が欠損するが、短く斜め外方へ伸びる口縁部の端部が丸みをもち、わずかに膨らむ体部をもつ。

小型平底鉢(961)は、体部下半の一部を欠損するが、短く外反する口縁部の端部が面をもち、裾すぼまりの体部に平坦な底部をもつ。体部外面の調整は、ナデを施す。

瓶(972)は、直口のもので上端部が面をもつ。体部下半、把手および底部を欠損する。やや小型である。体部の調整は、外面ハケメ、内面ヘラケズリを施す。

(973)は壺の底部と思われる。

須恵器には、無蓋の高壺(962, 971)の壺部と、ぐい呑み状の小型鉢(974)がある。

#### 土坑14(Fig. 221)

土坑14から出土した土器には、土師器の壺1点・高壺4点・小型平底鉢2点、須恵器の壺2点・鉢3点・高壺1点の計13点である。土師器と須恵器がほぼ同数である。

土師器の壺は、やや斜め外方へ伸びる口縁部の端部が内方へわずかに肥厚し上端面をもつ布留系のものである(975)。

高壺には、浅い壺部に斜め外方に開く口縁部の端部が丸みをもつもの(978)と、屈曲して斜め外方に開く口縁部の端部が面をもつもの(976)がある。他に、脚部のみ残存するものがある(979, 983)。

小型平底鉢(977)は、やや大型のもので体部中央を欠損する。短く外反する口縁部の端部が丸みをもち、やや膨らむ体部に平底のものである。体部外面に斜格子叩き目を施す。(984)は、体部下半を残存するものである。土師器は、表面磨滅が著しく、調整不明な点が多い。

Fig. 219 C地区 土坑5出土遺物

6. 中期の遺物

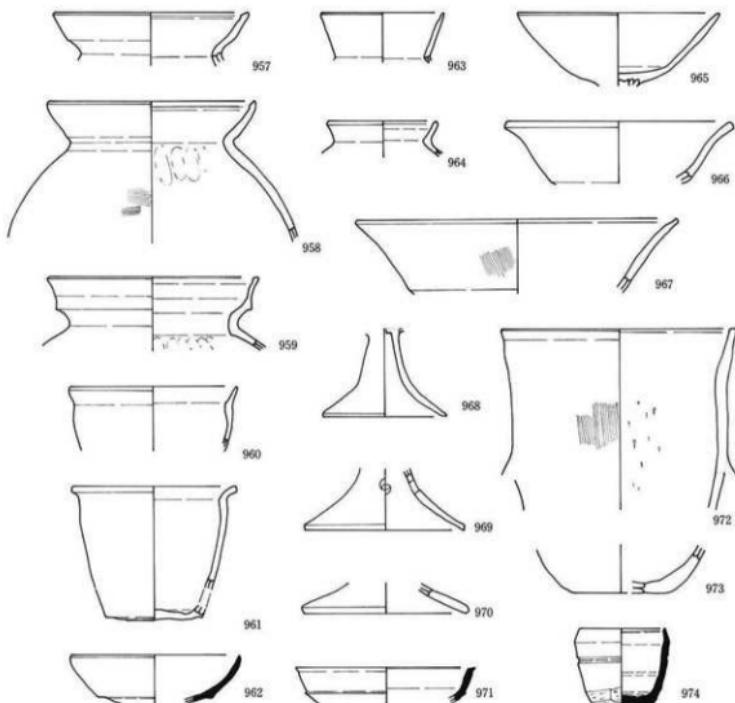


Fig. 220 C地区 土坑8出土遺物

須恵器の壺には、小型の二重口縁のもの(980)と、短頸壺(981)があり、後者は直口の口縁部の上端が凹面をなし、頸部との境目に凸線文を1条巡らし、肩の張る体部である。

鉢には、小型の平底鉢(985)、把手が付くと思われる直口の(987)、大型で双把手片口鉢(982)がある。(982)の鉢は、短く外反する口縁部の端部が面をなす。把手は断面綫長の不整梢円形で先端部を笠切りする。体部外面平行叩き目を施し、内面指頭圧痕を残す。淡灰色のやや焼きの甘いものである。

高杯は無蓋のもので脚部を欠損する。半球状の杯部にやや斜め外方に伸びる口縁部の端部が尖りぎみに伸びる。口縁部と杯部の境目に凸線文を1条巡らす。杯底部外面、脚部との境目に静止ヘラケズリを施す。

(980)が上部包含層、(985)が上部包含層および溝、(982)が土坑9・22出土の土器とそれぞれに接合する。

土坑19(Fig. 222)

土坑19から出土した土器には、土師器と須恵器が個体確認できるもので4:5の割合である。他に、土師器および須恵器の格子叩き目片や須恵器壺・甌の体部破片があり、特に甌の体部破片は他の遺構および包含層と接合するものがある。

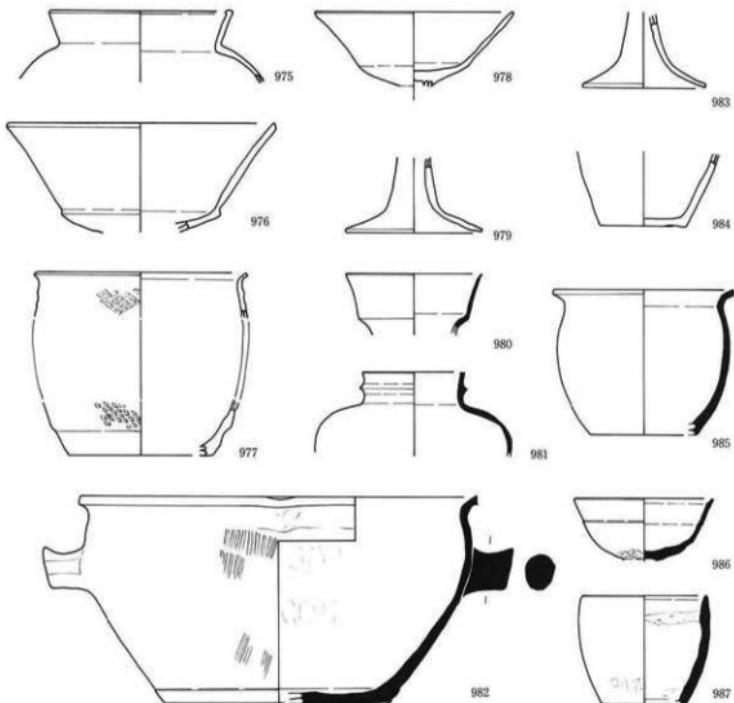


Fig. 221 C地区 土坑14出土遺物

土師器・須恵器とともに小破片が多く、完形のものは(1004.1010)のみである。

土師器の裏には、弥生第V様式系の短く外反する口縁部をもつもの(988)と、布留系の斜め外方へ伸びる口縁部の端部が内方へわずかに肥厚し、上端面をもつものの(989)がある。

高坏には、円板状の坏底部から屈曲して斜め上方に開く口縁部の端部がわずかに内方へ肥厚し上端面をもつもの(992)と、浅い塊状のもの(993.994)がある。(994)は、口縁部の端部がわずかに尖りぎみに外方へさらにもつ伸びる。他に、脚部がある(990.1006)。

小型平底鉢には、外反する口縁部の内面が凹面をなす(1003)と、短く外反する口縁部に、ふくらみをもつ体部に平底で、体部外面にハケメを施し、口径と器高がほぼ同一のもの(1004)がある。後者は、体部外面に煤が付着する。

須恵器の蓋は短頸壺の蓋と考えられ、つまみ部を欠損し、焼け歪みが大きい。天井部に櫛描きの静止波状文を施す(991)。壺には、短い筒状の頸部に短く外反する口縁部の端部が凹面をもつ短頸壺(995)と、波状文間凸線文を施す直口壺の(997)がある。鉢・塚の類は大型(1001)と小型がある。(999.1007)は把手が付くと思われる。(996)は、中型の平底鉢である。(998.1000)は、内傾する口縁部をもつ平底のもので、いずれも、底部外面にナデを施す。高坏は有蓋のもの(1008)と無蓋のもの(1009.1010)がある。

6. 中期の遺物

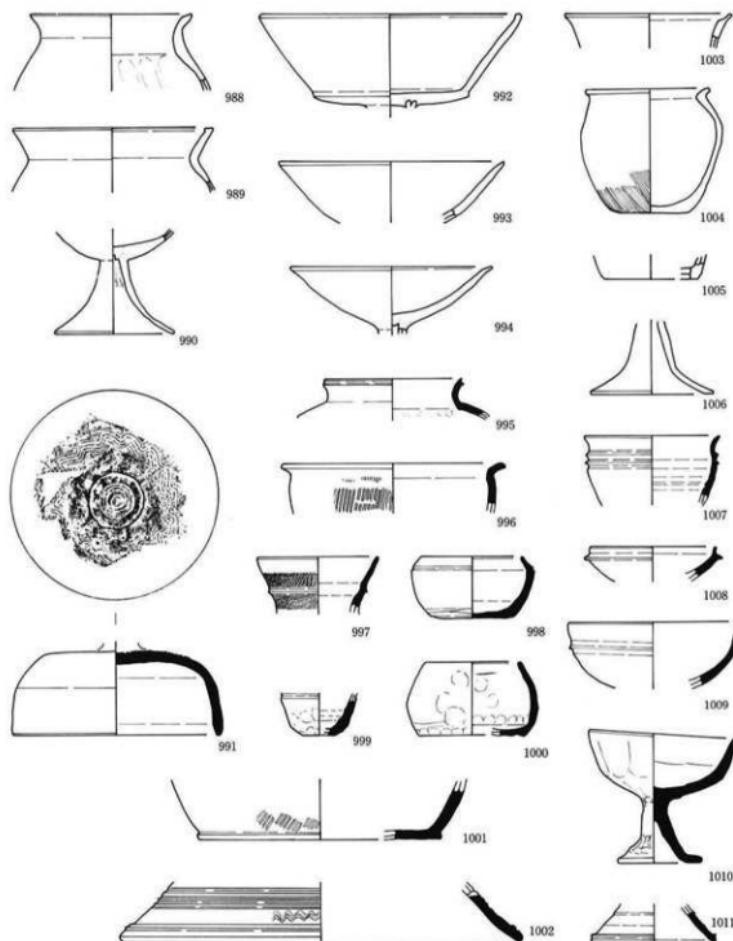


Fig. 222 C地区 土坑19出土遺物

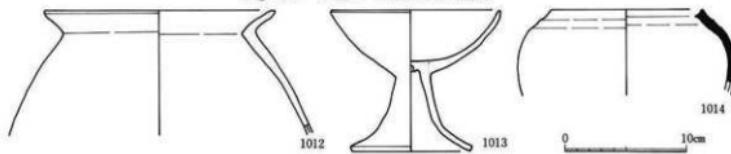


Fig. 223 C地区 土坑35出土遺物

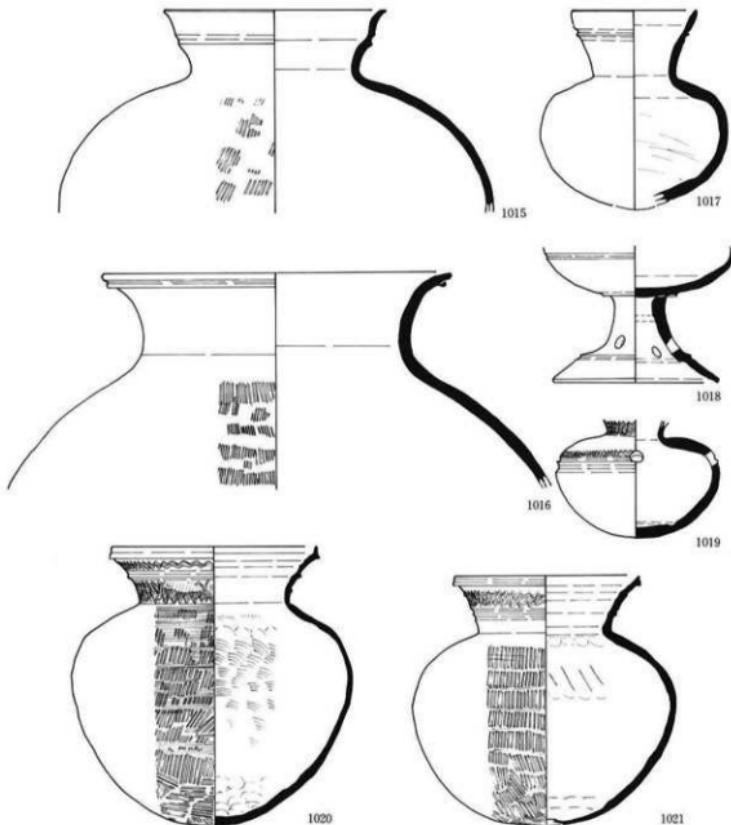


Fig. 224 B～C地区 溝3出土遺物

(1010)は、土師器の高杯をまねた形態・調整技法であり、半球状の杯部にわずかに開く脚柱部から、さらに開く脚台部をもつ。外面にナデを施す。他に、脚台部破片がある(1011)。

器台は裾広がりに開く脚台部をもつ(1002)。小破片のため、透かしは不明である。

#### 土坑35(Fig. 223)

土坑35から出土した遺物はわずかであり、井戸1と接合可能なものは井戸に含めた。土師器の壺・高杯と須恵器の無頸壺の計3点である。

#### 5) 溝

C地区の溝のなかで、実測可能な土器が出土したのは4条のみで、その他に、E・F地区の溝各1条がある。他の溝は、無遺物か土器の小破片を含むものである。

#### 溝3(Fig. 224)

6. 中期の遺物

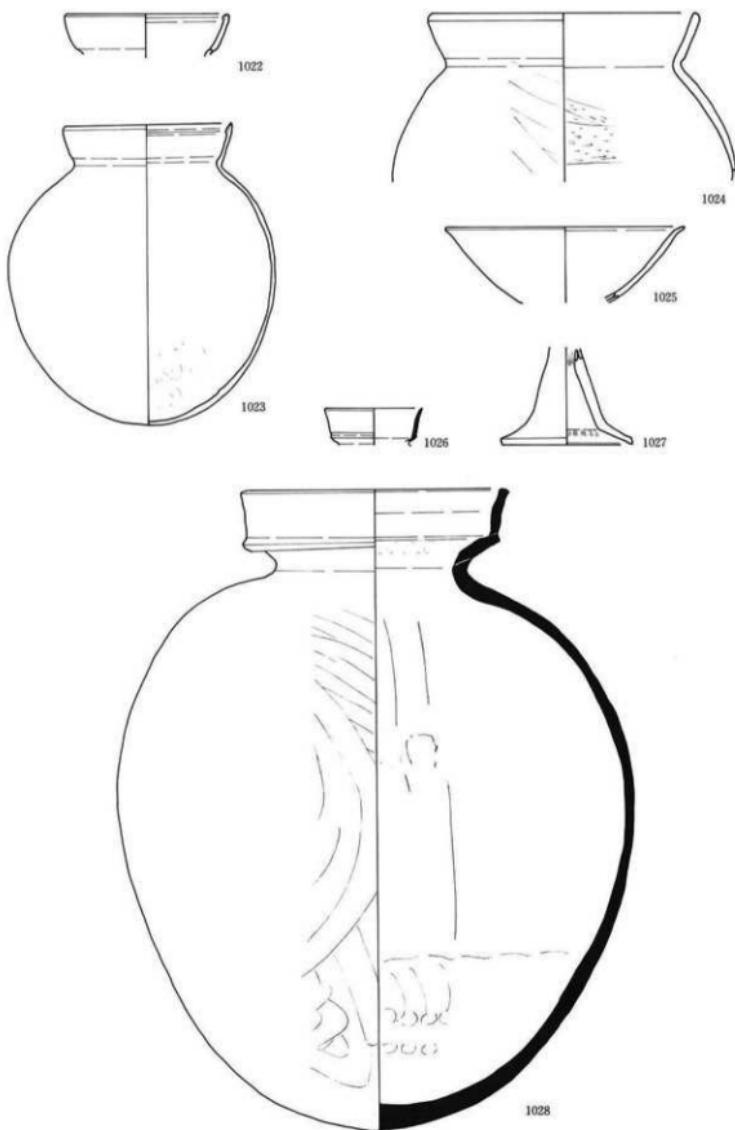


Fig. 225 C地区 溝8出土遺物

溝3は、B・C地区にまたがり、B地区から出土した土器は(1021)である。出土した土器は、須恵器のみで、壺、甕、高坏、扈等がある。壺には、二重口縁壺(1015)、直口壺(1017)、広口壺(1020.1021)がある。甕は大型で、外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を1条巡らす(1016)。高坏は口縁部を欠き、皿状の坏部に裾広がりの脚柱部からさらに聞く脚台部の端部が面をなす。坏部と脚部の境目に凸線文1条、坏部と脚台部に凹線文各1条を施す。脚部3方に円形の透かしを穿つ(1018)。扈は口縁部を欠き、肩の張る体部に丸底で、頭部に波状文、体部に波状文・凸線文2条を施す(1019)。

#### 溝8 (Fig. 225)

溝8から出土した遺物は土器のみで、土師器の甕・高坏、須恵器の壺・甕がある。

土師器の甕には、内湾ぎみに斜め外方に聞く口縁部の端部内面が粘土紐を1本重ねて肥厚させ、球形の体部に丸底の(1022.1023)と、斜め外方に聞く口縁部の端部が丸みをもつ(1024)がある。(1023)の底部内面には指頭圧痕を残し、後者の体部外面はハケメ状ナデ、内面はヘラケズリを施す。(1024)は、ほぼ完形であるが、破片の磨滅著しく復元が不可能であった。高坏には、浅い皿状の坏部から斜め外方へ伸びる口縁部の端部がわずかに外反する坏部のみのもの(1025)と、裾広がりの中空の脚柱部からさらに斜め外方へ聞く脚台部の端部が面をもつ脚部のみの(1027)がある。

須恵器の甕は、小型で二重口縁のものである(1026)。甕は大型の完形品の二重口縁のもので、土師器甕の形態に似る。体部外面は幅広のハケメ状のナデを施し、内面に指ナデを残す(1028)。

#### 溝11 (Fig. 226, 227)

溝11から出土した遺物は、コンテナに約3箱あり、土器、土製品、石製品がある。

土器はほとんどのものが須恵器で占め、土師器の甕の体部破片がわずかにある。須恵器には、蓋坏・壺・甕・高坏・器台等があり、他に、扈等の破片がある。

蓋坏は全部で31点出土しており、蓋21点、坏身10点と蓋が身の2倍ある。

蓋は、口径12.4~14.4cm、器高4.0~4.8cmと、口径に比して器高が低いものである。口縁部高と天井部高がほぼ同様のものが多い。天井部は平坦なものが多く、外面のヘラケズリの範囲は広い。内面は、回転ナデを施すものが多く、(1030.1031)は中央部に一方方向のナデを施す。口縁端部は、内傾する凹面をもつ(1029.1031.1039)と、わずかに内傾する段をもつ(1030.1032.1033.1034~1038.1040~1043)がある。口縁部は垂下するか斜め外方へわずかに聞き、口縁部外面は2度に分けて回転ナデを施す。口縁部と天井部の境目の稜線は、上・下に強い回転ナデを施すことにより強調される。(1040)は、磨滅し残りの悪いものである。

坏身には、口径が11.2cm(1044~1048)と11.6cm(1049~1052)の二種がある。口縁部がやや内傾し、口縁端部が内傾する面をもつ(1051)以外は、わずかに内傾する段をもつ。受部は横および斜め上方に伸び、上部の坏部との境目に凹線文を1条巡らすものが多く、下部に受け部を造り出すための強い回転ナデを施す。坏部は、やや偏平なものと丸みをもつもの(1048.1049.1052)があり、外面のヘラケズリは2/3以上施される。内面は回転ナデを施し、(1052)のみ中央部に一方方向のナデを施す。なお、内面坏部と口縁部の境目に粘土紐の雜ぎ目を残すものが多い。

蓋および坏身のヘラケズリは、砂粒の動きが少なく、むしろヘラケズリ状のナデを施すといった方がよいものである。全体に焼成の甘いものが多く、(1031)のみが外面に暗緑色の自然釉が付着する。

壺は、二重口縁の小型のもので体部外面にナデ、内面に回転ナデを施し指押さえを残す。扈の可能性もある(1053)。

6. 中期の遺物

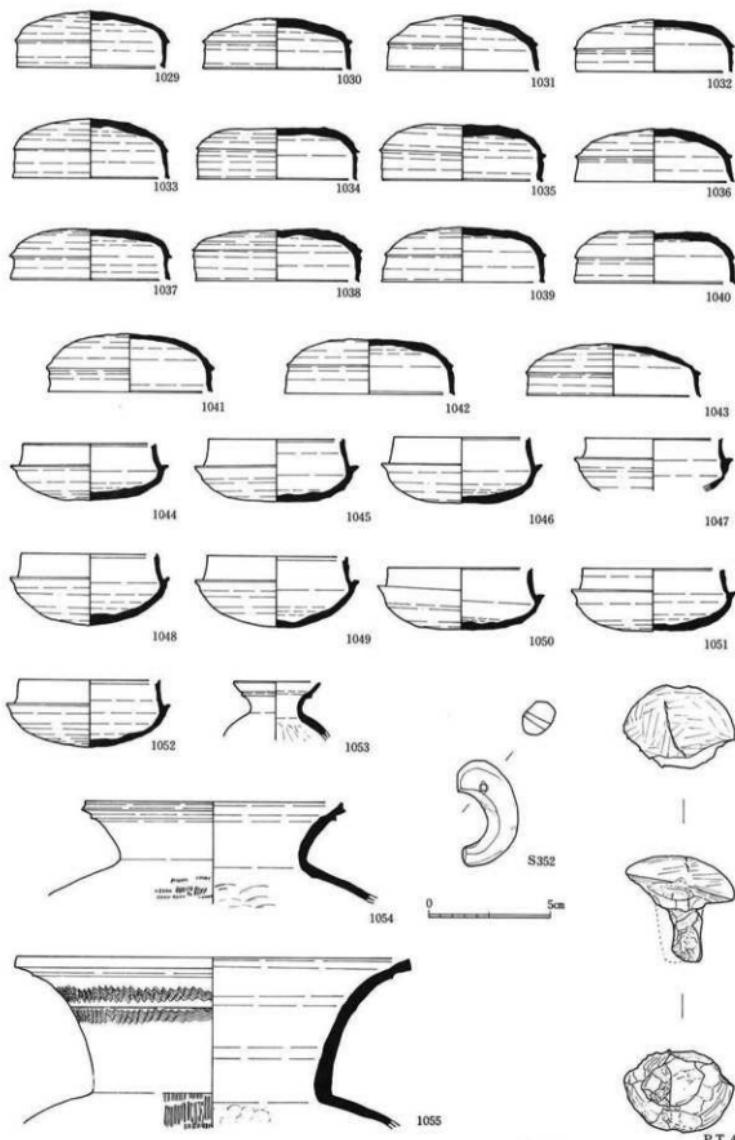


Fig. 226 C地区 溝11出土遺物(1)(S352は縮1/2)

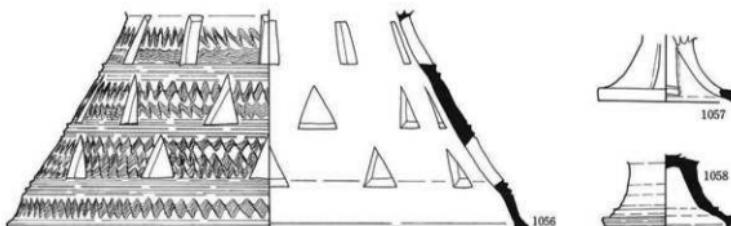


Fig. 227 C地区 溝11出土遺物(2)

壺には大型のものがあり、外反する口縁部の端部が面をもち、端部下に凸線文を1条巡らす。(1054)は体部外面に平行叩き目、内面に同心円文當て具痕後、いざれも半スリケシを施している。(1055)は、口縁部に波状文2帯間に沈線文を1条施す。体部外面平行叩き目、内面ナデを施す。

高杯には、無蓋の杯部破片と、脚部のみのものがある。(1057)は、裾広がりに開く脚台部の端部がわずかに垂下し面をなす。台形の透かしは4方に穿たれ内外面ともに面取りを施す。(1058)は、裾広がりに開く脚台部の端部がわずかに上・下に拡張し、端部に凹線文2条、脚台部に凸線文1条を施す。透かしは無い。

器台は脚台部のみ残存し、裾広がりに開く脚台部は端部近くでわずかにふくらみ、端部が外方へわずかに拡張し下端が凹面をなす。文様帶は4段あり、凸線文2条で区分され、最上段長方形透かし、以下2段が三角形透かしで交互に穿たれる。波状文は最下段のみ1帯で、他は2帯施される(1056)。

土製品には、須恵質の當て具がある。頭部は径12.0cmを測り、断面長椭円形をし、上面はハケメ状のナデを丁寧に施し、焼成時のひび割れがある。握部は、頭部の中心より約10度振れ、長さ6.5cm、径約4cmを測る(P.T.4)。

石製品には、緑色片岩製の勾玉があり、断面椭円形で、頭部の穿孔は両面から行われている。残存状態がさほど良くなく、加工痕は残っていない(S352)。

坏身が逆に重なった上から出土しているが、本来は、坏身の中に入っていた可能性が大である。

#### 溝17(Fig. 228)

E地区の溝17から出土した遺物には、土師器の壺・高杯・壺・器台、須恵器の壺・壺・高杯・器台等がある。

土師器の壺は、完形品で、二重口縁の大型壺である。斜め外方へ伸びる頸部に屈曲してさらに外反する口縁部の端部が丸みをもち、やや肩の張る体部に丸底のものである。体部外面の調整は、表面磨滅著しく不明である。頸部外面に粘土紐の雜ぎ目を2本残す(1060)。他に、小型壺の口縁部を欠損するものがある(1065)。

高杯には、円板状の杯部に、斜め外方に開く口縁部の端部がわずかに外反し、杯部と口縁部の境目に凸帯を付加する(1059)と、皿状の杯部に斜め外方に開く口縁部をもつ(1063)がある。

(1064)の壺の体部下半と(1066)の小型の筒型器台は、古墳時代前期に属するものである。

須恵器の壺には、広口壺があり、外反する口縁部の端部が尖りぎみにおわり、口縁部に凸線文3条を巡らし、凸線文間に部分的に波状文を施す(1067)。壺には、外反する口縁部の端部が丸みをもち端部下に凸線文を1条巡らす(1068)と、短く外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を1条巡らす(1069)。

6. 中期の遺物

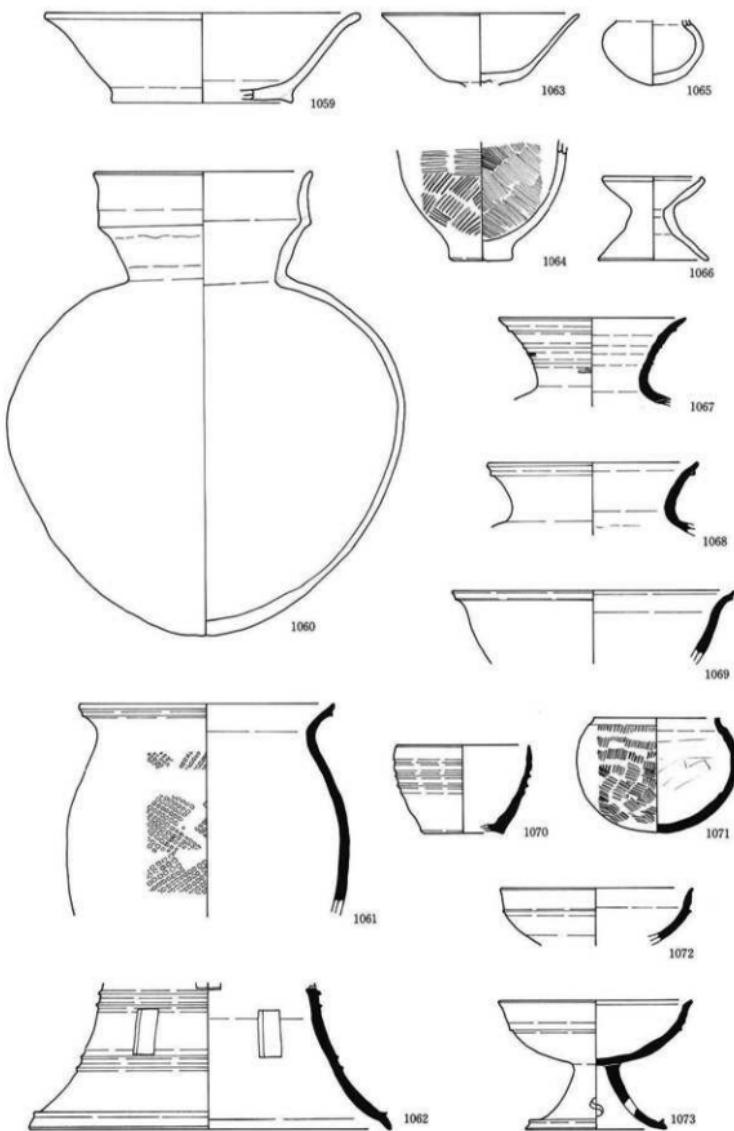


Fig. 228 E地区 溝17、F地区 溝23(1070.1071)出土遺物

し、わずかにふくらむ体部をもつ(1061)がある。体部外面に格子叩き目を施し、内面上半に回転ナデ、下半ナデを施す。

高坏は無蓋のものである。浅い皿状の坏部から斜め外方に伸びる口縁部の端部が内傾する面をもち、坏部に凸線文1条を施す。脚部は裾広がりに開き、脚台端部は尖りぎみにおわり、端部近くに凸線文1条を巡らし、脚部4方に円形の透かしを穿つ(1072, 1073)。

器台には、台部と脚部がある。前者は、短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり凹面をなす(1069)の鉢形器台である。後者は、裾広がりに開く脚台部の端部が尖りぎみにおわり、端部近くに凸線文を1条巡らす。透かしは凸線文2条毎間に長方形透かしを交互に穿つ(1062)。

溝23 F地区の溝23から出土した遺物には、須恵器がある。(1070)は小型の鉢で把手を欠損する。(1071)の無頭壺は完形で、口縁端部を箆切りする。体部外面に平行叩き目、内面にナデを施す。

## 6) 木根痕

後世に生えた木の根が腐植した後、土砂が落ち込んだ中から検出されたもので、その検出状態から、遺構に含まれる可能性が大なものがある。

木根痕は、ピット18の下層に位置し、完形の土器が出士すること、土器が集中して出土すること等からすると、この木根痕出土の遺物は、ピット18に含まれる可能性があろう。

木根痕から出土した土器には、土師器の甕・小型平底鉢、須恵器の甕がある。

土師器の甕は布留系のもの(1076)である。小型平底鉢の(1074)は、短く外反する口縁部の端部が面をもち、わずかにふくらむ体部にやや上げ底ぎみの底部をもつ。体部外面に回転カキメを施し、外面に煤が付着する。器高より口径が大である。

(1075)は、短く外反する口縁部の端部が面をもち、内面が凹面をなす。裾すぼまりの体部に平底で、体部外面

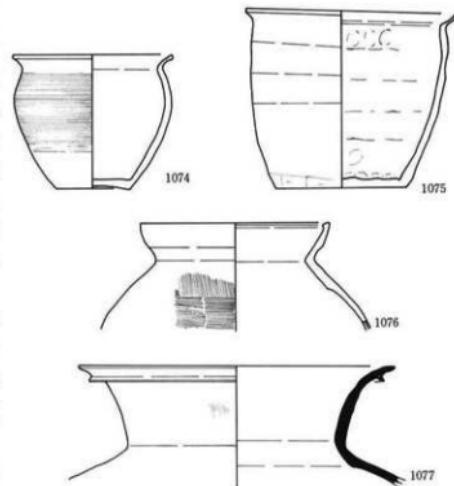


Fig. 229 C地区 木根痕出土遺物

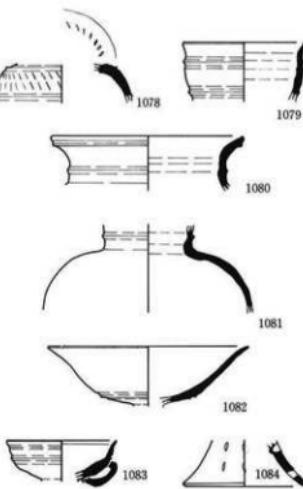


Fig. 230 C地区 包含層出土遺物

6. 中期の遺物

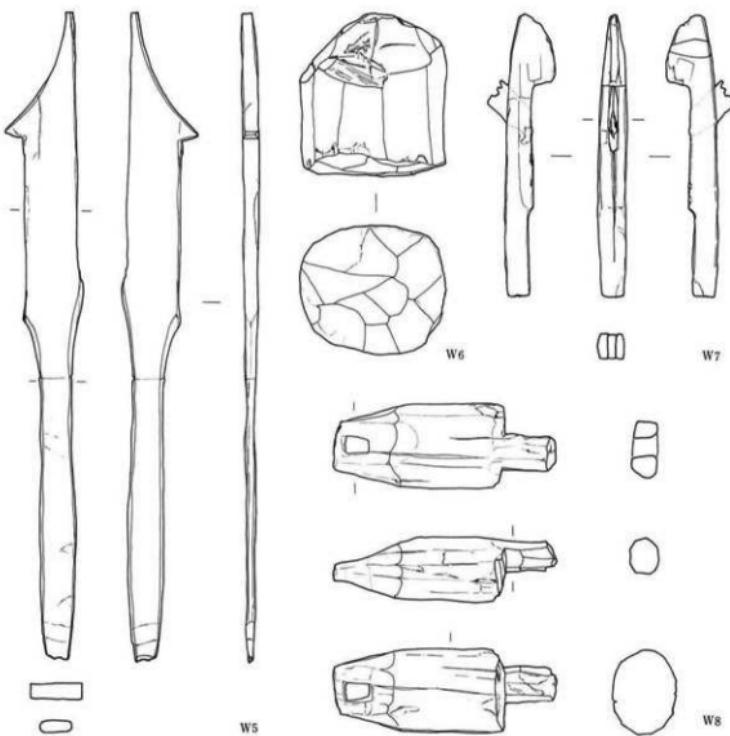


Fig.232 C地区 河川1遺物群1出土遺物(2) (縮1/4)

は、芯持ち材を用い、棒状の両端を丁寧に加工し、中心部を細く削り込んでいる(W 4)がある。一端は腐植のため加工痕は不明である。(W 3)も同様なつくりであるが、中心部の削り込みは無く、製作途中のものかもしれない。鎌状木製品は、刃部と柄部とからなり、刃部は一部残存するのみで実態は不明であるが、装着したままで出土した。柄部はほぼ完形で、頭部を二等辺三角形状に作り出し、握部に抉りを入れる。頭部下に断面長方形のはぞ穴を穿つ(W 7)。刃部は、はぞ穴に一部残存していたが、装着角度は出土時のものであり、実際とは異なると思われる。用途不明の木製品には、板状のものと棒状のものがある。(W 2)は板状の小片で一端を段状に作り出し、他端をゆるやかに削っている。(W 6)は芯持ち材で、一方を尖がらせ、他方を平坦に加工している。(W 8)は、芯持ち材を用い、1方を平面台形、断面三角形状に尖らせ、先端近くに方形の穴を穿ち、他方を垂直に切り一端に棒状の突起を作り出したもので、何らかの部材と組み合わせて用いられたと考えられるものである。他に、自然木が若干出土している。

遺物群2 (Fig.233)

遺物群1・3に挟まれて検出され、土器および木製品が出土した。

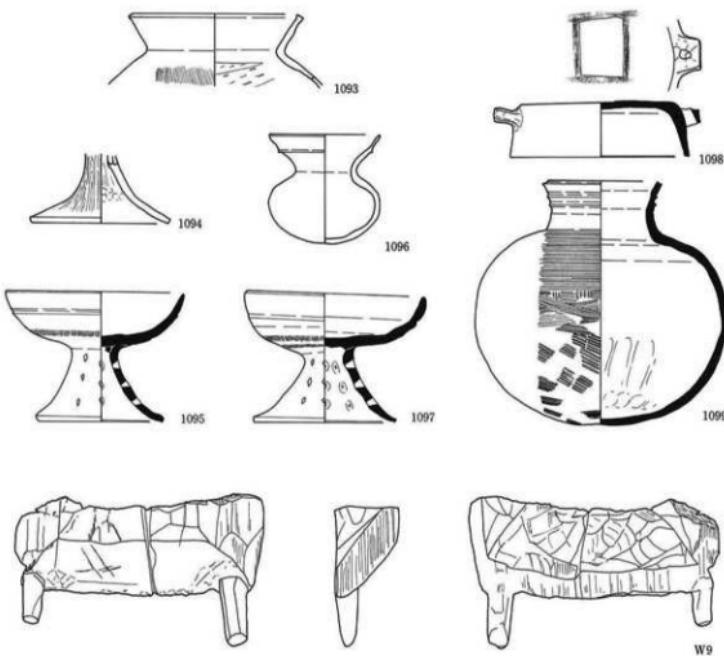


Fig.233 C地区 河川1遺物群2出土遺物 (W9は縮1/6)

土器には、土師器、須恵器がある。土師器には、壺(1093)、高坏(1094)、小型壺(1096)がある。須恵器には、短頸壺の蓋(1098)、直口壺(1099)、高坏(1095.1097)がある。

須恵器の蓋は、天井部が偏平で、斜め外方へわずかに開く口縁部の端部が面をなす。相対する2方に台形の耳を付け先端部窓切りし、上方から円孔を穿つ。天井部外面に「匁」形のゲタ痕および糊痕を残す。直口壺は、筒状の頭部にやや斜め外方に開く口縁部の上端が外傾する凹面をなす。やや偏平な体部に丸底である。口縁部に凸線文2条を施す。体部外面上半回転カキメ、中央部平行叩き目後ハケメ、下半および底部平行叩き目を施し、体部内面上半回転ナゲ、下半および底部當て具痕を残す。内外面ともに粘土紐の離ぎ目を残す。高坏は、浅い塊状の坏部にわずかに開く口縁部の端部が丸みをもつ。根広がりの脚台部の端部は面をもつ。坏部外面口縁部の境目に沈線文1条を施し、坏部に櫛齒文を施す。脚部に菱形の透かしを3段各々5・7列穿ち、透かしは部分的に穿孔しないものもあり、穿孔されたものは内面に面取りを施す。木製品は、双把手付の木槽で、幅約20cm、深さ5.3cmで棒状の把手を造り出すもので、全長は不明である(W9)。

#### 遺物群3 (Fig.234,235)

河川1右岸側遺物群の東側で検出されたもので、土器のみが出土した。

土器には、土師器、須恵器、黒色磨研土器がある。土師器には、壺・壺・鉢・高坏がある。壺には、

6. 中期の遺物

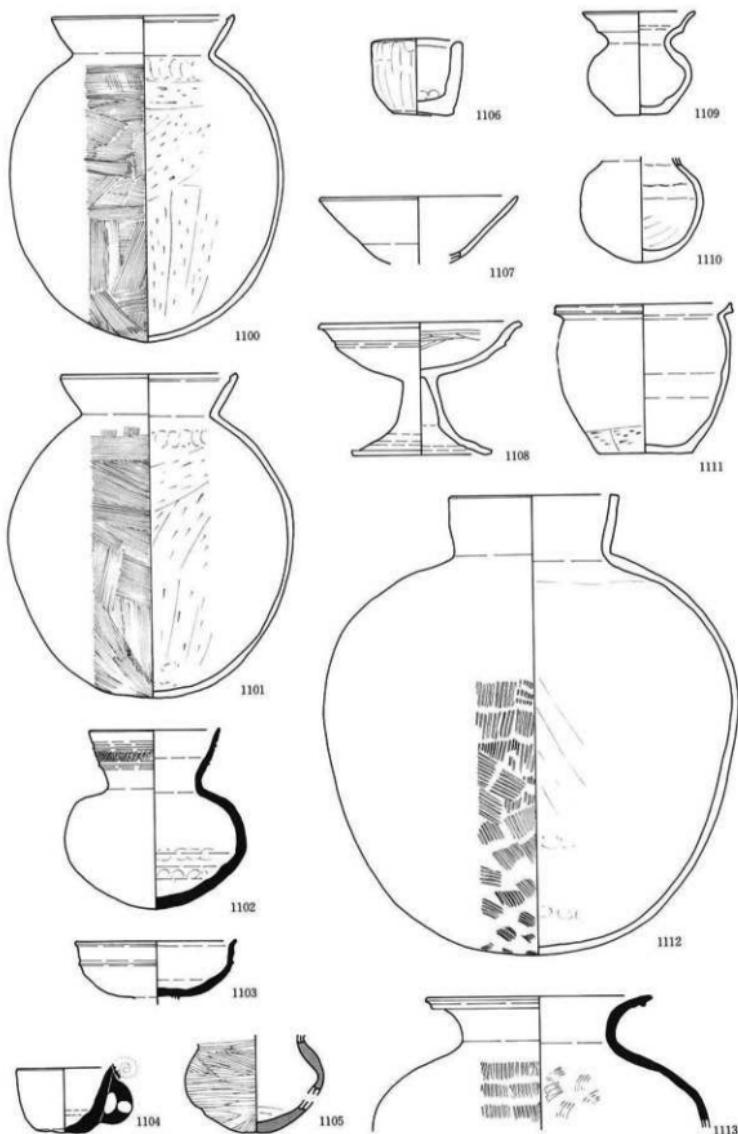


Fig. 234 C 地区 河川 1 遺物群 3 出土遺物(1)

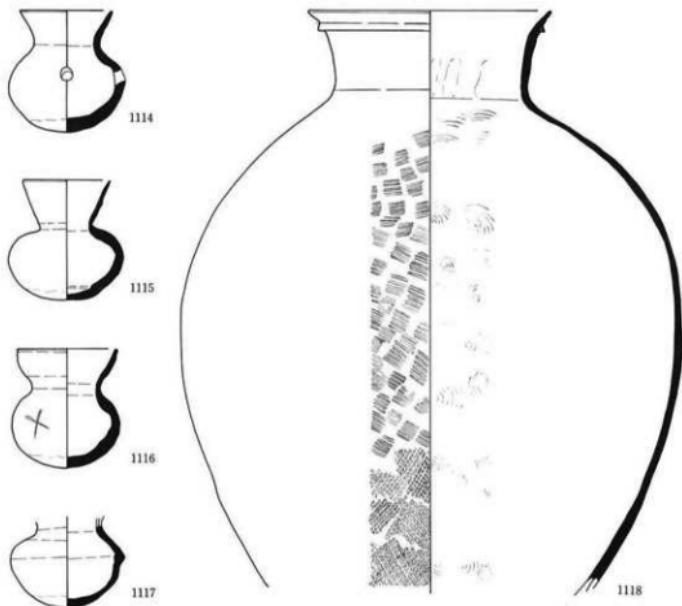


Fig. 235 C地区 河川1遺物群3出土遺物(2)

布留系の斜め外方へ内寄ぎみに伸びる口縁部の端部が内方に肥厚し、面をもつもの(1100.1101)がある。いずれも、体部外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。

壺には、大型短頸壺(1112)、小型壺(1109.1110)がある。(1112)は、やや斜め外方に伸びる口縁部の上端が面をもち、肩がやや張る体部に丸底のもので、体部外面平行叩き目を施し、内面指ナデおよび指頭圧痕を残す。(1109)は、二重口縁をもち、やや偏平な体部に平底のものである。(1110)は、口頸部を欠損する。

鉢は、小型で直口の手づくねのもの(1106)が、短頸壺(1112)の中から検出された。小型平底鉢は、短く外反する口縁部の端部が面をなし、わずかに立ち上がる。口縁部内面が四面をなす。体部はわずかにふくらみ、底部は平坦である。体部外面にナデ、底側部にヘラケズリを施し、体部内面ナデを施す。内外面ともに煤が付着する(1111)。

高坏には、皿状の坏部に斜め外方に開く口縁部をもつ(1107)と、皿状の坏部から短く外反する口縁部の端部が面をなす(1108)がある。後者は裾広がりの脚台部の端部が面をなす。口縁部と坏部の境目に凹線文を1条施す。口縁部および脚台部内外面に回転ナデを施し、坏部内面に粗いヘラミガキを施す。

須恵器には、壺・高坏・鉢・甌・甕がある。壺には、小型のものがあり、(1102)は直口壺で、短い筒状の頸部に内寄ぎみに開く口縁部の端部が丸みをもち、肩の張る体部に丸底である。口縁部に凸線文2条間波状文を施す。体部外面ナデ、底部内面當て具痕・粘土紐の継ぎ目を残す。一部淡灰色を呈し焼きの甘いものである。(1115)は、土師器の長頸壺の形態を真似した小型壺で、体部外面上半回転ナデ、下

6. 中期の遺物

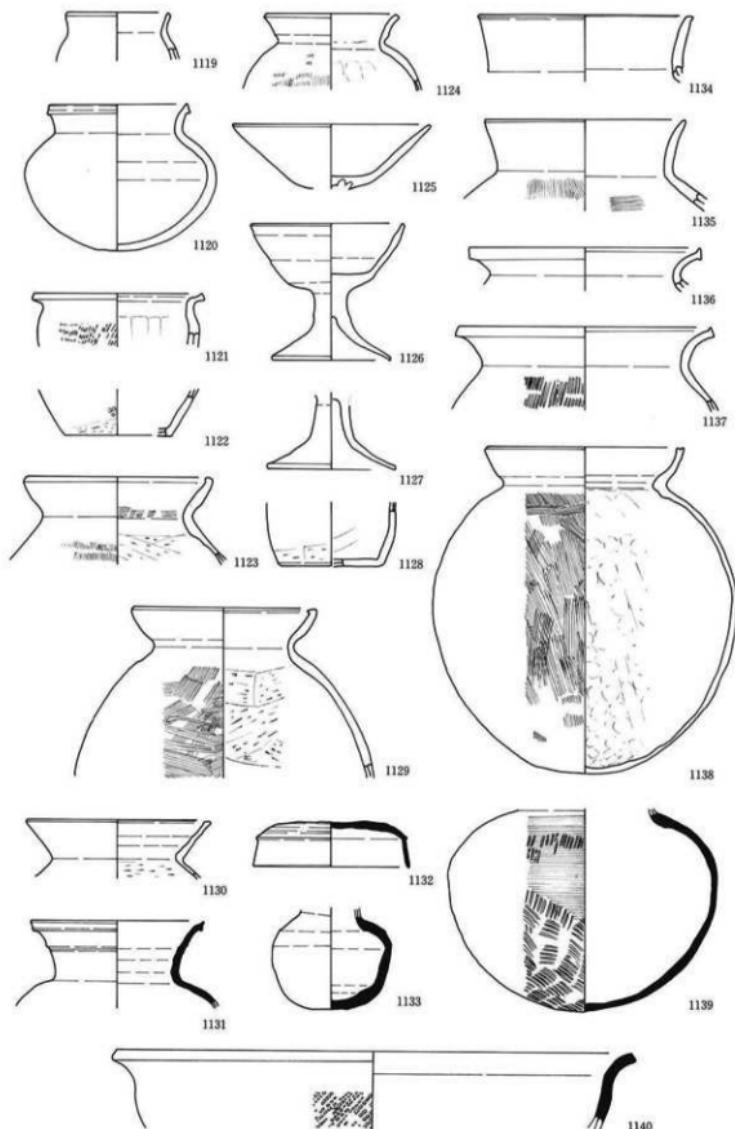


Fig. 236 C地区 河川1遺物群4出土遺物(1)

半ナデを施し、内面指ナデを施す。底部外面に粘土紐の維ぎ目を残す。淡灰褐色の焼きの甘いもので須恵器というよりは瓦質土器である。(1116)は短い筒状の頸部に内弯ぎみに斜め上方へ伸びる口縁部の端部が尖りぎみにおわり、やや偏平な体部に丸底のもので、体部外面上半回転ナデ、下半ナデを施し、内面ナデである。体部外面「×」の籠記号あり。底部内外面に粘土紐の維ぎ目を残す。(1117)は、口縁部を欠損する。(1116)と同様の壺と思われる。

高坏は無蓋のもので、浅い碗形の坏部に斜め上方に立ち上がる口縁部の端部がわずかに外反し丸みをもつ。坏部との境目に凸線文1条を施す。坏部外面回転ナデ、坏底部内面、不整方向のナデを施す。坏底部外面に、回転カキメの接合痕を残す。0.1~0.5cmの砂粒を多く含む暗灰色のものである(1103)。鉢は、小型で把手付きのもの(1104)で、厚手のつくりである。把手上に渦巻き状の装飾が付くと思われる。

壺は、小型壺によく似たつくりのもの(1114)で、短い筒状の頸部に斜め外方へ伸びる口縁部の上端がわずかな面をもつ。やや偏平な体部に丸底のものである。体部外面上半回転ナデ、下半内外面ともナデを施す。底部内外面に粘土紐の維ぎ目を残す。淡青灰色の焼きの甘いものである。

壺には、短い筒状の頸部に外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文1条を巡らす。体部が肩の張る(1113)と、筒状の頸部にやや外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下や下がったところに凸線文1条を巡らし、卵形の体部の(1118)がある。前者は、体部外面平行叩き目後部分スリケシ、内面同心円文當て具痕後半スリケシを施す。後者は、体部外面上半薄い平行叩き目、下端斜格子叩き目を施し、内面薄い同心円文當て具痕後半スリケシを施す。淡灰色をした焼きの甘いものである。

黒色磨研土器は小型のもので、口縁部を欠損する(1105)。体部外面丁寧なヘラミガキを施し、内面ナデを施す。遺物群下層より出土しており、時代が古くなる可能性もある。

#### 遺物群4 (Fig. 236, 237)

河川1の左岸西側で検出した遺物群で、土器と木製品が出土した。

土器には、土師器と須恵器がある。土師器には、壺・鉢・高坏・壺がある。壺には小型の短頸壺がある(1119.1120.1124)。(1120)は、短い筒状の頸部に短く外反する口縁部がわずかに垂下し凹面をなす。やや偏平な体部に丸底のものである。口縁部内外面および体部内面回転ナデを施す。体部外面は、表面磨滅のため不明である。(1124)は、短い筒状の頸部に短く外反する口縁部の端部が丸みをもつ。体部外面ハケメ、内面指ナデを施す。鉢には、小型平底鉢があり、(1121)は、短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をなす。体部外面繩蓆文叩き目を施し、内面ナデを施す。他に、斜格子叩き目(1122)、ナデ(1128)を施すものがある。(1122.1128)は、底側部外面にヘラケズリを施す。高坏には、皿状の坏部から斜め外方に伸びる口縁をもつ(1125.1126)がある。後者は、回転ナデを施す。(1127)の脚部も、脚台端部内外面に回転ナデを施す。壺には、布留系の内弯する口縁部をもつ(1123.1129.1130.1138)と、斜め上方に伸びる口縁部をもつ(1134.1135)、短く外反する口縁部をもつ(1136.1137)がある。前者の(1123.1129.1130)の口縁端部は、内方へわずかに肥厚し、上端が面をもち、(1138)は、上端が凹面をもつ。中者の口縁端部は、(1134)がわずかに外方へ肥厚し、上端面をもち、(1135)は丸みをもつ。(1134)は、短頸壺かとも思われるが外面に煤が付着していたため、壺に分類した。後者の壺は、口縁部の端部がいずれも、面をもちわずかに立ち上がる。体部の調整は、前者が外面ハケメ・内面ヘラケズリおよび指頭圧痕、中者が内外面ハケメ、後者が外面平行叩き目・内面ナデを施す。

須恵器には、坏蓋・壺・鉢がある。坏蓋は、わずかに斜め外方に開く口縁部の端部が丸みをもつ。天井部は偏平で口縁部高が器高の2/3近くを占める。天井部外面の回転ヘラケズリの施す範囲は広く、内

6. 中期の遺物

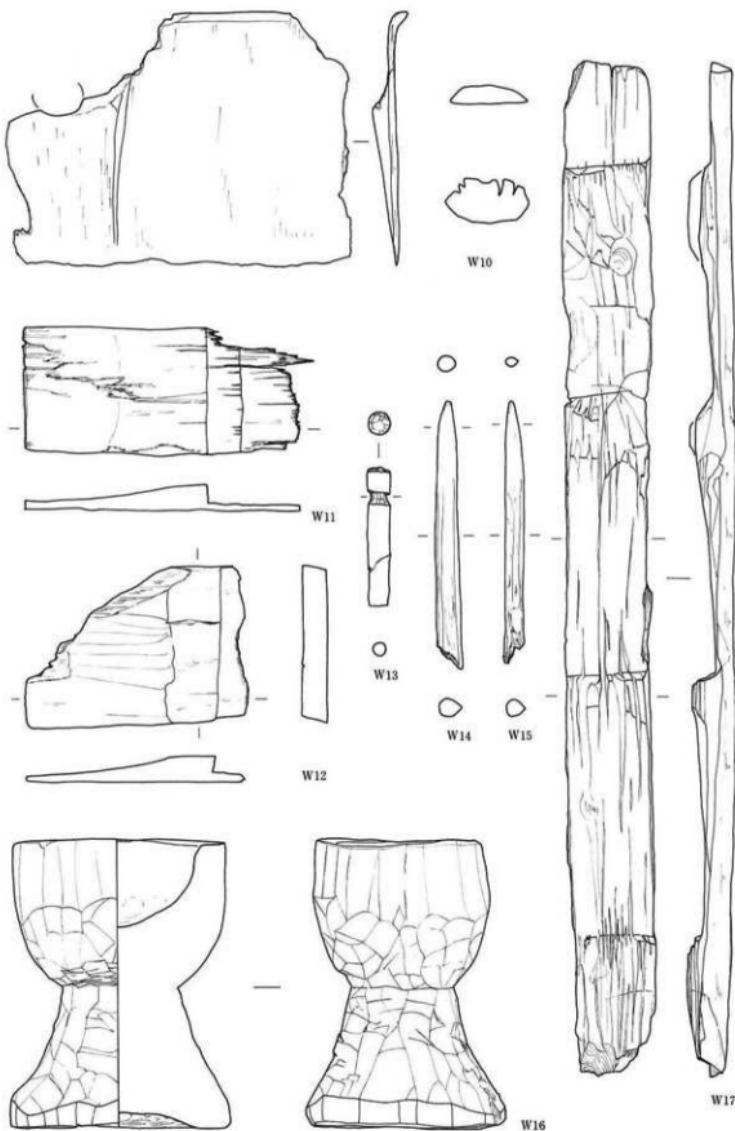


Fig. 237 C 地区 河川 1 遺物群 4 出土遺物(2) (W10~15は縮1/4、W16は縮1/6・W17は縮1/8)  
298

面中央に不整方向のナデを施す(1132)。甕の(1131)は、筒状の頸部に、外反する口縁部の端部がわずかに上下に拡張し凹面をなす。口頸部の境目に沈線文2条を施すことによりわずかな凸線文をつくり出す。体部外面に指頭圧痕を残す。(1139)は口頸部を欠損し、やや肩の張る体部に丸底のもので、体部外面上半に平行叩き目後回転カキメ、下半および底部に平行叩き目を施す。体部内面に同心円文當て具痕後スリケシ、底部に當て具痕を残す。壺の(1133)は、口頸部を欠損し、肩の張る体部に、わずかに平坦部をもつ底部をもつ。外面ナデ、内面指ナデを施す。鉢には、大型のものがあり、短く外反する口縁部の端部が面をもつ。わずかにふくらむ裾すぼまりの体部である(1140)。体部外面に格子叩き目を施す。

木製品には、えぶり、臼、梯子、用途不明木製品等がある。えぶりは横長なもので、約1/2残存し、数度乾燥したものか歪みがある(W10)。

臼は、縱長のもので、器高36.0cmを測る。鉢部は平面梢円形をしており、長径26.0cm・短径19.5cmを測り、半球状をし内径20.0cm×14.0cm、深さ10.5cmを測る。脚台部は、断面が台形をし、端部の長径は27.0cm・短径は23.5cmを測る。脚台部の端部は、幅約5cm程を面取りし、わずかに上げ底である。外面、加工痕をよく残す(W16)。

梯子は、ほぼ完形であるが腐食が著しく、足かけ部のほとんどを欠損する。足かけ部は、4段あり、全長1.25m、幅12cmを測る(W17)。

他に、用途不明の木製品として、板状のもの(W11.W12)と棒状のもの(W13～W15)等が出土している。

#### 遺物群5 (Fig.238,239)

河川1の左岸東側で検出された遺物群で、土器が出土した。土器には、土師器、須恵器、瓦質土器がある。土師器には、壺・鉢・高杯・甕がある。壺には、短頸壺(1141.1153)、直口壺(1143)がある。(1141)は、わずかに斜め外方へ開く口縁部の端部が丸みをもち、偏平な体部をもつ。体部外面にハケメ、内面にヘラケズリを施し、内面に粘土紐の維ぎ目を残す。(1153)は、短い筒状の頸部に、短く外反し屈曲してわずかに立ち上がる口縁部の上端が面をもつ。体部外面の調整は表面磨滅のため不明、内面に指頭圧痕を残す。(1143)は、斜め外方へ伸びる口縁部の端部が丸みをもつ。口頸部の外面にハケメを施す。

鉢には、小型平底鉢がある。短く外反する口縁部の端部が面をもつ(1147.1148)は、体部がわずかにふくらみ、底部がわずかに上げ底ぎみをおわる。体部外面の調整は、前者が平行叩き目を施し、後者がナデであり、体部内面に粘土紐の維ぎ目を2本残す。(1146)は、短く外反する口縁部の端部が尖りぎみにおわり、内面が凹面をなす。体部外面にナデを施す。

高杯には、脚部のみあり、やや裾広がりの脚柱部から、さらに裾広がりに聞く脚台部の端部がわずかに垂下し丸みをもつ(1149)と、端部が面をもつ(1150)がある。前者は脚台部の内外面にハケメを施し、後者はナデを施す。

甕には、口縁部が内弯する布留系のもの(1142.1152)と、外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文1条を施し、須恵器に似たつくりの(1154)がある。

須恵器には、蓋杯・壺・甕がある。杯蓋は、偏平な天井部に、わずかに聞く口縁部の端部が丸みをもつ。天井部と口縁部との境目の稜線は、上下の回転ナデにより強調される。天井部の外面の回転ヘラケズリは広い。天井部の内面中央部に、不整方向のナデを施す。

坏身は、内傾して立ち上がる口縁部の端部が内傾する面をもつ。受け部は斜め外方に伸び、上・下に強い回転ナデを施すことにより受け部を強調する。底部は、やや偏平である。外面の回転ヘラケズリは広く、内面中央部に不整方向のナデを施す。壺には、二重口縁をもつもの(1156)と小型壺(1157)がある。

6. 中期の遺物

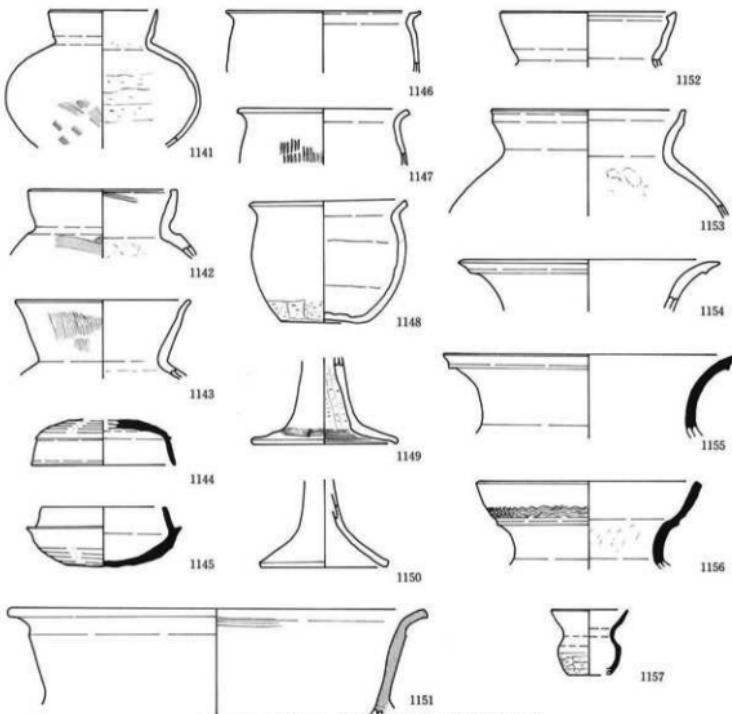


Fig. 238 C地区 河川1遺物群5出土遺物(1)

前者は、筒上の頸部に外反して屈曲し、さらに斜め外方に開く口縁部の上端が面をもち、口縁部に波状文を施す。後者は、斜め外方に開く口縁部の端部が丸みをもち、肩の張る体部に平底のもので、外面の体部下半にヘラケズリを施す。

甕は、外反する口縁部の端部が尖りぎみにおわり、端部下に凸線文1条を施す(1155)。(1158)は、ほぼ完形で、外反する口縁部の端部が凹面をなし、端部下に凸線文を1条施す。やや肩の張る体部に丸底である。口頸部に波状文間凸線文を2条施す。体部外面に平行叩き目を施し、内面に同心円文當て具痕後スリケシを施す。外面の口縁部から肩部にかけて自然釉が付着する。

瓦質土器には、大型で把手が付くと思われる鉢があり(1151)、短く外反する口縁部の端部が面をなし、裾すぼまりの体部である。内外面に回転ナデを施す。

青灰色シルト層出土の遺物(Fig. 240, 241)

河川1の遺物群上の青灰色シルト層からも、多量の土器が出土した。土器には、土師器、須恵器、瓦質土器がある。土師器には、壺・高杯・鉢・甕がある。壺には、二重口縁壺がある。(1159)はやや小型で、口縁部にわずかな凸線文を1条巡らす。(1171)は小型のもので、完形品である。底部外面に粘土紐の継ぎ目を残す。(1164)は大型のもので、屈曲部を凸帯状に張り出す。

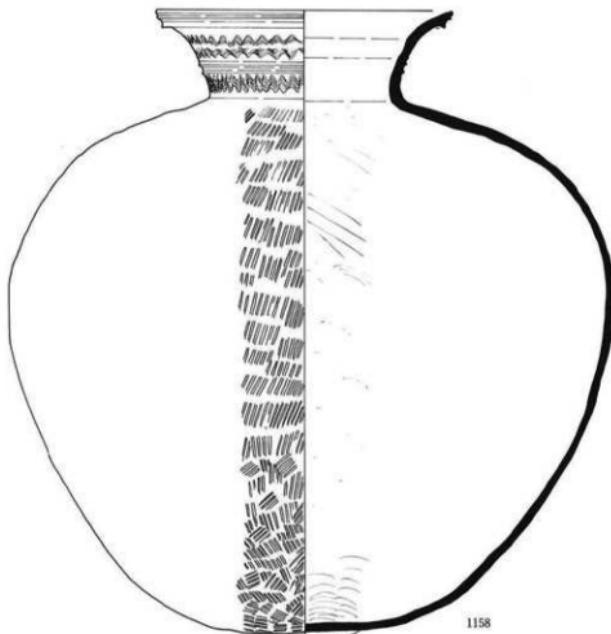


Fig.239 C地区 河川1遺物群5出土遺物(2)

高坏には、3種類ある。皿状の坏部に、屈曲して斜め外方へ開く口縁部をもち、口縁部の端部が面をもちわずかに立ち上がる(1163)、浅い塊状の坏部に、口縁部の端部がわずかに外反し丸みをもつ(1175)、皿状の坏部から屈曲し、さらに外反する口縁部をもつ(1168.1169.1176.1177)がある。(1175)は、坏部外面にハケメを施し、(1170)の脚部も含めて後者は、内外面に回転ナデを施す。鉢には、小型平底鉢の底部破片がある(1178~1180)。甕には、内弯する口縁部をもつ(1160)と、二重口縁をもつ(1161.1162)がある。

須恵器には、蓋坏・壺・高坏・鉢・甕・甕がある。蓋坏の蓋には、小型で口縁部と天井部との境目の稜線が鈍く、口縁部の端部が内傾する段をもつ(1182.1183)と、やや大型で天井部が丸みをもち、天井部との境目の稜線が鈍く、わずかに開く口縁部をもち、口縁端部が内傾する凹面をもつ(1181)がある。(1183)は、天井部の内面に同心円文当て具痕を残す。

坏身は、わずかに内傾する口縁部の端部が内傾する段をもち、斜め外方にわずかに伸びる受け部をもつ(1184)。壺は、小型の直口壺(1172)と広口壺(1185)がある。

高坏には、無蓋のものがある。(1173)は浅い坏部に、内傾する口縁部の上端が面をもち、坏部に凹線文・波状文・凸線文を施す。(1165)は、浅い塊状の坏部に、斜め外方に伸びる口縁部の端部がわずかに外反し尖りぎみにおわり、坏部に凸線文1条を施す。(1174)は、浅い坏部から、屈曲してさらに斜め外方に伸びる口縁部の端部が尖りぎみにおわり、中空の脚柱部から裾広がりに伸びる脚台部の端部が丸み

6. 中期の遺物

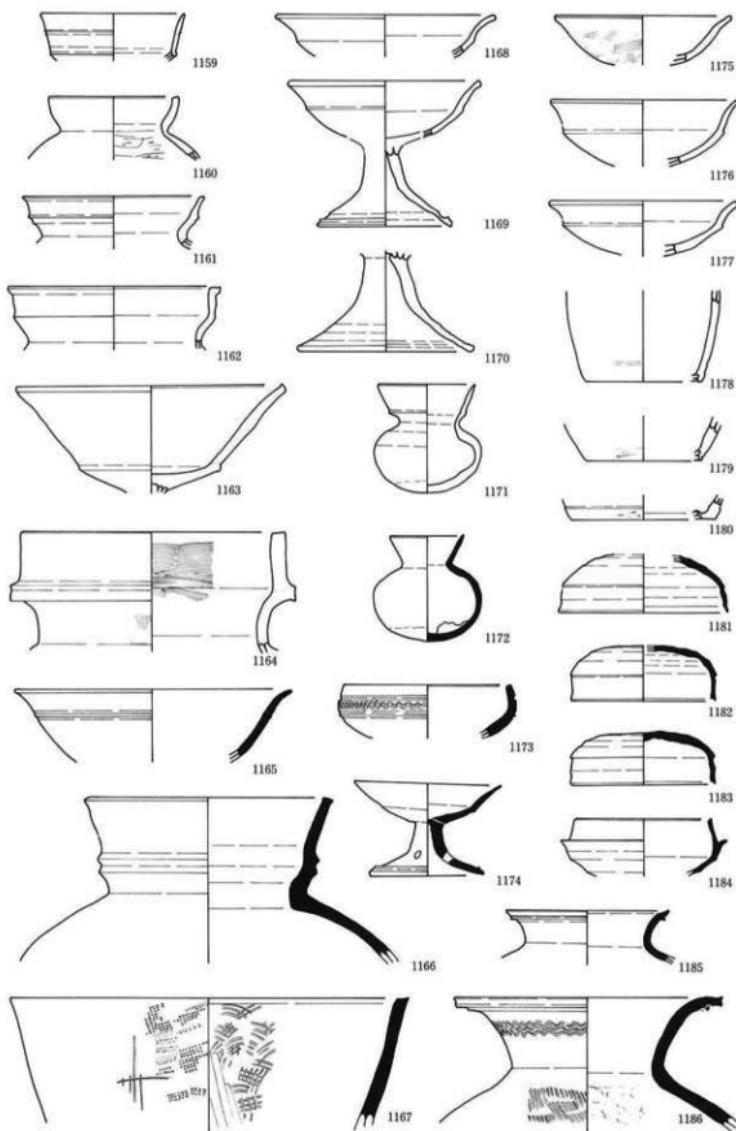


Fig. 240 C地区 河川1青灰色シルト層出土遺物(1)

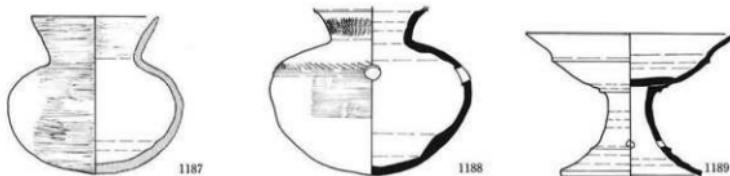


Fig. 241 C地区 河川1青灰色シルト層出土遺物(2)

をもち、端部上に凸線文1条を巡らす。(1189)は、浅い坏部から屈曲して、さらに外反する口縁部の端部が尖りぎみにおわり、中空の脚柱部から裾広がりに伸びる脚台部の端部がわずかに垂下し面をもつ。坏部と脚部の境目および脚柱部と脚台部の境目に凸線文を各1条施すもの等がある。

鉢は、大型の直口のもので、口縁部の上端部が箆切りされる。体部外面に細かい假格子叩き目を施し、内面に同心円文當て具痕を残す。外面に箆記号を残す(1167)。甌は、大型のもので、口縁端部を欠損する。肩の張る体部に丸底のもので、外面の頸部に波状文、体部に列点文・凸線文2条を施す(1188)。

壺には、外反する口縁部の端部がわずかに上下に拡張し凹面をなし、端部下に凸線文1条を施す(1186)と、大型で二重口縁をもち口縁部下に凸線文1条を施す(1166)がある。前者は、体部外面に平行叩き目、内面にスリケシを施す。後者は、内外面ともにスリケシを施す。

瓦質土器には、直口壺(1187)がある。斜め外方に伸びる口頸部の端部が丸みをもつ。やや偏平な体部に丸底である。口頸部の内外面および、体底部外面にヘラミガキ、体底部内面にナデを施す。一部淡灰色で他は黒灰色の土器である。

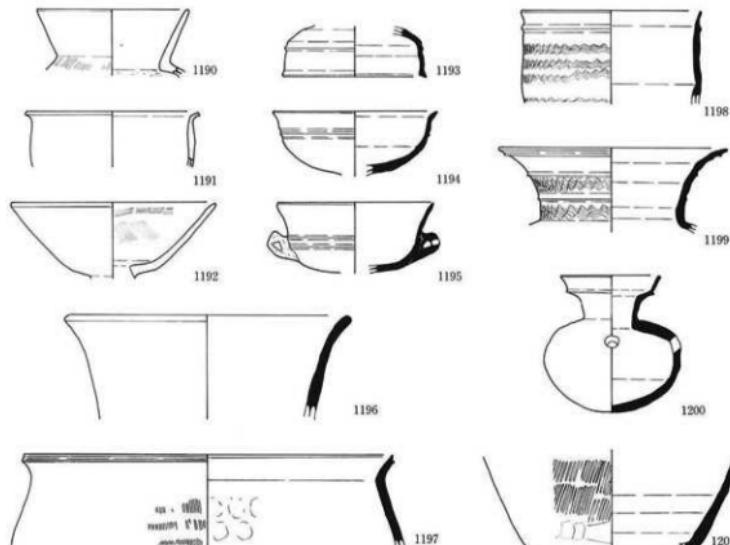


Fig. 242 C地区 河川1砂砾層出土遺物

6. 中期の遺物

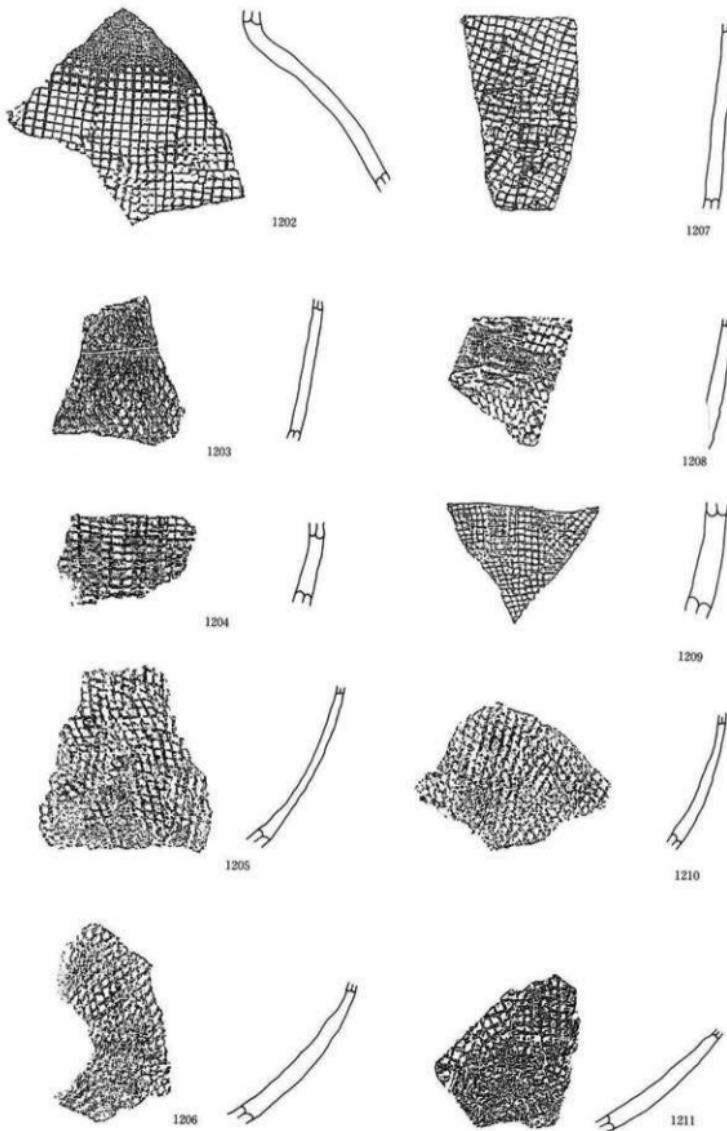


Fig. 243 C地区 河川1出土遺物拓本(1)

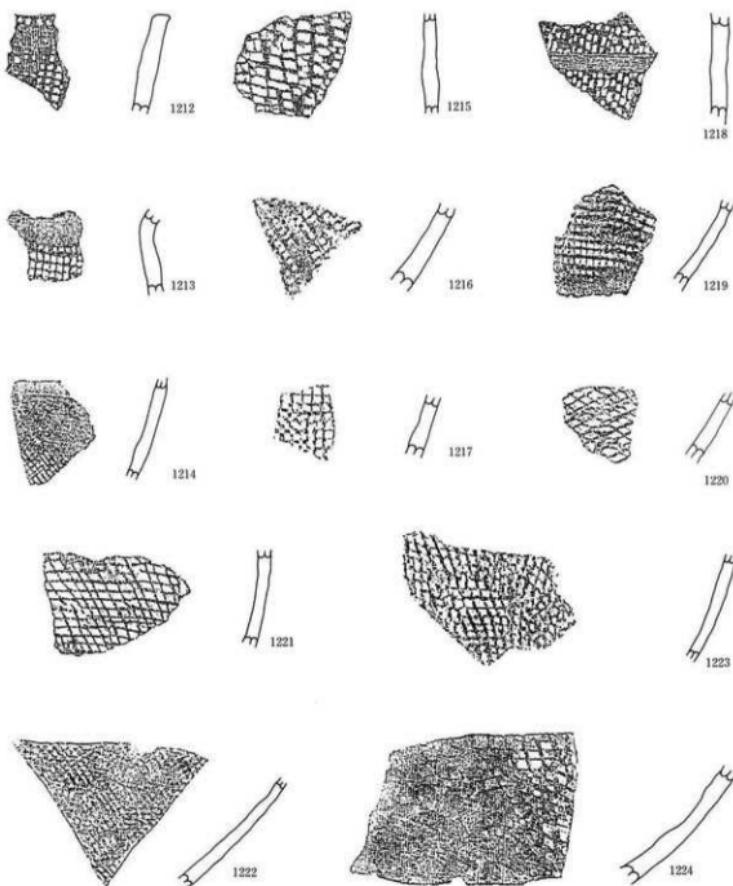


Fig. 244 C地区 河川1出土遺物拓本(2)

砂砾層出土の遺物 (Fig. 242)

砂砾層は、上部では奈良・平安時代の遺物を含むもので、下部に古墳時代中期の遺物を多く含んでいた。土師器、須恵器が出土しており、土師器には、壺(1190)・鉢(1191)・高环(1192)がある。須恵器には、蓋坏(1193)・壺(1198.1199)・高坏(1194.1195)・扈(1200)・瓶(1201)・甕(1196.1197)等が出土している。

河川1の遺物群から出土した遺物は、その出土状況から、大きくは右岸側と左岸側に2区分できる。

なお、右岸側の出土遺物と左岸側の出土遺物では、若干の時期差がありそうである。

遺物群上層の青灰色シルト層から出土した遺物は、遺物群と同様の時期のものを多量に含むが、それ

6. 中期の遺物

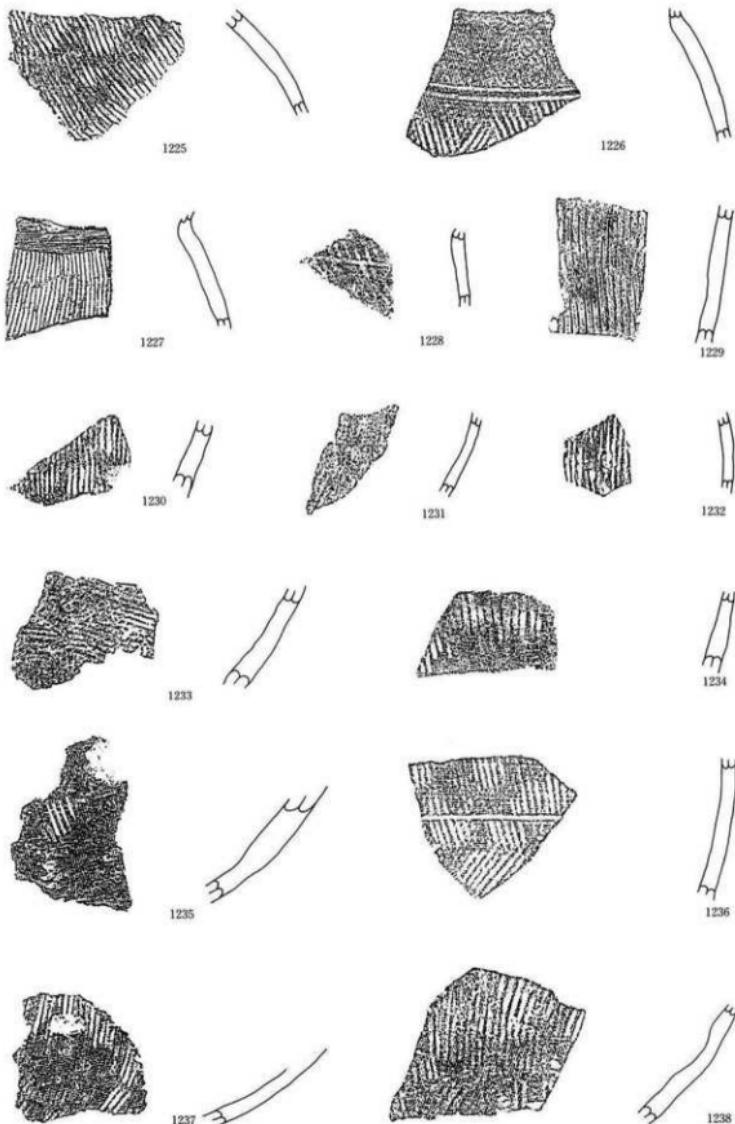


Fig. 245 C地区 河川1出土遺物拓本(3)

以降のものも含まれ、その上限は古墳時代後期に属するものである。

#### その他の遺物

河川1から出土した土器のなかには、土師質のもので、体部外面に格子叩き目や平行叩き目を施すものがコンテナに約3箱出土する。

Fig.243,244は、外面に格子叩き目および斜格子叩き目を施すもので、内面は、いずれも丁寧なスリケシを施している。(1212)は、瓶の口縁部破片で、(1214,1217,1220,1221,1223)は、小型平底鉢である。壺か甕の体部破片と思われるものが多く、(1203,1218)のように叩き目後に沈線文や櫛描文を施すものは瓶の可能性がある。

Fig.245,246は、平行叩き目を施すもので、(1240)は内面に同心円文当て具痕を残す。(1226)は、鍋かとも思われる。Fig.247は、須恵器で、(1242)が外面に平行叩き目後沈線文を施し、(1243,1244)が繩席文叩き目を施す。

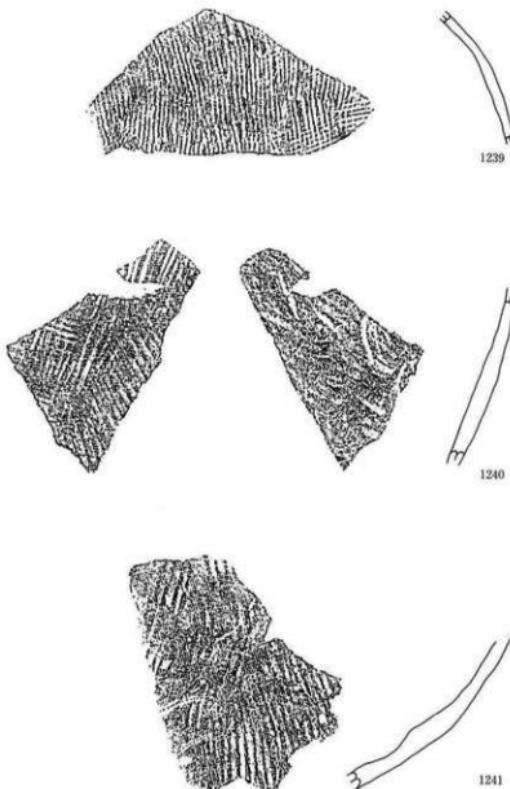


Fig.246 C地区 河川1出土遺物拓本(4)



Fig.247 C地区 河川1出土遺物拓本(5)

## 7. 中期～後期の遺物

ここで取り扱う遺物は、古墳時代後期の遺構出土のものと、G地区を流れる河川8出土の遺物である。H地区の灰原出土の遺物は、本来は、この節に含まれるものであるが、多量の遺物が出土しているため、後節で一括して記述する。

古墳時代後期の遺構は、当遺跡では散見される程度で、実測可能な遺物が出土する遺構は、土坑2基、溝2条である。

### 1) 土坑

土坑は、C地区、D地区で各1基検出された。

土坑2 (Fig. 248)

土坑2から出土した土器は、須恵器の壺および高杯である。壺は、筒上の頸部からわずかに斜め外方に開く口縁部の上端が面をもつ。体部上端に、列点文・波状文を施す(1245)。灰白色をした焼きの甘いものである。高杯は、有蓋のもので杯部のみを残存する。口縁部は、短く内傾し端部が丸みをもち、受け部は斜め外方に伸び、皿状の杯部である(1246)。

土坑37 (Fig. 249)

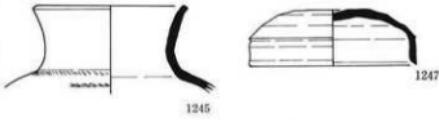
土坑37から出土した土器は、須恵器の壺蓋および高杯があり、他に、焼け歪んだ蓋杯の類が若干出土している。壺蓋は、垂下する口縁部の端部が内傾する凹面をなし、やや偏平な天井部との境目の稜線がやや鈍い。天井部の外面に溶着痕が2ヶ所にある(1247)。高杯は有蓋のもので、口径15.6cmを測り、やや大型のものである。内傾する口縁部

の端部がわずかに外反し丸みをもつ。

受け部は、やや斜め外方に伸び端部が

丸みをもち、皿状の杯部をもつ。脚部

の透かしは、3方に穿つ(1248)。



### 2) 溝

実測可能な遺物が出土する溝は、G

地区の3条のみである。

溝33 (Fig. 250)

須恵器の杯身が3点、完形で出土した。(1249)は小型のもので、口径7.0cmを測る。やや内傾する口縁部の端部が内傾する段をもつ。受け部は横方向に伸び、口縁部との境目に強いナゲが巡る。丸みをもつ杯部である。(1250.1251)は大型のもので、内傾する口縁部の端部が前者が丸みをもち、後者が内傾する段をもつ。受け部は水平で丸みをもつ杯部である。杯部外面のヘラケズリの範囲が約1/2である。

溝27・28 (Fig. 251)

溝27・28から出土した遺物は、須恵器のみである。蓋壺・壺・高杯・提瓶・器台がある。蓋杯は、小型のもの(1253～1259.1267)と、大型のもの



Fig. 248 C地区 土坑2  
出土遺物 Fig. 249 D地区 土坑37出土遺物

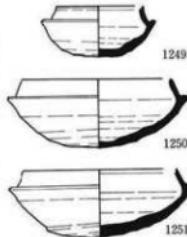


Fig. 250 G地区 溝33  
出土遺物

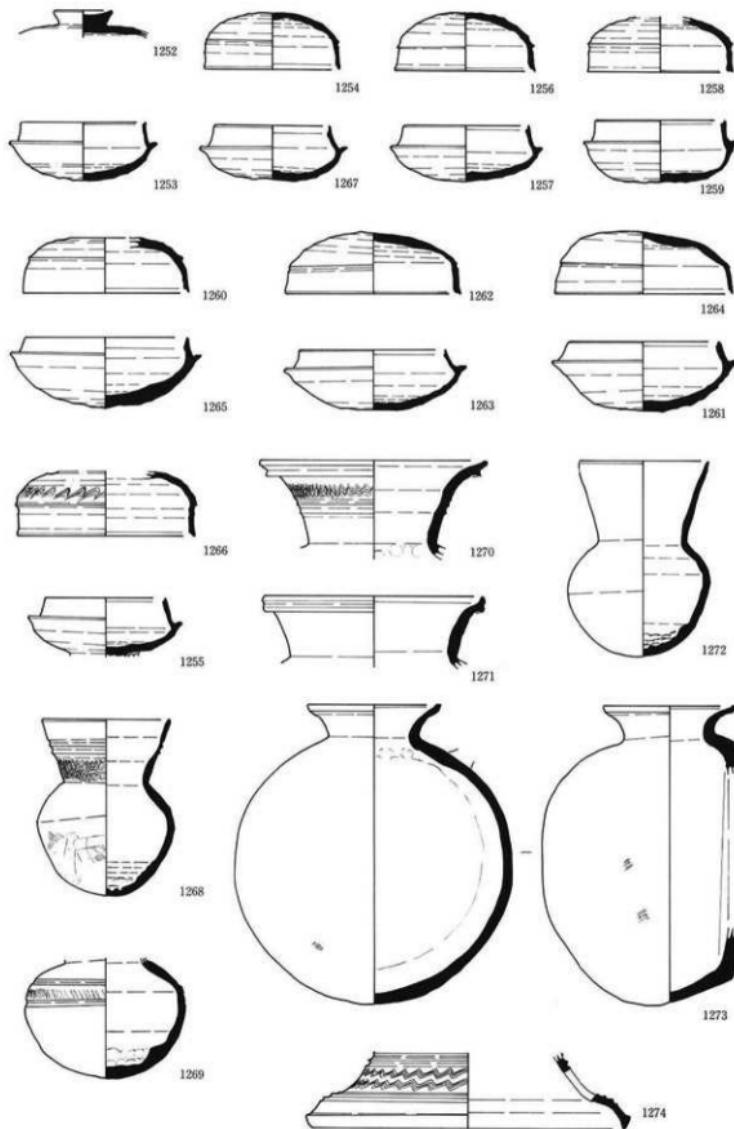


Fig. 251 G地区 溝27.溝28出土遺物

## 7. 中期～後期の遺物

(1260～1266)があり、(1266)の天井部には、波状文が施される。壺には、広口壺(1270)と直口壺(1268. 1269. 1272)があり、(1269)は口頭部を欠く。高坏には、蓋(1252)と、有蓋で坏部のみ残存していた(1255)がある。壺は、口頭部破片で、短い筒状の頸部に短く外反する口縁部の端部が上下にわずかに拡張し、口縁部の端部に凹線文1条を施す(1271)。提瓶は、把手部を欠損する。口縁部は短く外反し、端部がわずかに立ち上がり、上端面および外端面をもつ。体部は背が偏平で、腹が半球状をなす。体側部外面に、平行叩き目を施す(1273)。器台は、脚部のみ残存しており、裾広がりに開き、さらに内湾ぎみに開く脚台部の端部が面をもつ。最下段は無文帶で、以上に凸線文2条間毎に波状文2帯を施す。小破片のため、透かしの形態・個数は、不明である(1274)。

(1253. 1256. 1257. 1259. 1263. 1271)が満28から、(1285)が満27・28の屈曲部から出土しており、それ以外のものが満27から出土したものである。

### 3) 河川

F・G地区の北東から南西に向けて流れる河川で、その堆積は、おおよそ上・下の2層に分けられる。遺物の出土状況も上層と下層で若干の差異があり、以下、下層と上層に分けて記述する。

#### 河川8下層出土遺物(Fig.252～263, 274, 275)

河川8下層から出土した遺物には、河川底部から出土したものが多い。遺物には、土器、土製品、木製品等がある。

土器には、土師器と須恵器があり、その出土の割合は、ほぼ1対2である。

##### i 土師器 土師器には、壺・高坏・鉢・甕および、須恵器の影響を受けた土器の一群がある。

壺には、広口壺、二重口縁壺、長頸壺、短頸壺、小型壺がある。広口壺は、外反する口縁部の端部が丸みをもち、球状の体部に丸底のものである。口径と腹径がほぼ同じである。体部の調整は、外面に指ナデ、内面にヘラケズリを施す(1281)。二重口縁壺には、短い筒状の頸部に外反し屈曲してさらに外反する口縁部をもつものがある(1275. 1276)。前者は、口縁部の端部の内面がわずかに肥厚し、上端面をもち、後者は端部が丸みをもつ。体部の調整は、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。長頸壺には、筒状の頸部に、わずかに斜め外方に開く口縁部の上端が面をもち、やや縱長な体部に丸底のもの(1288. 1291)と、口縁部を欠損するやや偏平な体部をもつ(1287)がある。体部外面の調整は、いずれもハケメであるが、前者のハケメは粗く施される。(1288)は、肩部に平行叩き目を残す。(1291)の体部中央には、焼成後の穿孔が見られる。短頸壺は、斜め外方に伸びる口縁部の上端が面をもち、やや偏平な体部に丸底のもの(1292)、体部の調整は内外面ともにナデを施す。(1281. 1287. 1288. 1291. 1292)の外面には、煤が付着する。小型壺には、口縁部が短く外反し、やや肩の張る体部に丸底のもの(1278)、斜め外方に伸びる口頭部をもち、やや偏平な体部をもつ(1277)、内弯する口縁部にやや偏平な体部をもつ(1279)がある。体部の調整は、(1278)が内外面ともに指ナデおよび指押さえ、(1277)が外面ハケメ、内面ヘラケズリおよび指押さえ、(1279)が外面ハケメ後指ナデ、内面指ナデおよび指押さえを施す。

高坏には、皿状の坏部から斜め外方に開く口縁部をもつ(1282～1285. 1290)、塊形の坏部をもつ(1289. 1293)と、皿状の坏部から屈曲してさらに外反する口縁部をもつ(1294. 1296. 1297)がある。坏部の調整は、(1282～1285. 1296. 1297)がナデを施し、(1289. 1290. 1294)がハケメを施す。(1293)は、口縁部の端部がわずかに外反し丸みをもつ。坏部の外面に指頭圧痕を残し、内面に縱方向の粗いヘラミガキを施す。内外面に朱が施される。

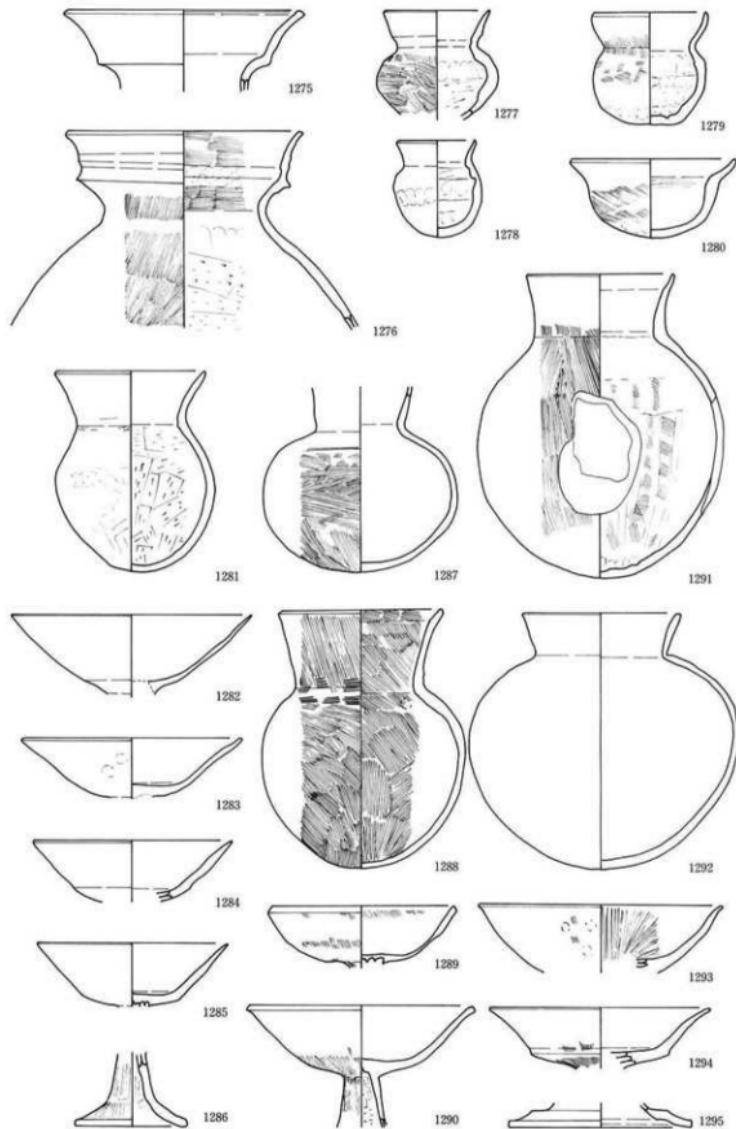


Fig. 252 G地区 河川8下層出土遺物(1)

## 7. 中期～後期の遺物

鉢は、内窓ぎみに斜め外方に伸びる口縁部に半球状の体部に丸底のもの(1280)が1点のみある。体部外面にハケメ、底部外面に指押さえを施す。内面は、ナデを施す。

甕には、口縁部が内窓するもの(1298.1304.1306～1309)、外反するもの(1299～1302.1315)、斜め上方に開くもの(1303.1305.1310.1311)がある。(1304)は、口縁部が尖りぎみにおわり、球状の体部に丸底のものである。体部の外面に指ナデおよび指押さえ、内面上半にハケメ、下半にヘラケズリ状ナデを施す。口縁部外面に粘土紐を残す。桃褐色をしており二次焼成を受ける。(1306)は、口縁部の端部が内方に粘土紐を1本貼り足すことにより肥厚させる。球状の体部に丸底のものである。体部の調整は、外面にハケメ、内面に指頭圧痕およびヘラケズリを施す。内面に炭化物、外面に煤が付着する。(1307)は、口縁部の端部が内方へわずかに肥厚し上端が面をもち、肩の張る体部である。体部の調整は、外面にハケメ、内面に指ナデが施される。内外面ともに煤が付着する。(1298)は、口縁部の端部が内方へわずかに肥厚し上端が凹面をなす。体部外面の調整は、外面にハケメ、内面に指ナデが施される。(1309)は、口縁部の端部が内方にわずかに肥厚し、上端面をもち、頸部外面に強いヨコナデを施し、球形の体部をもつ。体部の調整は、外面が表面磨滅のため調整不明、内面にヘラケズリが施される。

(1299)は、短く外反する口縁部の端部が丸みをもち、やや偏平な体部である。体部の調整は、外面にハケメ、内面にヘラケズリが施される。外面に煤が付着する。(1300.1301.1315)は、口縁部の端部が丸みをもち、球形の体部に丸底である。体部の調整は、外面(1300.1315)がハケメ、(1301)がナデ、内面は前者がヘラケズリ、後者が指頭圧痕を残す。(1315)は、内外面ともに煤が付着し、内面に炭化物の付着が著しい。(1302)は、口縁部の端部が面をもつ。体部の調整は、外面にハケメ、内面にハケメ後指ナデを施し、粘土紐の維ぎ目を残す。

(1305.1311)は、口縁部の端部が丸みをもち、前者は肩のやや張る体部をもつ。後者は、やや偏平な体部をもつ。体部の調整は、前者が外面にハケメおよび指ナデ、内面にヘラケズリ状ナデ、後者が内外面ともにナデおよび指ナデを施す。(1305)は、外面に煤が付着する。(1303)は、口縁部の上端が面をもつ。体部の調整は、外面がナデ、内面がヨコナデを施す。外面に煤が付着する。

(1311)は、甕というよりは、むしろ短頸甕に属す可能性がある。

須恵器の影響を受けた土器には、高坏・甕・鉢・瓶・甕がある。

高坏は、壺状の坏部に短く外反する口縁部の端部が面をもつ。坏底部外面に凸線文1条を巡らす。脚部を接合するための箒の痕跡を良好に残す(1314)。坏部の調整は、内外面ともに回転ナデを施し、坏底部の内面に不整方向のナデが施される。甕は、壺形甕で、短い筒状の頸部に外反し屈曲してさらに斜め外方に伸びる口縁部の端部が丸みをもち、やや肩の張る体部に丸底のものである(1320)。体部外面の調整は不整方向のナデ、内面は上半が回転ナデ、下半および底部に布目の当て具痕を残す。体部外面に黒斑がある。鉢は、浅い碗状の体部から屈曲して上方に伸び、わずかに外反する口縁部の端部が尖りぎみにおわる。口縁部の内外面に回転ナデを施し、体部外面にヘラケズリ後ナデ、内面に不整方向のナデを施す完形のものである(1321)。瓶は、体部の下半および把手を欠損する(1319)。短く外反する口縁部の端部が凹面をなし、わずかにふくらむ体部をもつ。体部の調整は、外面に平行叩き目後スリケシ、内面に不整方向のナデを施す。

甕には、短く外反する口縁部の端部が凹面をなす(1312.1316)、端部が面をなし口縁部の内面が凹面をもつ(1317)、わずかに垂下し面をもつ(1318)がある。体部外面の調整は、(1316～1318)が平行叩き目を施し、(1312)が繩蓆文叩き目を施す。体部内面の調整は、(1312)が同心円文當て具痕を残し、他はス

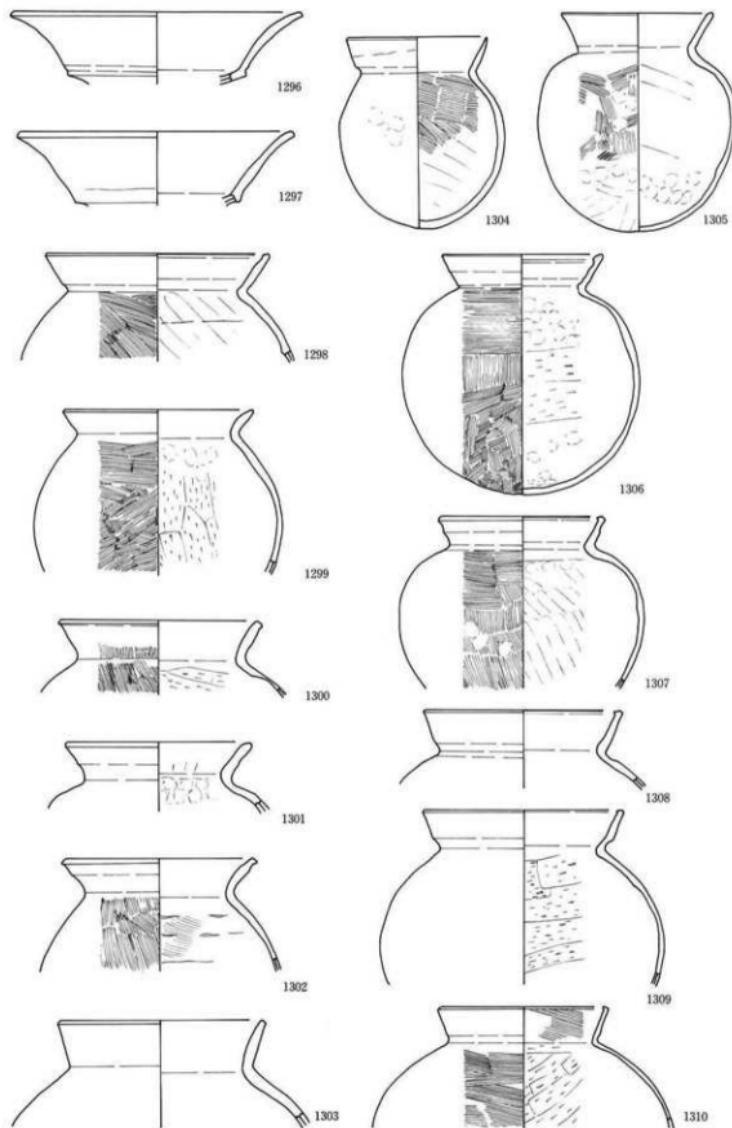


Fig. 253 G地区 河川8下層出土遺物(2)

7. 中期～後期の遺物

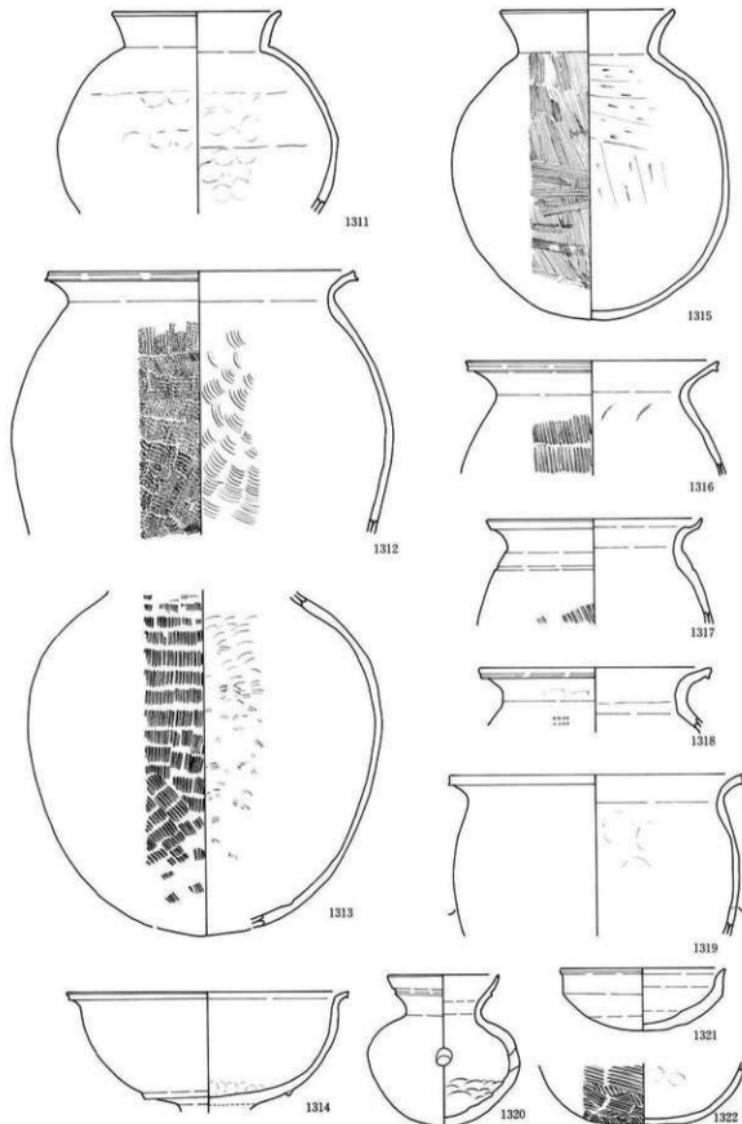


Fig. 254 G地区 河川8下層出土遺物(3)

リケシを施す。(1313)は、口頸部を欠損するもので、壺か甕の体部であろう。やや肩の張る体部に丸底のものである。調整は、外面に平行叩き目、内面に同心円文當て具痕後半スリケシを施している。(1316)は、外面に煤が付着する。(1322)は、甕の底部と思われ、平底ぎみの丸底である。調整は、外面に平行叩き目、内面にスリケシを施す。内外面に煤が付着する。

以上の土器の他に、外面に平行叩き目、内面に同心円文當て具痕を施す体部破片が出土している。

#### ii 須恵器 須恵器には、蓋坏、鉢・塊、高坏、壺、器台、甕、瓶、甕等がある。

蓋坏の蓋には、口径12cm前後、器高5cm程度のやや小型の(1323.1327)と、口径13cm前後、器高4cm程度の(1324~1326.1328~1330)の二種類がある。前者は天井部が丸みをもち、後者はやや偏平である。口縁の端部は、(1323)が内傾する段をもち、(1324.1327)が凹面をもち、(1326.1328)が平坦面をもち、(1325.1329)が内傾する面をもち、(1330)が内面に凹線文1条を施し、以下の器壁を薄くし、端部が丸みをもつものである。(1324.1325.1329)は、天井部の内面に不整方向のナデを施す。

坏身には、多種ある。(1331)は、内傾する口縁部の端部が丸みをもち、受け部が斜め上方に伸び、受け部の端部が丸みをもつ。坏部は、やや浅いものである。(1335~1337.1339.1340)は、外反ぎみにやや内傾する口縁部の端部が内傾する段をもち、横方向に伸びる受け部の端部が丸みをもち、坏部が丸みをもつ。(1341)は、内傾する口縁部の端部がわずかな面をもち、横方向に伸びる受け部の端部が尖りぎみにおわる。やや偏平な坏部である。(1342)は、斜め外方に伸びる口縁部の端部が丸みをもち、坏部との境目に凸帯文を1条施し、やや偏平な坏部である。坏部の外側の調整は、(1332)が回転ヘラケズリ後回転ナデ、(1333)が回転ヘラケズリ状ナデ、(1341)が回転ヘラケズリ後ハケメおよび不整方向のナデ、(1342)が不整方向のナデで、粘土紐の繼ぎ目を残すものである。他は、回転ヘラケズリを施す。坏部内面の調整は、回転ナデを施すものが多く、(1333.1336.1341.1342)が不整方向のナデを施す。(1337)は、「！」、(1340)は「×」、(1335)は「フ」の箇記号を施す。(1334.1338)は、褐色をしたものである。

鉢・塊の類には、把手が付くもの(1344.1348.1351.1352.1357)と、そうでないものがある。(1343)は、底部が欠損し、直立する口縁部の端部がわずかに外反し尖りぎみにおわる。体部の外側下半に不整方向のナデを施す。(1347)は、やや斜め外方に開く口縁部の端部が丸みをもち、半球状の体部に丸底のものである。体部外側の調整は、不整方向のナデを施し、内面の調整は回転ナデを施す。底部内面に不整方向のナデを施す。体部と底部の境目に粘土紐の繼ぎ目を残す。底部外側の相対位置に煤が付着する。(1345.1346.1350)は、短く外反する口縁部の端部が尖りぎみにおわり、偏平な体部をもつもので、(1345.1350)は無文で、(1346)は、体部に波状文・凸線文1条を巡らす。(1350)の底部外側には、ヘラケズリ後不整方向のナデが施され、内面には不整方向のナデが施される。(1349)は、短く外反する口縁部にややふくらむ体部に平底のもので、底側部の外側に不整方向のヘラケズリを施している。(1356)は、鉢底部と思われ、わずかに上げ底ぎみである。底側部の外側に不整方向のヘラケズリを施し、底部外側に不整方向のナデ、底部の内面に放射状ナデを施す。内外面に煤が付着している。(1344)は、外反ぎみに内傾する口縁部の端部が丸みをもち、半球状の体部をもつ。体部に凸線文2条を施す。把手が付くと思われる。(1348)は、口縁部と把手を欠損する平底のもので、体部に波状文・凸線文1条以上を施す。体部下半の外側に不整方向のヘラケズリを施し、底部外側に不整方向のナデを施す。(1351)は、わずかに外反して立ち上がる口縁部に受け部状の段をもち、やや偏平な体部に平底のものである。体部に波状文間凸線文1条を施す。把手は、断面円形で環状のものを上部が体部に押し込んで付けられている。底側部外側に不整方向のヘラケズリを施す。淡褐色をした焼きの甘いものである。(1352)は、把手を欠

7. 中期～後期の遺物

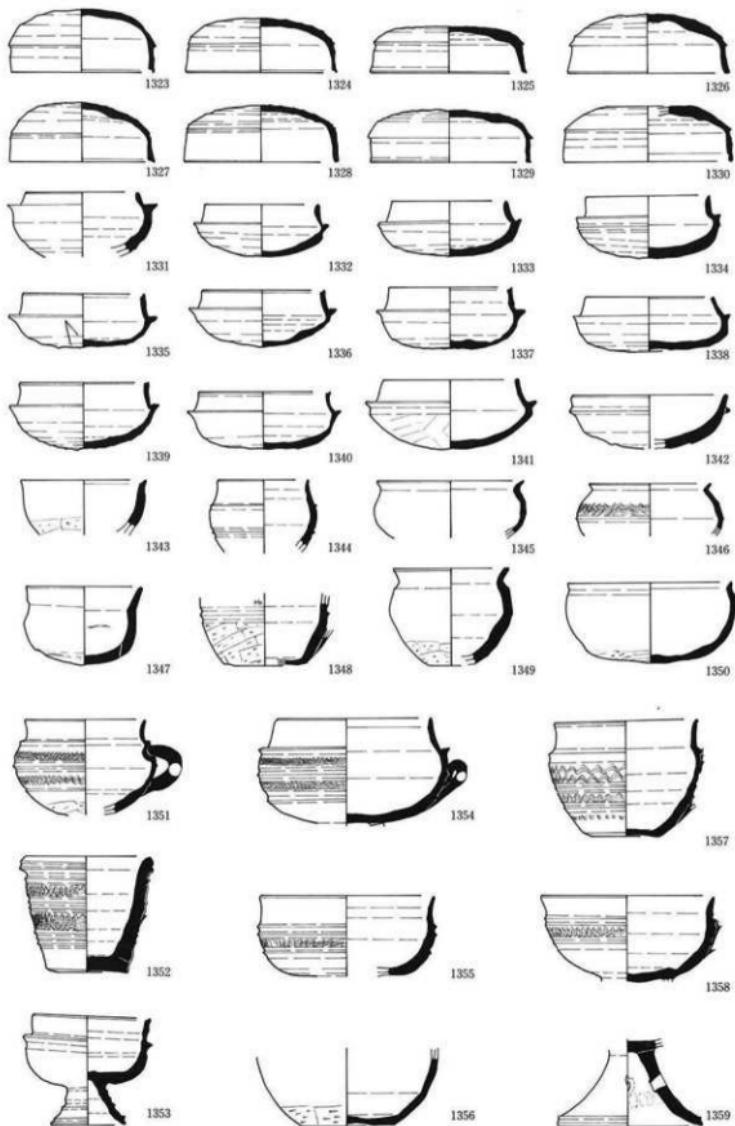


Fig. 255 G地区 河川8下層出土遺物(4)

損する。わずかに聞く口縁部の端部が丸みをもち、口縁部の端部下に凸線文1条を施す。裾すばまりの体部に平底のものである。体部に凸線文・波状文を施す。把手の痕跡があり、口縁部にも窪みがあるため、装飾が付いていたと思われる。底部内外面の調整は、不整方向のナデを施す。(1357)は、やや大型で、把手を欠損する。外反ぎみに直立する口縁部の端部が丸みをもち、受け部状の段を有し、わずかにふくらむ体部にわずかな上げ底のものである。体部に、波状文・凸線文を施す。底側部の外面に不整方向のヘラケズリを施し、底部の外面に不整方向のナデを施す。内外面に自然釉が付着する。

高坏には、有蓋のもの(1354.1371)と、無蓋のものがある。(1354)は、内傾する口縁部の端部内面に凹線文を1条巡らし、受け部はわずかに伸び、その端部が尖りぎみにおわる。やや深い壇状の坏部をもつ。坏部外面に波状文と凸線文を交互に2帯施す。把手は断面円形のものを環状に1個付ける。脚部はほぼ欠損するが、4方に透かしが穿たれる。坏部内面に不整方向のナデを施す。外面に自然釉が付着する。(1371)は、内傾する口縁部の端部が丸みをもち、受け部が横方向に伸び尖りぎみにおわる。やや浅い壇部に、わずかに聞く脚柱部から裾広がりに伸びる脚台部の端部近くに凸線文を1条巡らし、尖りぎみにおわる。脚台部の3方に円形の透かしを穿つ。坏底部の内面に不整方向のナデを施す。

(1353)は小型のもので、わずかに聞く口縁部の端部が内傾する段をもち、受け部状の段をもつ半球状の坏部に、裾広がりの脚台部の端部が凹面をもつ。脚柱部との境目に凸線文を1条巡らす。坏底部の内面に自然釉が付着する。

(1355.1358)は、半球状の坏部に短く外反する口縁部の端部が丸みをもつ。坏部外面に前者は、凸線文2条・波状文・凸線文1条を施し、後者は凸線文2条間波状文1帯を施す。前者の把手の有無は不明である。後者は、双把手が付くと思われる。(1358)は、坏底部内面に同心円文當て具痕後、不整方向のナデを施す。5方に透かしの痕跡がある。(1360.1367)は、皿状の坏部に外反する口縁部の端部が丸みをもつ。裾広がりに聞く脚台部の端部が面をもつ。两者ともに坏部との境目に凸線文を1条施す。後者は、3方に透かしを穿つ。(1361)は、皿状の坏部に直立する口縁部の端部が内傾する面をもつ。坏部との境目に凸線文1条を巡らす。坏部内外面ともに、不整方向のナデを施す。(1362)は、皿状の坏部に屈曲してさらに外反する口縁部の端部が丸みをもつ。表面磨滅のため、調整は不明である。暗褐色をしており、生焼けか土師質のものか不明である。(1363.1364)は、蓋を逆転させた形で、口縁部の端部が、前者が丸みをもち、後者が内傾する段をもつ。(1364)の脚部は、裾広がりに聞き、端部がわずかに立ちあがり凹面をなす。坏部の外面に前者がヘラケズリ状回転ナデ、後者が回転ヘラケズリを施す。(1366)はやや大型で、皿状の坏部に、短く外反する口縁部の端部が尖りぎみにおわる。坏部との境目に凸線文を1条巡らす。(1370)は、皿状の坏部に短く斜め外方に聞く口縁部の端部が丸みをもち、裾広がりの脚台部が凹面をなし、端部内面も凹面をなす。坏底部の内面に不整方向のナデを施す。脚柱部の4方に線状の透かしを穿つ。(1368)は、皿状の坏部に短く外反する口縁部の端部が丸みをもち、裾広がりの脚台部の端部が凹面をもつ。坏部に凸線文・波状文を施す。坏底部の外面に回転ヘラケズリを施す。脚部の3方に透かしを穿つ。

(1359.1372.1373)は、脚部のみが残存していた。(1359)は、裾広がりの脚台部の端部がわずかに上方に拡張し、凹面をもつ。脚部の4方に縦長の梢円形の透かしを穿つ。(1372)は、裾広がりの脚台部の端部および内面が凹面をもつ。脚柱部との境目に凸線文を1条施す。脚部の3方に縦長の梢円形の透かしを穿つ。(1373)は、裾広がりの脚台部の端部が丸みをもち、端部近くと脚柱部との境目に凸線文を1条ずつ巡らす。脚柱部の内面にヘラケズリを施し、坏底部の内面に一方方向のナデを施す。脚部の3方に

7. 中期～後期の遺物

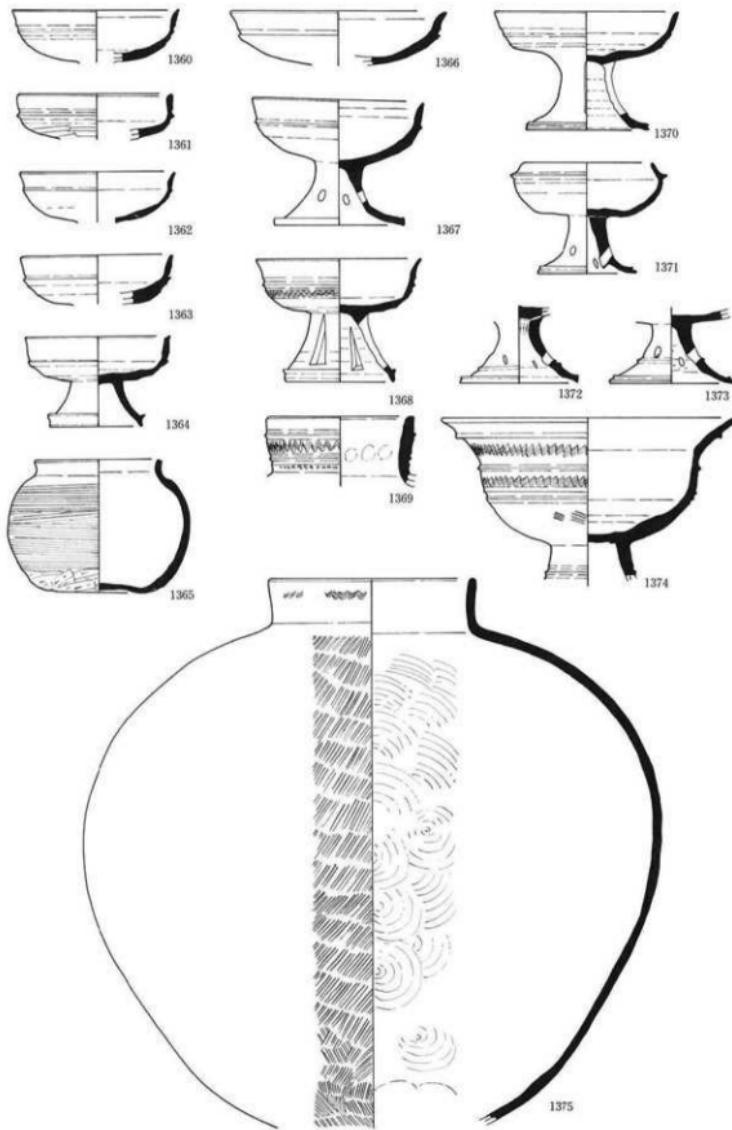


Fig.256 G地区 河川8下層出土遺物(5)

円形の透かしを穿つ。

他に、やや大型の塊形の器台形の高坏がある(1374)。半球状の坏部に、外反する口縁部の端部が丸みをもつ。端部下端に凸線文を1条巡らす。やや裾広がりの脚柱部をもつ。口縁部から坏部にかけて、波状文・凸線文を交互に施す。脚柱部に凸線文1条以上を施す。坏底部の外面に平行叩き目後、回転ナデ、内面に不整方向のナデを施す。0.1~0.4cmの砂粒を多く含むやや焼きの甘い土器である。

壺には、広口壺、二重口縁壺、有蓋壺、直口壺、短頸壺、小型壺がある。

広口壺は、筒状の頸部から外反する口縁部をもつもので、(1389)が口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文1条を施す。球形の体部に丸底のものである。口頸部に波状文と凸線文を交互に施す。体部の調整は、外面に平行叩き目を施し、内面に丁寧なスリケシを施す。(1393)は、口縁部の端部が垂下し凹面をもつ。端部下に凸線文1条、口頸部に波状文間凸線文2条を施す。二重口縁壺は、短い筒状の頸部に外反し屈曲してさらに斜め上方に伸びる口縁部をもつものである。(1394)は、底部を欠損し、口縁部の端部が面をもち、屈曲部に凸線文1条を施す。球形の体部である。体部の調整は、外面に平行叩き目を施し、内面に同心円文當て具痕後半スリケシを施す。底部との境目に粘土紐の織ぎ目を残す。(1403)は大型で、口縁部の端部が尖りぎみにおわり、端部下に凸線文1条、屈曲部に凸線文2条を施す。やや肩の張る体部に丸底のものである。口縁部と頸部に波状文を施す。体部の調整は、外面に丁寧なスリケシが施され、内面に同心円文當て具痕後半スリケシが施される。肩部外面と口頸部、および底部内面に自然釉が付着する。有蓋壺には、口頸部のみが残存しており(1380.1381)、全体形は不明である。(1380)は、内傾する口縁部の端部が丸みをもち、受け部が横方向に伸びその端部が凹面をなす。短い筒状の頸部をもつ。受け部に蓋の痕跡を残す。頸部に波状文を施す。(1381)は、直立する口縁部の端部が丸みをもち、端部内面に凹線文1条を施す。受け部は断面三角形で、短い筒状の頸部をもつ。頸部に波状文を施す。口頸部の内外面に自然釉が付着する。(1379)は、有蓋壺の蓋と思われ、わずかに内傾する口縁部の端部が丸みをもつ。天井部との境目の稜線は断面三角形である。天井部の中央につまみの痕跡を残す。天井部の外面は、自然釉付着のため不明、内面中央部が不整方向のナデを施す。

直口壺の(1382)は、斜め外方へ開く口頸部にやや肩の張る体部をもつ。体部の調整は、内外面ともに回転ナデを施し、内面に指痕圧痕を残す。口頸部に凸線文と波状文を交互に施し、体部に凸線文間波状文を施す。焼け歪みの大きな土器である。短頸壺には、小型と大型のものがあり、その蓋と思われるものがある。(1365)は小型で、短く直立する口縁部の端部がわずかな凹面をもつ。やや偏平な体部にわずかに上げ底ぎみの底部をもつ。体部の調整は、外面に回転カキメ、内面に回転ナデを施す。底部外面に不整方向のナデ、内面に指押さえを残す。底側部の外面は、横方向のヘラケズリを施す。体部との境目に粘土紐の織ぎ目を残す。(1369)は、口頸部破片で、わずかに斜め外方に開く口縁部の端部がわずかな凹面をもつ。口頸部の外面に凸線文と波状文を交互に施すが、下端の波状文はナデのために下半が消されている。(1375)は、底部を欠損する。直立する口頸部の端部が丸みをもち、球形の体部をもつ。口縁部に波状文を施すが、回転ナデによりほぼ消されている。体部の調整は、外面に平行叩き目、内面に同心円文當て具痕後半スリケシを施す。(1376.1377)は短頸壺の蓋で、(1376)は、斜め外方に開く口縁部の端部が内傾する面をもち、天井部はやや丸みをもつ。天井部との境目に凸線文を1条施す。口縁部に波状文・凸線文を施す。つまみは、中央部がふくらみ、その周囲を窪ませる。つまみの端部は、凹面をなす。天井部の外面は回転ナデを施し、内面の中央部に指押さえが残る。(1377)は、天井部の一部のみを残存し、羽状の列点文および凸線文2条を施す。内面に指押さえが残る。小型壺には、筒状の頸部に

7. 中期～後期の遺物

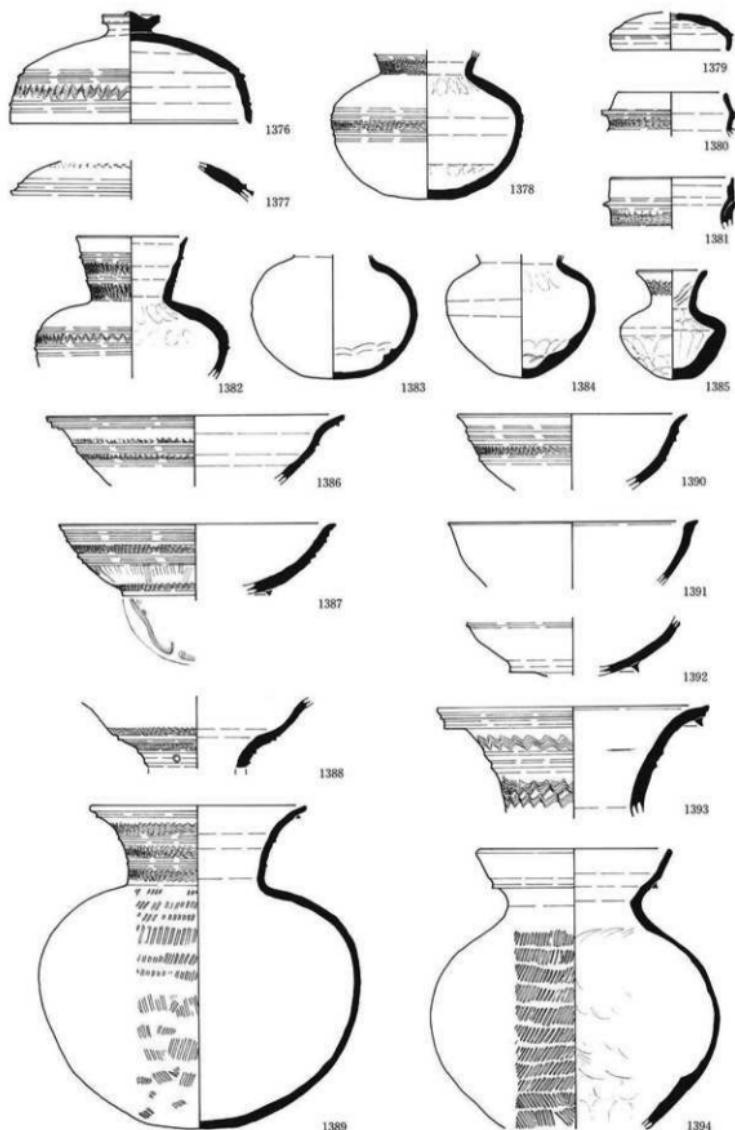


Fig. 257 G地区 河川8下層出土遺物(6)

外反する口縁部の端部が丸みをもち、肩の張る体部に丸底のものがある(1385)。口縁部に波状文を施す。体部の調整は、内外面ともに指ナデおよび指押さえを施す。

その他には、口縁部を欠損する(1378)、体部のみを残存する(1383.1384)がある。(1378)は、短い筒状の頸部に、やや肩の張る体部に丸底のもので、頸部に凸線文、波状文を施し、体部に凸線文間波状文を施す。体部の内面に指頭圧痕および当て具痕を残す。

器台には、小型のものが多く、台部のみが出土している。(1386)は、浅い塊状の台部に短く外反する口縁部の端部が凹面をもち、端部下に凸線文を1条施す。台部に波状文と凸線文を施す。内外面の調整は、回転ナデを施す。(1387.1390~1392)は、浅い塊状の台部から斜め外方に伸びる口縁部の端部が尖りぎみをおわる。(1387.1392)は、台底部との境目に凸線文を1条施す。(1387)は、台部の外面に凸線文2条間波状文・櫛描縦線文と列点文を組み合わせて施す。台底部にも、櫛描文を施すが一部しか残存しておらず、全容は不明である。台部の内面に不整方向のナデを施す。(1390)は凸線文間波状文を施し、(1391)は無文、(1392)は凸線文1条を施す。(1388)は筒形器台で、台底部の外面に波状文と凸線文を交互に施し、脚台部との境目に竹管文・凸線文1条を施す。台部の内面に自然軸が著しく付着する。

龜には、小型で壺形のものがある。(1395)は、口頭部を欠損し、肩が張り偏平な体部に丸底のものである。無文で、肩部に斜め上方から焼成前に穿孔される。(1396)は、口縁部を欠損し、やや偏平な体部に丸底のもので、無文である。(1400~1402.1404.1405)は、二重口縁をもつもので、口縁部の端部が、(1402)が内傾する面をもち、(1404.1405)が丸みをもつ。口縁部の屈曲部に凸線文を巡らすものが多く(1400.1401)が内傾する段をもち、(1405)は凹線文を1条施す。体部は、肩の張るもの(1397.1400.1405)、偏平なもの(1401.1402.1404)等がある。頸部に波状文を施すもの多く、(1405)が回転カキメを施す。体部には、凸線文を施すもの(1402)、波状文・凸線文(1398~1401.1404)、凹線文2条間列点文(1397)等を施すものがある。(1405)は無文である。体部および底部の調整は、内外面ともに上半が回転ナデを施し、下半および底部外面に不整方向のナデを施すものが多い。底部内面は、指押さえおよび不整方向のナデを施す。瓶には、全容の判明するものは出土しておらず、口縁部破片(1408)、底部破片(1409)、把手(1406)がそれぞれ1点ずつある。(1406)の把手は、断面円形の棒状のもので、先端部が籠切りされ平坦面をもつ。切り込みは、下端までぬけ、把手の下部に刺突痕を残す。体部の外面は、平行叩き目後スリケシが施され、内面に回転ナデを施す。(1408)は、短く外反する口縁部の端部が面をもち、端部下に凸線文1条を施す。わずかにふくらむ体部をもつ。体部外面に平行叩き目後、部分的に回転ナデを施しスリケシを行う。内面に同心円文當て具痕後回転ナデによりスリケシを施す。(1409)は、据すばまりの体部に平底のもので、底部に台形の透かしを穿つが小破片のため、個数は不明である。体部の外面に平行叩き目後、部分的に回転ナデによりスリケシを施す。内面に不整方向のナデを施す。淡褐色をした土器である。(1407)は、大型の把手付き鍋と思われる。短く外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を1条施し、ややふくらむ体部をもつ。体部外面に沈線文1条以上を施す。体部外面の調整は、平行叩き目後横方向のナデによるスリケシを施し、内面に回転ナデによるスリケシを施す。

甕には、大型のものが多い。(1410)は口頭部破片で、筒状の頸部に外反する口縁部の端部が丸みをもち、内面が凹面をなす。端部下に凸線文1条を施す。口頭部に波状文と凸線文を交互に施す。(1411)は、筒状の頸部に外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文1条を巡らし、頸部が無文のものである。頸部の内面に指押さえを残す。(1412)は、斜め外方に開く頸部に外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を1条施す。口縁部に、波状文・凸線文を施す。(1413.1414)は、筒状の頸部に

7. 中期～後期の遺物

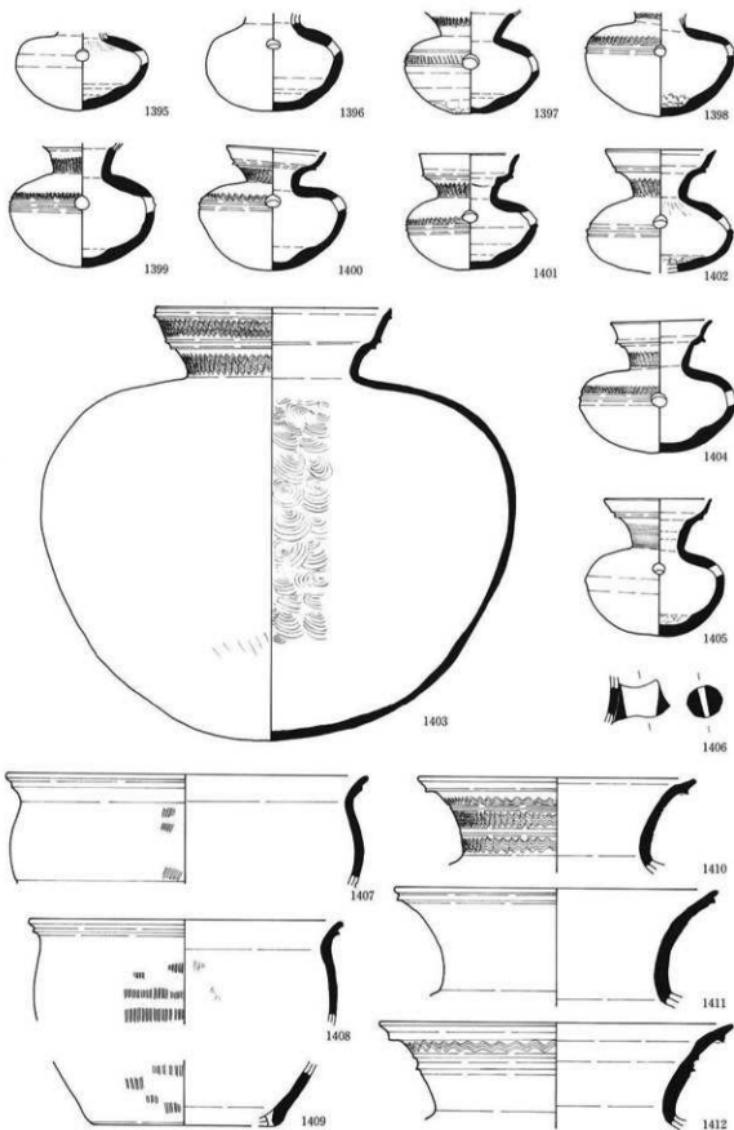


Fig. 258 G地区 河川8下層出土遺物(7)

外反する口縁部の端部が面をもち、端部下に凸線文を1条施し、やや肩の張る体部をもつ。体部の調整は、外面に(1413)が横方向の平行叩き目後スリケシを施し、内面に浅い同心円文當て具痕を残す。淡灰色をしたやや焼きの甘い土器である。(1414)は、筒状の頭部に外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を1条巡らし、卵形の体部に丸底のものである。体部外面の調整は、平行叩き目後半スリケシを施し、内面に同心円文當て具痕後斜めおよび縱方向の指ナデにより半スリケシを施す。(1415)は、斜め上方に開く頭部に外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を1条施す。体部の調整は、外面に平行叩き目後丁寧なスリケシが施され、内面に同心円文當て具痕後スリケシが施される。(1416)は口頸部破片で、筒状の頭部に外反する口縁部の端部が凹面をなし、端部下に凸線文を1条施す。その凸線文上に竹管文をほぼ等間隔で施し、口頸部には、まず、3個1対の円形浮文を弧状に付し、その中心に欠損して定かではないが勾玉状の浮文を付し、その下端に竹管文を1個施す。さらに、凸線文2条間に波状文を施し、竹管文による波状文を施し、凸線文2条間に竹管文を施し、波状文を施す。装飾性に富む要である。(1417)は、完形品である。筒状の頭部に外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を1条施す。やや肩の張る体部に丸底である。口縁部に波状文間凸線文を施す。体部の調整は、内外面ともに丁寧なスリケシが施される。(1418)は、斜め外方に開く口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を1条施す。口縁部に波状文・凸線文2条を施す。(1419)は完形にちかく、体部が焼け歪んでいる。筒状の頭部に外反する口縁部の端部が凹面をなし、端部下に凸線文1条を施す。やや偏平な体部に丸底のものである。口頸部に波状文と凸線文2条を交互に施す。体部外面の調整は、平行叩き目を施し、内面に同心円文當て具痕を残す。底部の内外面ともにスリケシを施す。

他に、完形にちかい(1417)と同様の壺が2点出土している。

Ⅲ その他の遺物 その他の遺物には、木製の案、石製の双孔円板、土管状土製品および埴輪等が出土している。なお、古墳時代前期の土器が若干ある。

木製の案は、天板部が約1/2残存しており、脚部が欠損する。上面は平坦に仕上げられ、下面是周囲を薄く削り出す。脚部を装着するために、断面逆台形のホゾ穴を穿つ(W18)。

石製の双孔円板は、滑石製のもので、不整円形をし、表裏面とも研磨され、側面もおおむね表裏面に対し直交あるいは斜交する方向の研磨によって成形される。両面から貫通する2孔が認められるが、その他に、穿孔時の失敗と思われる非貫通の穿孔痕も認められる(S 353)。

土管状土製品の(1440)は、円管状のもので、一端がやや細く造られ、他端が円周の約1/2位、深さ3.0cmの逆U字状に抉られる。外面にハケメを施し、内面にヘラケズリ状のナデを施す。粘土紐の繋ぎ目を外面に残す。内外面に煤が付着する。

他に、F地区に統くと思われる河川8の下部砂層からは、古墳時代中期の遺物とともに、前期の遺物が出土する。古墳時代中期の遺物には、土師器および須恵器がある。(1459)は、土師器の高坏で、浅い塊状の坏部をもつ。(1446.1447)は須恵器の蓋坏で、内傾する口縁部の端部が内傾する凹面をもつ。(1448)は無蓋の高坏で、塊形の坏部に凸線文・波状文を施す。(1457)は壺の口頸部破片で、筒状の頭部に外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を1条施す。口頸部に波状文間凸線文を施す。(1458)は壺の口頸部破片で、短い筒状の頭部に外反する口縁部の端部が面をもち、端部下に凸線文を1条施す。口頸部に波状文と凸線文を交互に施す。

古墳時代前期の遺物には、広口壺(1460)、長頸壺(1441)、短頸壺(1461)、小型壺(1442)、小型器台(1443~1445)、小型壺(1454)、台付き鉢(1455)、高坏(1456)、壺(1449~1453)等が出土している。

7. 中期～後期の遺物

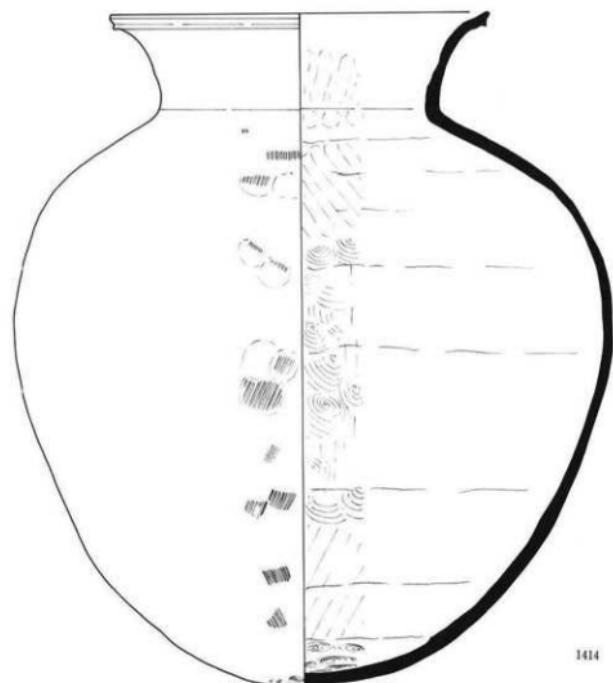
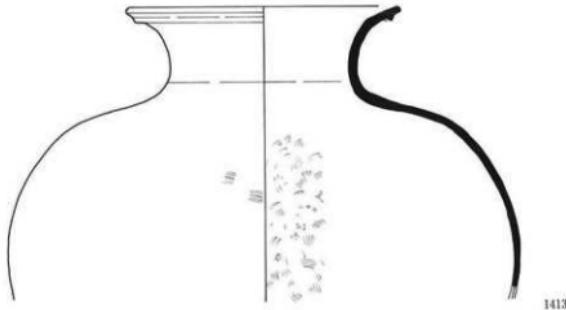


Fig.259 G地区 河川8下層出土遺物(8)

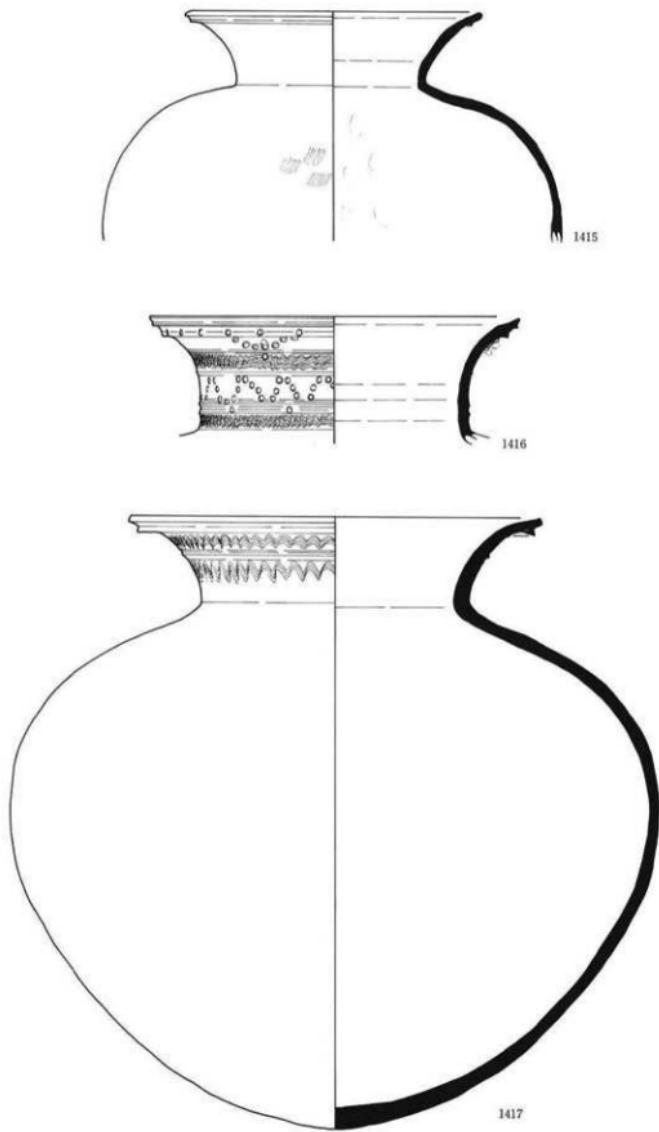
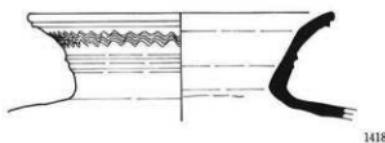
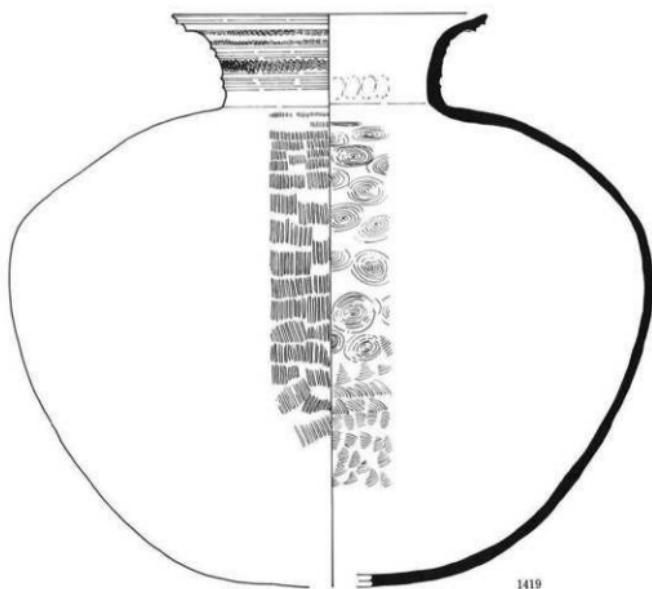


Fig. 260 G地区 河川8下層出土遺物(9)

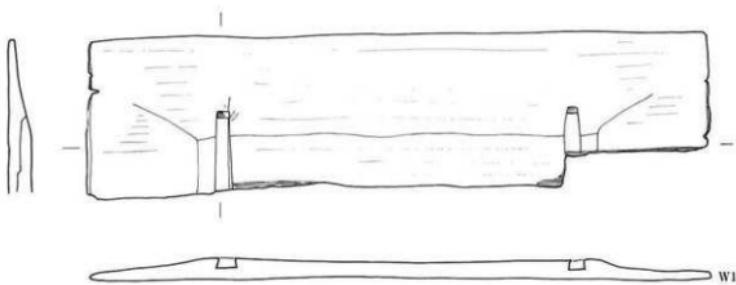
7. 中期～後期の遺物



1418



1419



W18

Fig.261 G地区 河川8下層出土遺物(10)

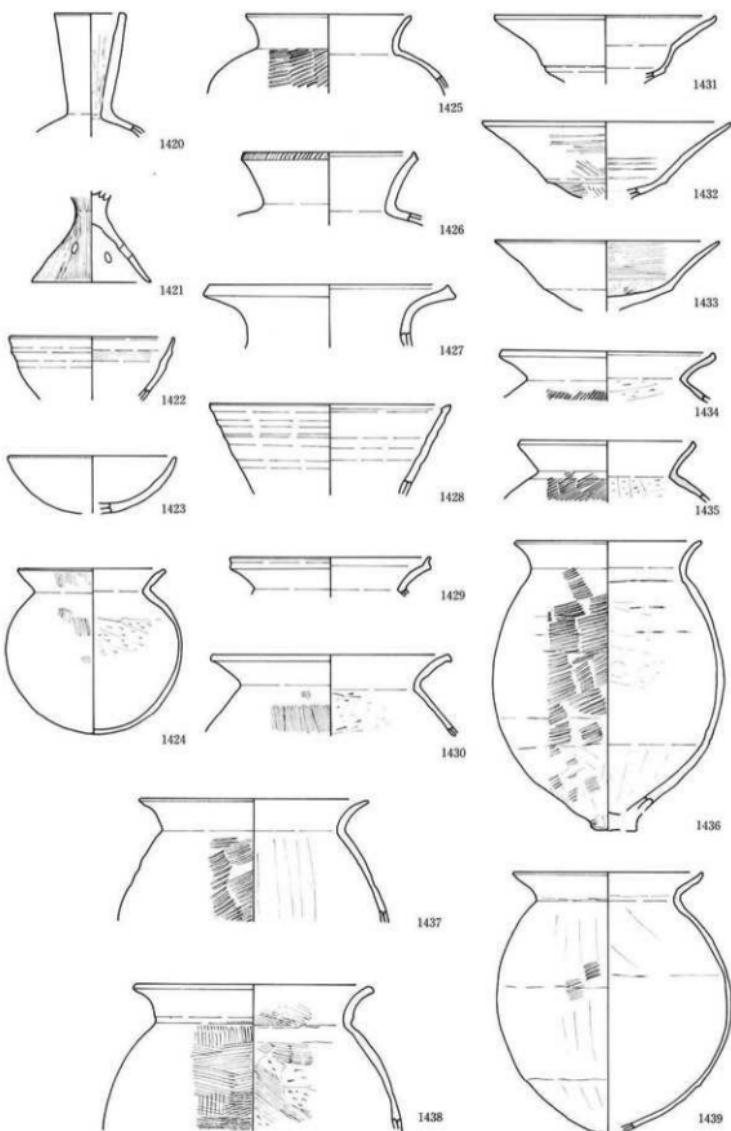


Fig. 262 G地区 河川8下層出土遺物(11)

7. 中期～後期の遺物

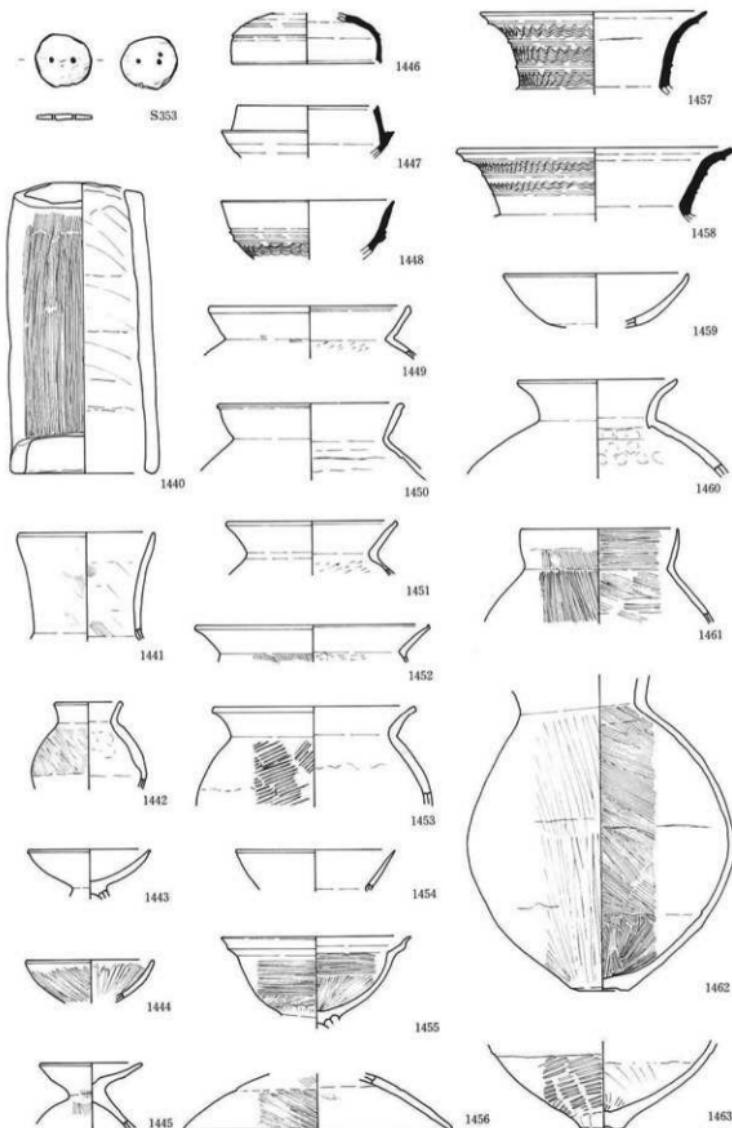


Fig. 263 G地区 河川8下層出土遺物(12) (S 353は縮1/2)

(1462)は、口縁部を欠損するが、やや縦長の体部にわずかに突出する底部の中央部がわずかに窪む。外面にヘラミガキを施し、内面にハケメを施す。(1451.1452)は、角閃石を含む生駒西麓産の甕である。

#### 河川8上層出土遺物 (Fig. 264~273, 276, 277)

河川8上層出土の遺物には、土器がある。土器には、土師器、須恵器等があり、下層出土の土器と同様に古墳時代前期・中期の遺物を多量に含み、後期の遺物が若干出土している。

i 土師器 土師器には、壺・高坏・鉢・甕があり、他に、須恵器の手法をまねた土器の一群がある。

壺には、広口壺、二重口縁壺、直口壺、短頸壺がある。広口壺は底部を欠損し、斜め外方へ開く口頸部の端部が丸みをもち、ややふくらむ体部をもつ。体部の調整は、外面ナデ、内面指ナデを施す。外面に粘土紐の維ぎ目を残し、煤が付着する(1478)。二重口縁壺は、口頸部のみ残存する(1464)。筒状の頸部に外反し屈曲してさらに上方に伸び、口縁端部がわずかに内弯し内傾する面をもつ。口頸部の境目の外面に粘土紐の維ぎ目と指頭圧痕を残す。口縁部外面に組紐文状の波状文を施す。直口壺は、完形品で、斜め外方に開く口頸部の端部が尖りぎみにおわり、偏平な体部に丸底のものである。口頸部内外面に、粗いヘラミガキを施し、体部外面にヘラミガキ、内面に指頭圧痕を残す。底部外面にヘラケズリ、内面にナデを施す。体部下半に焼成後の穿孔がある(1472)。短頸壺は、短い筒状の頸部に、わずかに開く口縁部の端部が丸みをもつ。体部の調整は、外面が表面磨滅のため不明、内面が指頭圧痕および粘土紐の維ぎ目を残す(1465)。

高坏には、口縁部が外反するもの(1466~1468)と、塊状のもの(1473~1475)がある。(1466)が坏部との境目が明瞭な棱をもち、(1467.1468)が不明瞭である。(1466)は内外面ともにナデを施し、(1467)は坏部外面にハケメ、口縁部内外面にナデを施す。(1468)は、口縁部外面ナデ、内面ハケメ、坏部外面ヘラケズリ、内面ナデ、脚部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリを施す。(1473)は、内弯ぎみに伸びる口縁部の端部が内方にわずかに肥厚し上端面をもつ。内外面ともにハケメを施す。(1474)は、皿状の坏部から斜め外方に開く口縁部をもつ。内外面ともにナデを施す。(1475)は、浅い塊状の坏部に斜め外方にやや開く口縁部の端部が面をもつ。やや裾広がりの脚柱部に斜め外方に開く脚台の端部が面をもつ。坏部内面ナデ、外面に指頭圧痕を残す。脚台部外面ナデ、内面に布目圧痕を残す。

鉢には、口縁部が内弯するものがある。(1479.1480)は、内弯する口縁部の端部が内傾する面をもち、浅い塊状の鉢部に丸底のもので、(1479)が外面ハケメ後ナデ、(1480)が指ナデを施し、内面いずれもナデを施す。(1480)は、内外面に丹彩を残す。

甕には、外反する口縁部をもつものと、内弯ぎみに斜め外方に伸びる口縁部をもつもの、二重口縁部をもつものがある。

(1483)は、弥生第V様式系の甕で、わずかに斜め外方に伸びる口縁部の端部が尖りぎみにおわり、ややふくらむ体部に、突出する平底をもつもので、内外面ともに、指頭圧痕および粘土紐の維ぎ目を残す。

(1476.1477.1486)は、やや小型のもので、短く外反する口縁部の端部が丸みをもち、ややふくらむ体部をもつ。体部の調整は、外面いずれもハケメを施し、内面に(1476)がヘラケズリを施し、(1477)が上半ハケメ下半ヘラケズリを施し、(1486)が上端ハケメ、下半ナデを施す。(1470)は、短く外反する口縁部の端部が丸みをもち、やや偏平な体部をもつ。体部の調整は外面ナデ、内面指ナデを施す。(1486)の体部外面に粘土紐の維ぎ目を残す。(1485)は、やや偏平な体部に丸底のもので、体部外面ヘラケズリ状ナデ、内面上半ヘラケズリ、下半ナデを施す。(1498)は、わずかに斜め外方に伸びる口縁部の端部が丸みをもち、やや下ぶくれの体部に丸底のもので、体部の調整が外面にハケメ、内面にハケメおよび指ナ

7. 中期～後期の遺物

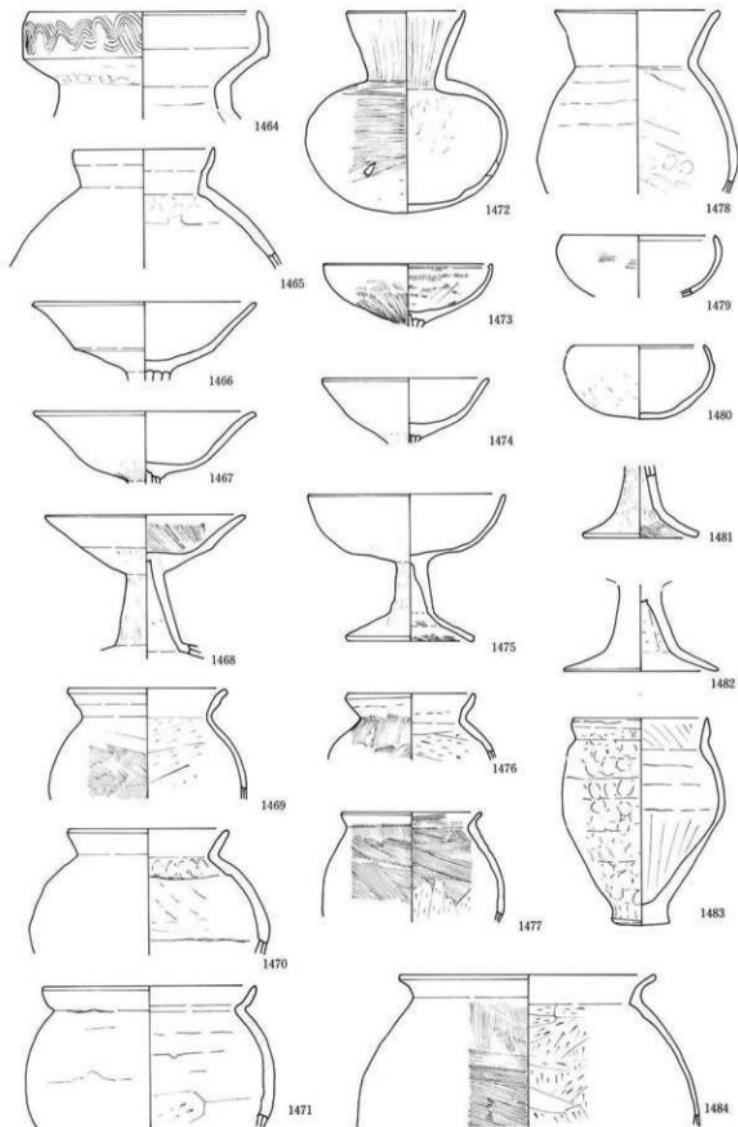


Fig. 264 G地区 河川8上層出土遺物(1)

デを施す。内面に粘土紐の繼ぎ目を残す。

(1484)は、大型で、短く外反する口縁部の端部が丸みをもち、頸部が「く」の字状に屈曲し、内面に明顯な棱を残す。体部の調整は、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。(1492)は、外反する口縁部の端部が丸みをもち、球形の体部に丸底のものである。頸体部の境目に、強いヨコナデが巡る。体部の調整は、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。

(1497)は、斜め外方に開く口縁部の端部が丸みをもち、体部が長胴形のものと思われる。体部の調整は、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。(1502)は、斜め外方に開く口縁部の端部が尖りぎみにおわり、わずかな外端面をもつ。やや下ぶくれの体部に丸底のものである。体部の調整は、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施し、底部内面に指ナデを施す。

(1471)は、短く内弯ぎみに斜め外方に伸びる口縁部に、やや偏平な体部をもつ。体部の調整は、内外面ともにナデを施し、内面下半にヘラケズリを施す。内外面に粘土紐の繼ぎ目を残す。(1470.1471)は器壁の厚いものである。(1487)はやや小型で、内弯ぎみに斜め外方に開く口縁部の端部が丸みをもち、内面端部下に凹面をもつ。やや偏平な体部に丸底のものである。体部の調整は外面にハケメ、内面に上端指ナデ、以下ヘラケズリを施す。(1488.1495)は、内弯ぎみに斜め外方に開く口縁部の端部が内方にわずかに肥厚し、上端面をもつ。体部の調整は外面にナデ、内面にヘラケズリを施す。

(1496.1499~1501)は、内弯ぎみに斜め外方に開く口縁部の端部が内方にわずかに肥厚し、内傾する面をもち、球形の体部をもつ。体部の調整は、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。(1491.1493.1494)は、内弯ぎみに斜め外方に開く口縁部の上端が凹面をもつ。(1489.1490)は、大型の二重口縁型で、短く外反し屈曲してさらに斜め外方に伸びる口縁部をもつ。(1489)の口縁端部は内方にわずかに肥厚し、(1490)は上端面をもち、口縁部に凹線文1条を施す。いずれも外面に煤が付着する。

須恵器の手法をまねた土器の一群には、壺・龜・高杯・甕がある。壺は、短い筒状の頸部に短く外反する口縁部の端部が面をもち、口縁部の内面が凹面をなす(1509)、(1510)は口縁部の端部がわずかに立ち上がり凹面をなす。体部の調整は、前者が外面が表面磨滅のため不明、内面に指頭圧痕を残す。後者が外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。

高杯は、杯部のみ残存し、浅い皿状の杯部に屈曲して外反する口縁部の端部が丸みをもつ。杯底部内面不整方向のナデ、他は回転ナデを施す(1507)。龜は小型のもので、短い筒状の頸部に屈曲して外反し、さらに斜め外方に伸びる口縁部の端部が丸みをもち、やや偏平な体部に丸底のものである。口縁端部に凹線文1条を施し、体部上半に円孔を穿つ。体部の調整は、外面ハケメ、内面上半指ナデ、下半ヘラケズリ状ナデを施す。この土器は、土器師の小型壺に穿孔することにより龜としたものである。

甕には、外反する口縁部をもつものと、内弯ぎみに斜め外方に伸びる口縁部をもつものがある。(1505)は、筒状の頸部に外反する口縁部の端部が面をもつ。体部の調整は、外面平行叩き目、内面同心円文当て具痕後半スリケシを施す。(1506)は、短い筒状の頸部に短く外反する口縁部の端部が丸みをもつ。口縁部下端に凹線文1条を施す。体部の調整は外面平行叩き目、内面同心円文当て具痕後スリケシを施す。(1512)は、大型で短い筒状の頸部に短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をなし、体部が張る。口縁端部に凹線文1条を施す。体部の調整は、外面平行叩き目、内面同心円文当て具痕後スリケシを施す。(1511)は、短く外反する口縁部の端部が凹面をもち、ややふくらむ体部をもつ。体部の調整は、外面繩蓆文叩き目、内面に薄い同心円文当て具痕を施す。外面に煤が付着する。(1503.1504)は、内弯ぎみに斜め上方に伸びる口縁部の端部が、前者は丸みをもち、後者は凹面をもつ。体部はやや

7. 中期～後期の遺物

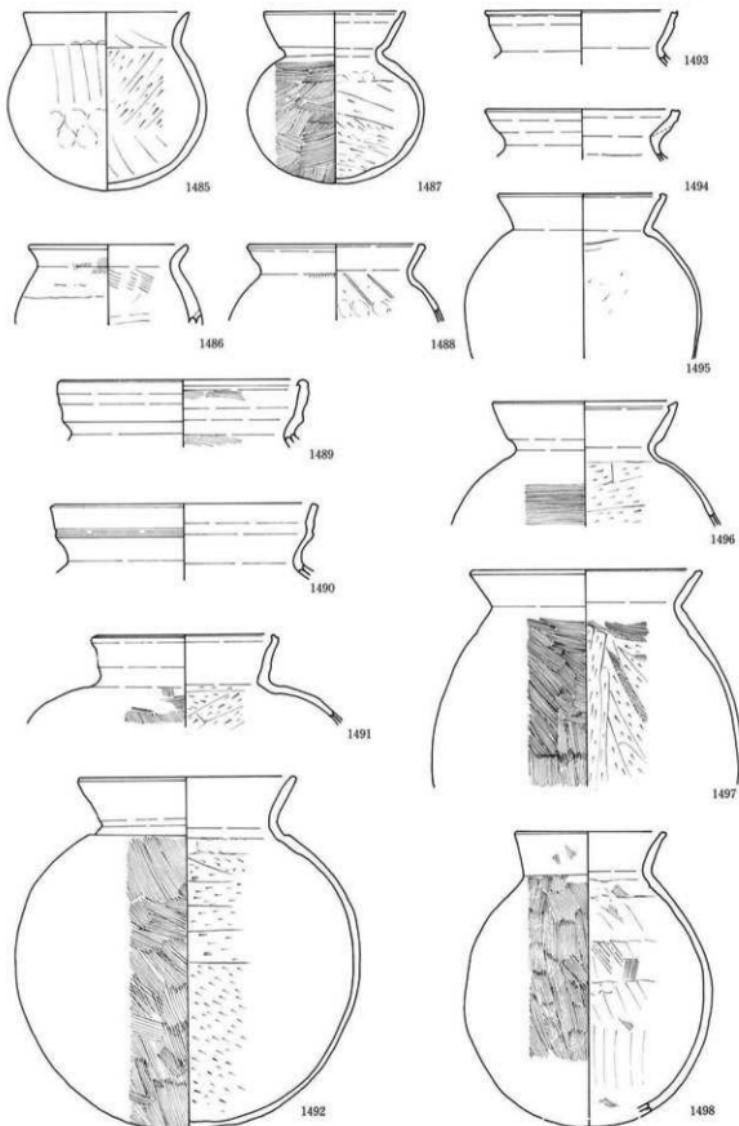


Fig. 265 G地区 河川8上層出土遺物(2)

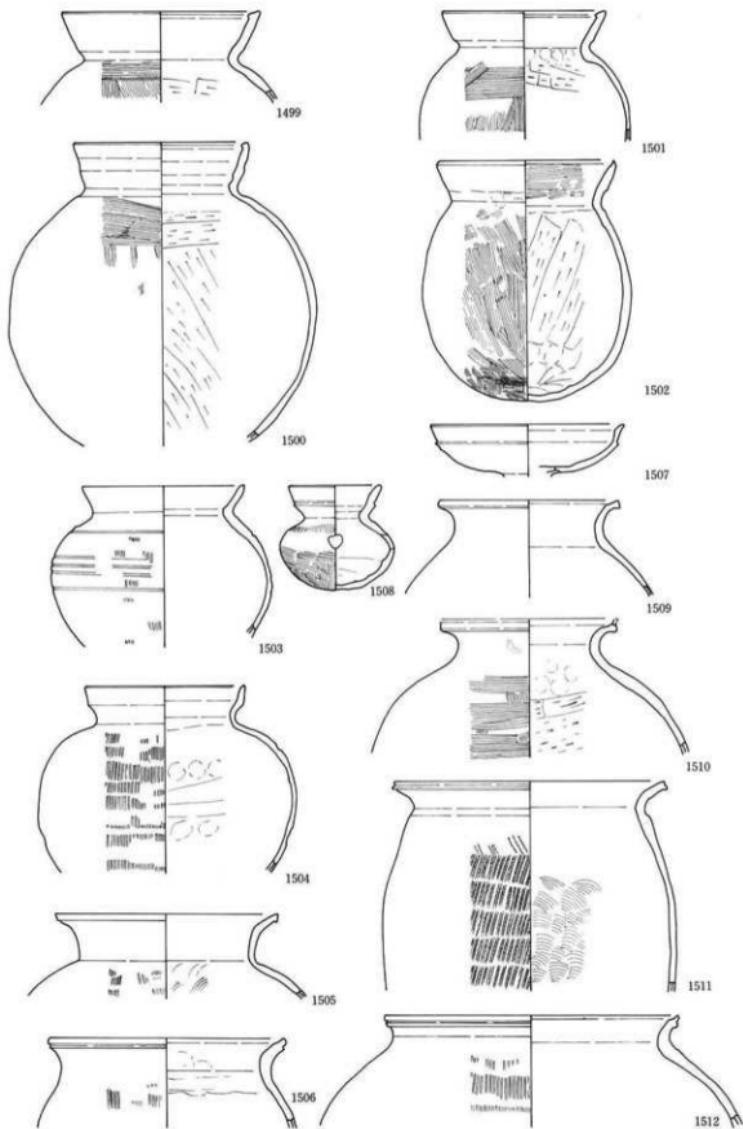


Fig. 266 G地区 河川8上層出土遺物(3)

## 7. 中期～後期の遺物

偏平な球形で丸底と思われる。体部の調整は、前者が外面平行叩き目後半スリケシを施した後、体部上半に沈線文を不連続に5条施す。後者は、外面平行叩き目後、部分的にスリケシを施し、内面同心円文當て具痕後スリケシを施す。(1503)は二次焼成を受け桃褐色である。

ii 須恵器 須恵器には、蓋坏、高坏、鉢・壺、瓶、扈、提瓶、器台、横瓶、壺、甕等がある。

蓋坏の蓋には、口径12cm前後のやや小型で、垂下する口縁部の端部が内傾する段をもち、天井部との境目の稜線が断面三角形をし、天井部が丸みをもつもの(1513～1515.1517～1519)、口径13cm前後でやや斜め外方に開く口縁部の端部は、(1516)が内傾する面、(1520)が平坦面をもち、天井部との境目の稜線が断面三角形で、天井部が偏平なもの、口径14～15cmで、やや斜め外方に開く口縁部の端部が内傾する段をもち、天井部の境目の稜線が鈍いもの(1529.1530)か、凹線文を施すもの(1531.1532)があり、天井部がやや偏平なものである。(1516.1520)の天井部内面は不整方向のナデが施される。

坏身には口径10cmの小型のもの(1521～1528)と、口径13～14cmのやや大型のもの(1533～1537)がある。前者は、やや内傾して立ち上がる口縁部の端部が、(1528)が内傾する面をもつ以外は、内傾する段をもち、受部はわずかに斜め上方につまみ出される。坏底部は丸みをもつ。(1523.1525)の坏底部内面には、不整方向のナデが施され、(1526)の坏底部内面には、同心円文當て具痕が残る。(1521.1524.1527)の坏部外面には、ヘラ記号が施される。後者は、斜め内方へ伸びる口縁部の端部が(1533.1537)が内傾する段を、他が丸みをもつ。坏底部内面に(1534)は一方方向のナデを施し、(1536.1537)は同心円文當て具痕を残す。

高坏には、有蓋と無蓋のものがあり、その蓋もある。有蓋の高坏は脚台部を欠損する(1540)。斜め内方に伸びる口縁部の端部が内傾する段をもち、横方向に伸びる受け部の端部が丸みをもち、浅い塊状の坏部に裾広がりの脚柱部をもつ。坏底部外面に回転カキメを施す。脚柱部の4方に円孔を穿つ。受け部に蓋の溶着痕が残る。

(1538)は、つまみ部を欠損する蓋で、斜め外方に開く口縁部の端部が丸みをもち、天井部との境目の稜線が鋭く、天井部は偏平である。天井部外面に回転カキメを施し、内面に不整方向のナデを施す。

無蓋のものには、浅い坏部に外反する口縁部をもつ(1542.1545)と、塊形の坏部に外反する口縁部をもち、把手を付けるもの(1539.1543.1546)、塊形の坏部に直口の口縁部をもつもの(1544)等がある。(1542)は、口縁端部が尖りぎみにおわり、坏部との境目に凸線文1条巡らす。(1545)は、口縁端部が丸みをもち、坏部との境目の稜線が明瞭である。坏底部外面回転ナデを施す。把手付きの高坏は、坏部外面に凸線文と波状文を施し、1方ないしは2方に把手を付ける。(1543)の口縁端部は丸みをもち、(1546)の端部が丸みをもじ内面端部下に凹面をもち、(1539)の端部は内傾する段をもつ。いずれも、脚部は欠損するが、(1539.1546)は3方に透かしが穿たれる。(1544)の口縁端部はわずかな凹面をもち、坏部との境目に凸線文1条を施す。裾広がりの脚柱からさらに開く脚台部の端部が凹面をもつ。脚部の3方に円孔を穿つ。坏底部内面不整方向のナデを施し、坏部外面回転ナデを施す。脚柱部外面に指頭圧痕、脚台部内外面に回転ナデを施す。

その他に脚部のみのものがあり、(1548～1550)は、脚台端部が尖りぎみにおわり、端部近くに凸線文1条を巡らす。(1550)は脚柱部との境目に凸線文1条を施す。(1548.1550)は、脚柱部の3方に円孔を穿つ。(1547)は裾広がりに開く脚台部の端部が面をもち、脚柱部との境目に凸線文1条巡らす。(1541)は、裾広がりの脚柱部に屈曲してさらに斜め外方へ開く脚台部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。脚柱部の3方に円孔を穿つ。

鉢・塊の類には、直口のもの(1559.1560)、わずかに外反するもの(1555.1556.1558)、把手付きのもの(1557.1561)、台付のもの(1562.1563)、すり鉢(1564)等がある。(1559)は、コップ形の小型のもので、端部が丸みをもち、平底のもので、内外面回転ナデを施す。(1560)は、端部が丸みをもち、坏部との境目に凹線文1条を施す。

(1555)は、短く外反する口縁部の端部が丸みをもつ。(1556)は、浅い塊状の坏部に、やや斜め外方に伸びる口縁部の端部がわずかにつまみ出され、内傾する面をもつ。(1558)は、わずかに内傾する口縁部の端部がわずかにつまみ出され内傾する面をもち、塊状の鉢部をもつ。坏部との境目に凹線文1条を施す。鉢底部外面ヘラケズリを施し、内面に不整方向のナデを施す。

(1557)は、把手を欠損し、口縁端部がわずかにつまみ出され尖りぎみにおわる。わずかに上げ底ぎみの底部に焼成後の穿孔が見られる。鉢部に凸線文間波状文を施す。わずかに残った把手の痕跡から断面長方形であることがわかる。(1561)は、わずかに内傾する口縁部の端部が丸みをもち、塊形の鉢部をもつ。鉢部との境目に段を有し凸線文と波状文を交互に施す。把手が付くと思われる。

(1562.1563)は、内傾する口縁端部が丸みをもち、塊形の鉢部に脚台が付く。(1562)は、鉢底部外面静止ヘラケズリを施し、(1563)は回転ヘラケズリを施す。なお脚部の3方に円孔を穿つ。(1562)は淡灰色の生焼けである。

(1564)は、すり鉢の底部破片で、底側部が横方向に突出し凹面をなし、平底である。底部外面静止ヘラケズリを施す。

他に、婧壺形の縦長なもの(1565)と、平面隅丸長方形・断面U字状の鉢がある。(1565)は、直口の口縁部の端部がわずかにつまみ出され内傾する面をもち、わずかに下ぶくれの体部をもつ。口縁部近くに円孔を1個穿つ。外面回転ナデを施し、内面ナデを施す。(1566)は、直口のもので上端面をもつ。3室に区切られる。底部外面静止ヘラケズリを施し、鉢部外面カキメおよびナデを施す。

頃には、外反する口縁部をもつものがあり、(1553)が端部面をもち、(1552)が端部凹面をもち、(1554)は端部丸みをもち、端部下に凸線文1条を施す。わずかにふくらむ体部に平底のもので、器高より口径が大である。(1552.1554)は体部上半に凸線文および波状文を施し、(1553)は沈線文2条を施す。体部の調整は、(1552.1553)が外側平行叩き目、(1554)が平行叩き目後スリケシを施し、内面はいずれも同心円文当て具痕後スリケシを施す。把手は、断面不整円形の棒状で、(1554)は先端部を箇切りする。いずれも切り込みを入れる。(1554)の底部は、中心に円孔を穿ち、周囲に台形の透かしを6ヶ所穿つ。

(1551)は、大型の鍋と思われ、短く外反する口縁部の端部が面をもち、端部下に凸線文を1条施す。ややふくらむ体部をもつ。体部に把手の痕跡がある。

龜には、樽形龜と壺形龜がある。樽形龜は、口頭部が欠損する(1569)と、完形品の(1570)がある。(1569)は、焼け歪みが大で、体部に凸線文2・波状文2・凸線文1・波状文2・凸線文2条を施す。(1570)は、短い筒状の頭部に外反し、屈曲してさらに外反する口縁部の端部が内傾する面をもち、樽形の体部をもつ。体部中央に凸線文2条毎間波状文1帯を施す。

壺形龜には大型と小型がある。大型のものは完形品である(1578)。筒状の頭部に外反し屈曲して、さらに斜め外方に伸びる口縁部の端部が丸みをもち内面端部下に凹面をなす。やや肩の張る体部に丸底のものである。口縁部の屈曲部に凸線文1条を施し、凸線端部は凹面をもつ。頭部に波状文、体部に浅い凹線文2条間波状文を施す。体部の調整は、外面上半回転ナデ、下半平行叩き目を残す。内上面上端しばり目を残し、以下同心円文当て具痕後回転ナデを施す。底部内面に同心円文当て具痕を残す。小型のも

7. 中期～後期の遺物

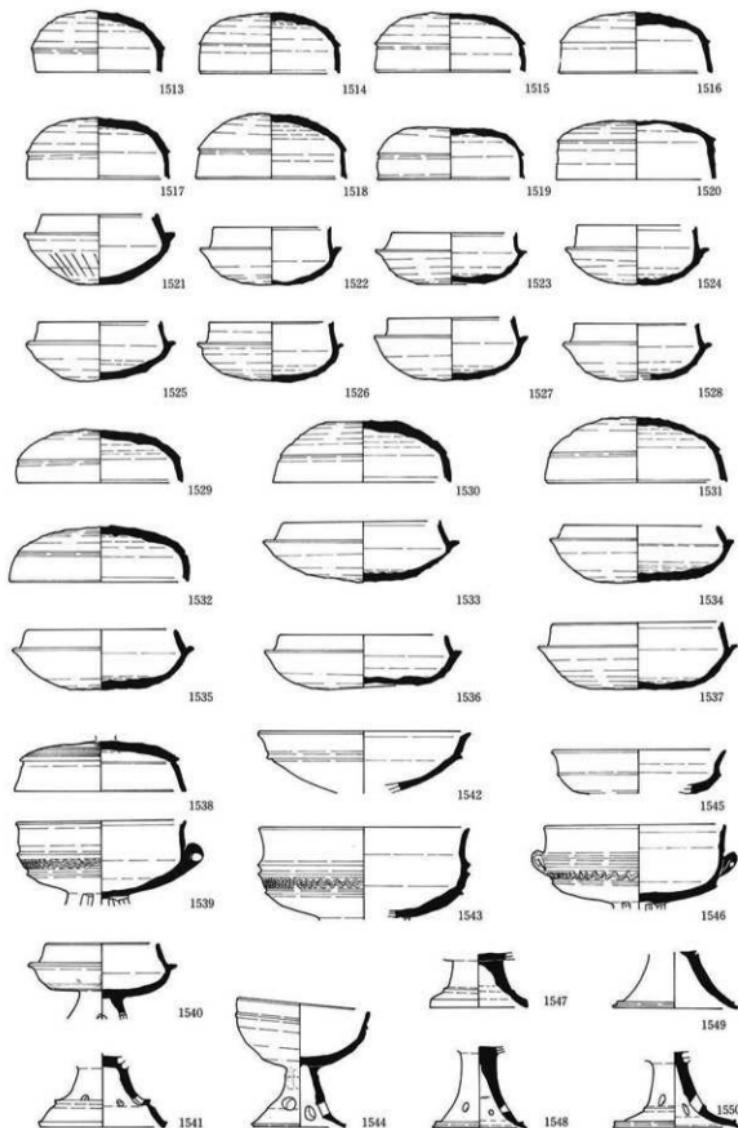


Fig. 267 G地区 河川8上層出土遺物(4)

のには、口縁端部が丸みをもつ(1573.1576)、内傾する面をもつ(1577)、内傾する段をもつ(1572.1575)があり、体部肩のやや張るもの(1572.1575.1577)と、偏平なもの(1573.1576)、肩が張るもの(1574)等がある。(1572.1574.1576.1577)の底部内面に當て具痕を残す。(1572.1575)は無文で、(1573.1576.1577)は、頸部に波状文、体部に波状文・凸線文を施す。(1574)は、頸部に波状文、体部に凹線文・列点文を施す。(1567)は口頸部破片である。筒状の頸部に外反し屈曲してさらに外反する口縁部の端部が尖りぎみにおわり、口縁部下と屈曲部、その上部に凸線文を施し、口縁部に波状文を施す。(1568)は、ミニアチュアのもので口縁部を欠損する。肩の張る体部に平底をもつもので、頸体部外面に回転カキメを施し、体部下半および底部外面に静止ヘラケズリを施す。

提瓶は、完形で1点のみ出土している(1571)。斜め外方に開く口頸部に、背が平坦面をもち、腹が半球状の体部をもつ。体側部上端に半環状の把手を付ける。体部外面回転カキメを施す。頸部に銘記号を施す。

器台には、小型(1581.1582)、中型(1580)、大型(1579)のものがあるが、いずれも破片で全体像がわかるものはない。(1581.1582)は、浅い壺状の台部に、斜め外方に開く口縁部の端部がわずかに外反し尖りぎみにおわる。台部に(1581)は凸線文、(1582)は凸線文・波状文を施す。(1580)は、壺状の台部に外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を施す。台部に凸線文間波状文を施す。内面に自然釉を残す。(1579)は、壺状の台部に外反する口縁部の端部が凹面をもち、端部下に凸線文を巡らす。台部に波状文・凸線文を施す淡褐色をしたものである。(1585.1586)は、脚台部のみのもので、裾広がりに開く脚台部の端部が丸みをもつ。前者は凸線文2条毎回は無文で、下段に三角形の透かし、それ以上に長方形の透かしを交互に穿つ。後者は凸線文2条間薄い波状文2帯を施し、長方形の透かしを1列に穿つ。

横瓶は、1点のみ完形で出土している(1589)。短い筒状の頸部に、短く外反する口縁部の端部がわずかに上下に拡張し面をもち、俵形の体部をもつ。口縁部に凹線文1条を施す。体部の調整は、外面平行叩き目後回転カキメ、内面同心円文當て具痕を残す。淡灰褐色をした生焼けのものである。

壺には、広口壺、直口壺、短頸壺、二重口縁壺、小型壺がある。広口壺は、筒状の頸部に外反する口縁部の端部が尖りぎみにおわり、端部下に凸線文を施す(1583)が、口頸部に凸線文と波状文を交互に施す。(1599)は、筒状の頸部に外反する口縁部の端部がわずかに垂下し凹面をもち、やや偏平の体部に丸底で、口頸部の波状文間に凸線文を施す。体部の調整は、外面に平行叩き目、内面に同心円文當て具痕後スリケシを施す。(1584)は、筒状の頸部に斜め外方に開く口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を施す。口頸部に波状文間凸線文を施す。(1590)は、筒状の頸部に外反する口縁部の端部がわずかに上・下に拡張し、上・下に凹面をもつ。口頸部に波状文間凸線文を施す。(1587)は、筒状の頸部に外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をなし、肩の張る体部に丸底をもつ。口頸部・体部外面回転カキメ、底部平行叩き目を施し、体部回転ナデを施す。焼成時のヒビ割れ、焼け歪みがある。(1591)は筒状の頸部に外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をなし、端部下に凸線文を施す。(1593)は長頸壺で、斜め外方に伸びる口頸部の端部が丸みをもち、やや肩の張る体部に丸底のものである。頸部に凸線文間波状文を施す。体部の調整は外面不整方向のカキメ、内面回転ナデを施す。(1588)は短頸壺で、短く立ち上がる口頸部の端部が内傾する凹面をもち、肩の張る体部に丸底のものである。体部の調整は、外面平行叩き目後回転カキメ、底部外面平行叩き目、内面回転ナデを施す。底部外面に溶着痕がある。

## 7. 中期～後期の遺物

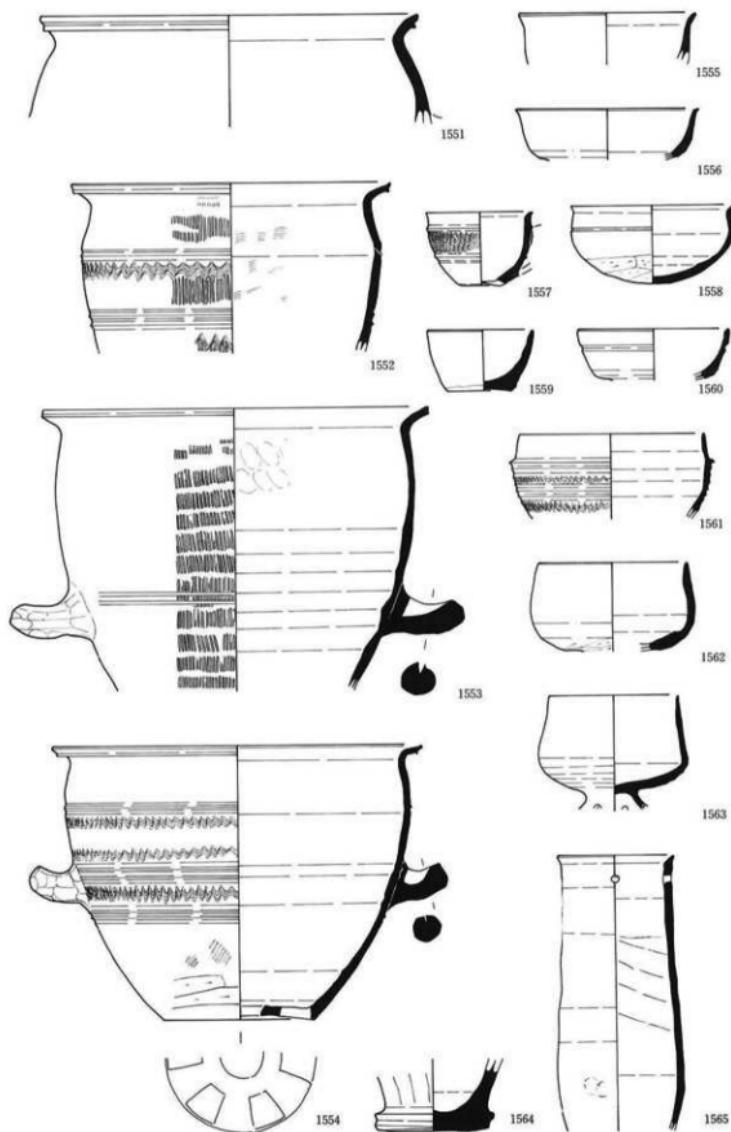


Fig. 268 G地区 河川8上層出土遺物(5)

(1598)は二重口縁壺で、底部を欠損する。筒状の頸部に外反し屈曲して、さらに外反する口縁部の端部が面をもち、肩の張る体部をもつ。口頸部間に波状文間凸線文を施す。体部の調整は、外面に平行叩き目後部分的に回転ナデ、内面に同心円文當て具痕後スリケシを施す。淡褐色をした土器である。

(1594)は小型壺で、短い筒状の頸部に短く外反する口縁部の端部がわずかに垂下し面をもち、偏平な体部と平底のものである。体部の調整は、外面上半回転ナデ、下半回転ヘラケズリを施し、内面回転ナデを施す。

(1607)は、口頸部を欠損するもので、やや肩部の張る丸底のものである。体部内外面に回転ナデを施す。灰白色の焼きの甘いものである。

壺には、短く外反する口縁部をもつ(1592.1596.1597)と、大きく外反する口縁部をもつ(1595.1600～1604.1605.1606.1608)がある。(1592)は、短く外反する口縁部の端部が凹面をもつ。体部の調整は、外面平行叩き目、内面に同心円文當て具痕を残す。(1596.1597)は大型で、短く外反する口縁部の端部が凹面をもち、前者が張る体部をもち後者がややふくらむ体部をもつ。いずれも、体部外面、平行叩き目後回転カキメを施し、内面同心円文當て具痕後スリケシを施す。

(1600)は筒状の頸部に外反する口縁部の端部が尖りぎみにおわり、端部下に凸線文を施す。口頸部に波状文・凸線文を施す。(1595)は、筒状の頸部に外反する口縁部の端部が面をもつ。体部外面、平行叩き目後スリケシ、内面同心円文當て具痕後スリケシを施す。(1603.1604.1608)は、筒状の頸部に外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文1条を施し、口頸部に波状文間凸線文を施す。(1608)は、肩の張る体部に丸底のものである。体部の調整は、(1604)が外面平行叩き目後スリケシ、内面同心円文當て具痕後スリケシを施し、(1608)が外面平行叩き目後部分的に回転ナデ、内面同心円文當て具痕を残す。(1601.1602.1606)は、筒状の頸部に外反する口縁部の端部が面をもち、端部下に凸線文1条を施す。口頸部に(1602)は波状文と凸線文を交互に施し、(1606)は凸線文を施す。体部の調整は、いずれも外面平行叩き目、内面同心円文當て具痕後スリケシを施す。(1605)は、大型のもので、筒状の頸部に外反する口頸部の端部が凹面をもち、端部下に凸線文1条を施す。口頸部に凸線文と波状文を交互に施す。

Ⅲ その他の遺物 その他の遺物には、古墳時代前期の土器がある。壺・鉢・高坏・壺等がある。

壺には、広口壺、二重口縁壺、直口壺がある。(1610.1611)は、筒状の頸部に外反する口縁部の端部が上・下にわずかに拡張し面をもつ。(1612)は短い筒状の頸部に外反する口縁部の端部が面をもつ。いずれも無文のものである。二重口縁壺は、(1609)が口縁垂下部を欠損し、(1613)が口縁部を欠損する。(1609)は口縁部の内面に波状文を施し、頸体部の境目の凸線上に刻み目を施す。(1613)は頸部に波状文を施す生駒西麓産の土器である。直口壺の(1625.1626)は、斜め外方に開く口頸部の端部が丸みをもつ。(1626)は口頸部外面ハケメを施し、粘土紐の離ぎ目を残す。

鉢には、弥生第V様式系の突出した底部をもつもの(1614.1615)、直口の塊形のもの(1627～1629)、二重口縁をもち塊形のもの(1620)、短く外反する口縁をもつもの(1621)がある。(1615)は底部中央が穿孔される。(1620)は内面丁寧なヘラミガキを施す。

(1619)は、小型の壺で、内窓ぎみに斜め外方に伸びる口縁部の端部が尖りぎみにおわる。

高坏には、坏部が塊形のもの(1630.1624.1632.1633)と、外反する口縁部をもつ(1623.1631)がある。(1630)は、内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。

壺には、弥生第V様式系の粗い叩き目を施す(1616)、内窓ぎみに斜め外方に伸びる口縁部をもつ(1617.1618)がある。

7. 中期～後期の遺物

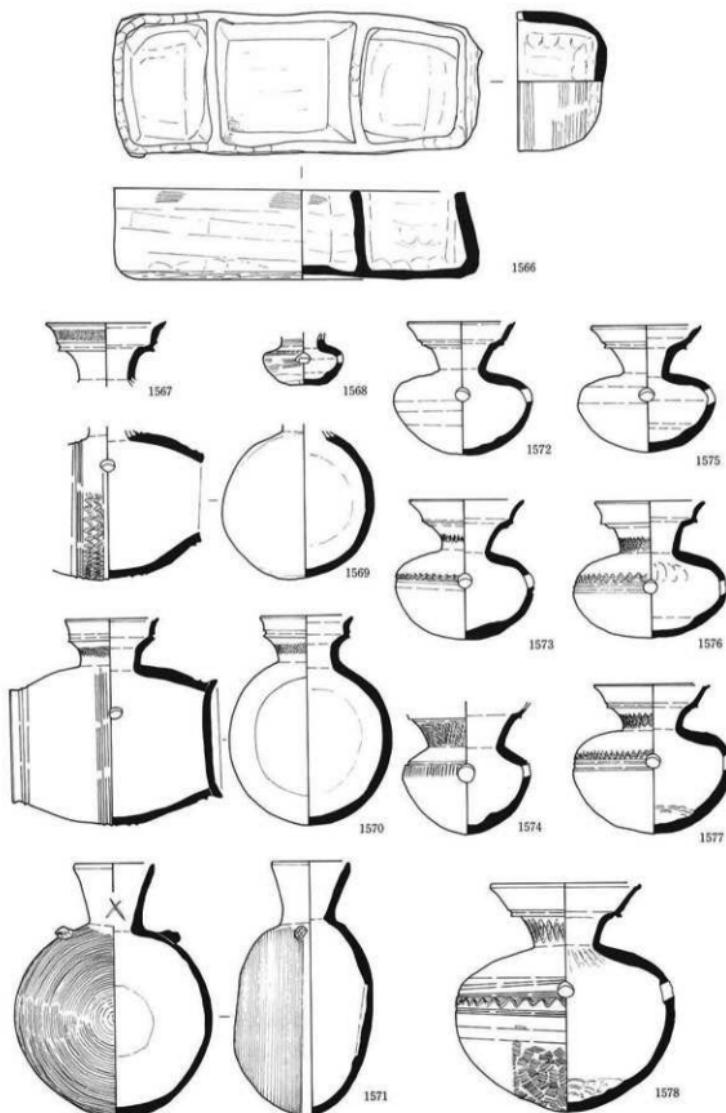


Fig. 269 G地区 河川8上層出土遺物(6)

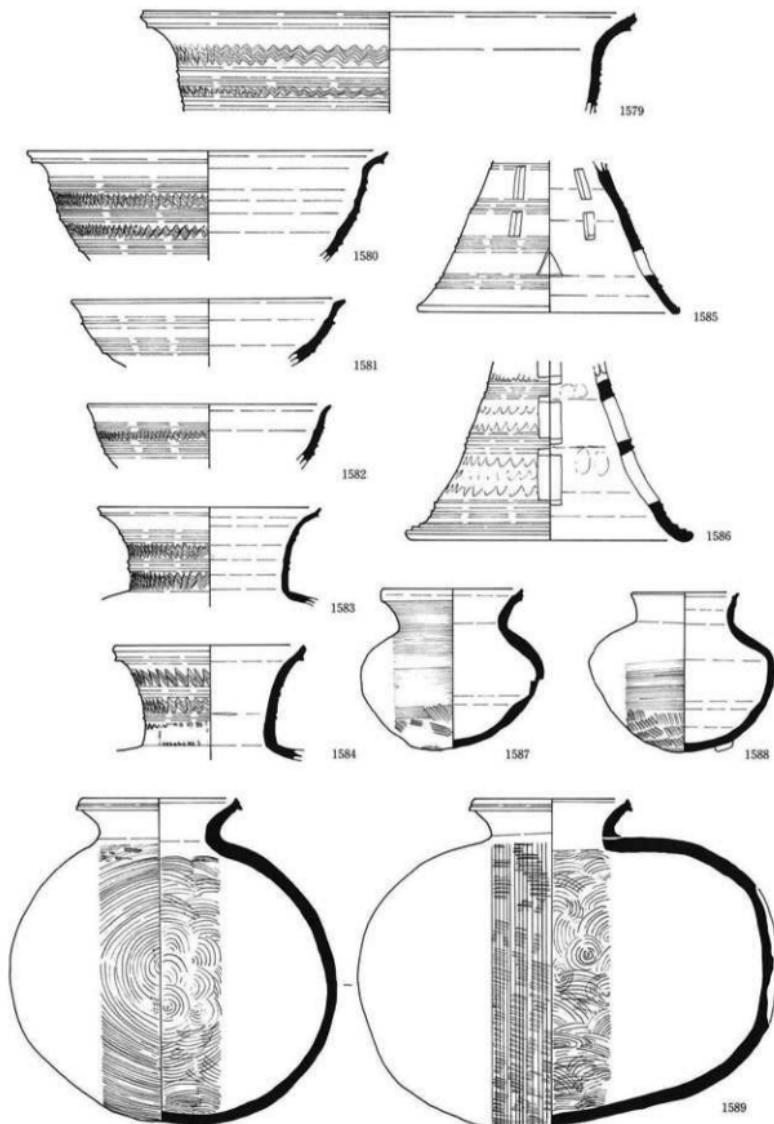


Fig. 270 G地区 河川8上層出土遺物(7)

7. 中期～後期の遺物

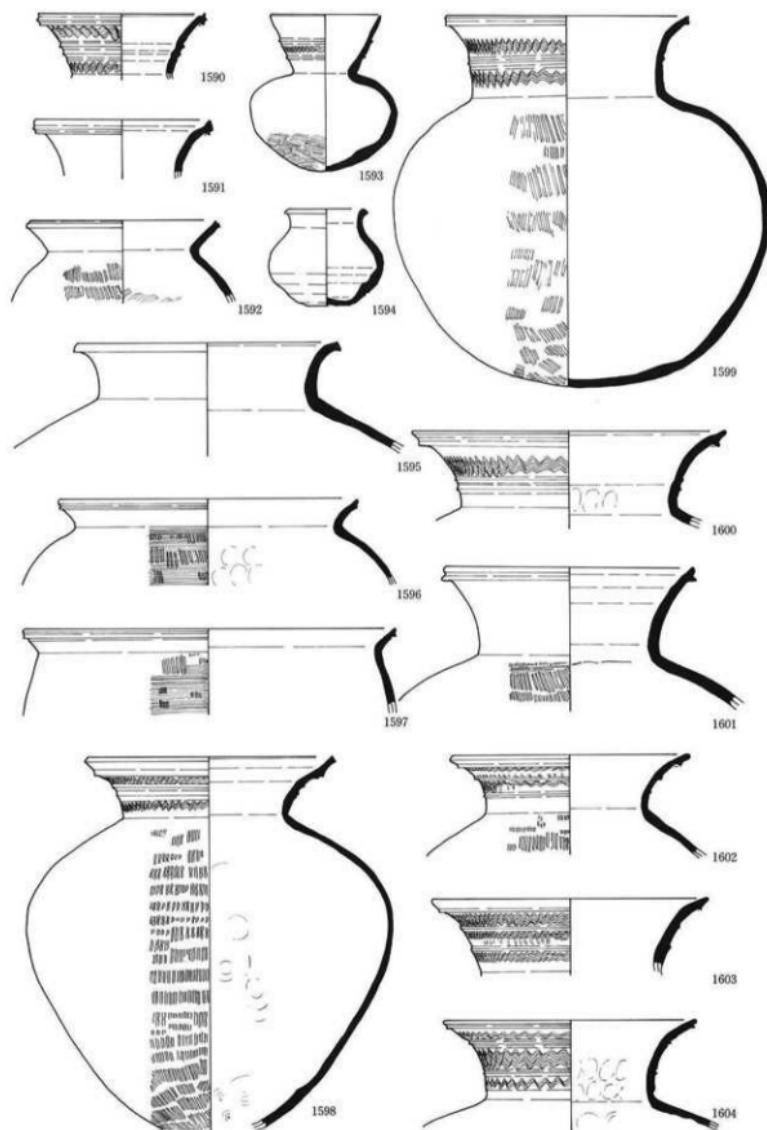


Fig. 271 G地区 河川8上層出土遺物(8)

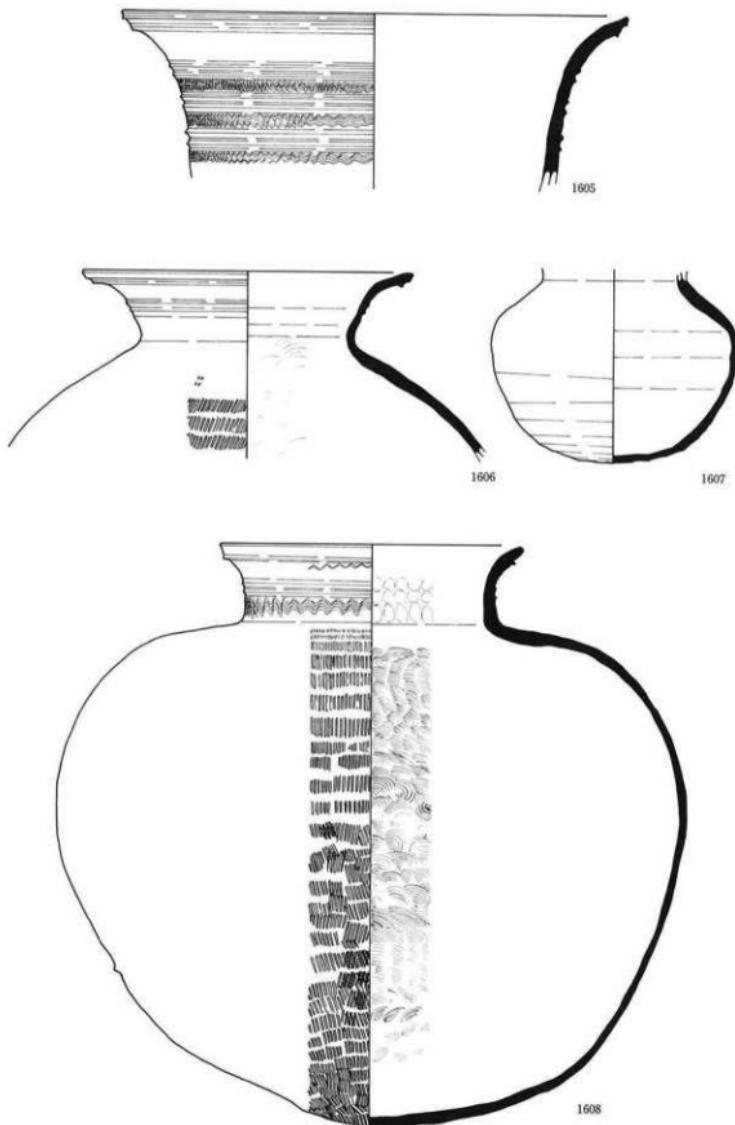


Fig. 272 G地区 河川8上層出土遺物(9)

7. 中期～後期の遺物

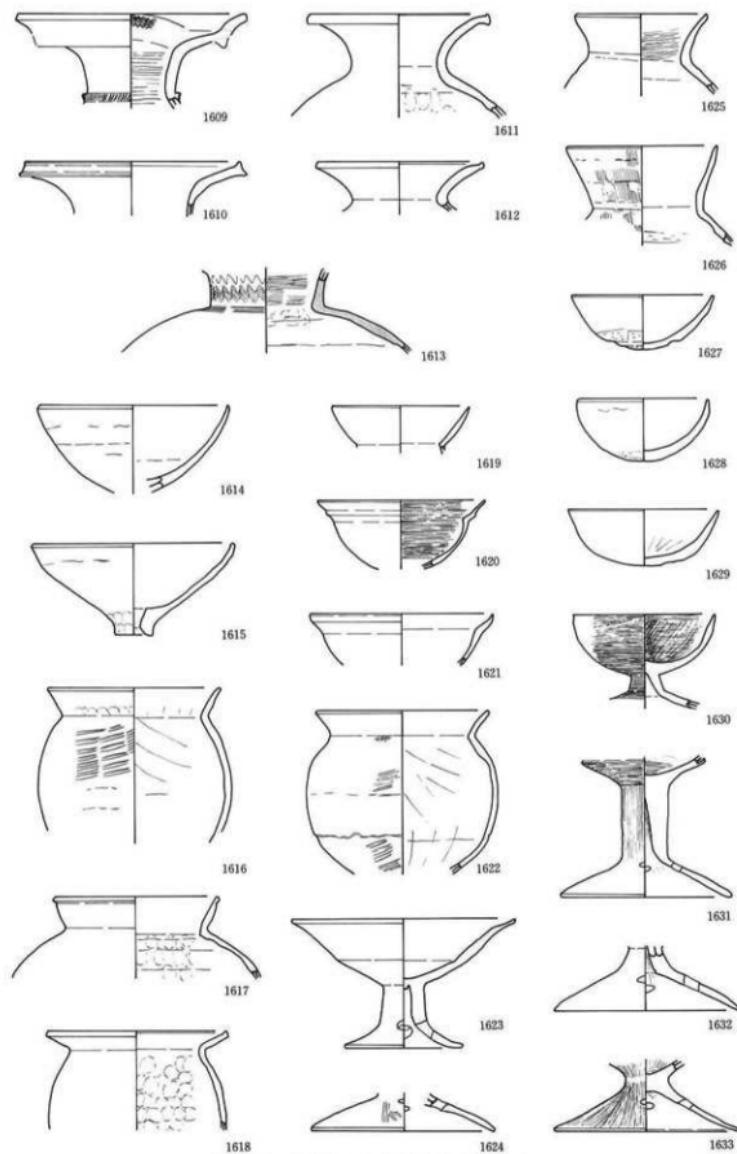


Fig. 273 G地区 河川8上層出土遺物(10)

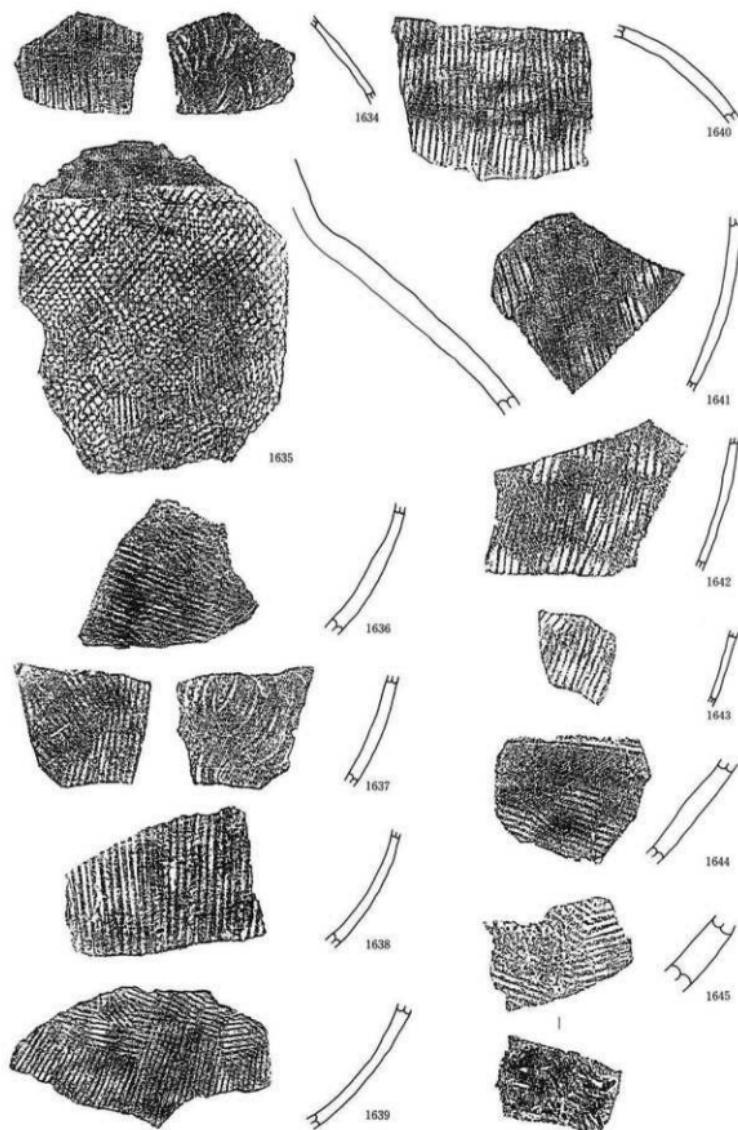


Fig.274 G地区 河川8下層出土遺物拓本(1)

7. 中期～後期の遺物

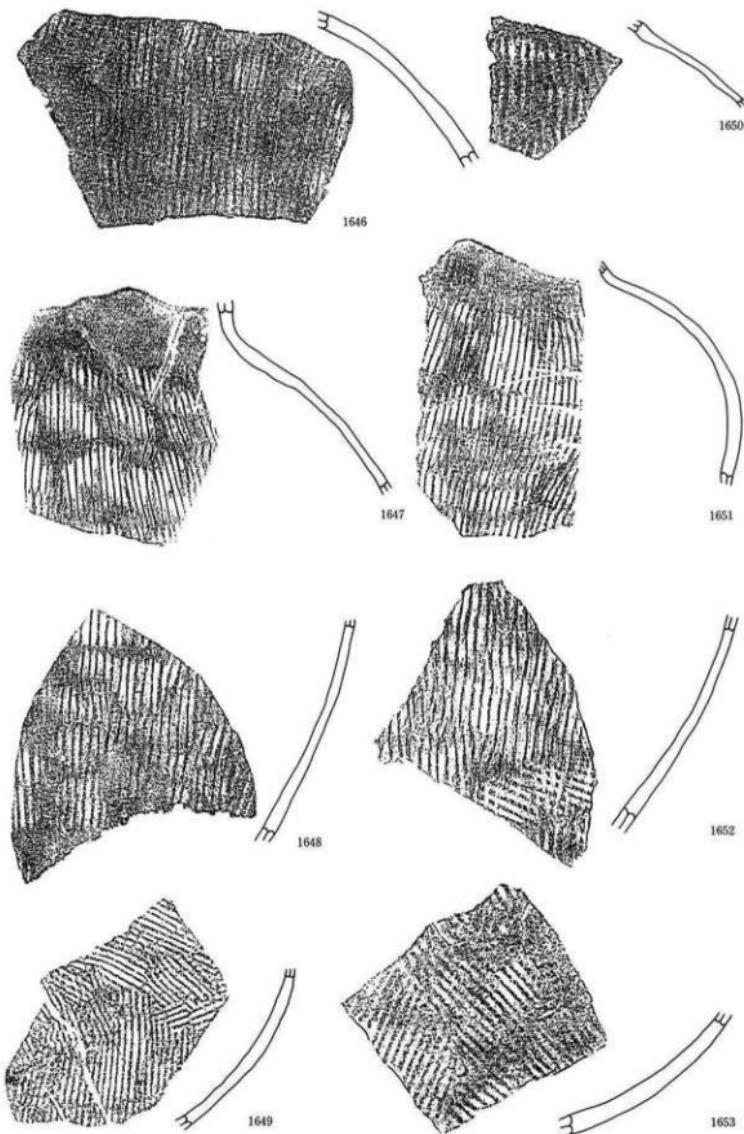


Fig. 275 G地区 河川8下層出土遺物拓本(2)

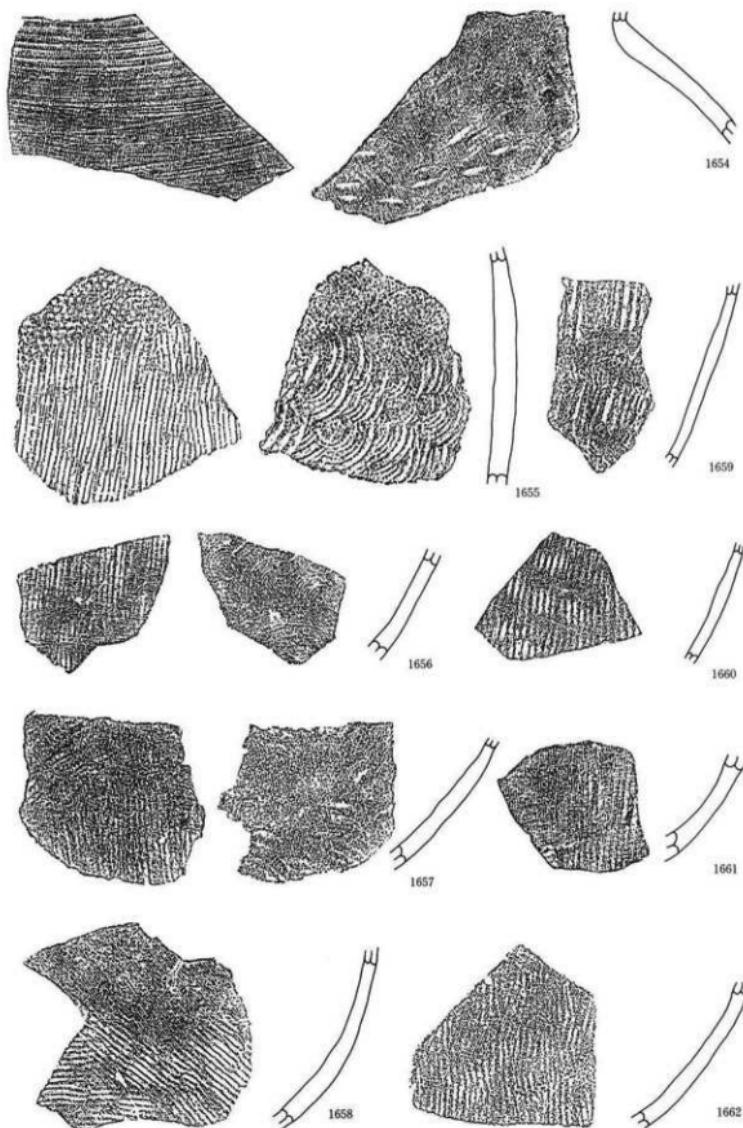


Fig. 276 G地区 河川8上層出土遺物拓本(1)

7. 中期～後期の遺物

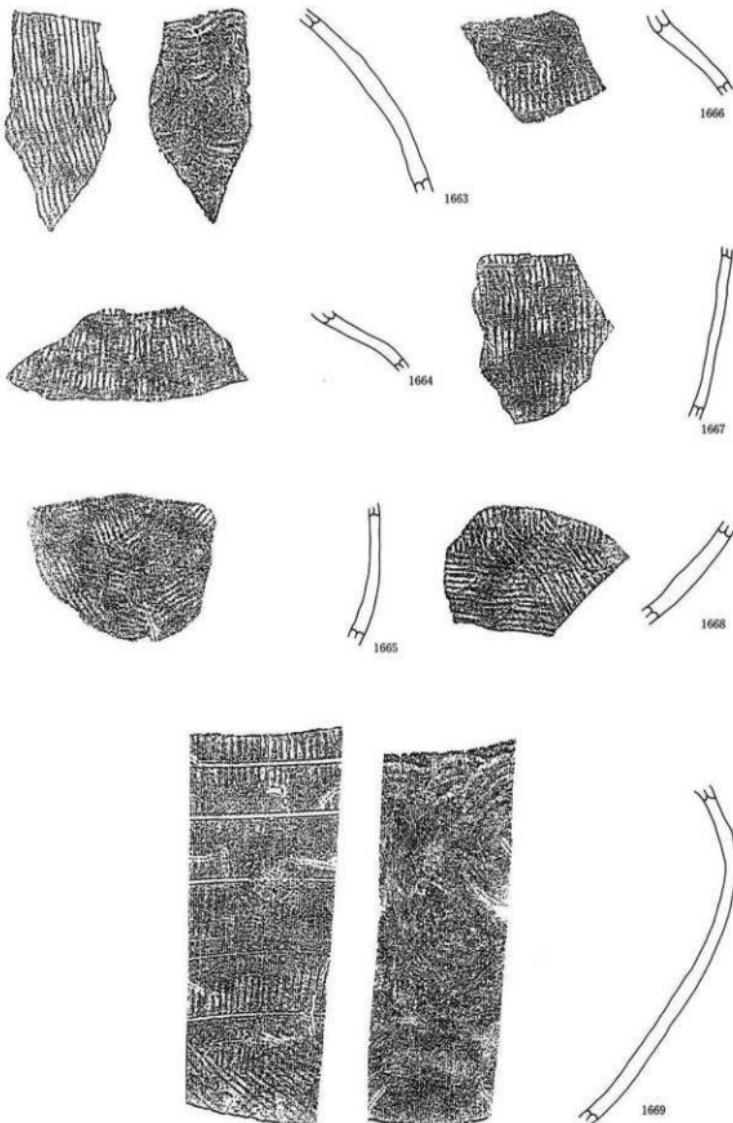


Fig. 277 G地区 河川8上層出土遺物拓本(2)

なお、河川8から出土した土器のなかには、土師質で外面の調整に叩き目を施す一群がある。

Fig.274,275が、河川8下層から出土したものである。壺ないしは壺の体部破片が多く出土しており、(1635)は大型壺の体部上端破片で、外面に斜格子叩き目を施し、内面に同心円文当て具痕を残し、外面に煤が付着する。他は、外面に平行叩き目を施すもの多く、内面に同心円文当て具痕後スリケシを施すものがある。(1646)の内面には細かく浅い同心円文当て具痕が残る。体部外面に煤が付着するものが多い。

河川8上層から出土したものには、下層と同様に壺か壺の体部破片が多い(Fig.276,277)。

(1654)は、体部上端の破片で、外面に回転カキメを施し、内面に当て具痕を残す。(1655)は、体部外面に格子叩き目および平行叩き目を施し、内面に同心円文当て具痕を残す。外面に、煤が付着する。他はいずれも、体部の外面に平行叩き目を施し、内面に同心円文当て具痕を残すかそれをスリケスものである。

(1669)は、須恵器の壺の体部破片で、外面に平行叩き目を施した後、沈線文を等間隔に施し、内面に同心円文当て具痕後半スリケシを施している。

河川8からは、同様の破片がコンテナにして約3箱分出土している。

古墳時代中～後期の遺物には、他に、河川や上部河川から出土した埴輪がわずかではあるが出土している。

(1670)は、H地区の古代河川7から出土した土師質の円筒埴輪である。基部および断面台形の擁が3本残存していた。調整は、外面にタテハケを施し、擁の上面および上下にヨコナデを施す。内面に指ナデを施す。円形の透かしを2方に交互に穿つ。

(1671,1672,1675,1677,1680～1682)は、I地区の古代河川8から出土した土師質の円筒埴輪の破片である。断面が台形の擁をもつものが多く、調整は、(1671)が外面タテハケを施すが、擁以下にヨコハケの二次調整を施す。内面に指押さえを残す。(1672,1675,

1680)は、内外面ともにタテハケを施す。(1672)には、円形の透かしの一部が残る。(1677)は、外面が表面磨滅のため調整不明、内面が指押さえを残す。円形の透かしの一部を残す。(1681,1682)は、基部破片で、外面にタテハケを施し、内面に指ナデを施す。(1682)には、棒状浮文が施される。

(1673)は、須恵質のもので、外面にタテハケを施し、内面に斜めハケを施す。擁は、残存しておらず、あったとしても間隔が広いため、円筒埴輪というよりは円筒状土製品とも考えられる。I地区の古代河川8より出土した。

(1676,1678,1679)は、G地区の古代河川5から出土したもので、いずれも、断面台形の擁を付ける。調整は、外面にタテハケを施し、内面に指ナデを施す。

以上、遺構とは遊離した状態で出土した埴輪ではあるが、ここにまとめて記載した。

他に、形象埴輪片も出土しているが、小片のため、図示できなかった(P.L.199)。

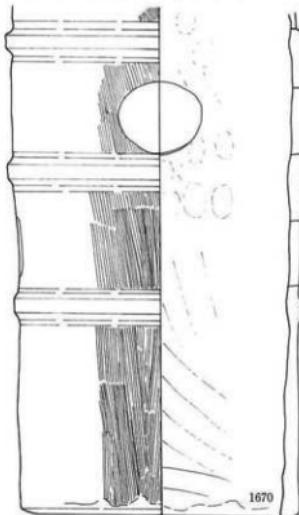


Fig.278 H地区 古代河川7出土埴輪

7. 中期～後期の遺物

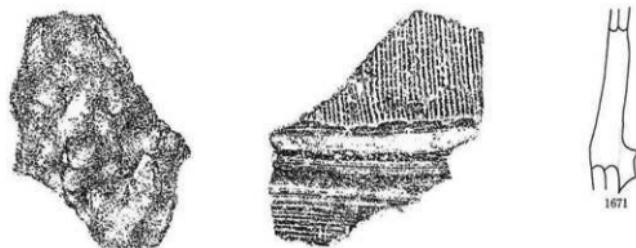


Fig.279 G・I地区 出土埴輪(1)

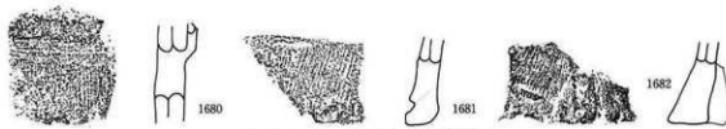
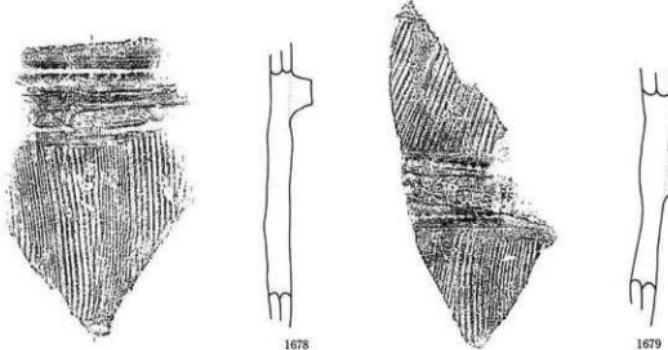
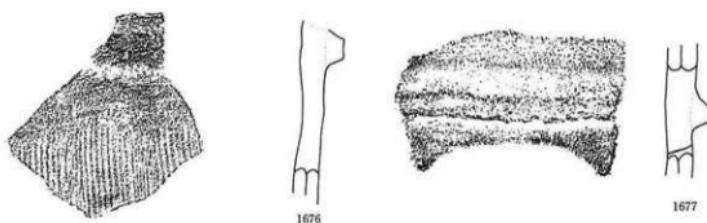


Fig. 280 G・I 地区 出土埴輪(2)

## 8. 灰原出土の遺物

H地区の灰原から出土した遺物は、コンテナにして約2000箱である。ほとんどが須恵器で占めるが、わずかに土器および飯蛸壺が混入している。完形になるものは、小型の蓋坏・高坏・壺等で、大型のものには無い。溶着したものや、焼け歪んだものが多く、生焼けのものもある。全体量が膨大なため全てを把握することができなかったが、本遺跡の灰原の特徴をできる限り抽出したつもりである。器種構成および法量等は、後述の統計処理の項で取り扱う。

以下、器種ごとに記述していく。

### 1) 須恵器

須恵器には、そのほとんどの器種が出土している。蓋坏、高坏、鉢・塊、甕、器台、提瓶、横瓶、瓶、壺、甕等であり、他に、図示できなかったが、平瓶が数点出土している。

**蓋坏** 蓋坏には、完形のものが多く出土している。

蓋の(1713～1716)は、口縁部が外側に開き、天井部が偏平かわずかに丸みをもち、天井部と口縁部との境目に断面三角形の鋭い稜線が施される。天井部高より口縁部高の方が大である。天井部外面の調整は、(1713.1714)が回転ヘラケズリ、(1715)が回転カキメ、(1716)が回転ナデを施す。内面の調整は、(1715)が回転ナデ以外は、中央部に不整方向のナデが施される。口縁部の端部は、(1713.1715)が平坦面をもち、(1714.1716)が丸みをもつ。

(1717～1728)は口径10cm前後のやや小型で、天井部が丸みをもち、口縁部が垂下するもので、天井部と口縁部との境目に、やや鈍い断面三角形の稜線が施される。口縁部高より天井部高の方が大である。天井部外面の調整は、回転ヘラケズリを施すが、その範囲は1/3前後である。(1718.1719)は、天井部外面に静止ヘラケズリを施す。口縁部の端部は、(1717.1719.1721.1722.1724.1725.1727.1728)が凹面をもち、(1718.1720.1723.1726)が内傾する段をもつ。

(1729～1740)は口径12cm前後のもので、天井部が丸みをもつものとやや偏平なものがあり、(1731)は段をもつ。口縁部は垂下するものと、やや開くものがあり、天井部と口縁部との境目に鈍い断面三角形の稜線を施すものと、凹線文を施すもの(1729.1731.1740)がある。天井部外面の調整は、回転ヘラケズリを施すが、その範囲は前者と同様に1/3前後である。(1730.1731)は、天井部内面に同心円文当て具痕を残す。口縁部の端部は、内傾する段をもつ。

(1741～1756)は、口径14cm前後のやや大型のもので、天井部が丸みをもち、口縁部が垂下するものとやや開くもの、やや内傾するものがある。天井部と口縁部の境目にわずかな断面三角形の稜線をもつものと、凹線文を1条施すものがある。天井部外面の調整は回転ヘラケズリを施すが、その範囲は1/3以下のものが多い。内面の調整は、(1746)が同心円文当て具痕を残し、(1747)が一方方向のナデを施している。口縁部の端部は、(1747.1752.1755)が内傾する面をもち、他は内傾する段をもつ。

(1757～1768)は、やや偏平な天井部にやや開く口縁部をもつ。天井部と口縁部との境目に不明瞭な稜線をもつ。(1759.1768)は、天井部が段をなす。天井部外面の回転ヘラケズリは、粗雑に施される。内面の調整は、(1758)が一方方向のナデ、(1759.1765.1766.1768)が同心円文当て具痕を残す。口縁部の

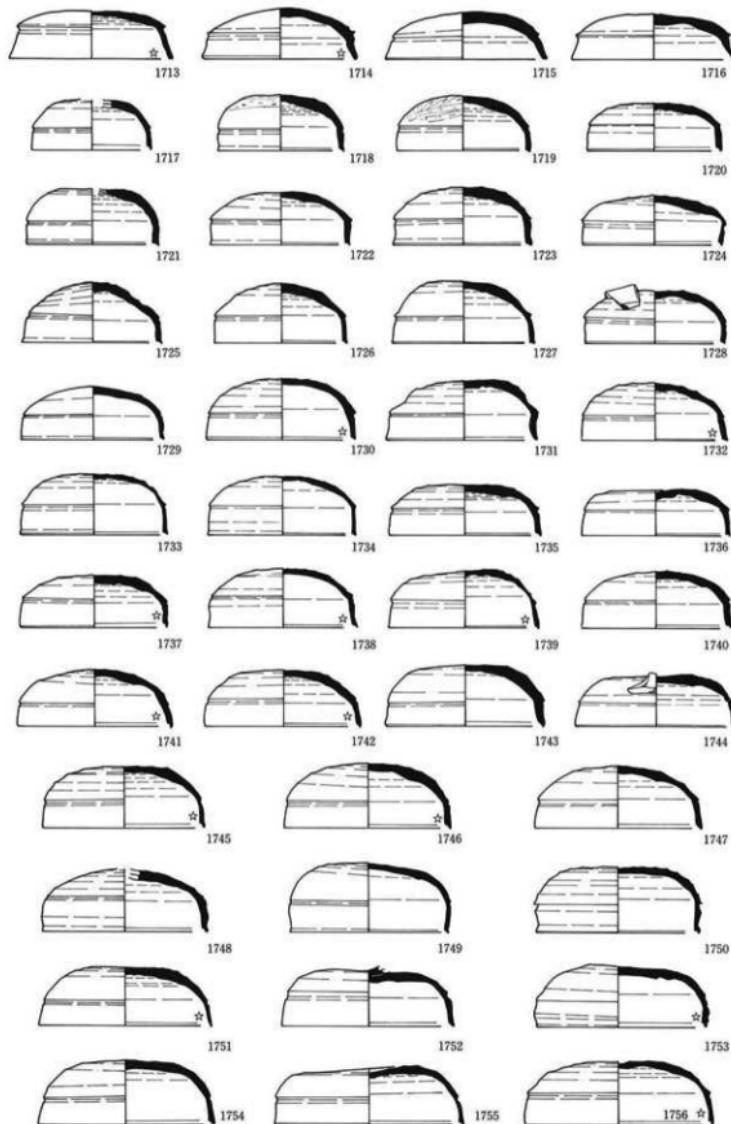


Fig. 281 H地区 灰原出土遺物(1)

#### 8. 灰原出土の遺物

端部は、(1761.1765.1768)が内傾する凹面をもち、(1758～1760)が丸みをもち、他は内傾する段をもつ。

坏身の(1769)は、口縁部を欠くが丸みをもつ体部に外方に開く口縁部をもつと思われる。体部と口縁部の境目に断面三角形の凸線文を1条施す。底部外面の調整は、静止ヘラケズリを施す。内面は、不整方向のナデを施す。

(1770.1771)は平底ぎみの体部に、やや内傾する口縁部をもつ。口縁部と体部との境目の受部は、断面三角形をなす。外面は、口縁部から受部にかけて緩やかな曲線を描く。底部外面の調整は、(1770)がナデを施し、(1771)が回転ヘラケズリを施す。内面は、いずれも回転ナデを施す。口縁部の端部は、前者が丸みをもち、後者がわずかに内傾する段をもつ。

(1772～1787)は、内傾する口縁部に平底ぎみの体部をもつ。受部は、やや斜め上方に伸びる。底部外面の調整は、(1772.1777.1781)が回転カキメを施し、(1773.1785.1787)が静止ヘラケズリを施し、(1776.1782)がナデ、他は回転ヘラケズリであるが、他に比べてその幅が狭い。口縁部の端部は丸みをもつものが多く、(1778.1780)が内傾する段をもち、(1784)が内傾する凹面をもつ。他の坏身に比べて、器壁が厚いものが多い。

(1788～1795)は小型で、外反ぎみに内傾する口縁部に丸みをもつ体部をもつ。受部は、横方向に伸びる。底部外面の調整は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデである。口縁部の端部は、(1791～1793)が内傾する面をもち、他は内傾する段をもつ。

(1796～1802.1805～1821.1824.1825)は、先述の坏身のやや大型のもので、体部が丸みをおびるものとやや偏平なものがある。受部は、横方向およびやや斜め上方に伸びる。(1816)は、底部が平坦である。底部外面の調整は回転ヘラケズリを施すが、その範囲は1/3前後である。内面は、(1796.1810.1811.1816)が同芯円文当て具痕を残し、(1806.1807)が一方方向のナデである以外は回転ナデである。口縁部の端部は、丸みをもつものと内傾する段をもつものが多く、(1796)は内傾する面をもち、(1817)は内傾する凹面をもつ。(1804)は、同様の坏身の受部を焼成前に削り取ったものである。

(1827.1830.1832～1834)は、大型化したもので、体部が丸みをもち口縁部は内傾する。受部は横および斜め上方に尖りぎみに伸びる。

(1822.1823)は、やや偏平な体部に尖りぎみの底部をもつ。口縁部は内傾し、受部は横方向に尖りぎみに伸びる。体部外面の調整は回転ヘラケズリ、内面に回転ナデを施すが、そのヘラケズリは粗雑である。口縁部の端部は、尖りぎみにおわる。

(1803.1826.1828.1829.1831)は、内傾する口縁部に尖りぎみの底部をもつ。受部は、わずかに斜め上方に伸びる。底部外面の調整は、回転ヘラケズリを施す。内面は、(1826.1829)が同芯円文当て具痕を残し、一方方向のナデを施す。口縁部の端部は尖りぎみにおわる。

(1835～1850)は、坏蓋と坏身がセットで出土したものである。(1837～1848)が灰白色または淡褐色とした生焼けのものであり、完形品である。

高环 高环には、無蓋高环、有蓋高环とその蓋がある。

無蓋高环には、(1867～1874.1878.1882)のように、口縁部がわずかに外反し、塊状の坏部をもつもので、口縁部と坏部との境目に断面三角形の凸線文および波状文を施すものがある。(1867.1869.1870)の坏部には、環状の把手を1方ないしは2方に付ける。口縁部の端部は、(1871)が尖りぎみにおわり、(1867.1870)が内傾する段をもつ以外は、丸みをもつ。(1872.1873.1878)の脚台部は、裾広がりに伸び、

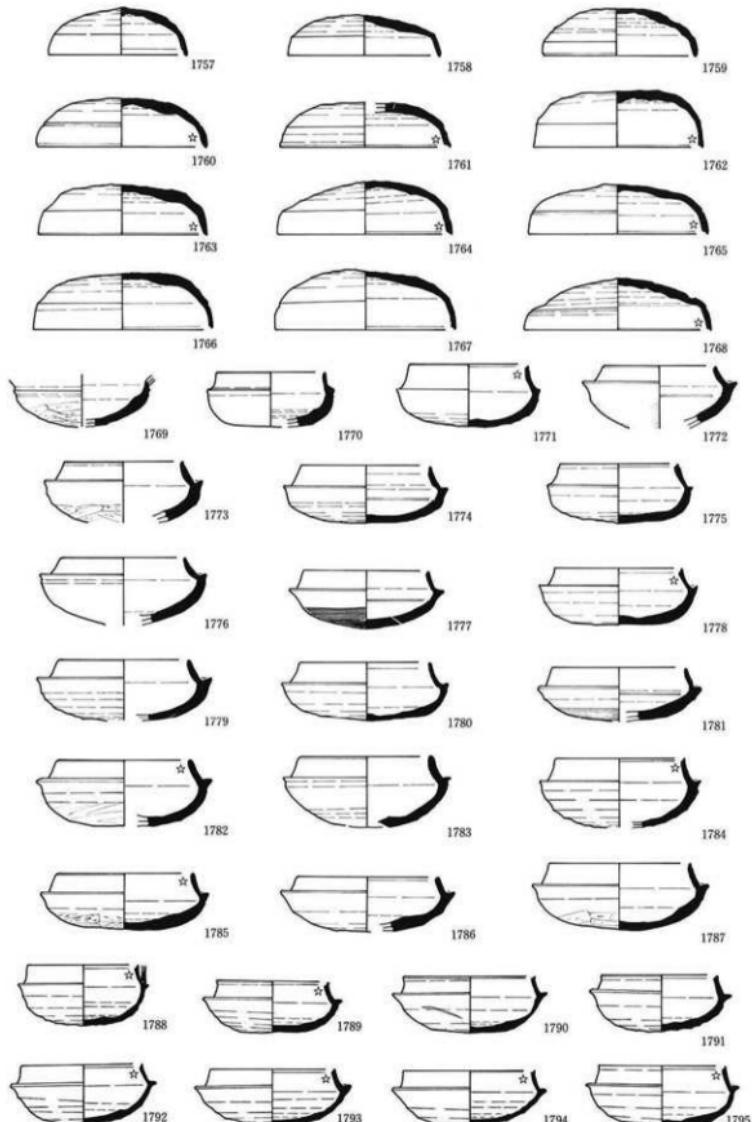


Fig. 282 H地区 灰原出土遺物(2)

8. 灰原出土の遺物

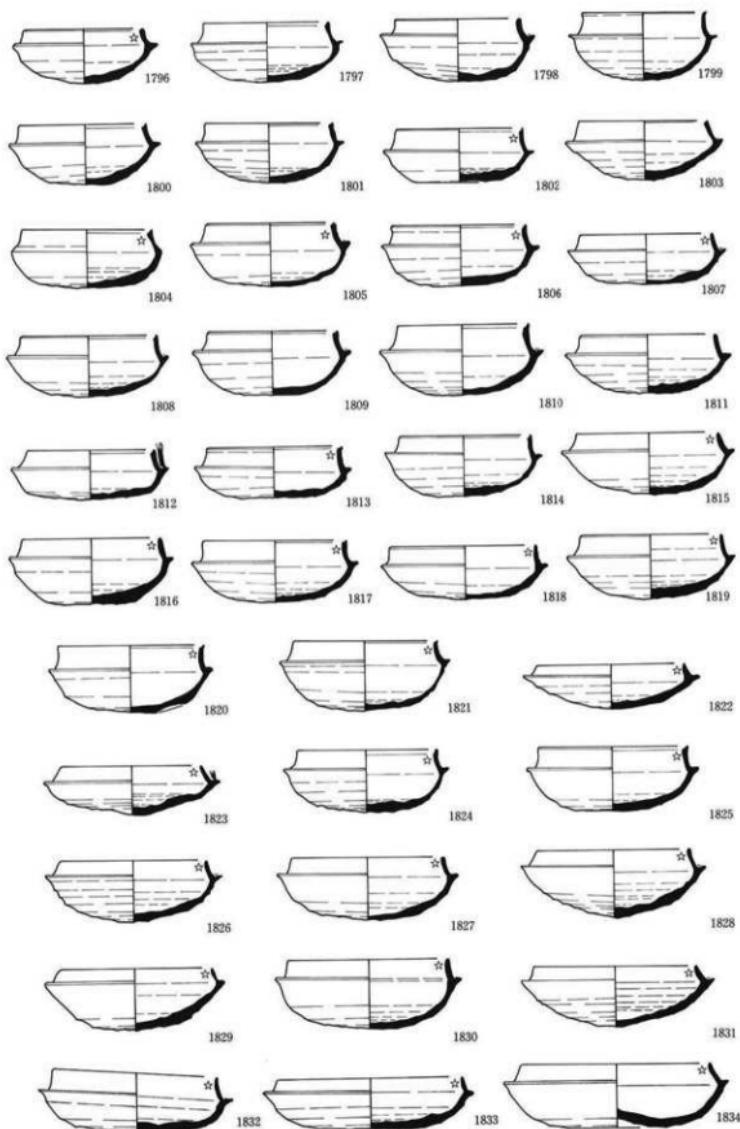


Fig. 283 H地区 灰原出土遺物(3)

内湾ぎみに垂下する脚台端部が外端面をもち、外端面上端に凹線文を1条施す。脚台部の3方に台形の透かしを穿つ。(1869)の坏部内面には、砂が焼き縮められた状態で出土しており、脚部破損後逆にして焼き台として使用されたものと思われる。(1882)の脚台部は、裾広がりの脚台部に内傾しわずかに拡張する脚台端部をもつ。前者と同様に3方に台形の透かしを穿つ。

(1875.1876.1879~1881.1883~1885.1887~1889)は、わずかに開く口縁部に、浅い塊状の坏部をもち、口縁部と坏部の境目に段をもつ。口縁部の端部は、(1876.1879.1883.1884.1887)が内傾する凹面をもち、他は丸みをもつ。脚台部には、坏部高より低く「ハ」の字形に開く(1875.1879)、坏部高よりやや高い(1880.1883.1884.1888)、坏部高の二倍弱ある長脚の(1881.1885.1889)、裾広がりに開く脚柱部から内湾ぎみに開く脚台部をもち、境目に段をなす(1887)等がある。脚台端部は、(1887)がわずかに上方に拡張し面をもち、(1888)はわずかに下方へ拡張し、(1879.1883.1884)はわずかに上下に拡張し凹面をなし、(1875.1880)はわずかに上下に拡張し上下2方に凹面をなす。(1881.1885.1889)は、内湾ぎみに伸びる脚台端部がわずかに下方に拡張し、上下二面の上方に凹線文を1条施す。脚台部の透かしは、台形、円形、正方形と様々である。

(1886)は、口縁部と坏部の境目に凹線文を1条施し、脚部は裾広がりに開き、脚台端部がわずかに下方へ拡張し上下に二面をもつ。(1877)は、両端部を欠損し長台形と三角形の透かしを千鳥に穿つ。

(1900.1904)は、浅い塊状の坏部にわずかに開く口縁部をもつ。前者は裾広がりの脚部をもち円形の透かしを穿ち、後者は筒状の脚柱部をもち、凹線文を2条施し、切り込み状の透かしを穿つ。

有蓋高坏の蓋には、小型で垂下する口縁部に丸みをもつ天井部と、口縁部の境目に稜線および凹線文を施す坏蓋に中央が凹むつまみが付くもの(1851~1854.1859)、前者よりやや大型の(1860.1861.1863.1864)、さらに大型の(1865.1862.1866)がある。(1855.1856)は、つまみ部のみを残存し、高坏の蓋というよりは有蓋蓋の蓋の可能性がある。

有蓋高坏には、小型の坏身に裾広がりの脚台部をもつ(1890~1894.1896~1899.1901.1902)と、やや大型の(1895.1903.1910)、大型の(1905~1909)がある。前者には、脚台部の形態で二種に別れる。その一は、裾広がりに開く脚台部の端部が上下にわずかに拡張するもの(1890.1893.1894.1897.1901.1902)で、3方に台形の透かしを穿つ。その二は、短く裾広がりに伸びる脚台部の端部が内傾する面ないしは凹面をもつもの(1891.1892.1896.1898.1899)であり、脚部の3方ないしは4方に円形か台形の透かしを穿つ。(1891)は透かしを穿たない例である。やや大型のものは、前者のその二の脚部がやや長くなつたもので、3方に円形の透かしを穿つものと透かしのないものがある。

大型のものには、坏部が浅いもの(1905.1906)と、深いもの(1907)があり、(1909)は短く裾広がりの脚台端部が内外方へわずかに拡張し凹面をもち、(1907)は裾広がりの脚台端部が内外方にわずかに拡張し面をもち、3方に小さな円形の透かしを穿つ。(1906)は脚台端部近くで段をなし端部が内方へわずかに拡張し面をなし、(1908)は脚台部中央で内湾ぎみに開き外方へわずかに拡張し面をなす。脚柱部の3方に長方形の透かしを穿ち、脚台部に千鳥に円形の透かしを穿つ。

他に、脚台部のみが出土している。(1916)は、裾広がりの脚台端部が丸みをもち端部上に凸線文を1条施す。4方に円形の透かしを穿つ。(1917)は、裾広がりの脚部が屈曲しさらに外方へ開く脚台部の端部が内傾する凹面をなし、屈曲部に凹線文を1条施す。(1918)は、裾広がりに開く脚台部の端部ちかくで段をなし、端部は面をなし、4方に菱形の透かしを穿つ。

(1911.1912)は、柱状の脚柱部に裾広がりの脚台部の端部が面をもつ。前者は端面上部に、後者は脚

8. 灰原出土の遺物

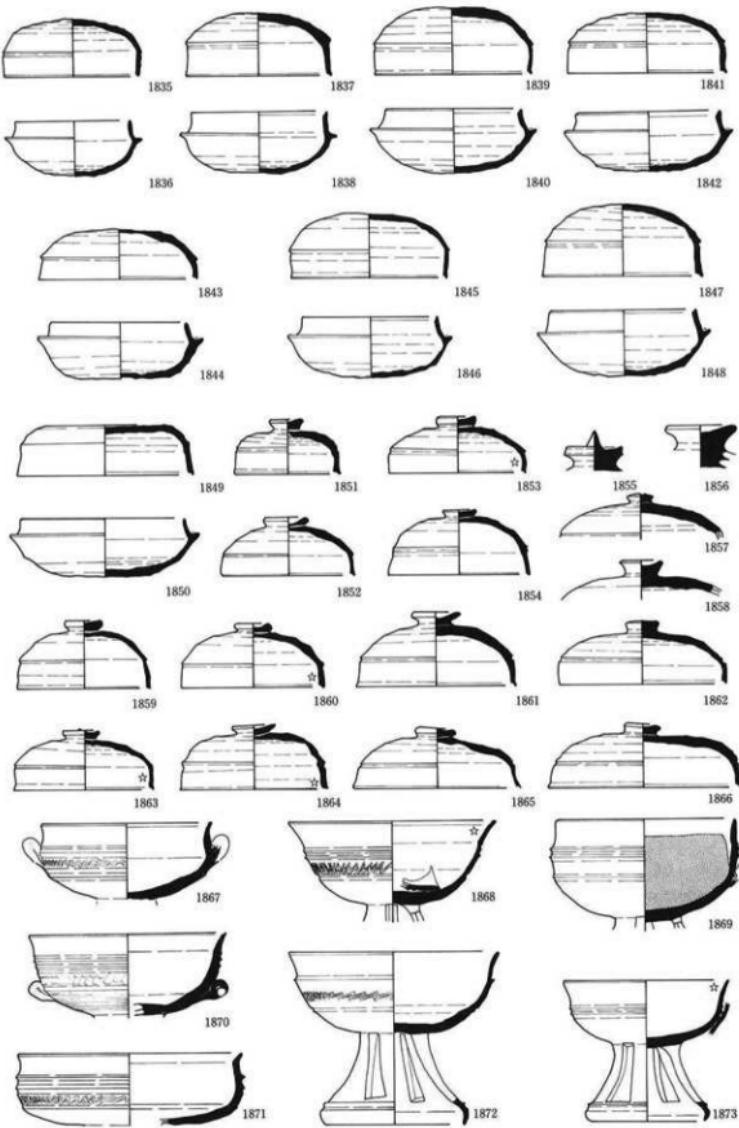


Fig. 284 H地区 灰原出土遺物(4)

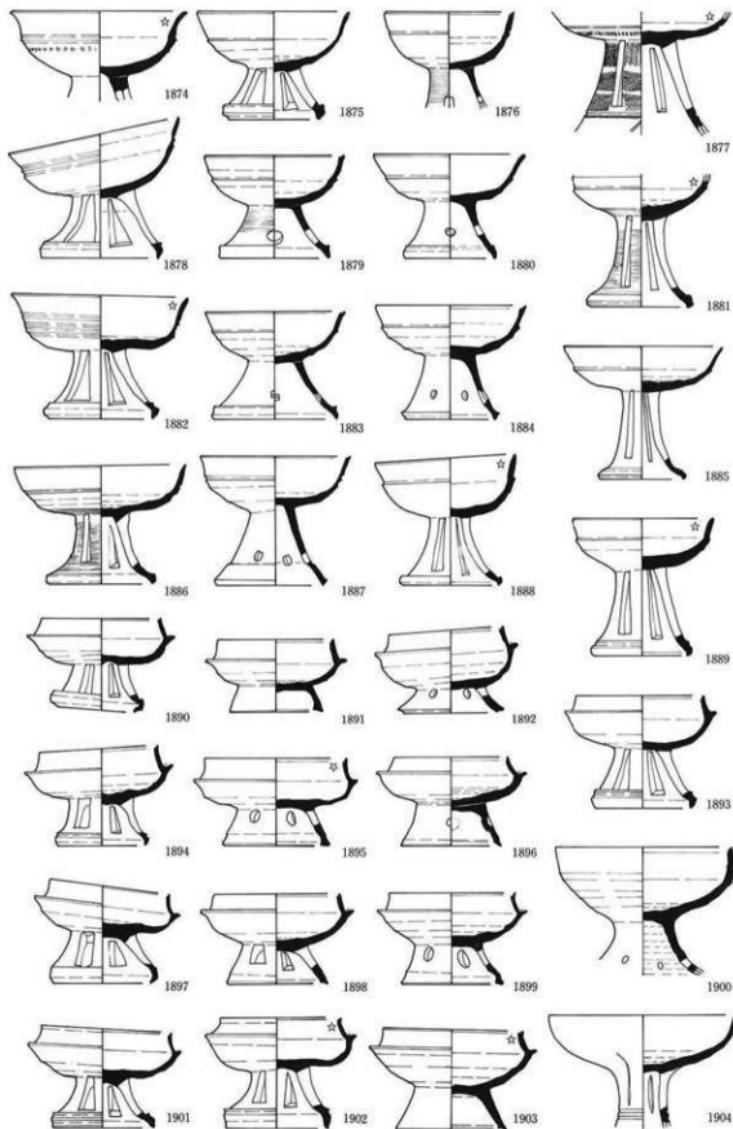


Fig. 285 H地区 灰原出土遺物(5)

8. 灰原出土の遺物

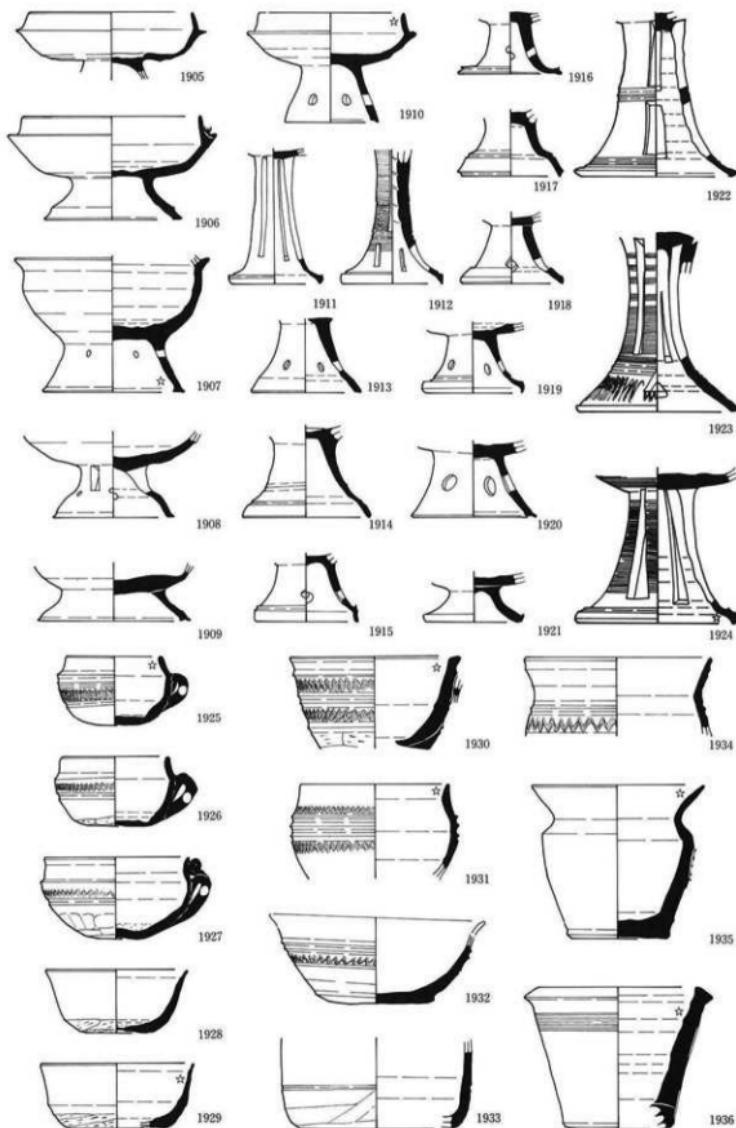


Fig. 286 H地区 灰原出土遺物(6)

柱部に凹線文を2条、端部上に1条施し内面に粘土紐の縦ぎ目を残す。透かしは、前者が長方形を3方に1段、後者が2段千鳥に穿つ。

(1915)は、裾広がりの脚台端部が、わずかに上下に拡張し面をなし、4方に円形の透かしを穿つ。(1913.1914)は、裾広がりの脚台端部ちかくで内湾ぎみに伸び、前者が下端面をもち3方に円形の透かしを穿ち、後者が脚柱部に凸線文を、脚台部に凹線文を各1条施す。(1919)は、裾広がりの脚台部の端部が下方にわずかに拡張し上下に二面をもつ。脚柱部との境目に凸線文を1条施し、3方に円形の透かしを穿つ。(1920)は、裾広がりの脚台部の端部が内外方にわずかに拡張し凹面をなし、3方に円形の透かしを穿つ。

(1924)は、やや大型で、裾広がりの脚柱部から伸びる脚台部の端部ちかくで、内湾ぎみに開く脚台端部が下方にわずかに拡張し上下二面をもち、上面が凹面をなす。(1922)は、裾広がりに開く脚柱・脚台部の端部が下方へわずかに拡張し内傾する面をもつ。脚柱部中央および脚台部に凹線文を各2条施し、長方形および台形の透かしを2段1列に穿つ。(1923)は、筒状の脚柱部から裾広がりに開く脚台部の端部が上方へわずかに拡張し、面をもつ。脚台部と脚柱部の境目に凹線文を2条、脚台部に波状文を施す。透かしは、長方形と三角形の透かしを2段千鳥に施す。

(1921)は、短く裾広がりに開く脚台部の端部が上方へわずかに伸び面をなす。(1912.1922~1924)が外面に回転カキメを施す。

#### 鉢・壺 鉢・壺の類には、小型のものが多く、大型のものがわずかにある。

小型で環状の把手が付くものには、(1925~1927.1931)のように、口縁部が内傾または外反するものと、(1930)のように直口のものがある。前者は、壺状の体部に平底ぎみの底部をもち、(1925~1927)が口縁部との境目に段を施し、体部に波状文・凹線文を施す。(1931)は、波状文間凸線文を施す。底部外面の調整は、ナデか静止ヘラケズリを施す。(1927)の把手には渦巻き状の浮文が付く。後者は、口縁部の端部が内傾する面をもち、据すばまりの体部に平底のものとおもわれる。体部に凸線文・波状文を施す。底側部外面には静止ヘラケズリが施される。

小型で牛角状の把手が付くものには、直口のやや深い塊形の(1937.1938)がある。

鉢には、口縁部の端部がわずかに外反する(1928.1929.1932)があり、壺状の体部に平坦な底部をもつものである。(1928.1929)は、無文で底部外面に静止ヘラケズリを施し、(1932)はナデを施す。

(1949)は、やや開く口縁部の端部が外方へ肥厚し、口縁部内面の端部下に粘土紐を1条付加し二重口縁にしている。底部は平坦で厚手の作りである。

(1942)は、外方へ開く口縁部の端部がわずかに肥厚し二面をなし、浅い塊状の体部をもつ。体部外面に把手の跡がれた痕跡が残る。体部外面の調整は平行叩き目を施し、内面は同心円文で具痕を残す。

(1936.1939~1941.1943~1946.1948)は捏ね鉢で、(1936.1946)には環状の把手が付く。全体に厚手の作りである。(1936)は、斜め上方に開く口縁部の端部が上・下にわずかに伸び、面をもつ。据すばまりの体部に平坦な底部をもつ。(1943.1945)は、斜め上方に開く口縁部の端部が、前者が凹面をもち、後者が内傾する面をもち内方にわずかに拡張する。いずれも、据すばまりの体部に、円盤状の底部をもつ。底側部は拡張し、面をもつ。(1939.1944.1946.1948)は、口縁部がわずかに外反するもので、口縁部の端部は(1939.1946)が下方にわずかに拡張し面をもち、(1944.1948)が上方に拡張し面をもつ。

(1935)は、形態的には壺に分類されるが、作りは捏ね鉢と同様である。体部に環状の把手の付着痕を

8. 灰原出土の遺物

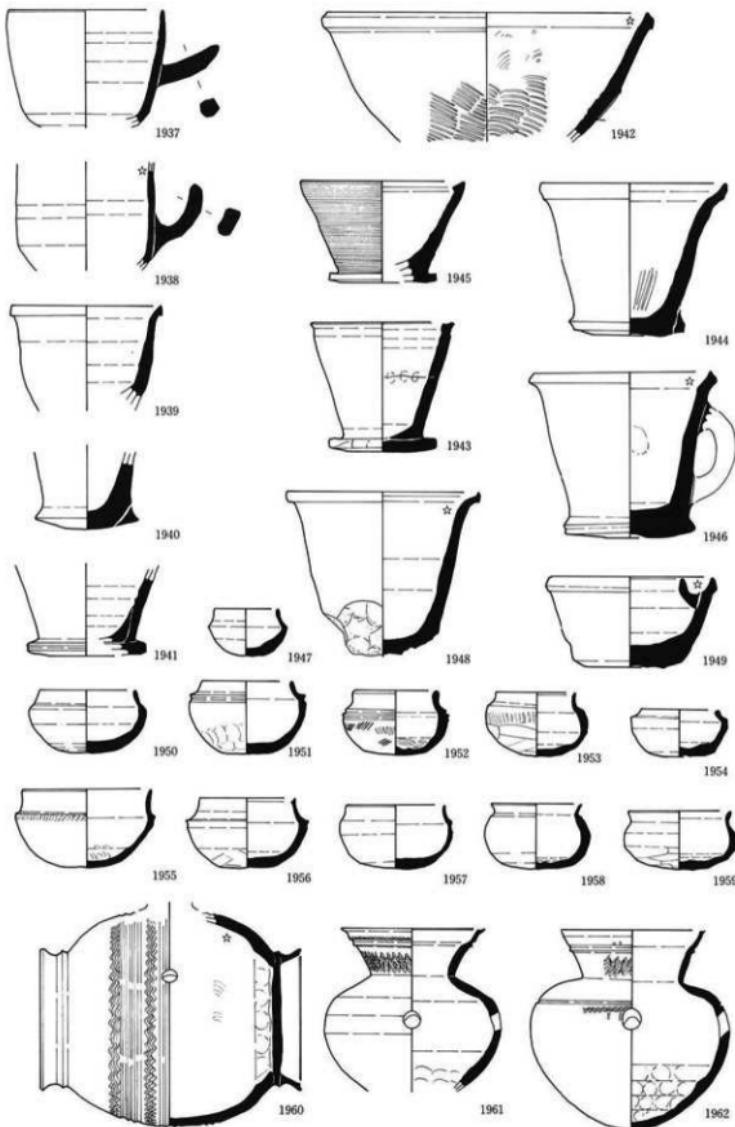


Fig. 287 H地区 灰原出土遺物(7)

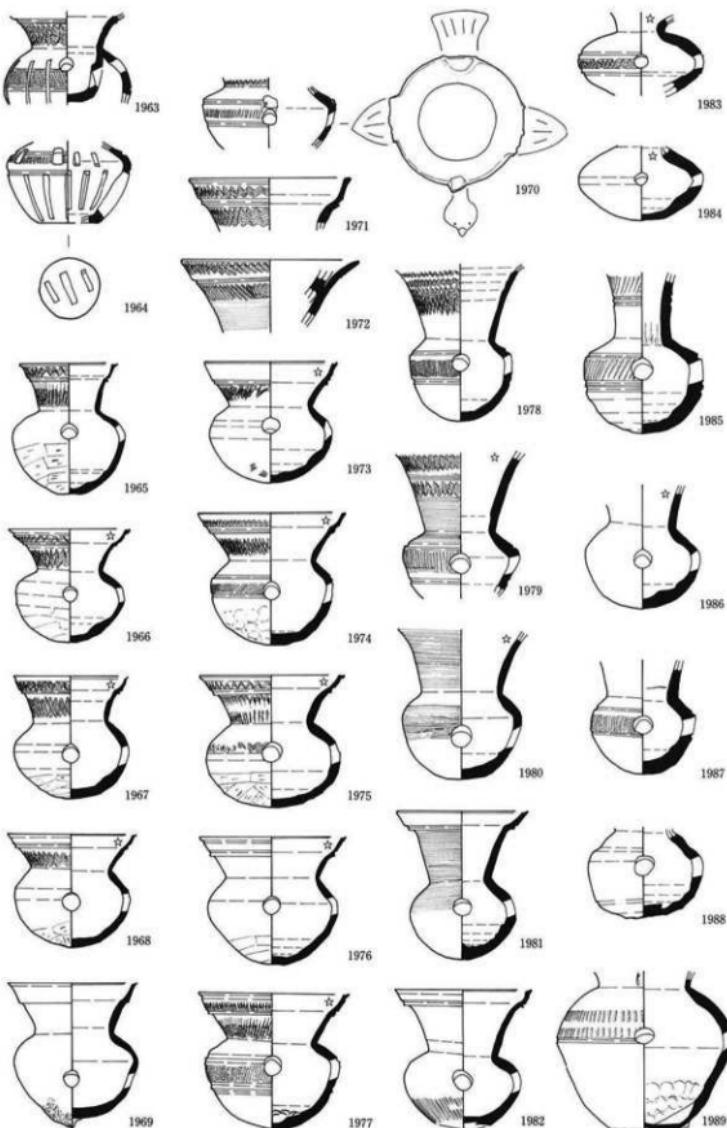


Fig. 288 H地区 灰原出土遺物(8)

残す。

(1947.1950～1959)は、小型の塊で、内傾する口縁部に半球状の体部をもち、口縁部と体部の境目に段をもつものと、口縁部がわずかに外反し前者と同様の体部をもつもの、口縁部が外反しやや偏平な体部をもつものがある。口縁部の端部は、丸みをもつものが大半を占め、(1953.1956)が内傾する段をもつ。体部外面に、凸線文および列点文を施すものがある。底部外面の調整は、(1950.1954.1955.1957.1958)が回転ヘラケズリを施し、(1951)がナデ、(1953.1956.1959)が静止ヘラケズリ、(1952)が平行叩き目を施す。内面は、(1950.1951)がナデ、(1952.1955)が同心円文當て具痕を残す以外は、回転ナデを施す。

龜 龜には、樽形龜・大型龜・小型龜がある。

樽形龜は、1点のみ出土しており、(1960)が口縁部を欠損する。体径が体側径の1.5倍で、体部に波状文・凸線文を施す。体側部は円盤状の粘土を貼り付けた後、周囲に粘土紐を1本雜ぎ足し拡張し、端部は凹面をなす。

大型龜には、壺型のものがある。(1961.1962)は、二重口縁をもつもので、短い筒形の頸部にやや肩の張る体部に丸底のものである。口縁部端部は内傾する面ないしは凹面をもち、口縁部および頸部に波状文を施す。(1962)は、体部に凹線文・波状文を施す。(1989)は、口縁部を欠損するもので、やや肩の張る体部に平底ぎみの底部をもつ。体部に列点文・凹線文を施す。底部内面に自然釉が溜まっていた。いずれも、底部外面の調整はナデを施し、内面は同心円文當て具痕を残している。(1971.1972)はいずれも、口縁部のみを残すもので、後者は二重口縁が退化したものである。

小型龜には、壺形龜・二重龜・鳥形龜がある。壺形龜には、口縁部を欠損するがやや偏平な体部に丸底のもので、体部に凸線文間波状文を施すものと無文のものがある。底部外面の調整は丁寧なナデが施される。内面は回転ナデを施す(1983.1984)。外方に開く頸部に、外方に開き屈曲してさらに斜め上方に開く口縁部をもち、肩の張る体部に丸底のもの(1966～1969.1973～1977)がある。これらは、口径が体径を上回るものである。口縁部の端部は、内傾する面か凹面をもつものが多く、(1967)が内傾する段をもつ。口縁部・頸部に波状文を施すものが多く、体部に(1974)は凹線文間列点文、(1977)は凸線文間列点文、(1975)は波状文を施す。底部外面の調整は、静止ヘラケズリ・ナデを施すものが多く、内面は、(1967.1975)が同心円文當て具痕を残し、(1977)がツキコミを残す以外は回転ナデである。

(1965.1981.1982)は、頸部がやや長く、口縁部が斜め外方に開きさらに斜め上方に伸びるもので、体部が丸みをもち丸底のものである。口縁部の端部は内傾する面か凹面をもつ。口頸部に波状文を施すものもあるが無文のものが多い。底部外面の調整は(1965)が静止ヘラケズリ、(1982)が平行叩き目を施し、(1981)が回転ナデを施す。(1978～1980)は、口縁部を欠損するが頸部が長く、肩部が張る体部に丸底のものである。(1978.1979)は、頸部に波状文、体部に凹線文間列点文を施す。(1979.1980)は頸体部間に回転カキメを施す。(1986.1987)は、口頸部を欠損するが、体部がやや小型で肩部がやや張り、丸底のものである。無文のものと、体部に凹線文間列点文を施すものがある。

(1985)は、口縁部を欠損するが長い筒状の頸部に肩の張る体部に丸底のもので、頸部に列点文・凹線文、体部に凹線文間列点文を施している。頸部内面に絞り目痕を残す。底部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。(1988)は、口頸部を欠損するが、体部および底部に段をもち、歪んでいる。

二重龜には、完形品は無く、全容は不明であるが、頸体部破片および体部破片が2点のみ出土している。(1963)は、口縁部の屈曲部から体部の二重部分が残存する。体部の外側は、中央に凹線文間列点文

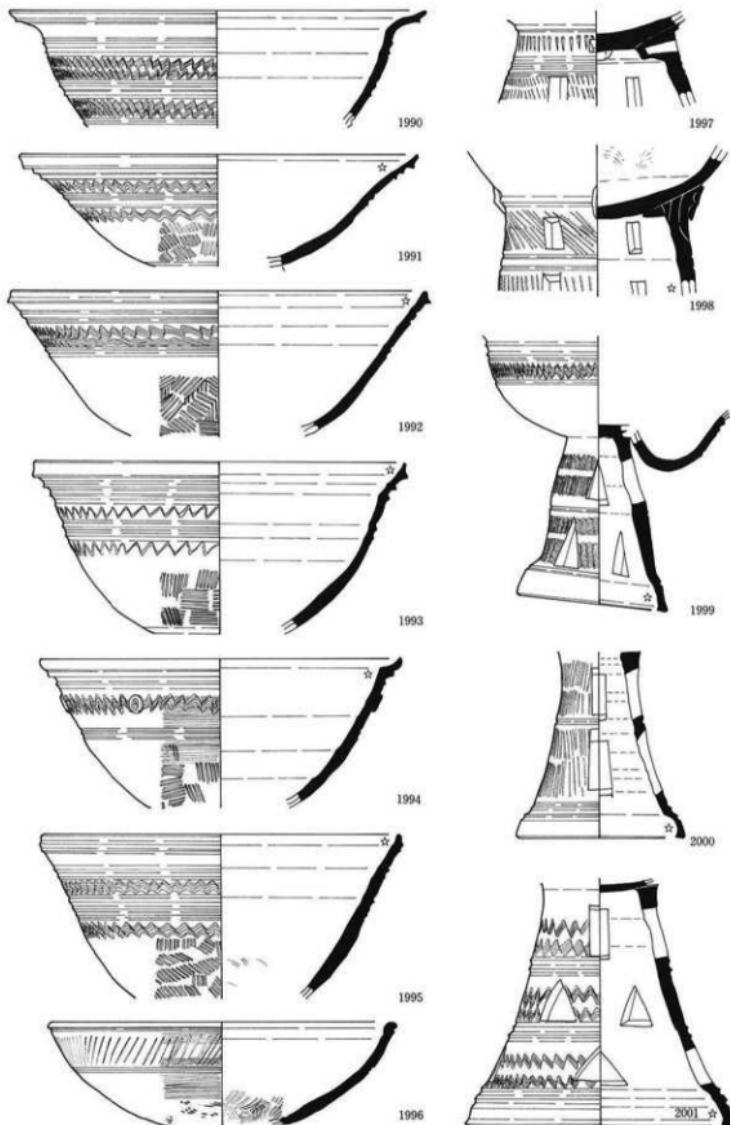


Fig. 289 H地区 灰原出土遺物(9)

## 8. 灰原出土の遺物

を施しそれを切る形で長方形の透かしを穿ち、円形の透かしは体部の上方外側から内側の体部にかけて穿孔している。(1964)は、体部の外側のみを残しており、体部の中央に凹線文間列点文を施した後、文様上および以下に長方形の透かしを2段交互に穿っている。底部に長方形の透かしを3方に穿つ。

鳥形魁は、1点のみ出土しており、体部のみが残存する。鳥の頭・羽・尻尾等の突起部は欠損している。体部は肩が張るもので、体部中央に凹線文間列点文を施し、円形の透かし上に頭部を作り出しているものである(1970)。

器台 器台には、鉢形器台と筒形器台がある。

鉢形器台には、全体形がつかめるものが少なく、台部のみか脚部のみが残存しているものが多い。

(1990～1996)は、台部のみを残すもので、(1990)は、半球上の台部に外反する口縁部の端部が丸みをもち、口縁端部下に凸線文を1条施す。台部外面に凸線文・波状文を交互に施す。(1991～1993)は、斜め外方に開く口縁部の端部が下方にわずかに拡張し、凹面をなす。台部は、(1991)が浅い塊状であり、(1992.1993)が半球状をし、外面に波状文および凸線文を施す。(1993)は、籠描き波状文である。台部外面の調整は、いずれも平行叩き目を施し、内面は(1992.1993)が同心円文當て具痕後スリケシを施す。(1994)は、口縁部が内湾ぎみに斜め上方に伸び、口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を1条施す。台部は半球状をし、外面に凸線文間波状文を施し、波状文上に渦巻き状浮文をつける。台部内面上端に装飾が付されたと思われる痕跡が2カ所ある。台部外面の調整は、平行叩き目後回転カキメを施す。内面は同心円文當て具痕後スリケシを施す。(1995)は、斜め外方に開く口縁部の端部が上・下にわずかに拡張し、上下2方に凹面をなす。半球状の台部に凸線文および波状文を施す。台部外面の調整は、平行叩き目を施し、内面は同心円文當て具痕を残す。(1996)は、斜め上方に伸びる口縁部の端部が丸く肥厚し、端部下に凸線文を1条施す。台部は浅い塊状をし、外面に斜線文・凹線文を施す。台部外面の調整は平行叩き目後回転カキメ、内面は同心円文當て具痕を残す。淡茶褐色をした生焼けのものである。

(1997.1998)は台部と脚部の接合部で、いずれも台部と脚部の境目に凸帯文を1条施し、後者は棒状浮文を4カ所に施す。前者は、脚部に列点文・凸線文を施し、長方形の透かしを千鳥に穿つ。後者は、列点文・凹線文を施し、長方形の透かしを1列に穿つ。いずれも、台底部内面に同心円文當て具痕を残し、後者は外面に脚部と接合するための放射状の籠痕を残す。

(2002)は口縁部と脚台端部を欠損し、(2003)は脚台端部を欠損する。前者は、半球状の台部に裾広がりの脚部をもつ。台部外面の調整は平行叩き目後部分的に回転ナデを施し、内面は回転ナデを施す。後者は、半球状の台部にわずかに外反する口縁部の端部がやや上方へ拡張し面をもつ。端部下に凸線文を1条施す。台部上端に凸線文・波状文、下端に波状文を施す。台部外面の調整は、平行叩き目後スリケシを施し、内面は同心円文當て具痕を残す。脚部との境目に凸線文を1条施し、裾広がりの脚部はいずれも、波状文および凸線文を施し、三角形の透かしを千鳥に穿つ。

(2004.2005.2027.2038)は、脚部のみ残存しており、(2005)は裾広がりに開く脚台端部が下方にわずかに拡張し面をもち、上端に凹線文1条を施す。最下段は無文帶で、以上に凸線文間波状文を施し、三角形の透かしを1列に穿つ。他は、裾広がりに開く脚部が端部近くで内湾ぎみに伸び、脚台端部がわずかに内・外に拡張し下端面をもつ。後者はいずれも、最下端部は無文帶で、(2004.2027)は凸線文間波状文ないしは列点文を施し、長方形の透かしを1列に穿ち、(2038)は凹線文間波状文を施し、最上段は長方形、以下三角形の透かしを千鳥に穿つ。

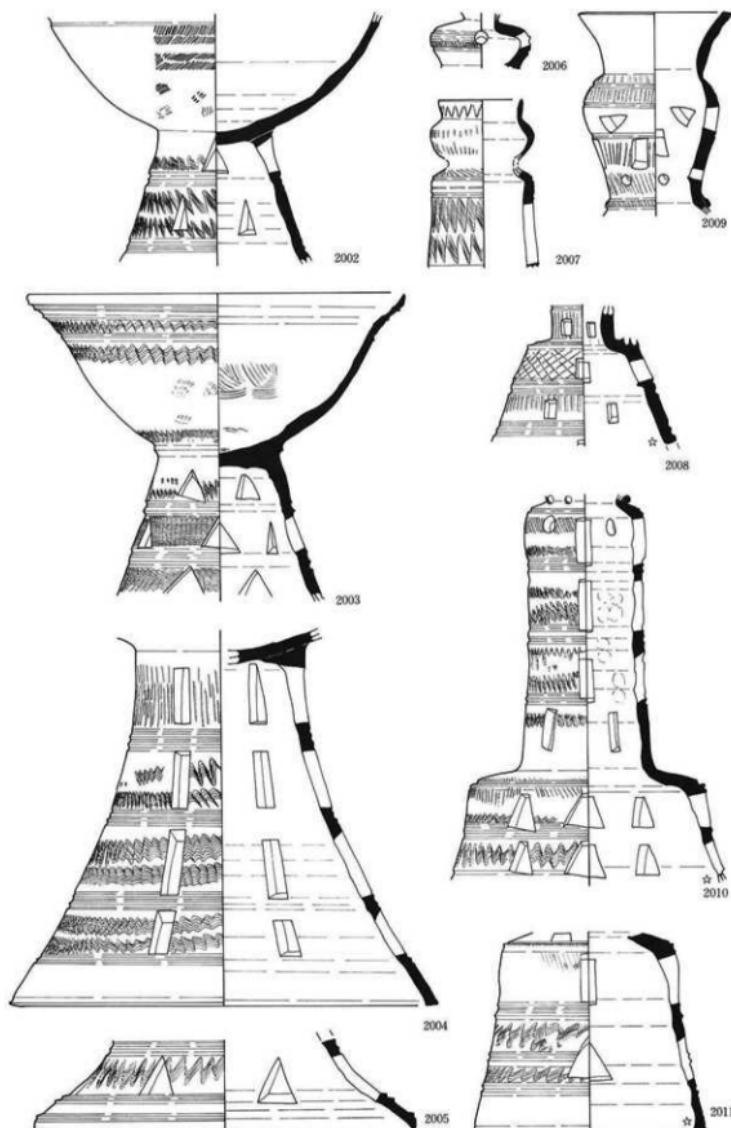


Fig. 290 H地区 灰原出土遺物(10)

8. 灰原出土の遺物

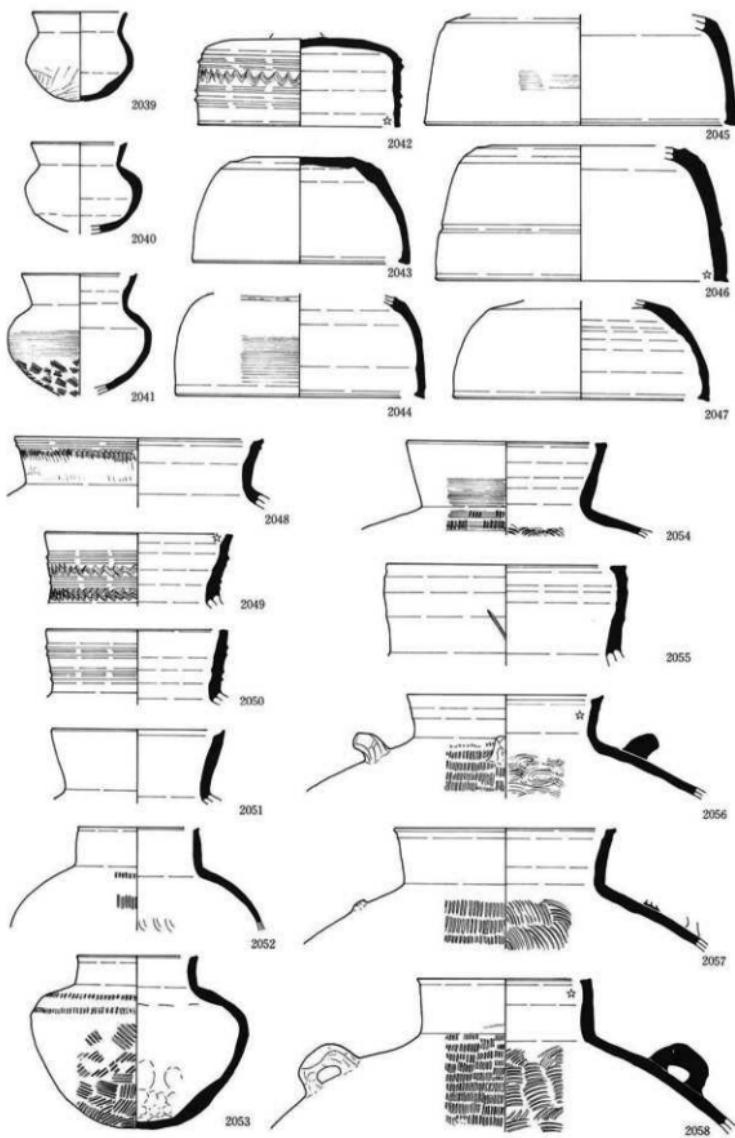


Fig. 292 H地区 灰原出土遺物(12)

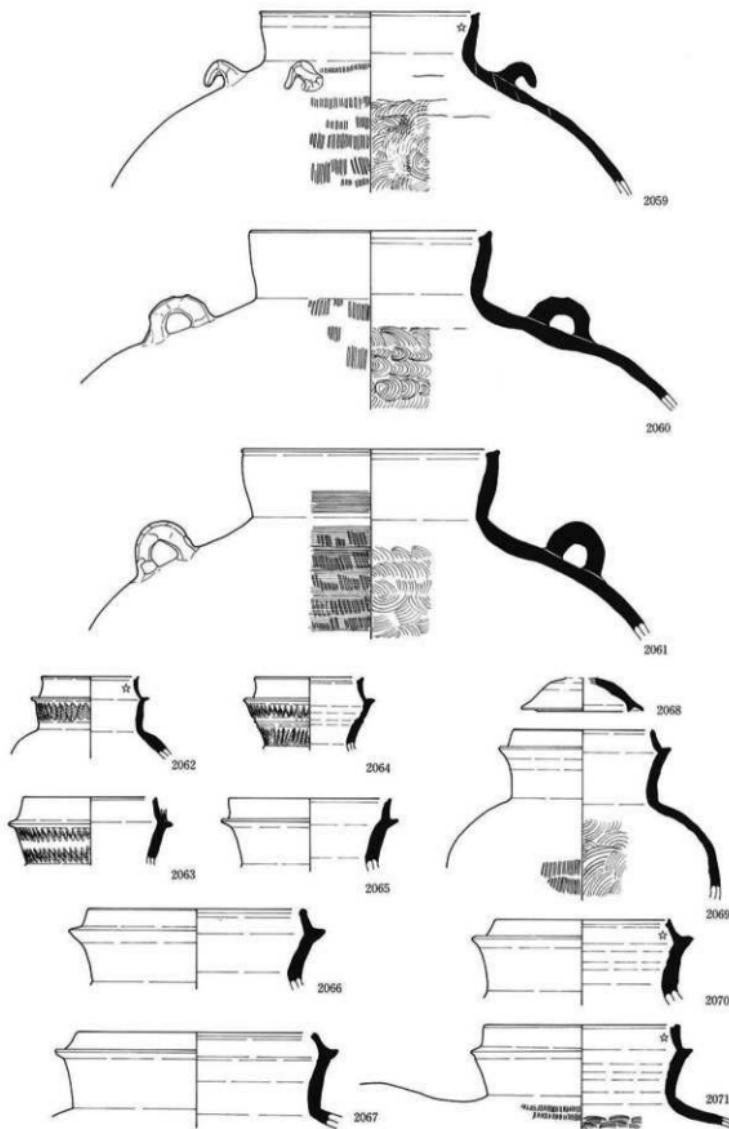


Fig.293 H地区 灰原出土遺物(13)

## 8. 灰原出土の遺物

2020.2029)が内傾する段をもつ。(2019.2022)は肩部が屈曲し、(2016.2018.2020.2021.2029~2033)は肩が張る。(2028)は、台付きのものである。(2034)は、口縁部上端が面をもち、偏平な体部に平坦な底部をもつ。体部上半に横位の環状把手を付ける。後者には、直口壺の口縁部よりやや短いもの(2036.2037.2040.2041)で、斜め外方に伸びる口縁部に球形の体部をもつ。(2037)は口縁部がやや内湾ぎみに伸びる。口縁端部は内傾する凹面をもつ。体部下半の調整は、いずれも外面平行叩き目を施し、内面同心円文当て具痕を残す。

その他のものに、土師器の小型壺の形態に似る(2035.2039)がある。斜め外方に伸びる口縁部の端部は丸みをもつ。(2035)は偏平な体部をもち、(2039)は球形の体部をもつ。後者は、体部外面に静止ヘラケズリを施す。

(2012~2014)は、小型短頸壺の蓋である。(2012)は、垂下する口縁部に丸みをもつ天井部をもつ。口縁部と天井部との境目に凹線文を1条施す。(2013)は、やや斜め外方に開く口縁部に丸みをもつ天井部との境目に稜線をもつ。(2014)は、わずかに内傾する口縁部にやや丸みをもつ天井部をもつ。口縁端部は(2013)が丸みをもち、他は、内傾する凹面をもつ。

大型の短頸壺には、口縁部がやや斜め外方に伸びるものと、内湾ぎみに伸びるものがある。前者は、やや小型の(2053)と(2048~2050.2054.2056~2058)がある。(2048)は、口縁端部がわずかに外方へ拡張し、内傾する面をもち端部下に凸線文を1条施し、頸部に波状文を施す。(2049.2050)は、口縁端部が上端面をもち、頸部に凸線文ないしは波状文を交互に施す。他は、口頸部が無文のもので、(2053)は、口縁端部が内傾する凹面をもち、肩の張る体部に丸底のもので、体部上端に列点文を2帯施す。体部の調整は、外面平行叩き目、内面同心円文当て具痕後シリケシを施す。(2054.2058)は、口縁端部がわずかに内方に拡張し、上端面をもつ。(2056.2057)は、口縁端部がわずかに内・外方に拡張し、内傾する凹面をもつ。後者には、やや小型の(2052)と(2051.2055.2059~2061)がある。(2051)は、口縁端部が内傾する凹面をもち、(2052)は、わずかに外方に拡張し内傾する面をもち、他は、わずかに内・外方に拡張し内傾する凹面をもつ。いずれのものも、体部の調整は、外面平行叩き目を施し、内面同心円文当て具痕を残す。(2054.2061)は外面さらに回転カキメを施し、(2058.2059)は回転ナデを施す。(2057.2058.2060.2061)は環状の、(2056.2059)は半環状の把手を付ける。

大型の短頸壺の蓋には、天井部中央につまみが付くもの(2042)と付かないもの(2043~2047)がある。前者は、垂下する口縁部の端部が面をもち、天井部がやや偏平で、口縁部との境目に断面三角形の稜線を施す。口縁部外面に凸線文間波状文を施す。天井部中央につまみの痕跡を残す。

後者は、わずかに開く口縁部の端部が内方ないしは外方へわずかに拡張し内傾する面をもち、偏平な天井部をもつ。天井部外面の調整は、(2044)が静止ヘラケズリを施す以外は回転ヘラケズリを施す。(2046)は、口縁部に凹線文を1条施す。他は、無文である。

有蓋壺には、小型で裝飾されるもの(2062~2064)と中・大型で無文のもの(2065~2067.2069~2071)がある。前者の(2062.2064)は口縁部が外反ぎみに内傾し、(2063)は内傾する。口縁端部は、(2062.2063)が内傾する段をもち、他が内傾する凹面をもつ。受部は横方向に拡張し、尖りぎみにおわる。頸部は、(2062)が筒状で、(2063.2064)が裾すぼまりである。頸部に波状文ないしは凸線文を施す。(2063)には、受部に蓋の小片が溶着していた。

後者の(2065)の口縁部が直立する以外は、口縁部が内傾し、受部は横方向に伸び丸みをもつ。頸部は裾すぼまりである。口縁部の端部は、(2065.2070)が内傾する段をもち、(2066.2069)が内傾する面をも

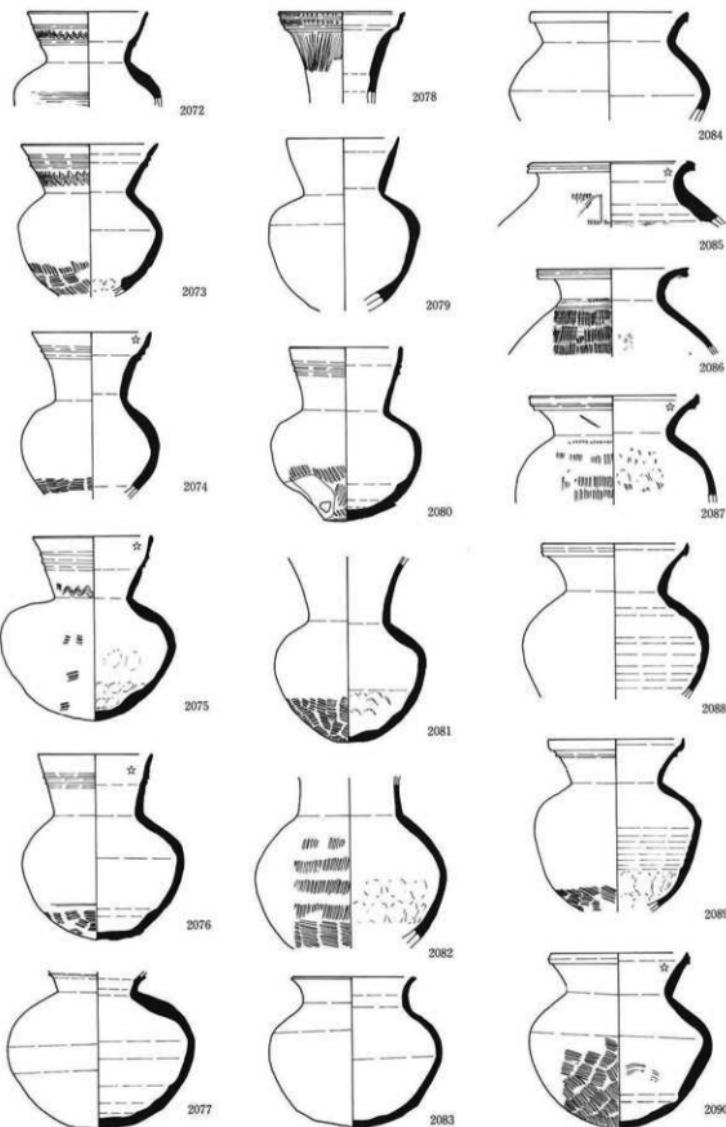


Fig.294 H地区 灰原出土遺物(14)

8. 灰原出土の遺物

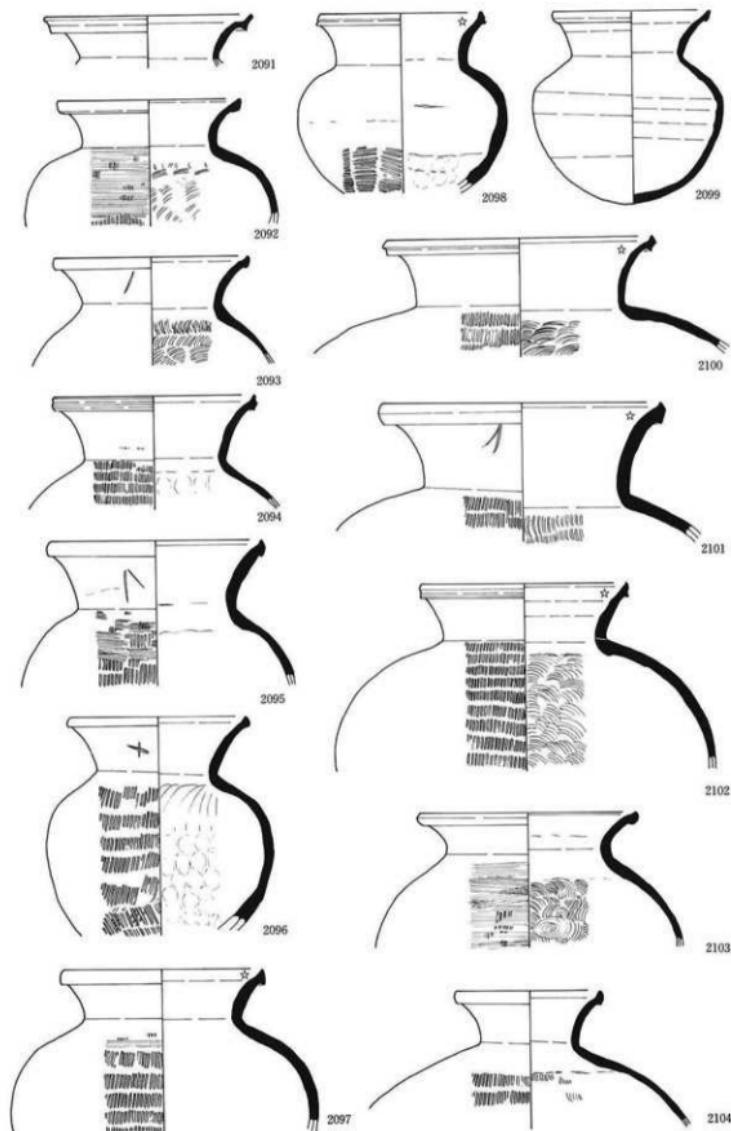


Fig. 295 H地区 灰原出土遺物(15)

ち、他は、内傾する凹面をもつ。(2069.2071)の体部外面は、平行叩き目を施し、内面は同心円文当て具痕を残す。

(2068)は、小型の有蓋壺の蓋でつまみを欠損する。口縁部は短く内傾し、口縁端部が尖りぎみにおわる。天井部は丸みをもち、口縁部との境目が斜め外方に拡張する。

直口壺には小型のものがあり、口縁部の形態で二種類に分けられる。斜め上方に伸びる口縁部をもつものと、壺形魁と同様の形態をしている二重口縁部をもつものがある。前者には(2076.2079.2081)と、口縁部がやや内弯ぎみに伸びる(2075.2080)があり、いずれのものも、体部はやや肩が張り丸底のものである。(2075.2076.2080)は口頸部の境目に凸線文を施し、(2075)は頸部に波状文を施す。

後者は、口縁部が斜め外方に伸び屈曲してさらに斜め外方に伸びる。(2073)は屈曲部上に凸線文を施し、(2072.2074.2078)は凹線文を施す。(2072.2078)は、口縁部に波状文を施し、(2073.2078)は、頸部に波状文を施す。体部の調整は、外面ナデを施すものが多く、(2072)が回転カキメを施す。体部下半および底部は平行叩き目を施すものが多い。(2081)の内面には、ツキコミ痕を残す。

小型の広口壺には、無文のものが多い。

小型の広口壺の(2077)は、口縁部の端部を欠くが、短い筒状の頸部に外反する口縁部をもち、やや偏平な体部に丸底のもので、口縁部の端部下に凸線文を1条施す。体部の内外面の調整は、いずれも丁寧な回転ナデを施す。(2083)は、外反する口縁部に筒状の頸部をもち、やや肩の張る体部に丸底のもので、口縁端部は笠切りによる。(2084)は、短く斜め外方に開く口頸部の端部が下方にわずかに伸び面をなし、肩の張る体部をもつ。(2086)は、短い筒状の頸部に外反する口縁部の端部が下方にわずかに肥厚し、凹線文を1条施す。体部の調整は、外面平行叩き目後回転カキメを施し、内面同心円文当て具痕を残す。

(2089)は底部を欠損し、斜め外方に伸びる口頸部の端部が上方へ拡張し面をなし、口縁端部下に凸線文を1条施す。肩の張る体部をもつ。体部下半の調整は、外面平行叩き目、内面同心円文当て具痕後スリケシを施す。(2096)は、やや大型で底部を欠損する。斜め外方に開く口頸部の端部は、上方にわずかに伸び面をなし、やや肩の張る体部をもつ。体部の調整は、外面平行叩き目を施し、内面上端指ナデ、以下同心円文当て具痕後スリケシを施す。

(2087.2090.2098.2099)は無文の小型壺で、(2090.2098)が完形品である。斜め外方に開く口頸部の端部が上下にわずかに伸び、上下2方に凹面をもつ。体部がやや張り、丸底のものである。体部下半の調整は、外面が平行叩き目、内面が同心円文当て具痕後半スリケシを施すものが多く、(2087)が外面回転ナデを付加し、(2099)が内外面ともにスリケシを施す。

中型の広口壺には、大きく分けると、短い頸部に口縁部が外反するものと、筒状の頸部に大きく外反する口縁部をもつものがある。

前者には、(2091～2095.2104.2139～2141.2165)がある。(2093～2095)は、前述の無文の小型広口壺をやや大きしたもので、口縁端部をわずかに上下に拡張し面をもつものである。(2091)は、口縁端部が上下に拡張し凹面をもつ。(2165)は、前者の形態に頸部に波状文間凸線文を施すものである。(2104)は、口径に比して体径が大きくなるものである。(2141)は、斜め外方へ開く口頸部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を1条施し、頸部に凸線文を2条施す。(2139)は、筒状の頸部に外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。頸部に波状文間凸線文を施す。(2140)は、斜め外方へ開く口頸部の端部が立ち上がり下方にわずかに拡張し、凹面をもつ。口頸部に波状文間凸線文を施す。

後者には、(2155～2160.2162.2163)がある。(2155)は、やや頸部が細く斜めに開く口縁部の端部が上

8. 灰原出土の遺物

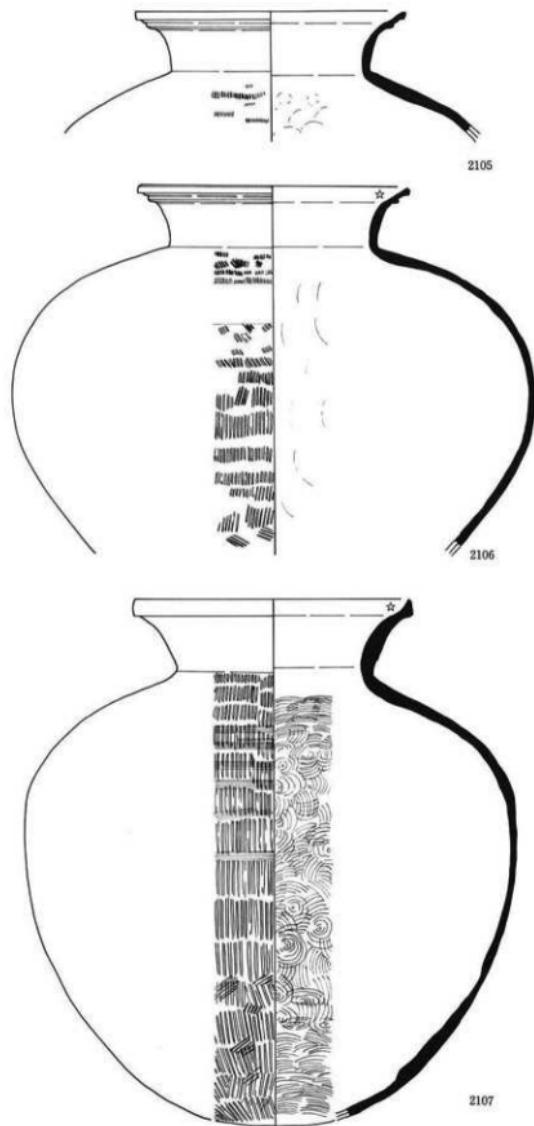


Fig. 296 H地区 灰原出土遺物(16)

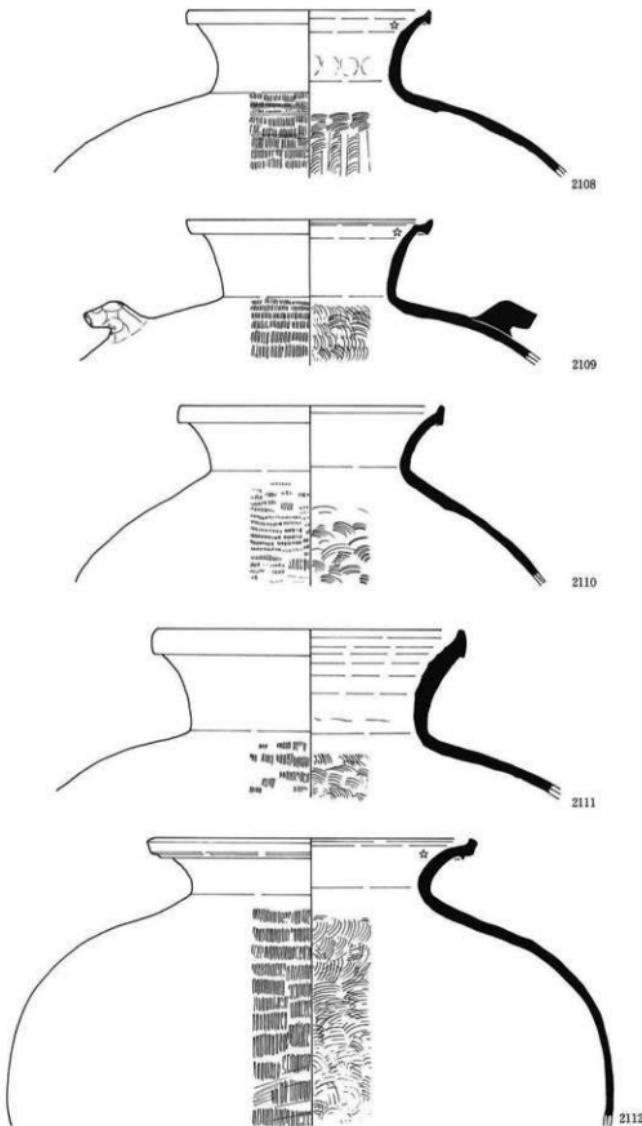


Fig. 297 H地区 灰原出土遺物(17)

8. 灰原出土の遺物

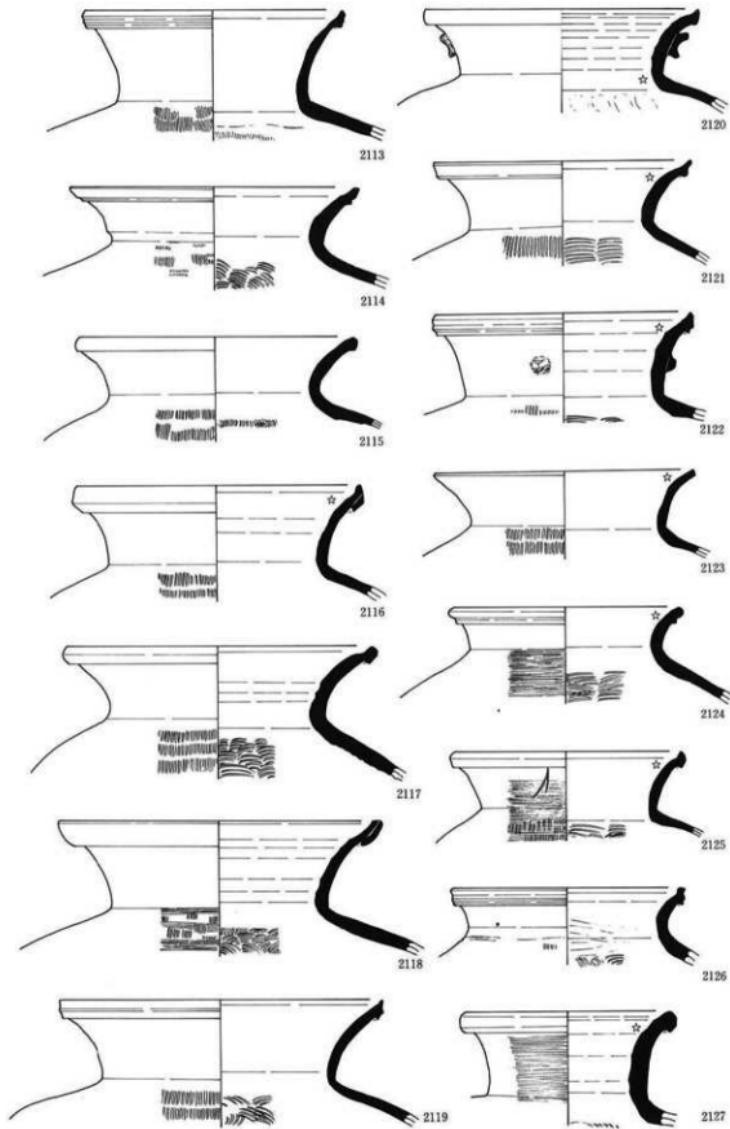


Fig.298 H地区 灰原出土遺物(18)

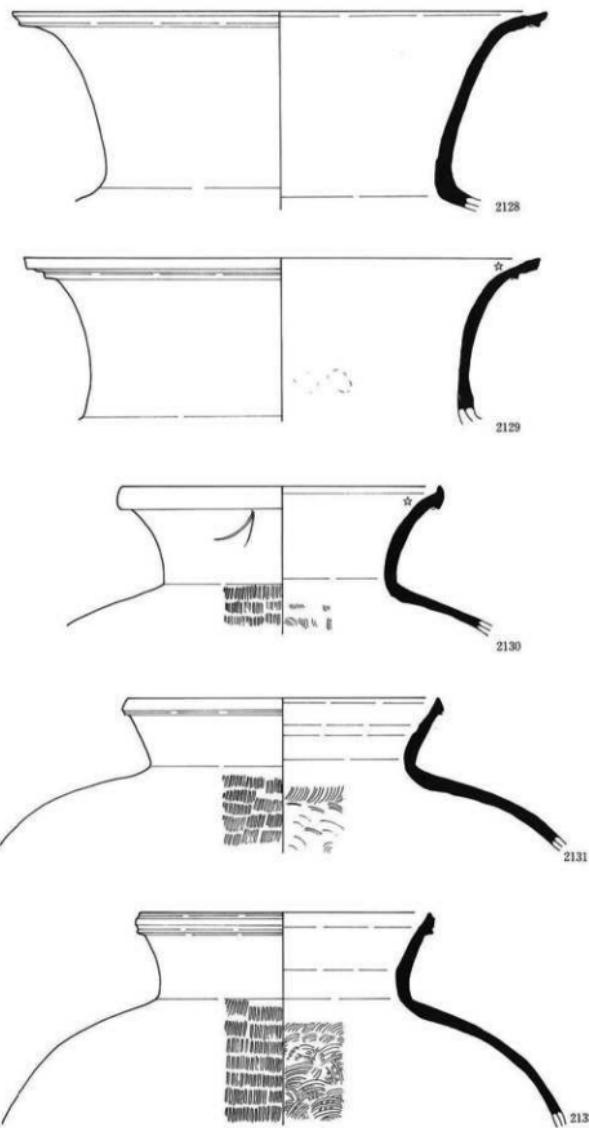


Fig. 299 H地区 灰原出土遺物(19)

8. 灰原出土の遺物

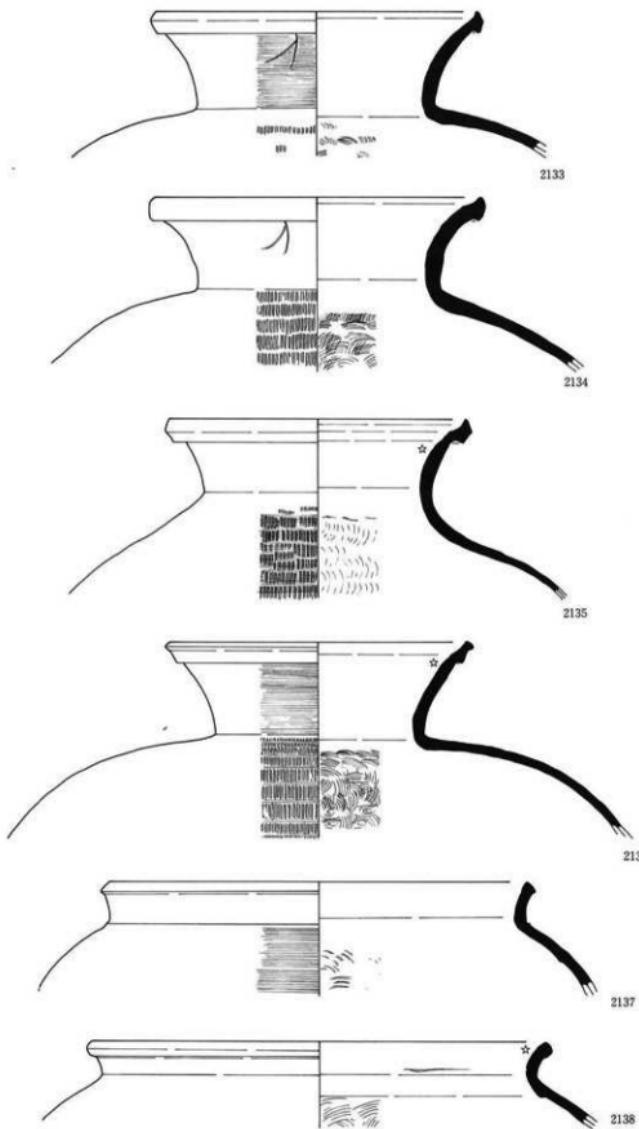


Fig.300 H地区 灰原出土遺物(20)

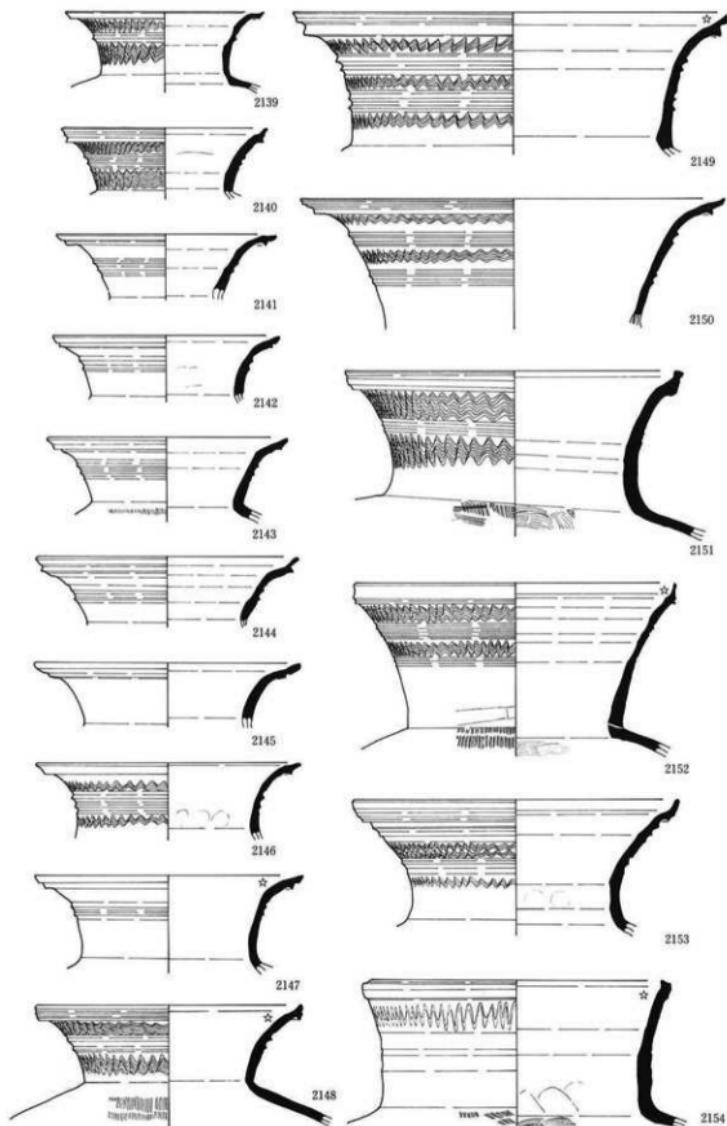


Fig. 301 H地区 灰原出土遺物(21)

8. 灰原出土の遺物

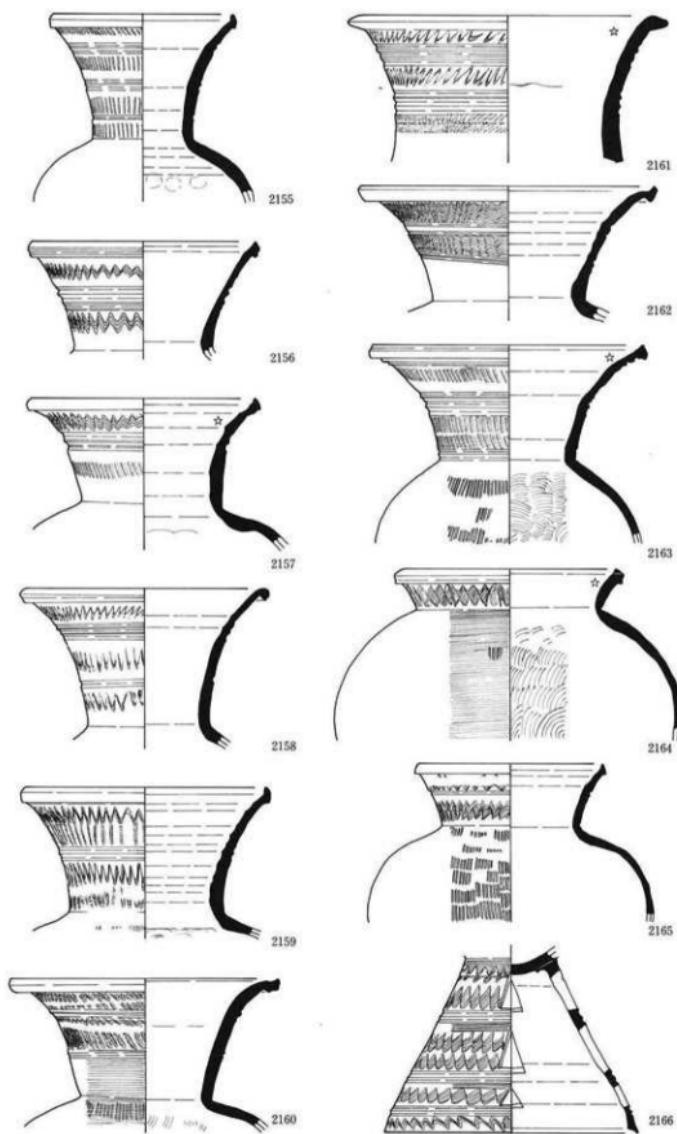


Fig.302 H地区 灰原出土遺物(22)

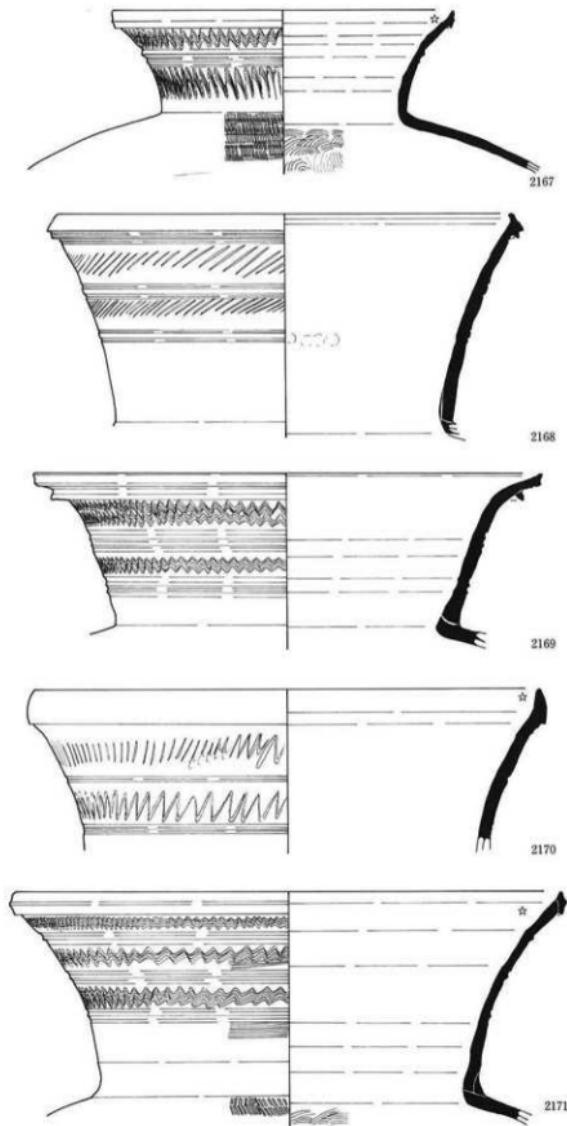


Fig.303 H地区 灰原出土遺物(23)

8. 灰原出土の遺物

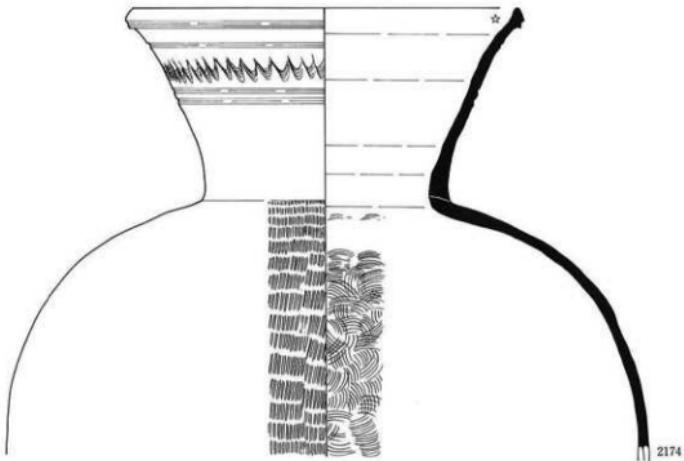
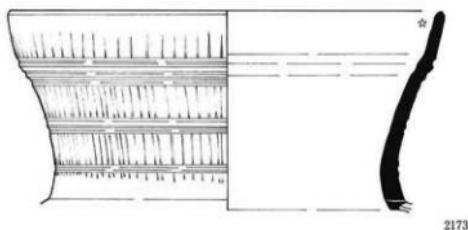


Fig.304 H地区 灰原出土遺物(24)

方に伸び、下方へわずかに拡張し面をもつ。口頸部に列点文間凸線文ないしは凹線文を施す。(2157. 2159. 2163)は、斜め外方に開く口頸部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。(2163)は、体径より口徑が大で端部下に凸線文を1条施す。口頸部に(2157. 2159)が波状文間凹線文、(2163)が列点文間凹線文を施す。(2156. 2160)は、斜め外方に開く口頸部の端部が上下方にわずかに拡張し、上下2方に面をもつ。頸部に波状文間凸線文および波状文間凸線文・凹線文を施す。(2162)は、下方にわずかに垂下し上下2方に面をもつ。口頸部に、波状文間凹線文を施す。

その他の壺に、頸部が短く斜めに開き、口縁部の端部が上下にわずかに拡張し、上下2方に面をもつ(2164)がある。頸部に波状文間籠描きの弧文を施す(P.L. 230)。(2166)は、脚部のみ残存するが、台付壺の脚部と思われる。裾広がりの脚部が端部近くで内湾ぎみに伸び、端部が内傾する凹面をもつ。文様帶は5段あり、凹線文間波状文を施す。透かしは三角形を3段1列に穿つ。

**壺・甕 壺・甕の類には、中～大型のものがあり、完形になるものはない。口縁端部の形状で分類できる。**

(2128. 2144)は、口縁端部が丸みをもち端部下に凸線文を1条施す。後者は頸部にも凸線文を施す。

(2105. 2106. 2129. 2142. 2145. 2147)は、口縁端部が面をもち、端部下に凸線文を1条施す。頸部が無文のものと凸線文および波状文間凸線文を施すものがある。

(2143. 2146. 2149. 2150. 2169)は、口縁端部の下方がわずかに拡張し凹面をもつ。大型のものは端部下に凸線文を1条施す。頸部に凸線文および波状文を施す。

以上の中には、大部分のものが口頸部破片であるが、体部を残すものは、外面に平行叩き目を施し、内面に同心円文當て具痕後丁寧なスリケシを施す。(2123)は、口縁端部を籠切りするもので、乾燥時に端部が破損したために作り直した二次口縁をなす。

(2152. 2153)は、口縁端部が上方へのび外端面をもつもので、いずれも端部下に鈍い凸線文を1条施す。口頸部に波状文および凸線文を施す。

(2102. 2107. 2108～2111. 2120)は、短い頸部に外反する口縁部の端部が上下にわずかに伸び面をもつ。いずれも無文のもので、(2109)は体部上方に半環状の把手を付ける。体部はいずれも外面に平行叩き目後部分的に回転ナデか回転カキメを施し、内面は同心円文當て具痕を残す。(2108)は、内面にさらに縱方向にナデを施す。(2120)は、頸部の2方に勾玉状浮文を施す。

(2131)は、口縁端部がわずかに立ち上がりわざかに下方に伸びる。端面下方に凹線文を1条施す。(2121)は、口縁端部が上下にわずかに拡張し凹面をもつ。

(2101. 2113. 2116. 2130. 2133. 2135)は、口縁端部が上下にわずかに拡張し上下2方に面をもつ。(2114. 2117. 2134)は、前者と同様の形態で口縁端部が全体にやや丸みをもつものである。(2119. 2122. 2132. 2167. 2171)は、口縁端部がわずかに上下に拡張し上下2方に凹面をもつものである。無文のものが多く、(2167. 2171)は口頸部に波状文間凸線文を施し、(2122)は頸部に乳頭状浮文を施す。(2100. 2168. 2174)は、口縁端部が上下にわずかに伸び、上下2方に面・凹面をもつ。口頸部に凹線文間斜線文および波状文を施すものがある。(2161)は、口縁端部が外方へ肥厚し尖りぎみにおわる。口頸部に波状文・凹線文・列点文を施す。(2103. 2115. 2127)は、口縁端部が丸みをもち肥厚する。

(2112. 2126. 2136. 2151)は、口縁部端部が立ち上がり上端面および外端面をもつ。(2151)は口頸部に波状文間凸線文を施す。

8. 灰原出土の遺物

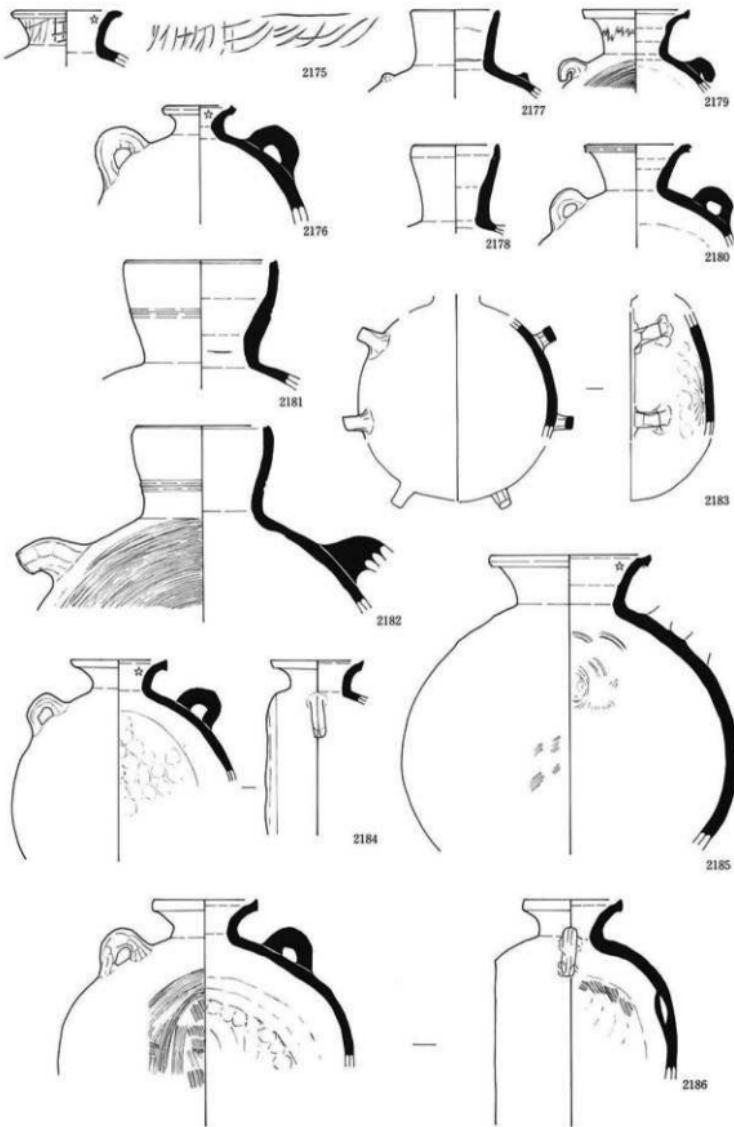


Fig. 305 H地区 灰原出土遺物(25)

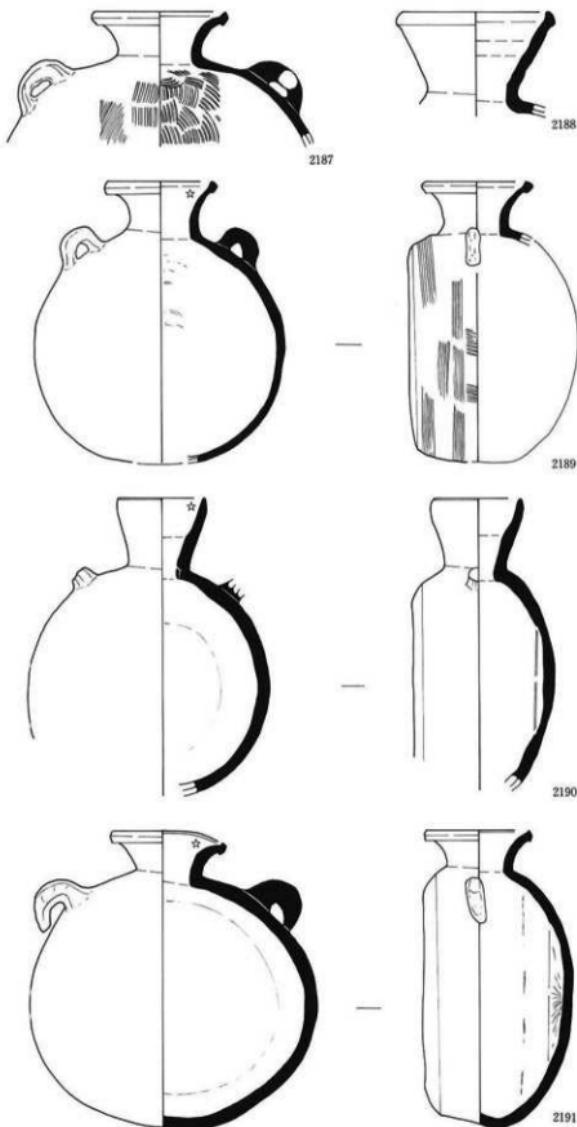


Fig.306 H地区 灰原出土遺物(26)

## 8. 灰原出土の遺物

(2154)は、筒状の頸部にわずかに開く口縁部端部が内外方にわずかに肥厚し、上端部が凹面をもち、外端面をもつ。口縁部に波状文を施す。(2172)は、口縁端部が上下にわずかに拡張し上下2方に面をもち、それぞれに凹線文を1条施す。口頸部に縦線文・凹線文を施す。口頸部内面に同心円文當て具痕後スリケシを施す。

(2118)は、斜めに開く口縁部の端部近くで内湾ぎみに伸び、端部外面に粘土紐を1条付加し、上端面をもつ。(2124)は、短い頸部に短く外反する口縁部の端部が下方にわずかに拡張し、上下2方に面をもち、下面に凹線文を1条施す。

(2170.2173)は、筒状の頸部に、外反する口縁部が屈曲してさらに上方に伸び、端部が丸みをもち、外端面をもつ。前者が口頸部に波状文・凹線文を施し、後者が口頸部間に縦線文を施し凹線文で区切っている。

(2137.2138)は、短い口頸部で口径と頸径にあまり差がないものである。口縁部の端部は前者が上下にわずかに拡張し、後者がわずかに肥厚する。

体部まで残すものが少なく、体部に(2136)は外面に平行叩き目を施した後、等間隔に浅い篦描き沈線文を施し、(2124.2137)は回転カキメを施す。頸部に松葉状「ノ」ないしは、逆U字状「匚」の篦記号文を施すものがままある。

**提瓶** 提瓶には、3種あり、口頸部が斜め外方に開くものと、直口および内湾ぎみにやや開くもの、全体形が定かでないが把手が多数付くものがある。

口頸部が斜め外方に開くものには、小型のものとやや大型のものがある。小型のものには、口縁端部が凹面をもつもの(2180)、わずかに立ち上がり面をもつもの(2179.2184)、わずかに立ち上がり上下2方に面をもつもの(2176)がある。いずれも全体形は定かではないが、体部の腹面が半球状をし背面が平坦面をもつ。(2179)は頸部に篦描きの波状文を施し、体側部に半環状の把手をつける以外は無文で、環状および半環状の把手を付ける。

やや大型のものには、口縁端部がわずかに立ち上がり面をもつもの(2186)、わずかに上下に拡張し面をもつもの(2188)、わずかに上下に拡張して上下2方に面をもつもの(2185.2187.2191)、端部が肥厚し上下2方に面をもつもの(2189)がある。いずれのものも、把手の残存しているものは、環状のものである。体部の腹面は半球状をし、背面は平坦面をもつ。体部の調整は、腹面の外面に平行叩き目を施し、(2185.2189)がその後スリケシを施し、(2186.2187)が回転カキメを施す。背面の外面はナデおよび指ナデを施すものが多い。内面は、同心円文當て具痕を残しその後指ナデを施すものもある。(2191)は、腹面内面に絞り目の痕跡を残す。(2175)は、斜め外方に開く口頸部の端部が上下2方に面をもち、頸部に篦描き文様を施す。

直口および内湾ぎみに開く口頸部をもつものには、小型と大型のものがある。小型のものには、わずかに開く口頸部の端部が丸みをもつもの(2177)、端部が直立し外端面をもつもの(2178)、内湾ぎみに開く口頸部の端部が丸みをもつもの(2190)がある。把手は、(2177)が乳頭状の、(2190)が半環状のものを付ける。体部の調整は、内外面ともにスリケシを施す。(2190)は、腹面内面に円盤を貼り付けた痕跡を残している。

大型のものは、内湾ぎみに開く口頸部の端部が、(2181)が内傾する凹面をもち、(2182)が内傾する面をもつ。いずれも頸部に凹線文を2条施す。体部腹面に回転カキメを施す。把手は、完存しておらず、

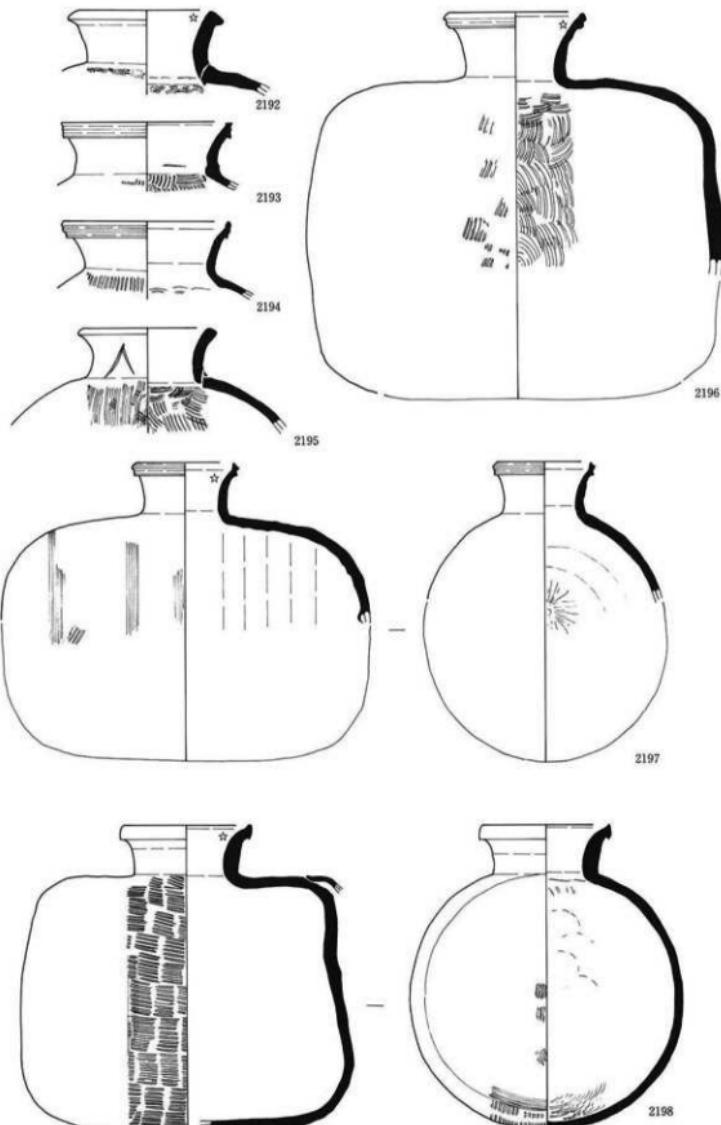


Fig. 307 H地区 灰原出土遺物(27)

## 8. 灰原出土の遺物

環状か半環状かは不明である。

把手を多數付けるもの(2183)は、完存するものが無く、体部のみが十数点出土している。全体に小振りのものが多く、体部が他のものと比較して偏平である。把手は体側部に横位に付けられ、面取りされるものと、されないものがあり、4個以上付くとおもわれる。体部内外面の調整は丁寧なナデおよび外面向転カキメを施すものが多く、腹面内面に絞り目を残す。

横瓶 横瓶には、口頭部破片が多く出土しており、完形のものは無い。短い筒状の頸部に短く開く口縁部に、俵状の体部をもつものである。(2195)は、口縁端部が丸みをもつもので、頸体部間に粘土紐の維ぎ目を残す。頸部に笠記号文を施す。(2192)は、口縁端部が下方にわずかに伸び面をもつ。(2198)は、口縁端部が上下にわずかに伸び面をもつ。(2194.2196.2197)は、口縁端部が上下にわずかに伸び上下2方に凹面をもつ。(2193)は、口縁端部が上下にわずかに伸び、上端面および外端面をもち、外端面に強いナデを2条施す。体部の調整は、外面に平行叩き目を施し、内面に同心円文当て具痕を残すもの多く、(2197)は、内外面ともに丁寧にスリケシを施した後、外面に回転カキメを施し、(2195)は、外面に回転カキメを施す。(2197)は、体側部に絞り目痕を残す。

(2196.2198)は、体側部が平坦で、体径に比して体幅が小のやや寸詰まりの体型である。(2198)の体側部には、坏蓋が溶着しており、1方の体側部を下面にして焼成されたことがうかがわれる。

壺 壺には、完形にちかくなるものが1点のみある。口縁部が直口のものと外反するものがある。(2199)は、外反する口縁部の端部が丸みをもち、端部下に凸線文を1条施す。体部はややふくらみ、上半に凸線文を1条施す。体部外面に平行叩き目を施し、内面にスリケシを施す。

(2200)は直口の口縁端部が内傾する面をもち、(2201)は端部がわずかに内方に伸び内傾する面をもち、(2202)は内外方にわずかに伸び上端面をもつ。(2201.2202)は体部上端に凸線文を1条施し、前者が体部外面に平行叩き目を施し、内面スリケシを施す。後者は内外面ともに指ナデを施し、内面に粘土紐の維ぎ目を7本残す。これのみが把手を残存し、牛角状のもので上面に箒切りを施す。底部は平らで透かし穴を穿つ。(2203)は底部のみ残存し、平坦な底部の中央に円形、周囲に梢円形の透かしを4個穿つ。

その他 その他の須恵器には、装飾部品がある。(2204.2205)は、小型壺の装飾部で、いずれも口縁部を欠損する。前者は肩部に列点文間凹線文を施し、底部中央に円形の穴を穿ち、後者は綾杉列点文・凸線文を施し、粘土紐の維ぎ目に強い回転カキメを残す。

(2207)は、馬形の装飾部で後ろ足および尻が欠損する。目・鼻の穴・手綱・尻繋は刺突文で表現され、口は切り込みを入れる。腹部中央に穴を穿つ。

(2206)は、甕の体部の肩部破片で断面三角形の貼り付け凸帯を縱位に施し、それとつなぐかたちで横位に1本施し、その交差した下端に渦巻き状浮文を施している。

溶着 溶着した須恵器には、様々のものがある。(2215)は、無蓋高坏の坏部内面に坏身が正位に溶着したもので、(2216)は無蓋高坏が重なった状態で溶着しており、(2217)は逆さまの坏身の上に無蓋高坏が乗る状態で、(2218)は有蓋高坏の蓋に高坏が2段以上重なっており、(2219)は無蓋高坏が3段以上重なり、(2220)は無蓋高坏に蓋坏が乗る。(2221)は坏身に高坏の蓋が乗り、(2222.2223.2225)は蓋坏がセッ

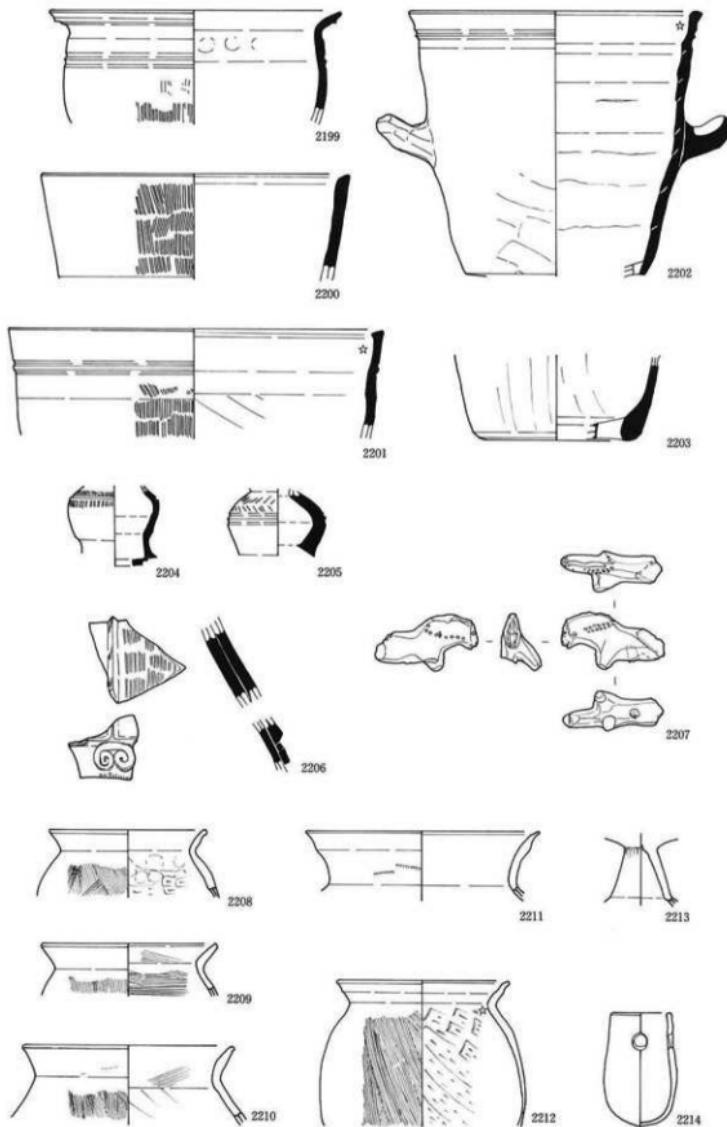


Fig. 308 H地区 灰原出土遺物(28)

## 8. 灰原出土の遺物

トで溶着し、(2224)は蓋が重なっている。(2227～2232)は杯蓋・杯蓋・杯身がそれぞれに溶着したもので、杯身・杯蓋が逆さに重なるもの、蓋・蓋・身・身・身・蓋・蓋・身、蓋・蓋・身、身・身2個、甕・身2・有蓋高杯等々である。

他に、図示しえなかつたが、甕底部に蓋杯セットで11個体溶着している例(P.L.234)がある。

(2226)は甕の口縁部内に杯蓋が逆さに重ねられたもの、(2233)は、大型甕の口縁端部に長脚1段高杯を3個以上掛けた例である。(2234)は、杯身や高杯の蓋の上に器台をのせた例で、実際は焼け歪みの大きな破片である。その他には、甕の底部上に甕の口縁部が溶着したものや、同様に蓋杯の類が溶着する例がある。

概して、蓋が付く杯身・高杯・有蓋壺・短頸壺の類はセットで焼かれたものや、大型のものの上に小型のものが乗せられる例が多くあり、窯詰めの様子を復元できる資料となるものである。

籠記号 篠記号を施すものには、蓋杯の天井部および底部外面や、甕の頭部に施されるものが多く、他に小型短頸壺の底部、大型短頸壺や提瓶の頭部等に施されるものもある。まれに器台の脚部(P.L.236)に施されるものもある。蓋杯のものには、「-」や「+」の記号を施すものが多く、蓋杯セットの場合には蓋か身のどちらか一方に施される(P.L.235-A.B.R)。甕の頭部に施される例では、『ノ』や『ロ』が多く(P.L.235-C～F.H.P.)、他に(P.L.236-V.W.Y)等がある。

成形・調整 以上、述べてきた須恵器の概略に加えて、成形・調整技法の顕著な例を以下に述べる。

①成形技法 須恵器の製作過程の第1段階である粘土の繋ぎ方が判別する例としては、外面および断面に、その接合痕が残されている場合にできうるものである。その例としては、(P.L.237)がある。その他には、絞り目を残す事がある(P.L.237)。

②調整技法 つぎに、第2段階として粘土の接合をよくするために、調整を加える。その調整には、器種および部位によってより有効な手段が用いられる。調整の種類には、轆を使用して施されるものと、そうでないものがある。前者には回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転カキメ等があり、後者には叩き目・当て具痕・ナデ・ケズリ・カキメ等がある。叩き目には、(P.L.240～242)のように平行叩き目、格子叩き目を施すものがあり、当て具痕には(P.L.240～245)のように、同心円文当て具痕と棒状のツキコミ(P.L.239)等がある。ナデ・ヘラケズリ・カキメ等は叩き目や当て具を施した後、スリケシとして施される場合がままある。

③文様 須恵器に施される文様は、多種あり、多用されるものは、波状文・列点文・斜線文・凸線文・凹線文等があり、他に、竹管文・浮文・鋸歯文・斜格子文等がある。

波状文には、籠描きのものと櫛描きのものがあり、灰原から出土したものには、前者が1点のみある(1993)。櫛描きのものには、丁寧に施されるものと乱雑に施されるもの等、様々である(P.L.247)。

列点文・斜線文等は、それのみが施されることが少なく、他の文様と組み合わされることが多い(P.L.248)。

凸線文・凹線文は、文様として用いられる場合と区画するために用いられる場合がある。前者の場合は他の文様と組み合わされるものが多く、後者の場合は蓋杯の稜線や甕の口縁端部の成形に使用されるものである(P.L.248)。

他の文様は、散見されるもので、浮文には円形(2010)・勾玉状(2120)・棒状(1998.2206)・乳頭状

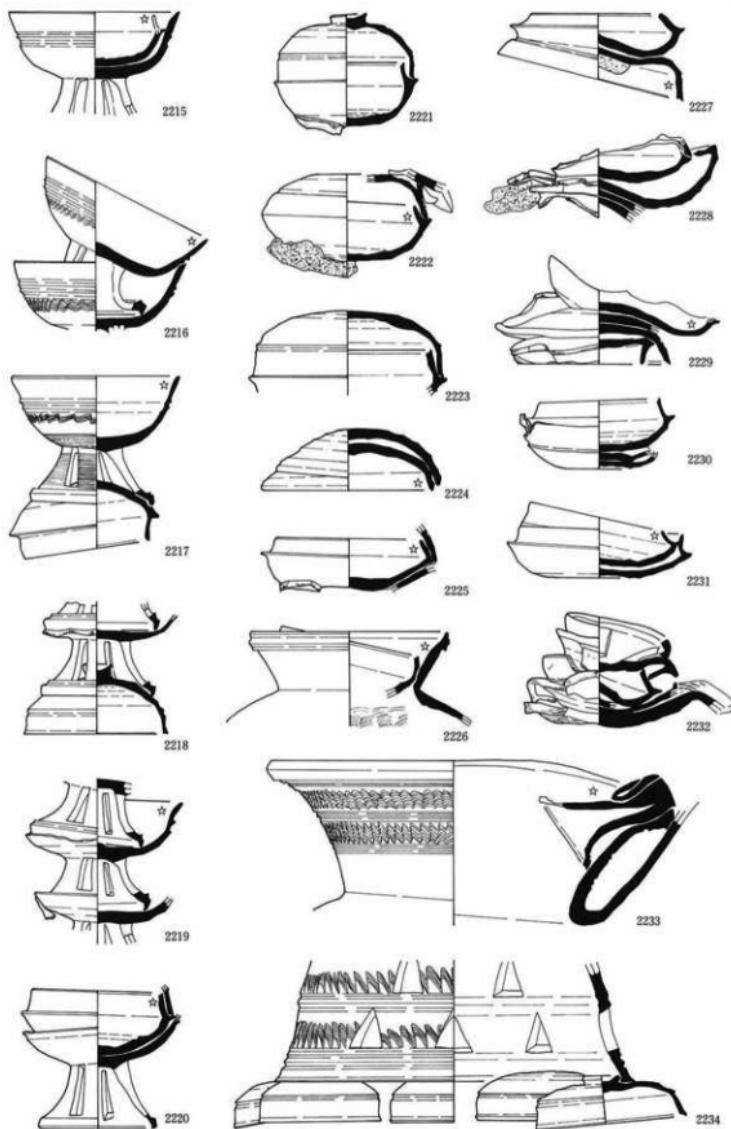


Fig.309 H地区 灰原出土遺物(29)

## 8. 灰原出土の遺物

(2120)・渦巻き状(1994.2206)のものがある。

焼き台 焼き台には、前述した高坏(1869)に加えて、子供の頭大の赤く焼けた石や窯壁か床面の焼土塊を用いたものが出土している(P.L.234)。

以上の須恵器に加えて土師器がわずかに出土している。

### 2) 土師器

土師器には、完形品が無く、壺の口縁部破片等がわずかにあり、飯蛸壺が完形で1点のみある。

(2208~2210)は、短く外反する口縁部が面をもつ。体部外面はいずれもハケメを施し、内面はそれれへラケズリ、ハケメ、ナデを施す。(2211)は、斜め外方へ開く口縁部に、端部が内傾する凹面をもつ。(2212)は、内湾ぎみに開く口縁部の端部が内方にわずかに肥厚し、内傾する面をもち、ややふくらむ体部である。体部外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。(2213)の高坏は脚部のみ残存しており、裾広がりに伸びる脚柱部から屈曲しさらに開く脚台部をもつ。(2214)の飯蛸壺は、直口の口縁部の端部が上端面をもち、やや下膨れの体部に丸底のもので、弥生時代中期のものとおもわれ、下層からの混入である。

以上、H地区の灰原出土の土器の概略を記述してきたが、須恵器に関しては、大きくは、3区分出来よう。

その一は、蓋坏および鉢・壺の類の外面に静止ヘラケズリを多用し、高坏・器台・壺・壺等に断面三角形の鋭い凸線文を用い、丁寧な波状文を施す一群である。壺・壺の類の体部内外面の調整に、丁寧なスリケシを施すものが多くある。これらのものは、概して、緑灰色の自然釉をかぶらず、灰白色のわずかな付着痕を残すものが多い。胎土は、全体に暗緑灰色を示すものが多く、2~3mmの砂粒を多く含んでいる。やや焼きが甘い感がする。

その二は、蓋坏が小型のものに代表される。蓋坏・高坏・甕等の口縁部の端部が内傾する凹面もしくは段をもつものが多い。壺・壺の類の口縁部の端部が、わずかに立ち上がり面をもち、体部外面に平行叩き目を施した後、回転カキメを施すものがあまある。体部の内面に同心円文當て具痕を残すものが多い。文様として施される凸線文は、断面三角形であるが鈍くなる。これらのものは、概して、青灰色を示すものが多く、断面セピア色をするものもあまある。砂粒の混入が、わずかで堅牢な焼きのものが多い。

その三は、蓋坏が大型のものに代表される。蓋坏・高坏等の口縁部の端部が丸みをもつか内傾する段をもつものが多く、回転ヘラケズリの施し方が粗雑である。壺・壺の類の口縁部の端部がわずかに上下に拡張するものが多く、全体的に端部が丸みを帯び、口頭部が短いものが多い。体部外面の調整は、平行叩き目後回転カキメで、叩き目をスリケシするものもある。施される文様は、四線文や粗雑な波状文が多く、波状文を簡略化させた斜線文や縦線文がある。これらのものは、概して、灰色のものが多く、生焼けに近い灰黒色をするものも多い。2~3mmの砂粒を含み、断面がビスケット状のものがある。

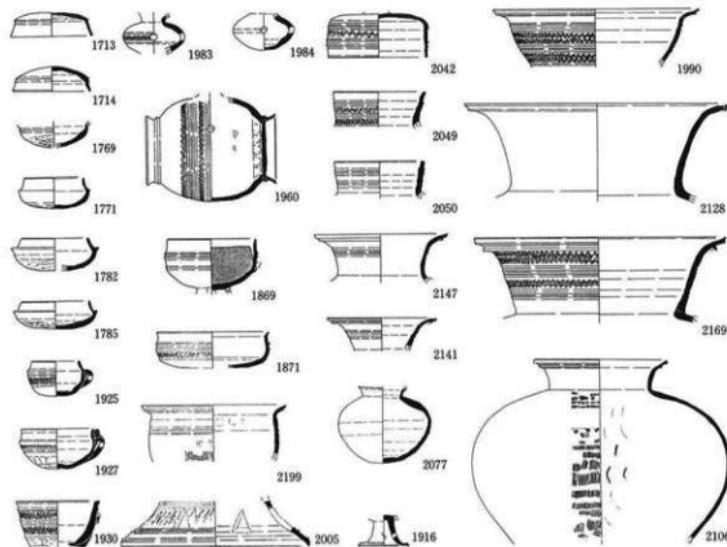


Fig. 310 H地区 灰原出土遺物分類1



Fig. 311 H地区 灰原出土遺物分類2(1)

8. 灰原出土の遺物

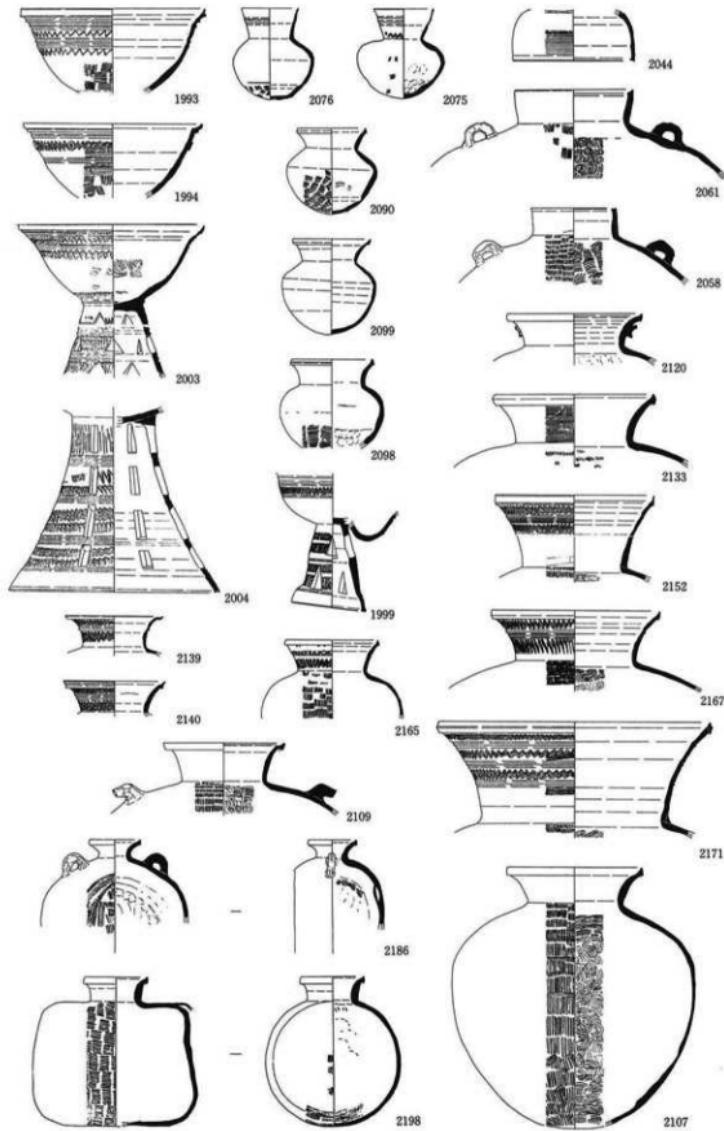


Fig. 312 H地区 灰原出土遺物分類 2 (2)

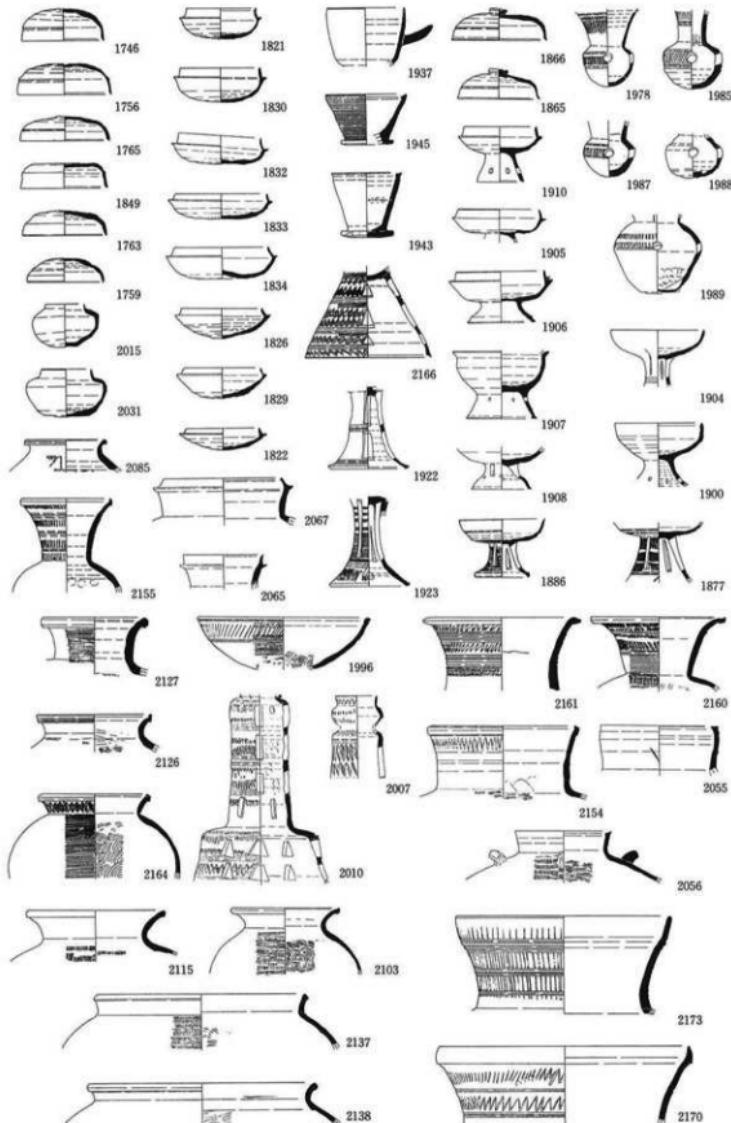
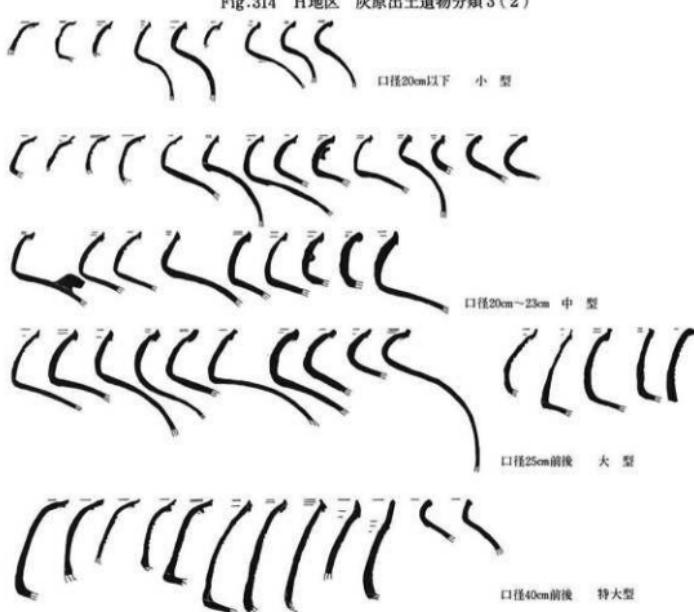
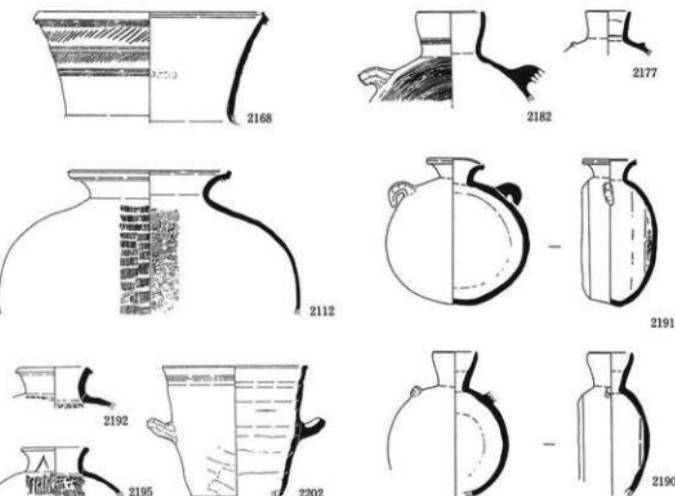


Fig. 313 H地区 灰原出土遺物分類3(1)

8. 灰原出土の遺物



## 3) 数量的検討

## a. はじめに

小阪遺跡の須恵器窯は、本体が調査区外にあるために灰原のみを調査し、大量に投棄された不良品の須恵器を回収した。本来的には全数調査が望ましいが、この作業には絶望的なほどの時間と労力が必要であり、到底われわれの手に負えるものではない。そこで調査時にはコンテナを一単位として登録番号が付与されているので、これを手がかりに一つのコンテナに収納された遺物単位で標本抽出し、母集団である灰原総体を推定しようと試みるものである。ちなみに自然科学分野からのアプローチは他項に譲り考古学的な検討に主眼を置くことにしたい。

ここで統計処理を行うにあたっては、以下にあげる諸点について留意しなければならない。

① まず、灰原の遺物総体の評価についてである。一般的に須恵器窯の調査に何が期待されるのであるか。操業の期間、つまり型式学的組列と床面の重複関係が第一点。器種構成とその量的な関係が第二点。さらに製作技術と工人系譜あるいは工人数の関係にまで言及できれば遺物に関しては一応の成果を得たと理解してよからう。ところが灰原の遺物はすでに検出された状態で人為的な選択が行われ、投棄されたものであるという前提条件から検討を進めなければならない。第一点の操業の期間については型式学的組列を重視すれば、上限と下限を知ることは比較的たやすいが、器種構成とその配分は、須恵器窯本体が操業時に生産していた実数と同様などとは到底考えがたい。しかも、常に時間を追って変化するはずの数量であるから、數次にわたる堆積資料である灰原の遺物を検討する際には、時期ごとにグルーピングした後にその比率を導いてやらねばならない。ただし、このグループが遺構としての床面単位の資料と合致しているかどうかを検証する方法は現状では見いだせない。

② 次に問題となるのは遺構としての灰原の取り扱いである。今回の灰原は当初、2基の須恵器窯によって形成されたものと考えられていたが、現状で観察する限り、1基のみが調査区外に確認されている。したがって、通常、窯から投棄された不良須恵器は扇形に堆積し、一つの窯に一つの灰原が形成されるという図式が成立するなら、当該灰原の遺物に対しても水平、あるいは垂直分布上で特色ある偏りを見せるか否かを検討する必要があろう。当然、ここでも検討の結果として得られた分布の特色が1基の窯から數次にわたり「かけだされた」もののなか、複数の窯からもたらされたものなのかを判断するのは至難の技であろうことは容易に予測できる。しかし、窯本体の調査が行われていない以上、この点においての検討が行われない限り、調査した灰原に対しての評価を与えることは不可能、あるいは非常に説得力に欠けるデータの呈示に留まると言えよう。

## b. 標本抽出と分析の前提

さて、では上述したような問題点を踏まえて小阪遺跡の灰原を検討する場合、いかなる方法を用いればよいのかを具体的に見ていく。

当該灰原の資料は、前章までに述べてきたように調査終了の時点までに渾然とした数量ではあるが約2000コンテナの須恵器や窯体破片等を回収している。この中には二次的な過程を経て回収したものや検出位置の不明な資料が混在しているので、2m×2mのグリッドを設定して検出した資料のみを検討の対象とする。遺物は残念ながらコンテナ(54cm×34cm×15cm)単位で無作為にグリッド内のものをすべて回収するという方法を用いた。したがって、遺物の水平分布はグリッドごとに含まれる数量でのみ呈示することができ、垂直分布にいたっては復元が不可能である。この場合、地区の明確な653コンテナについては全数調査が必要であろう。ここで最も有効な手段として考えられるのはコンテナごとの重量を測

## 8. 灰原出土の遺物

定し、平面上に表示することであるが、様々な制約の関係で今回は検討の対象とすることはできなかつた。したがつて前述の②で触れたように以下に述べる分析の結果は灰原を形成した須恵器窯が單一であるという仮定上でのみ有意なものと言える。この点において将来的に重要な課題を残し、極めて不完全な結果に終わったことが悔やまれる。

コンテナの内容、すなわち、遺物の検討に際しては冒頭で述べたように以下のような方法で標本を抽出して、全体の傾向を推定する。

仮に有限の母集団の大きさをNとした場合、その母平均、母分散、母比率を $\mu$ 、 $\sigma^2$ 、 $p$ とし、標本の平均、分散、比率が $\bar{x}$ 、 $S^2$ 、 $P'$ で表されるとする。信頼度がta、精度がbになった場合の標本数nを標本比率から導き出す計算式は、

$$n = \frac{N}{\left(\frac{b}{ta}\right)^2 \cdot \frac{N-1}{P'(1-P')} + 1}$$

となる。この結果、当該資料の母集団653コンテナから信頼度95%、精度0.05、母集団比率0.5として抽出されたのは242コンテナである。さらに乱数を発生させて該当するコンテナ番号を決定した。

このようにして抽出した242コンテナの遺物を統計学的に検討する方法であるが、基礎データとしては、上述したように器種構成とその量的配分、及び器種別の型式学的組列が示されることが望ましい。器種構成については『陶邑古窯址群I』、『陶邑』I～IIIの形式分類を基準に土器片を観察する。この作業は同時に型式を認定することも兼ねることになる。ここで問題となるのが田辺、中村両氏による編年上の視点の相違である。しかしながら、現在のところ両氏の説を批判検討する余力がないので、いたずらに混乱を招くことを避け、当該灰原に関連する編年の併行関係のみを呈示しておく。個々の遺物に関しては以下に掲げた両氏の段階（あるいは型式）を併記することで、おそらくその個体への相対的な理解が得られるものと考える。

〔中村編年〕

〔田辺編年〕

I 型式	1段階	T K73型式
	2段階	T K216型式 (ON46型式)
	3段階	T K208型式 (MT84型式)
	4段階	T K23型式 (KM1型式)
	5段階	T K47型式
II型式	1段階	MT15型式
	2段階	T K10（古）型式
	3段階	T K10（新）型式 ↑
	4段階	T K43（古）型式 (MT85型式)
	5段階	T K43（新）型式 ↓

6段階	TK209型式
III型式 1段階	TK217型式

各器種に分類する作業と時間軸への位置づけが終了した後、その構成比を個体数の復元に基づいて灰原全体および各段階（型式）において推定するのが本来的な作業であるが、今回は全体の構成比についての検討にとどめた。

調査で回収された遺物はほとんどが破損しており、本来なら、全破片単位で接合関係や残存度、製作技法、胎土など様々なファクターが考慮された上で個体識別がなされ、その結果としての個体数によって構成比が推定されてしまうべきであろう。とりわけ、破片の接合関係は重要であり、その検討を欠かすことはできない。たとえば、1グリッドに複数のコンテナが存在する場合、抽出されたコンテナの遺物と同一個体の破片が別の未抽出のコンテナに含まれる可能性は非常に高いと考えられ、抽出資料の個体推定数を母集団に戻してやる過程で同一個体を2度カウントしてしまうという問題を内包している。しかし、今回の場合、統計学上で許容される範囲を考えて、抽出した242コンテナ内で可能な限り、このような個体識別の方法を採用する必要があるが、母集団としての653コンテナ全てに対しては、たとえデータ的に重複するとしても誤差の範囲と見なし、特に考慮の対象とはしなくてよいこととした。

さらに統計学的な立場から見れば、構成比を推定する際に個体数の復元に関して残存度をどのように取り扱うのかという点で2種類の方法が存在する。仮にここに口縁部の残存度50%の坏身破片が2点あったとしよう。これらが、法量的には同一であるが胎土や色調が異なり、完全に違う個体であると認識できるものであった場合にその認識を重視して2個体とするのか、50%という残存度を重視して数量的に1個体であると考えるのかである。常識的に人文科学系の思考では2個体と判断するのが通有であろう。ところが後者の考え方もあるがち誤りであるとは言えない。なぜなら、前者の場合、実際には観察の視点が個人によって異なり、微妙な差異を判断する能力の大部分を経験に依存しているため、必ずしも信頼度が高いとは言えないからである。

そこで今回検討する資料については、基本的に個体数を口縁部の遺存数で決定し、それをこの2種類の方法で同時にい、その結果の違いに対しての評価を与えることとする。ただし、破片重量も測定してその合計を各器形ごとに設定したモデル重量で除し、個体推定数を導き出す。そして、口縁部の遺存数から考えた個体数と比較検討する。この作業で資料から得なければならないデータは、接合作業が終了したとして、口径・器高などの法量、口縁部の残存度、破片の乾燥重量、胎土、色調、製作技法上の細部形態の差異である。これらは、器種ごとに若干変化するので詳細は後項によられたい。

次にここで認識された個体別の形態変化が、確実に先学の型式学的組列と合致するのかどうかを検証するために多変量解析手法によるデータの分析を行う。ただし、この分析については須恵器を蓋坏という形態変化が著しいもののみで代表させるという從来からの方法を踏襲する。

#### c. 基礎データの採取と分析方法

先述したような目的に沿って統計処理を行うために必要なデータは、主な器種ごとに以下のように定め、全てを実際の遺物から直接求めた。なお、全データに共通の項目は口縁部の残存度、器高、口縁部径、口縁端部形状、重量、色調（焼成の具合）、自然釉のかかり具合、焼け歪み・割れ・溶着の有無、ロクロの回転方向、ヘラ記号の有無である。データには量的なものと質的なものがあるが、質的データについては数量化の後に処理する。

## 8. 灰原出土の遺物

### [アイテムG／個体の製作過程]

(カテゴリー00) ヘラ記号：ヘラ描き記号の有無と種類。

1 × 2 + 3 □ (U) 4 Δ (V)

5 | 6 || 7 ↗ 8 + 9 その他

(カテゴリー01) 軸の方向：個体が内外面にどの方向から被灰（釉）しているかを表記。

(カテゴリー02) 歪みなど：個体が不良となった原因。

1ひび割れ 2歪み（大） 3歪み（中） 4歪み（小）

5生焼け 6溶着 7破裂

(カテゴリー03) 溶着器種：焼成時に溶着した別個体の器種と数。溶着した部位も。

### [アイテムH／備考]

#### d. 器種構成比

こうして採取されたデータから器種構成の比率を推定してみることにしよう。Tab.34に掲げるのがそれである。ここでいう不明坏類とは、蓋か身か、あるいは高坏の一部かを判断できないものを指し、甕類としたものの中には、若干壺との判別がつかなかったものが含まれている。

まず、器種ごとの破片数であるが、蓋坏の占める割合が圧倒的で壺や甕を合わせたものよりも上回る。この破片数というのは、それぞれの個体の割れ方等によってまったく異なり、基準が定まっていないものである。しかしながら、従来にはデータとして採用されていたこともあるようなので、これでも構成比を算出してみると、蓋坏が5割強、壺や甕類で3割程度、残りがその他の器種となっている。

次に今回主眼を置いたデータであるが、口縁部の残存比率から個体数を求めてみよう。1個体の残存率が100%であるとして、坏身、坏蓋ともに250個体程度、統いて高坏、壺、甕類が70個体程度となっている。これをもとに構成比を算出すると、蓋坏が6割強、高坏、壺、甕類が各々1割程度となる。この際に注意しなければならないのは、不明坏類としたものが1%に満たない数字となっていて、データ的にはほとんど影響していないという点であろう。

最後にすべての資料から採取した重量での構成比率を見てみよう。興味深いのは、壺や甕類が破片数による場合とほぼ近似した値を示しているのに対して、蓋坏が減少傾向にあることである。これはやはり個体の比重が相当影響しているものと考えられ、破片数同様信頼に値するデータではない。なお、各器種ごとのモデル重量からの検討を行う予定であったが、基準とすべき陶邑の資料に完形品が少なく、今回はやむなく見送った。

これらの各算出方法による器種構成比率を円グラフとして図示したものがFig.316である。口縁部の残存比率によって算定したものが、ここではもっとも妥当な数値を表していると考えるが、実際に遺物に直面して我々が受ける印象でも、やや高坏の占める割合が少ないとと思われるが、ほぼこのような

Tab.34 抽出資料の総量と構成比

年号	年齢	不明	高坏	高身	高蓋	壺	甕	口縁部	不明	高坏	高身	高蓋	壺	甕	口縁部	不明	高坏	高身	高蓋	壺	甕
1943	2074	2199	199	256	1000	46	13	14	155	8	3044	259	106	157	43	21	20	21	20	21	20
1951	385		1308								3044	341	200	21	20						
1952	385		1308								3044	341	200	21	20						
明治	2554	4	94979	672.5	1008	641775336.5	718	166.5	163	927.5	94	7157.3	1087.5	1966	342.5	548.5	529.5	49.5	52	5	0
明治	2554	8	949.8	6.7	19.1	64.1	63.4	7.5	1.7	1.6	0.3	0.9	71.6	14.9	20	3.4	5.5	5.2	0.5	0.5	
明治	2554	9	31.9	0.9																	
口縁部	2554	9	31.9	0.9																	
口縁部	2554	10	10.3																		
口縫部	2554	10	10.3																		
高身	154000	9	181568.5	87336	11680	14594	94581	7002	1850	1877	20891	1821	227377.4	31307.5	17709	28641	9777	8343	2762		
高身	154000	10	20.4	9.8	1.3	1.6	10.6	0.9	0.3	0.2	2.3	0.2	20.5	3.1	2	3.3	1	0.6	0.2	0.1	
高身	154000	10	20.4	9.8	1.3	1.6	10.6	0.9	0.3	0.2	2.3	0.2	20.5	3.7	4.3	0.6	0.3				
高身	154000	10	20.4	9.8	1.3	1.6	10.6	0.9	0.3	0.2	2.3	0.2	20.5	3.7	4.3	0.6	0.3				
高身	154000	10	20.4	9.8	1.3	1.6	10.6	0.9	0.3	0.2	2.3	0.2	20.5	3.7	4.3	0.6	0.3				

比率を直感しているのではなかろうか。ただし、あくまでもこの比率は灰原全体としてのデータであり、時期別など細分化した検証を経ていないものであることを見忘れてはならない。

#### e. 蓋坏の多变量解析

当該灰原形成の母胎となった須恵器窯は、まぎれもなく陶邑の範囲に含まれるもので、これらから、出土する須恵器に関しては、前述したようにもはや確固たる編年観が打ち立てられている。しかしながら、これらの持つ形態的な特徴であるとか、法量の変化は、きわめて漸移的なもので、しかも発達と退化の交錯した複雑な現象である。実際の調査に際して、同一の個体に対して異なる評価が行われている背景には、このような変化の最大公約数をどの部分に求めるかという解釈の多様性がある。

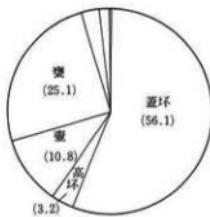
そこでこのような編年の基軸となっている、蓋坏についての若干の検討を行い、各々の変化がどのように関連を持ち、どのような要因に突き動かされて変動しているのかを考えていきたい。

分析に用いる資料は、坏身、坏蓋ともに残存率が約50%以上のものである。さらに我々が感覚的に型式ごとに分類し、その型式別に100%に近いものから順に10個体を選択した。ただし、残存率が50%未満であった場合には、その型式に該当するものが10個体以下になっている。また、ここに使用する蓋坏は、従来の編年に従えば、TK47型式（I型式5段階）からTK10型式（II型式2段階）を中心とした、資料的には制約のあるものであることを断わっておく。

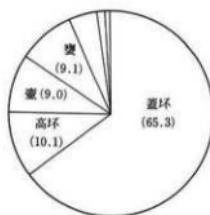
坏身、坏蓋における各部の計測値とそれをもとに算出した素データがTab.35・36に示すものである。高さ指数は各々の器形における偏平率を、口径指数は口縁部の傾斜を表す指標として参考にあげた。

ここではまず、これらの計測値をもとに主成分分析を行い、法量の観点から変化の特質にアプローチしてみよう。なお、主成分分析によって得られる各成分の固有値は、相間組列によるものである。

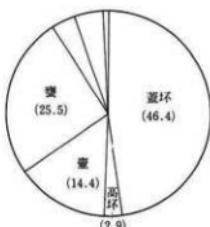
坏身の計測値から得られた主成分は、第5主成分まであり、第1主成分は固有値が3.142で累積寄与率



破片数による構成比



口縁残存度による構成比



重量による構成比 (%)

Fig.316 H地区 灰原出土須恵器器種構成

## 8. 灰原出土の遺物

Tab.35【环身】各部計測値

解説用データ	実数	平均値	標準偏差	最高値	最低値	実数	平均値	標準偏差	最高値	最低値	実数	平均値	標準偏差	最高値	最低値			
DATAN1	1	0701-081	40	15	100	130	110	97.3	90.8	1	0148-072	42	21	115	115	21	50	100
	2	0701-082	40	15	100	130	110	96.8	90.3	3	0292-033	50	25	140	140	25	50	90.8
	4	0610-073	50	15	100	130	116	90	91.4	4	0139-005	43	22	120	120	21	51.2	95
	5	0711-053	20	15	100	130	90	90	91.3	6	0099-000	50	25	125	125	25	50	90.3
	7	0205-151	60	15	100	130	122	80	86.9	7	1011-065	45	27	120	120	18	60	99.8
	8	0201-066	45	20	112	130	118	44.4	94.9	8	0282-059	41	21	120	120	20	51.2	95
	10	0202-058	48	15	100	130	110	90	90.9	10	0006-081	43	20	115	145	23	46.5	95.5
	11	0184-062	52	16	100	130	126	30.8	92.1	11	0097-068	42	21	125	125	21	50	96
	12	0202-055	48	15	100	130	120	30	90.8	12	0098-062	48	24	120	120	24	48.8	95.8
	13	0198-078	45	15	100	134	124	35.3	96.6	13	0099-062	47	24	120	120	23	51.1	96.1
	14	0086-060	45	15	100	140	120	33.3	92.3	14	0148-074	46	21	120	120	25	45.5	101.6
	15	0513-049	55	15	100	140	120	30	98.3	15	0277-062	45	27	120	120	25	46.5	98.8
	17	0305-045	40	15	130	140	120	37.5	92.3	17	0092-066	50	30	115	110	30	40	95.7
	18	1031-090	54	19	130	140	120	90	94.6	18	0041-029	52	30	120	120	30	42.9	95
	20	0771-007	48	15	100	130	122	31.3	87.1	20	0010-040	40	20	120	120	20	50	96
	21	0707-041	46	17	100	130	110	37.1	99.3	21	0179-154	40	21	140	130	19	62.5	97.1
	22	0209-055	55	15	100	130	120	30	90.5	22	0094-062	48	24	120	120	24	48.8	95.8
	23	0156-059	59	20	115	130	135	33.3	86.5	23	0047-003	48	18	120	120	30	27.5	100
	24	0066-155	50	18	100	125	117	36	80.5	24	0176-119	48	26	120	120	22	54.3	98.4
	25	0096-184	50	20	104	124	120	40	93.3	25	0078-062	45	25	120	120	20	45.5	97.1
	27	0769-097	47	10	125	151	120	41	91.8	27	0992-081	45	35	130	130	35	45.5	97.1
	28	0769-065	57	14	126	153	141	24	98.8	28	0092-049	46	23	120	120	23	50	99
	29	0554-047	47	17	100	130	118	37.5	84.7	29	0060-018	45	23	130	130	22	33.1	95.4
	31	0769-066	43	14	126	174	157	82.7	96.8	31	0049-070	49	24	130	130	35	40	100
	32	0153-005	36	15	100	130	110	37.5	90.9	32	0066-000	48	23	130	130	25	47.9	93.3
	34	0086-015	45	16	100	128	108	35.6	92.6	34	0147-046	39	20	130	130	14	64.1	91.1
	35	0033-020	45	17	120	150	125	38.1	87.5	35	0033-012	45	19	120	120	16	27.5	95.7
	37	0005-085	45	11	130	150	140	84.3	87.7	37	0260-029	40	22	120	120	18	35	93.8
	38	1011-029	50	15	110	130	118	30	93.8	38	0070-044	40	21	120	120	25	37.5	101.7
	40	0566-060	58	10	140	160	150	35.7	93.3	40	0083-015	45	21	120	120	17	35.5	102.7
	41	0086-070	55	18	100	140	126	32.7	97.3	41	0099-023	45	25	120	120	25	45.5	98.8
	42	0006-023	45	15	100	130	120	34.3	83.3	42	0070-029	40	21	120	120	17	35.5	97.1

\*実寸法はmm、重量はgを表す。  
\*\*実寸法は口縦高を最高で除したもの。  
\*\*\*口横指数は口縦径を口縦高で除したもの。

Tab.36【环蓋】各部計測値

解説用データ	実数	平均値	標準偏差	最高値	最低値	実数	平均値	標準偏差	最高値	最低値	実数	平均値	標準偏差	最高値	最低値
DATAN1	1	0148-072	42	21	115	115	21	50	100						
	3	0292-033	50	25	140	140	25	50	90.8						
	5	0099-000	50	25	125	125	25	50	93.9						
	7	1011-065	45	27	120	120	18	60	99.8						
	8	0282-059	41	21	120	120	20	51.2	95						
	10	0006-081	43	20	115	145	23	50	95.5						
	11	0097-068	42	21	125	125	21	50	96						
	12	0148-074	46	21	120	120	25	45.5	101.6						
	13	0148-074	46	21	120	120	25	45.5	101.6						
	15	0277-062	45	22	120	120	25	46.5	98.8						
	17	0092-066	50	30	115	110	30	40	95.7						
	18	0041-029	52	30	120	120	30	42.9	95						
	20	0010-040	40	20	120	120	20	50	91.7						
	21	0179-154	40	21	140	130	19	62.5	97.1						
	22	0094-062	48	26	120	120	26	48	99.8						
	23	0047-003	48	18	120	120	30	27.5	100						
	24	0176-119	48	26	120	120	22	22	94.8						
	25	0078-062	45	21	120	120	26	45.5	97.1						

\*実寸法はmm、重量はgを表す。

\*\*実寸法は口縦高を最高で除したもの。

\*\*\*口横指数は口縦径を口縦高で除したもの。

6.2.84%、第2主成分は固有値が1.331で累積寄与率89.45%、第3主成分は固有値が0.454で累積寄与率98.54%、第4主成分は固有値が0.058で累積寄与率99.71%、第5主成分は固有値が0.015で累積寄与率100.00%となっている。

杯蓋の計測値から得られた主成分は、第4主成分まであり、第1主成分は固有値が2.244で累積寄与率44.87%、第2主成分は固有値が1.418で累積寄与率73.23%、第3主成分は固有値が1.145で累積寄与率96.13%、第4主成分は固有値が0.194で累積寄与率100.00%となっている。以上のことから、両者ともに第1、第2主成分ではぼそその特徴を代表させることができるのである。

これらの各データに与えられた固有ベクトルから、合成変量を求

Fig.317 【环身】主成分分析・合成変量プロット

め、2次元にプロットしたものがFig.317・318である。坏身の方は、第I象限から第IV象限まで、ばらつきの多い分布を見せるのに對して、坏蓋はX軸とY軸の交点にやや集まる傾向がある。

Fig.319は坏蓋の主成分分析による合成変量のプロットから、象限ごとに各変数の平均値を求め、模式化したものである。さらに理解を助けるために、資料ごとに最も数量的に多い形態の特徴を加えた。

坏身に関しては、第1主成分が寄与率4割強を占め、それが口徑、あるいは受部径の大小に代表される数値の変動であることがわかる。第2主成分は器高というより、むしろ体部の高さの変化を象徴している。

坏蓋に関しては、第1主成分が寄与率4割強で、やはり坏身同様に口徑の変動を表すものと考えられる。しかし、第2、第3主成分は寄与率がほぼ同等で、やや寄与率のまさる第2主成分が口縁部の傾斜の度合を表しており、第3主成分は同じようなベクトル方向で、天井部の高さの変化に対応している。

ここで基本的な統計量に立ち戻ってみよう。各々の計測値から相関係数を求め、散布図を作成したものがFig.320である。

No.1とNo.6から理解されるように、口縁部径と器高にはまったく相関関係が認められない。坏身の計測値では、No.3、No.4に見られる各部の直径が高い相関を示しており、全体の径（受部径）が大きくなるにつれて、口縁部径も大きくなる。ついでNo.5でも器高と口縁部の高さがやや高い相関を示している。このことから、坏身はその計測値の中で口縁部径を最も有効な代表値とすることができ、口縁部高と体部高の比率は安定しているので、どちらかの数値が得られれば、他方をある程度推定することが可能であるといえる。また、坏蓋の計測値では、No.7に見られるように、口縁部径と稜部分の直径が高い相関関係を有している。しかし、高さの計測値については、No.8のように器高と稜部分の高さに相関が無く、No.9のように稜部分の高さと天井部の高さは負の相関にある。すなわち、器高の大小にかかわらず、稜部分の高さが大きいものは、天井部の高さが低いといえる。

これらの相関散布図から知りえる数値の動きは、主成分分析によるものと完全に一致しており非常に興味深い。

さて、ではここでこれまでとは違う角度から資料を見るために、クラスター分析を行ってみたい。

Figure 318: Principal component analysis of the lid of the vessel. The figure shows a scatter plot of the first principal component (PC1) against the second principal component (PC2). The data points are labeled with numbers corresponding to the table below. The plot shows a clear separation between the upper-left quadrant (negative PC1, positive PC2) and the lower-right quadrant (positive PC1, negative PC2), with most points falling in the latter quadrant.

	20:	0.342000 2.400000	34:	-2.217000 1.732000	21:	-0.045000 1.861000	11:	0.618000 1.932000	37:	-1.014000 1.515000
4:	0.459000 1.630000		39:	-1.691000 1.186000	15:	-0.951000 0.909000	11:	0.004000 1.276000	7:	-0.877000 0.827000
5:	-0.178000 0.841000		38:	6.566000 0.594000	16:	1.409000 0.532000	21:	-1.742000 0.293000	30:	-0.091000 0.303000
24:	0.356000 0.263000		12:	0.808000 0.297000	35:	1.589000 0.186000	17:	3.026000 0.235000	6:	-1.667000 -0.068000
13:	0.211000 -0.053000		9:	-1.292000 -0.366000	28:	-0.076000 -0.256000	14:	0.479000 -0.332000	19:	1.542000 -0.267000
23:	2.040000 -0.102000		18:	2.685000 -0.495000	27:	-0.109000 -0.761000	31:	0.431000 -0.888000	6:	0.591000 -0.802000
25:	1.635000 -0.674000		22:	-5.452000 -1.108000	10:	-1.745000 -1.569000	32:	-0.587000 -1.369000	3:	0.022000 -1.439000
36:	-0.209000 -1.673000		33:	-0.810000 -2.053000	26:	0.508000 -2.153000	29:	1.068000 -2.358000		

Fig.318 〔坏蓋〕主成分分析・合成変量プロット

## 8. 灰原出土の遺物

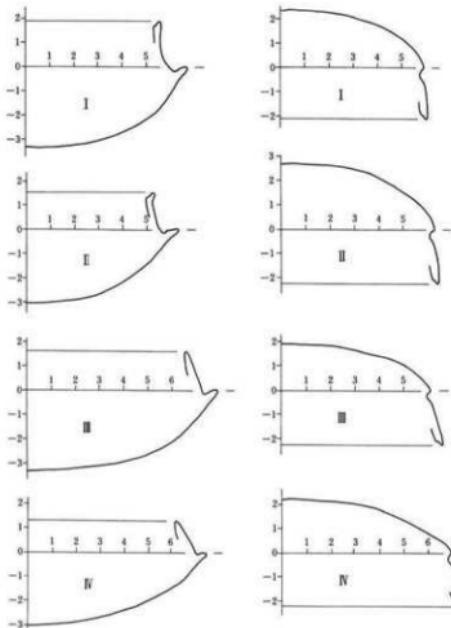


Fig. 319 主成分分析による蓋坏の形態モデル

Tab. 37 [环身] カテゴリカル・データ

DATA#	形態番号	形態名	形態番号	形態名	形態番号	形態名	形態番号	形態名	形態番号	形態名	形態番号	形態名	形態番号	形態名	形態番号	形態名	形態番号	形態名	形態番号	形態名		
1	0783-085	-5 TK67	13	6	1	1	8	163	77	1	2	4	5	2	1	1	2	4	5	2	1	
2	0920-075	-5 TK67	23	6	1	1	3	152	77	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
4	0610-073	-5 TK67	23	6	7	7	9	88	82	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
5	0710-085	-5 TK67	23	6	7	7	11	133	80	1	2	2	4	5	2	1	2	4	5	2	1	
7	0362-131	-1 MT15	23	6	7	7	13	15	88	37	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1
8	0320-068	-1 MT15	18	7	13	13	11	202	117	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
10	0362-098	-1 MT15	21	6	10	10	21	85	101	20	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
11	0184-062	-1 MT15	20	7	17	17	20	96	80	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
12	0362-098	-1 MT15	18	6	17	25	20	100	80	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
14	0868-089	-1	18	6	21	21	25	121	91	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
16	0519-072	-2 TK69	23	6	21	26	26	88	57	2	3	4	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
17	0655-045	-3 TK69	13	6	21	21	25	163	91	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
18	0351-080	-2 TK69	27	10	36	41	30	160	93	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
20	0717-087	-1 TK67	19	8	10	11	11	153	58	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
21	0707-041	-5 TK67	19	8	10	9	5	158	159	2	3	4	5	2	4	1	2	3	5	2	4	
22	0707-045	-2 TK69	25	7	13	15	16	129	64	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
23	0161-039	-2 TK69	25	7	13	20	16	126	64	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
24	0004-135	-5 TK67	23	9	17	6	10	148	23	2	3	4	5	2	4	1	2	3	5	2	4	
25	0364-284	-5	23	11	21	7	15	188	80	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
26	0364-284	-2 TK69	23	11	21	21	25	121	91	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
27	0364-067	-3	20	16	36	31	31	201	74	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
28	0364-065	-3	30	5	27	24	35	54	62	2	3	4	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
29	0364-068	-3	30	5	27	24	35	54	62	2	3	4	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
30	0364-098	-3	30	5	27	24	35	54	62	2	3	4	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
31	0364-098	-2	19	8	10	11	11	158	15	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
32	0313-005	-3 TK69	12	6	36	43	36	175	99	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
33	0313-005	-3	12	6	36	43	36	175	99	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
34	0001-033	-4 TK63	18	7	17	1	1	144	94	1	2	3	4	2	4	1	2	3	4	2	4	
35	0001-033	-2	17	8	21	31	31	174	38	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
36	0364-065	-2	18	8	21	31	31	174	38	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
37	0005-065	-2	18	8	21	31	31	174	38	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	
38	0011-059	-1-4	18	23	6	11	11	11	66	100	1	2	3	4	2	4	1	2	3	4	2	4
39	0562-052	-1	23	6	11	11	11	66	101	1	2	3	4	2	4	1	2	3	4	2	4	
40	0562-052	-1	23	6	11	11	11	65	101	1	2	3	4	2	4	1	2	3	4	2	4	
41	0562-052	-1-3	18	26	9	11	21	19	135	41	2	3	4	2	4	1	2	3	4	2	4	
42	0001-033	-3	18	10	6	11	11	13	377	1	2	3	5	1	1	1	2	3	5	1	1	

\*実数の数値は、測定値を1mm単位で分割したアイテムを示す。

\*実数5の底の1%の底は1%単位のアイテムを示す。

Tab.37・38が分析用のカテゴリカル・データである。変数8から変数14までは、前述した形態の特徴や製作技法をアイテム、カテゴリーとしてそのまま利用した。ただし、外面技法は、1が回転ヘラケズリと回転ナデの併用、2が他の技法とし、内面技法は、1が回転ナデと不整方向ナデの併用、2が他の技法とした。また、内面の同心円文当て具痕は、1が有り、2が無しとした。

このデータは質的データであるので、一致係数による類似度を求めた後に処理を行った。クラスター分析は、群平均法によるもので行い、その結果を使用してFig.321の денドログラムを作成した。

クラスター分析の結果から判明したこととは、まず、各個体間の距離が以外に遠く、グループとしてのまとまりが少ないことである。特に坏蓋にはこれが顕著に現れている。

Tab.38 [环蓋] カテゴリカル・データ

DATA No.	登録番号	中村編年	由立編年	実測用データ										
				実数1	実数2	実数3	実数4	実数5	実数6	実数7	実数8	実数9	実数10	実数11
1	0148-072	I-5	I-5	3	6	6	13	14	27	1	2	1	5	3
2	0202-105	I-5	TK47	3	6	6	13	14	27	5	2	5	5	3
3	0202-035	II-2	TK10	13	13	9	21	14	19	1	2	2	5	3
4	0139-005	I-5	I-5	6	8	6	5	5	22	1	2	2	5	3
5	0771-006	I-5	TK47	6	8	11	16	15	27	1	1	2	5	3
6	0888-059	II-1	II-1	13	13	18	15	14	20	1	2	2	5	3
7	1011-065	II-2	TK10	8	13	15	11	24	19	1	2	1	5	3
8	0383-058	II-5	II-5	4	7	31	26	15	20	2	2	2	5	3
9	0202-032	II-2	II-2	8	12	12	23	19	21	1	2	2	5	3
10	0605-061	II-2	TK10	6	6	41	26	10	20	5	2	2	5	3
11	0202-052	II-2	TK10	5	7	11	14	23	1	2	2	5	3	
12	0156-061	I-1	MT15	10	9	31	10	12	22	1	2	2	5	3
13	0978-082	II-1	MT15	10	10	15	15	15	23	2	2	2	5	3
14	0148-074	I-5	TK47	9	7	14	21	9	28	1	2	1	3	3
15	0777-086	II-2	TK10	3	6	22	17	14	19	1	2	2	5	4
16	0607-111	I-5	TK47	10	8	6	6	10	22	1	2	2	5	3
17	0505-055	I-2	TK10	13	8	1	4	2	22	1	2	2	5	3
18	0661-058	I-5	I-5	13	6	6	5	6	28	1	2	2	5	3
19	0047-033	II-1	II-1	12	6	10	11	8	23	2	2	2	5	3
20	0610-040	I-5	I-5	3	6	6	1	14	18	1	2	2	5	3
21	0791-184	II-2	II-2	3	7	26	27	16	24	1	2	2	5	3
22	0601-038	II-2	II-2	1	12	56	47	32	18	1	2	2	4	3
23	0547-063	I-5	TK47	11	4	6	11	1	27	1	1	2	5	3
24	0766-119	I-5	TK47	11	12	9	12	18	25	2	2	2	5	3
25	0275-051	II-1	MT15	12	12	15	15	3	22	2	2	2	5	4
26	0607-065	I-2	TK10	14	9	29	27	9	24	1	2	2	5	3
27	0602-031	II-2	TK10	6	6	24	25	8	24	1	2	2	5	3
28	0322-062	I-1	MT15	9	9	16	21	14	27	1	2	2	5	3
29	0718-051	II-2	TK10	15	8	26	25	6	22	1	2	1	5	3
30	0569-018	II-1	II-1	8	9	16	15	15	22	1	2	1	5	3
31	0491-076	II-1	MT15	12	10	16	21	13	27	1	1	2	5	3
32	0664-020	II-5	II-5	8	6	28	38	8	27	1	1	2	5	3
33	0889-008	II-2	II-2	13	9	39	31	12	29	1	1	2	5	3
34	0173-046	I-3	TK20B	2	11	14	28	8	1	1	2	2	5	3
35	0689-050	II-3	MT85	10	6	12	7	6	19	1	1	2	5	3
36	1033-012	I-4	I-4	9	5	36	27	5	17	1	1	2	4	2
37	0202-029	I-3	TK20B	3	8	16	13	19	20	1	2	2	5	3
38	0679-044	II-3	MT85	3	1	1	31	1	48	1	1	2	5	5
39	0883-015	I-4	TK20	4	10	36	3	22	1	1	2	2	5	2

＊実数の値は、実測値を1mm単位で四捨五入したアイテムを示す。

＊実数5・6の値は1%単位のアイテムで示す。

## 坏身のクラスターに、主成分分析

折のプロットでどの現象に分布したのかを重ねてみると、いくつかの領域に分類できる。第II象現のグループは左端に、統いて第I象現のグループ、第IV象現のグループとなって、右端付近は第III象現と第IV象現のグループが混在している。さらにこれらグループは、従来の編年によると、概ね、第I象現がMT15型式（II型式1段階）、第II象現がTK47型式（I型式5段階）、第III象現がTK10型式（II型式2段階）、第IV象現がTK10～MT85型式（II型式2～3段階）という対応関係に該当する。

## f. まとめにかえて

灰原出土の須恵器に関して、その数量的な検討を行ってきたが、

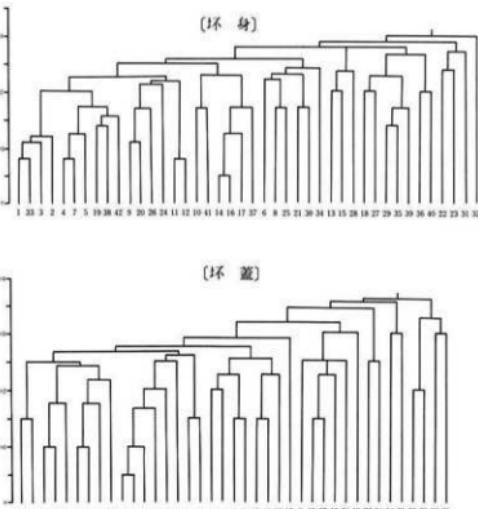


Fig.320 蓋坏各部計測値による相関係数と相関散布

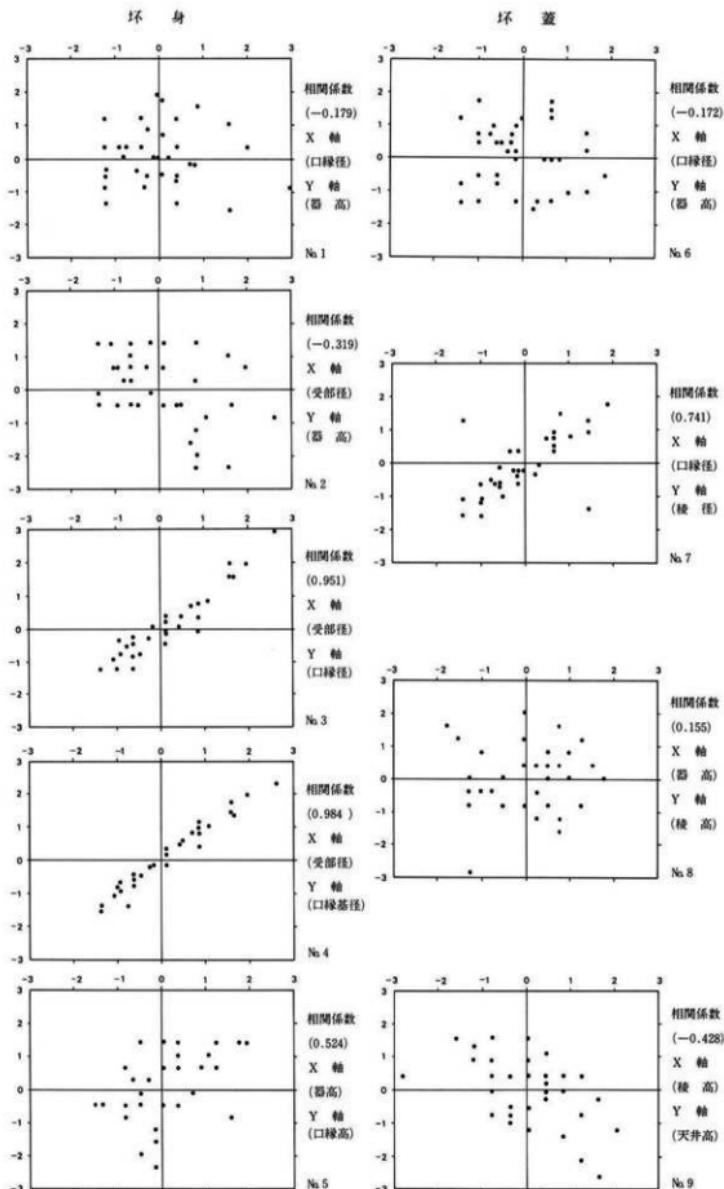


Fig. 321 蓋環のデンドログラム

前半では器種構成の比率が明らかになった。そして後半は、蓋環についての検討を行ったが、坏身については口縁部径と体部高、坏蓋については口縁部径と天井部高が数量的な変動の中心であることを明らかにした。また、形態的には坏蓋の変化が乏しいのに比べて、坏身は主成分分析の結果や従前からの編年とも抵触せずに、明確なグループに分離できた。このことは、多くの局面で蓋環が時期決定の根拠とされる場合に、坏身がその対象資料に含まれるか否かで、信頼度が変わることを示唆している。

今回、採取したデータは、膨大な量にのぼり、計測に携わったすべての人々の労苦は並み大抵のものではなかった。そのすべてをこの報告に生かしきれず、非常に残念であるが、陶邑内の窯跡、そして灰原の基準資料でもあるので、保管されているデータを今後、多くの方が活用されることを切に希望する。

## 9. 小 結

近年、初期須恵器や韓式系土器（広義で、朝鮮半島からの技術を導入して作られた土器。軟質、硬質を問わない）等を大量に包含する遺跡が、陶邑の北端部で相次いで確認されている。当該遺跡に統いて、伏尾遺跡、大庭寺遺跡などが調査され、衆目を集めめた。

これらの遺跡は、すべて近畿自動車道松原海南線および都市計画道路松原泉大津線の建設に伴って、その存在が明らかになったものである。以前に、泉北丘陵を襲ったニュータウン化の波は、陶邑の大部分を飲み込み、膨大な資料と引き換えに歴史的景観が消失された。ここ数ヶ年の道路建設は、同様に付近の牧歌的な景観、そして陶邑の中で唯一開発から逃れてきた泉北丘陵北端部の破壊をもたらし、その代償として貴重なデータを我々に提供してくれるという、誠に皮肉な結果に終わっている。

それはさておき、本章の冒頭で述べたように古墳時代に入って、小阪遺跡の様相は一変する。自然河川の氾濫や流域の拡大などが、丘陵上に人間を追いやっていた前代とは異なり、環境の変化、すなわち自然河川が自らの堆積物によって淘汰され、自然堤防ができる、ある程度の乾燥をもたらしていたことが、調査の結果から明らかである。

以下、時代を追って記述していく。

### 1) 古墳時代前期

古墳時代の初頭には、伏尾丘陵の東側に平行して伸びる尾根状地形の先端、あるいは直近の河川8が形成した自然堤防上にのみ、その生活の痕跡を見せ始める。これは、現在の陶器川左岸から石津川方向へ下降する地形からも推測できるように、調査地内の西半部では旧石津川の氾濫が激しく、安定していなかったことを示している。主たる検出遺構も溝であり、明確に当時の生活状況を復元するには至っていない。

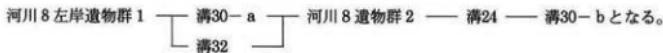
遺物の出土量としてはさほど多くないが、泉州地域においては、それでも、まとまって出土している方で、中でも、G地区の溝30およびF地区の溝24は、良好な一括資料といえる。

庄内期の溝30は、甕の出土量が多く、粗い叩き目を残すいわゆる伝統的第V様式系の土器が主流をなし、生駒西麓産の土器が2割強とこの地域としては多量の含まれ方をしており、小阪遺跡が河内地方とかなりの交流があった事がうかがえる。

布留期の溝24にもわずかではあるが生駒西麓産の土器を含み、1点ではあるが紀伊産の土器も含む。

## 9. 小 結

当遺跡から出土した庄内期および布留期の土器をみれば、古い順に



しかしながら、次の古墳時代中期に統くような遺構もしくは土器が検出されておらず、その時期の集落の位置等、不明である。なお、近接する伏尾遺跡の布留期の住居址や掘立柱建物との関係が注目されよう。

### 2) 古墳時代中期

中期に入ると、調査地内の全域で生活の痕跡を見出すことができる。特に、C地区の集落は、陶邑の一端を担う小規模な集落の形態がうかがえよう。

小阪遺跡の集落の特徴としては、遺物の多様性にある。從来知られていた土器様相と異なり、土師器と須恵器の比率が半々であり、いわゆる、韓式系土器が約2割あり、その他、土師器に似た須恵器や須恵器に似た土師器等、他の遺跡では検出されていないような特異な土器が散見される。

さて、集落が営まれていた期間の問題であるが、住居址や土坑等の遺構出土の土器を編年にしてみれば、古くは初期須恵器の段階のI-1(中村)=TK73(田辺)に位置付けられるであろう。廃絶期の問題としては、概報時に溝11の土器をもってI-3(中村)=TK208(田辺)としていたが、好みの類に底部が丸みをもち、口縁部の端部が顕著な内傾する段をもつものがある事から、少し時期が遅れてI-4=TK23に入る可能性があろう。

そこで、隣接する伏尾遺跡と比較してみると、以下のような差異が見出されよう。

Tab.39 小阪遺跡と伏尾遺跡の比較一覧

	小 阪	伏 尾
集 落 の 規 模	60m×60m	150m×80m以上
立 地	自然堤防上	河岸段丘上
古 墳	方墳2基?	方墳3基、円墳1基
堅 穴 住 居	8棟(平地式2棟)・小型	3棟・大型
掘 立 柱 建 物	3棟	30棟以上
井 戸	1基	?
土 坑	40基	60基
土 器	須恵器:土師器1:1 韓式系土器 小型平底鉢 瓶	ほとんどが須恵器で占める 韓式系土器 小型平底鉢 瓶 長胴甕 移動式竈
そ の 他	鐵鏃4点 水質した粘土塊 須恵質當て具	—

まず、集落の規模・出土遺物で比較するならば、Tab.39の通りである。

以上の表のように、陶邑内の集落の占める位置は、その立地条件すなわち自然環境に大きく左右されるわけである。端的に述べるならば、小阪遺跡の集落は、やや安定したとはいえ、いまだ湿润な谷部に

立地することや、建物の構成でも竪穴住居が主体となり、伏尾遺跡と大きな違いを見せる。これは、伏尾遺跡に比べて劣るというよりも、より前期的で伝統的な在り方を踏襲していると見るべきで、住居内の土器の殆どが土師器で占められていることからも、小阪遺跡が陶邑開発の初頭の基地として存在していたことを裏づけるものである。

### 3) 古墳時代中～後期

当該期に当たる検出された遺構は、灰原である。その他に、後期の土坑や溝が若干検出されているのみで、再び小阪遺跡は、希薄な存在となる。

灰原は、旧陶器川の一支谷に当たり、MT地区の先端に位置する。窯本体は未発掘であり、詳細は不明であるが、灰原の遺物を整理した結果、大きくは3時期に分かれることが判明した。その時期幅からしても、少なくとも2基以上窯があったと推定できる。

灰原の遺物は、前述したように、大きく3時期に分かれ、その所属時期は、おおむねTK216～TK208 = I-2～I-3、TK47～MT15 = I-5～II-1、TK10～MT85 = II-2～II-4にピークがある。それよりも新しいものは、わずかではあるが、TK209 = II-6までを含むものである。また、その量比は、古いものについては、目に止まりやすく、できるだけ実測図を記載しているため多く感じるが全体量の1割にも満たないものであり、他が二分するものである。

灰原の遺物は、小阪遺跡全体の遺物量の約4/5を占め、その器種構成は、本章の統計処理の項でも明らかにしたが、蓋坏の類が過半数を占めており、次いで高杯、甕、壺等になる。全体に小型のものに完形品が目立つ。全体的に、器種のバラエティに富み、筒形容器や二重甕・鳥形甕・把手を多数付けた瓶等、特異な器形も散見され、どのような消費地に送られているのかが興味深いものである。

なお、灰原出土のものであるため、溶着したものも多く、その窓詰めの様子の一部を復元できるものもある。

ともあれ、陶邑のMT地区内でも初期須恵器を焼いていた窯があった事を裏づける結果となった。

なお、G地区の河川等から出土した多量の須恵器にも陶邑では、今までに類例を見ないものが含まれており、陶邑における資料の豊富さの一端をうかがい知ることとなった。

以上のように、小阪遺跡の消長は陶邑の窯業生産と密接に関わりをもち、泉北丘陵の南側へと開発の中心が移動して行くにつれ、小阪遺跡の存在意義が薄まっていき、再び人間活動の活発化する中世まで、しばしの眠りにつくのである。

### 参考文献

- 堺市教育委員会 1983 「小阪遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第12集
- 泉大津市教育委員会 1975 『七の坪遺跡発掘調査概要』
- 泉大津市教育委員会 1982 『七の坪遺跡発掘調査概要II』
- 泉大津市教育委員会 1976 『豊中遺跡発掘調査概要』
- 豊中・古池遺跡調査会 1973 『豊中・古池遺跡発掘調査概報』1
- 〃 1974 『〃 〃 』2
- 〃 1976 『〃 〃 』3
- 和泉市教育委員会 1975 『上町遺跡発掘調査概要』
- 大阪府教育委員会 1985 『府中遺跡発掘調査概要—府道和泉中央線拡幅工事に伴う発掘調査—』
- 和泉市教育委員会 1987 『府中遺跡発掘調査概要・II』

- 東奈良遺跡調査会 1979 「東奈良」
- 大阪府教育委員会 1983 「萱振遺跡発掘調査概要・I」
- 一瀬和夫 1988 「久宝寺・加美遺跡の古式土器」『八尾市文化財紀要』3 八尾市教育委員会文化財室
- 一瀬和夫 1988 「大阪府久宝寺・加美遺跡の古式土器の土器胎土に関する2・3の問題」『古代学研究』116号
- 柳本照男 1983 「布留式土器に関する一試考—西摂平野東部の資料を中心にして—」『ヒストリア』第101号
- 寺沢 薫 1986 「畿内古式土器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』
- 寺沢 薫 1987 「布留0式土器概論」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズIII
- 平安学園考古学クラブ 1966 陶邑古窯址群 I
- 大阪府教育委員会 1973 『陶邑・深田』「大阪府文化財調査抄報」2
- 大阪府教育委員会 1976 『陶邑I』『大阪府文化財調査報告』28
- 〃 1977 『陶邑II』〃 〃 29
- 〃 1978 『陶邑III』〃 〃 30
- 〃 1979 『陶邑IV』〃 〃 31
- 〃 1982 『陶邑V』〃 〃 33
- 〃 1987 『陶邑VI』〃 〃 35
- 八尾南遺跡調査会 1981 『八尾南遺跡』
- 石田修・十河稔 1982 堺市立遺跡「大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第7回)資料」
- 界市教育委員会 1983 『田園遺跡発掘調査中間報告書』
- 和歌山県教育委員会 1984 『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』
- 界市教育委員会 1984 「四つ池遺跡第83地区発掘調査報告書」『堺市文化財調査報告書』第16集
- 神谷正弘・三好孝一 1985 「大阪府高石市水原地遺跡出土の須恵器について」『古文化談叢』第15集
- (財)大阪府文化財協会 1986 『信太山遺跡』
- 大阪府教育委員会 1987 『三軒屋遺跡』
- 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1987 大庭寺遺跡発掘調査「現地説明会資料」13
- (財)大阪府埋蔵文化財協会 1988 大庭寺遺跡「第3回泉州の遺跡—昭和62年度発掘調査成果展—」
- 大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会 1990 『陶邑・伏尾遺跡-A地区-』
- 小田富士雄 1991 「須恵器文化の形成と日韓交渉・總説編」『古文化談叢』第24集
- 大阪府教育委員会 1978 『大園遺跡・古池北遺跡発掘調査概要』
- 界市教育委員会 1978 『船尾西遺跡発掘調査詳報』
- (財)大阪市文化財協会 1990 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』II
- 韓式土器研究会 1987 『韓式土器研究・I』
- 〃 1989 『韓式土器研究・II』
- (財)大阪府埋蔵文化財協会 1987 『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』第21回埋蔵文化財研究集会
- 小田富士雄 1979 『九州考古学研究古墳時代編』学生社
- 田辺昭三 1982 「初期須恵器について」『考古学論考』平凡社
- 三宮昌弘 1988 「小阪遺跡の古墳時代集落」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鐵鑄について」『櫻原考古学研究所論集』第8
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」
- 中村 浩 1981 『和泉陶邑窯の研究』柏書房
- 中村 浩 1985 「近畿の初期須恵器—各地の出土例の聚成と概観的考察—その1」『古文化談叢』第15集
- 中村 浩 1989 「近畿地域の須恵器と陶質土器」『陶質土器の国際交流』
- 武束純一 1988 「朝鮮半島の布留式系甕」『永井昌文教授退官記念論文集』六興出版
- 田中清美 1986 「加美遺跡発掘調査の成果」『古代を考える』43
- 定森秀夫 1990 「日本出土陶質土器の原郷」『季刊考古学』第33号
- 柳晴夫・岩坪秀一 1976 「複雜さに挑む科学」講談社
- クリーブ・オルトン著、小沢一雅・及川昭文訳 1987 『数理考古学入門』雄山閣
- 日比野省三・中田友一 1979 「やさしいコンピュータ統計概論」福村出版
- 1988 『多変量分析』日本マイコン販売
- 朴 廣春 1990 「韓國陝川地域における土墳墓出土土器の編年的研究」『古文化談叢』第22集
- 宇野隆夫 1988 「越中の国府・莊園・村落」『歴史学と考古学』高井健三郎先生喜寿記念論集
- (財)大阪文化財センター 1980 「瓜生堂」
- (財)大阪文化財センター 1982 「巨摩・瓜生堂」
- (財)大阪文化財センター 1983 「西岩田」
- (財)大阪文化財センター 1984 「美園」
- (財)大阪文化財センター 1984 「佐堂(その2)-I」
- (財)大阪文化財センター 1985 「府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書」I
- (財)大阪文化財センター 1987 「久宝寺北」
- (財)大阪文化財センター 1988 「久宝寺南(その2)」
- (財)大阪文化財センター 1989 「新家」
- (財)大阪文化財センター 1987 「新家II」

## 第4章 古代の遺構と遺物 —条里制の施行と湿田



Fig. 322 周辺の地形と古代の遺構

## 1. 遺構



小阪遺跡における古代の遺構面は、単独のものは一部を除けば存在しない。これは、前代の古墳時代包含層である特徴的な茶黒色粘質土がC地区とG地区の一部を除いて後世に削平されており、本来その上に存在したであろう古代遺構面が喪失しているためである。そのため、古墳時代から近世までの遺構が同一遺構面で検出される場合も多く、遺物が出土しない遺構については時期の認定が難しい。とりあえずこの時期に包括した遺構についても、場合によればより広い時期幅を考えざるを得ないものも含まれている。

上記の理由により、古代に属する遺構の大半は、削平され残ったものか、あるいは河川内のしがらみのように深い部分に存在したものに限られる。検出された遺構としては、完新世段丘面上ではI地区の現条里と畦畔の方向を一にする水田やC地区の掘立柱建物群があり、氾濫原では前代からの河川の名残が隨所に残り、そうした中に水田やしがらみ等が設置されている。

## 1. 遺構

### 1) 河川

河川1 主にC地区中央部の3・12・23～25Cトレンドで検出された河川で、古墳時代にはすでに存在しており（古墳時代河川1）、この時期まで河川内に残された流路を古代河川1とする。なお、この河川が最終的に埋没するのは中世にまで下る。

この時期の河道は、古墳時代河川の中央部にあり、幅約7m、深さ約2.4mである。埋没土は大半が砂礫層であり、両側の古墳時代堆積層を切っている。両岸は急角度に立ち上がるが、上部は漏斗状に大きく広がる。

遺物は、奈良末～平安初め頃の土師器の皿や甕等が出土している。

河川2 E地区の北端部で検出された河川であるが、北東側の上流部は河川3に切られている。上流部は、調査区東端部では検出されなかったため、河川3と重なっているものと思われる。河川3と分離した後は南側を攻撃面として西に蛇行していることから、本来は

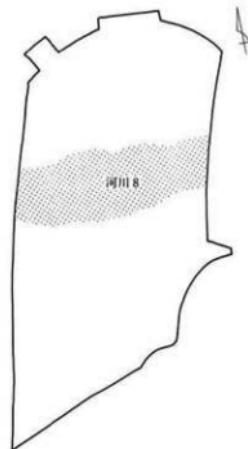


Fig. 323 古代河川・溝空間分布(1)

90度近い屈曲をもっていたようである。西半部は調査区北端部に平行して流れしており、南岸部のみ調査区にかかっている。

規模は、幅約6m、深さ約1.5mである。埋没土は、上層が黒灰色粘質土で、この地区の同時代の河川の堆積層と共通のものである。河川2では、その下層も黒灰色粘質土が0.4~1.2m堆積しており、最下層は褐色~青灰色砂礫層となる。

遺物は、下層の砂礫層からは5世紀代のものを含む須恵器や土師器が出土しており、各河川共通の上層からは須恵器壺蓋や土師器、瓦器なども出土している。

上層の沼状堆積の中から、同安窯系の青磁小皿が1点出土している。

河川3 E地区の東端部近くで検出された南北に直線状に流れる河川である。河川2を切っているが、河川2が大きく蛇行した屈曲点を越えて直流した流路の可能性が高い。

規模は、幅約9~12m、深さ約2mで、河川2よりは深い。埋没土は、上層が黒灰色粘質土で、河川2と共通の堆積層である。その下は0.4mほどの黒色粘土、さらにその下は黒灰色砂質土や黒色粘土などの薄い互層が0.5mほど堆積している。その下層は暗青灰色シルトで0.3mほどの層厚であるが、下流側では0.8mにもなる部分がある。最下層は灰~青灰色粘土で、川底部には偽礫が散乱している。南東部の川底部には自然木の先端を尖らした杭が直線状に3本流れに直交して打ち込まれていた。

遺物は、砂礫層より縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器などの雑多なものが出土している。一応、最も新しい遺物をこの河川の時期とみなすと、9世紀頃のものと言える。

河川4 F地区の2・10・12・14・15Fトレンチで検出された河川で、古墳時代河川7の名残の窪地が連続したものである。流路は大きく蛇行しており、幅は4~7m前後、深さは1m前後である。埋没土は、いわゆる沼状堆積と呼ばれるもので、暗黄灰色や灰褐色系統の粘土を主としたものであるが、12Fトレンチのように砂層の多い所もある。なお、15・16Fトレンチで

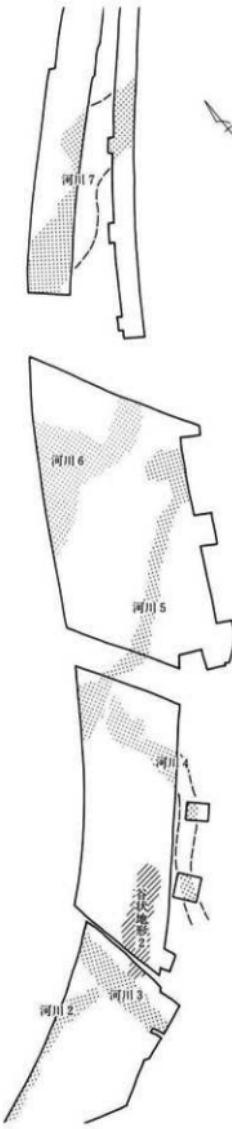


Fig. 324 古代河川・溝空間分布(2)

## 1. 道 構

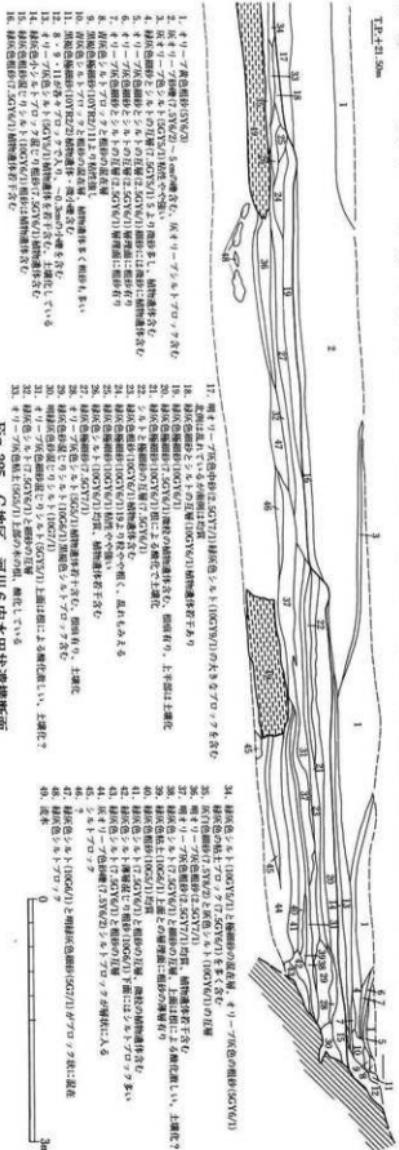


Fig. 325 G 地区 河川6 内水田状構断面

は、層厚は薄いものの平安後期の沼状堆積も検出されている。

河川内からは、2F・15Fトレンチでしがらみやダム状土盛り、2F・10Fトレンチで原位置は留めていないものの木棟が検出されている。

遺物は、須恵器・土師器・黒色土器等が出土している。

河川5 F地区1・7Fトレンチの北端、およびG地区2・9・12Gトレンチで検出された河川で、緩やかに蛇行しながら北東→南西方向に流れる。幅は約15m、深さは最深部で2mほどである。埋没土は上半部が灰色シルト、下半部が砂礫や粗砂層を含む砂層となる。

遺物は、須恵器・土師器が多いが、黒色土器も1点含まれる。時期は、奈良から平安時代にかけてのものである。

この河川が最も幅広くなった2Gトレンチ部で、しがらみが検出されている。

河川6 G地区北側の1・6・7・11・12Gトレンチで検出された河川で、北東→南西に流れた後、西に大きく蛇行し、調査区北端で大きく河川幅を広げている。上流側では幅10m前後、深さ2mほどであるが、下流側では河川幅が50mにも広がっている。埋没土は、砂礫や粗砂の多い砂層を主としたものである。河川がある程度埋まったT.P.+21m前後で、水田と考えられる畦畔2条と平坦面3枚が断面観察で確認されている。

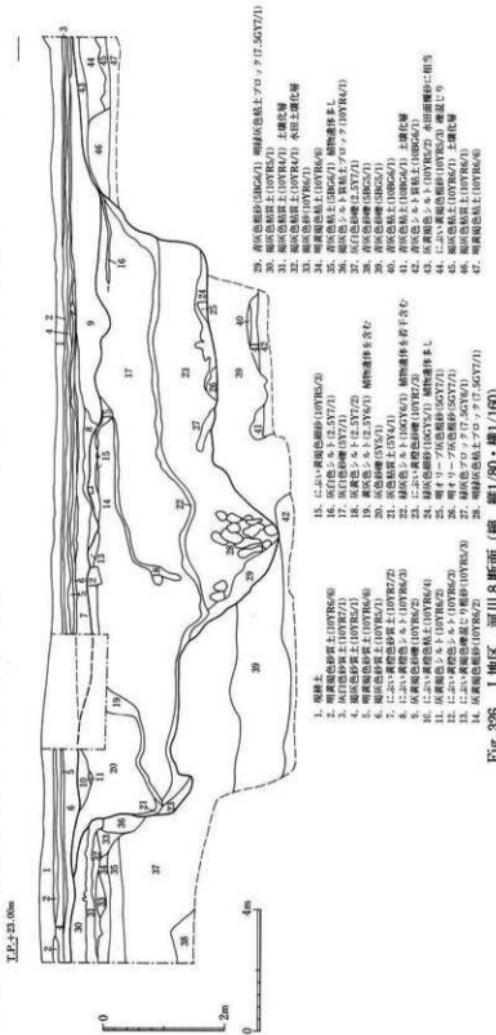
遺物は、弥生時代中期から平安時代までを含む複雑な遺物が出土しているが、初期須恵器の出土量の多いのが特徴である。ただし、河底から奈良時代の遺物が出土しており、河川の形成時期はそれ以上には遡らない。

河川7 H地区で検出(1・2Hトレンチ)された河川で、古墳時代河川9の名残である。この河川は、幅が20m以上、深さが3mにもおよぶ大きなもので、原ノ池の谷の主流路で

あろう。遺物も縄文時代からの複雑な時期のものが出土しており、堆積状況も複雑なため、この期の堆積層を特定するのは困難であった。

**河川8** 1地区中央部で検出された東西方向に流れる河川で、規模は幅21~30m、深さ約3mほどである。埋没土は、黄橙色から黄灰色の砂礫が大部分であるが、木の葉などの有機質を含んだシルト層を帶状の間層として挟む。また、川底部には、河岸部が崩落したために生じたと考えられる一辺が20~40cmの緑灰色粘土ブロックの偽礫が見られる。なお、この河川埋没土は、両岸にオーバーフローしており、水田面を覆っている。

河川内からは旧石器から奈良時代までの複雑な遺物が出土している。そのため、河川の流れ始めの時期は不明であるが、最終埋没時期は8世紀末と考えられる。なお、注目される遺物としては、111トレンチで出土した奈良時代ミニチュアの竈と鍋がある。砂礫層の中のやや離れた位置から出土しているが、竈の上の窓みに鍋がピタリとはまるため、セットとして間違いないものと考えられる。上流側の程遠くない所でなんらかの祭祀的行為が行われていたのである。



## 1. 造 構

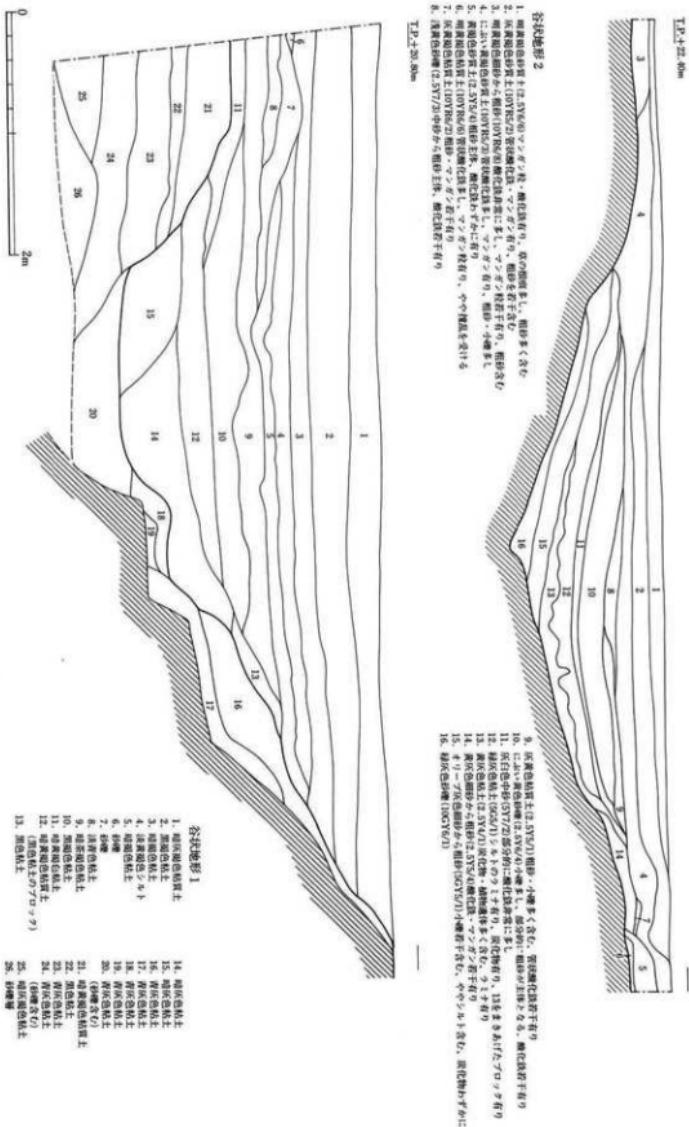


Fig. 327 C・F 地区 谷状地形断面

## 2) 谷状地形

谷状地形 1 C地区 9・10・11Cトレンチで検出されたもので、古墳時代谷状地形の痕跡がこの時期にも残されていたものである。この地形が最終的に埋没するのは、最上層の沼状堆積層から瓦器片が出土することから、中世まで下る。

谷状地形 2 F地区 16Fトレンチを主に検出されたもので、古墳時代河川5の痕跡が窪地として残されたものである。浅く、形状も不定形である。埋没土は暗黄灰色系の粘土である。

## 3) 挖立柱建物

掘立柱建物 1 C地区の3Cトレンチで検出された桁行2間×梁行1間の建物で、桁行の方向はN-14°-Wである。柱間は桁行1.8~1.9m、梁行1.6~1.7m、面積は6m<sup>2</sup>前後である。

柱穴は、径0.2~0.3mほど円形で、深さは0.4mである。柱痕は明瞭でないものが多かった。柱穴の埋土は、暗灰~茶褐色土である。柱穴内からは土器片が出土しているが、時期を特定できるものではなかった。

掘立柱建物 2 C地区的3Cトレンチで検出されたもので、建物は南側の調査区外に伸びるようであるが、検出された範囲では1×1間に北と西側に庇の付く建物である。桁行の方向はN-23°-W、柱間は桁行2.1m、梁行が2.0mで

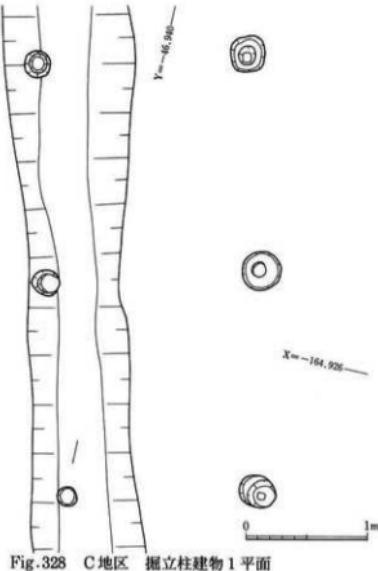


Fig. 328 C地区 挖立柱建物 1 平面

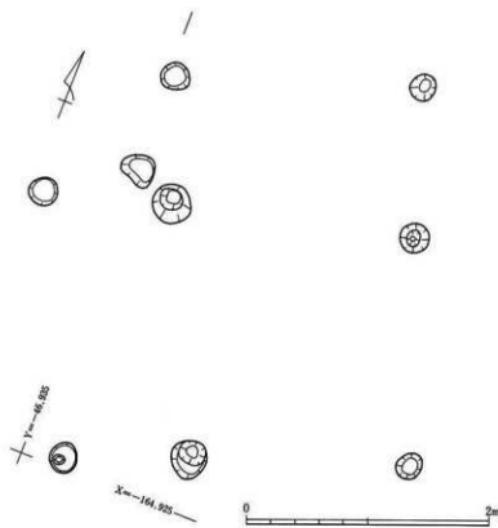


Fig. 329 C地区 挖立柱建物 2 平面

1. 遺構

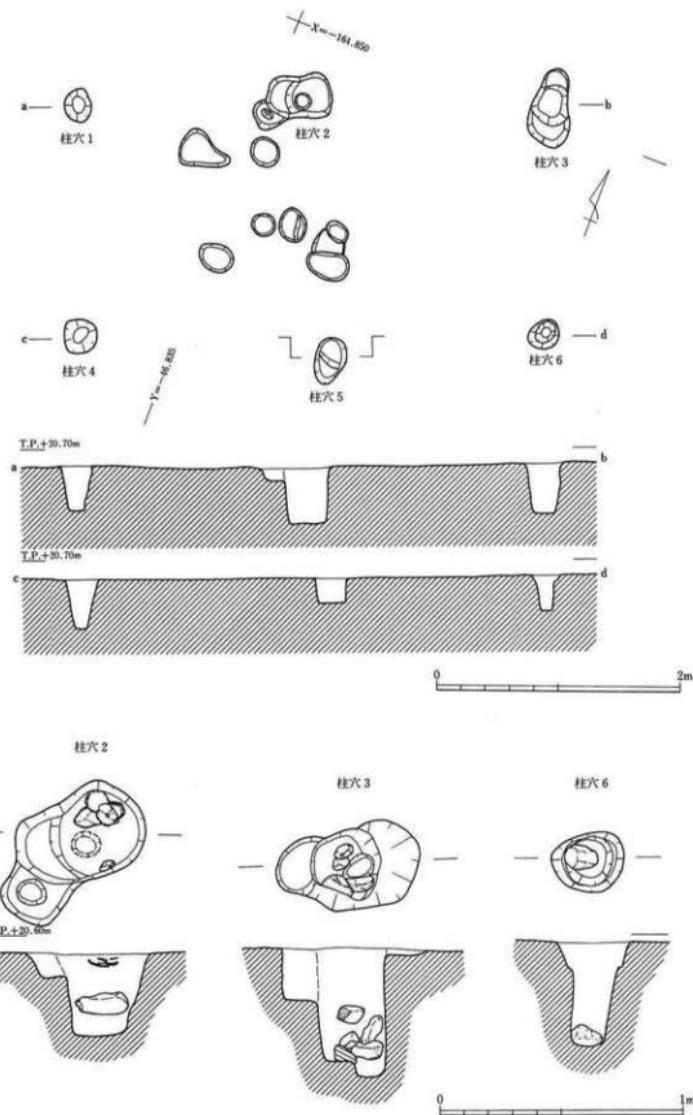


Fig. 330 C地区 堀立柱建物3平面および断面

ある。北側の庇とは1.2m、西側の庇とは1.0m離れている。

柱穴は径0.2~0.3mほどの円形で、深さは0.3~0.4mであり、底面はT.P.+20.1~20.25mで15cmほどのレベル差がある。柱痕はあまり明瞭ではなかった。柱穴の埋土は茶褐色系の土である。

柱穴4からは、黒色土器の小皿が出土している。これが建物の時期を決めうるものとすると、11世紀後半から12世紀前半のものである。

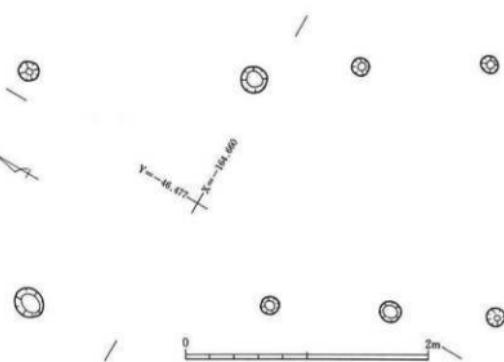


Fig. 331 F地区 挖立柱建物4平面

Tab.40 古代ピット一覧表

No.	PtNo.	地名	種別	形状	直径	深度	場所	上・下色	備考
1	G-P8	P-18	柱穴	円	27	24	5	褐色色砂質土	
2	G-P15	P-19	柱穴	円	20	20	11	褐色色砂質土	
3	O-P53	P-79	柱穴	円	17	14	10	褐色色砂質土	
4	O-P41	P-80	柱穴	円	29	26	31	褐色色砂質土	
5	O-P42	P-81	柱穴	円	27	24	5	褐色色砂質土	P43に切られる
6	O-P43	P-82	柱穴	円	30	18	23	褐色色砂質土	
7	O-P44	P-83	柱穴	円	29	26	22	褐色色砂質土	
8	O-P55	P-69	柱穴	円	26	23	17	褐色色砂質土	
9	O-P40	P-77	柱穴	円	30	26	20	褐色色砂質土	
10	O-P26	P-76	柱穴	円	20	16	41	褐色色砂質土	柱穴?
11	O-P37	P-73	柱穴	不規	48	32	14	褐色色砂質土	
12	O-P26	P-70	柱穴	円	26	20	8	褐色色砂質土	
13	O-P27	P-68	柱穴	円	20	27	10	褐色色砂質土	柱穴
14	O-P5	P-37	柱穴	不規	58	34	5	褐色色砂質土	北東壁は田P4(建物6の柱穴2) 横方
15	O-P5	P-38	柱穴	円	25	21	7	褐色色砂質土	黒色土有り、田P2(建物6の柱穴2)と関係有り?
16	O-P10	P-42	柱穴	円	21	20	5	褐色色砂質土	土師器片有り
17	O-P9	P-41	柱穴	円	28	22	8	褐色色砂質土	
18	O-P8	P-40	柱穴	円	20	16	7	褐色色砂質土	土師器片有り、P7を切る
19	O-P28	P-25	柱穴	円	27	21	10	褐色色砂質土	
20	O-P7	P-39	柱穴	円	26	16	4	褐色色砂質土	P8.11に切られる
21	O-P13	P-43	柱穴	円	34	21	7	褐色色砂質土	P7を切る
22	O-P12	P-44	柱穴	円	30	22	11	褐色色砂質土	土師器片有り
23	O-P12	P-45	柱穴	円	20	14	9	褐色色砂質土	
24	O-P17	P-47	柱穴	円	30	24	6	褐色色砂質土	土師器片有り
25	O-P51	P-48	柱穴	円	28	20	10	褐色色砂質土	柱穴
26	O-P18	P-49	柱穴	不動円	44	36	15	褐色色砂質土	土師器片有り
27	O-P9	N964	柱穴	円	17	13	7	褐色色砂質土	
28	O-P54	P-51	柱穴	円	18	18	30	褐色色砂質土	柱穴?
29	O-P20	N963	柱穴	円	20	18	6	褐色色砂質土	土師器片有り
30	O-P20	N963	柱穴	円	20	17	5	褐色色砂質土	
31	O-P20	N963	柱穴	円	21	17	4	褐色色砂質土	土器片、既化物有り
32	O-P22	N963	柱穴	不動円	12	12	8	褐色色砂質土	
33	なし	N963	平安以降?	不動円	51	30	2.8	褐色色砂質土	
34	なし	N963	平安以降?	不動円	40	21	2.5	褐色色砂質土	
35	なし	N963	平安以降?	円	28	21	3.5	褐色色砂質土	
36	なし	N963	平安以降?	円	32	22	9.3	褐色色砂質土	
37	なし	N963	平安以降?	円	25	15	2.5	褐色色砂質土	
38	なし	N963	平安以降?	円	16	10	1.7	褐色色砂質土	
39	なし	N963	平安以降?	円	18	10	5.5	褐色色砂質土	
40	なし	N963	平安以降?	円	12	10	4.2	褐色色砂質土	
41	なし	N963	平安以降?	不動円	20	20	8	褐色色砂質土	
42	なし	N963	平安以降?	円	16	12	1.3	褐色色砂質土	
43	なし	N963	平安以降?	円	17	15	2.0	褐色色砂質土	
44	なし	N963	平安以降?	円	22	18	1.9	褐色色砂質土	
45	なし	N963	平安以降?	円	18	12	5.9	褐色色砂質土	
46	なし	N963	平安以降?	円	25	10	6.5	褐色色砂質土	
47	なし	N963	平安以降?	円	14	8	5.8	褐色色砂質土	
48	なし	N963	平安以降?	円	18	10	7.5	褐色色砂質土	
49	なし	N963	平安以降?	円	20	17	1.0	褐色色砂質土	
50	なし	N963	平安以降?	不動円	28	12	3.3	褐色色砂質土	
51	なし	N963	平安以降?	不動円	90	18	5.2	褐色色砂質土	
52	なし	N964	平安以降?	円	10	10	7.3	褐色色砂質土	
53	なし	M964	平安以降?	円	42	28	8	褐色色砂質土	
54	なし	M964	平安以降?	円	34	18	1.6	褐色色砂質土	
55	なし	M964	平安以降?	円	18	18	1.4	褐色色砂質土	

## 1. 造構

掘立柱建物3 C地区の38Cトレンチで検出された $2 \times 1$ 間の建物で、桁行の方位はN-20°-Wである。柱間は、桁行が1.8~2.0m、梁行が1.9~2.0m、面積は約7.2m<sup>2</sup>である。柱穴は、0.25~0.4mの円形、ないしは梢円形で、深さは0.4~0.6mである。6個の柱穴の内、根石を持つ柱穴が3基ある。根石は、角の取れた自然石を使用しており、本来は柱穴の底に敷並べていたものと思われるが、検出状況を見ると原位置を保っているものはほとんどない。柱の抜き取りの際に擾乱を受けたものであろう。

遺物は、柱穴2から土師器の小皿が3点出土しているが、柱廻りに位置しており、建物との同時性を示すものではない。柱の抜き取り後に柱穴内に転落したものとすると、やや後出の時期を考えざるを得ない。柱穴2に隣接するピットからも黒色土器が出土しており、このピットが建物3と近接する時期のものとすると、建物の時期は平安時代後期頃と推測される。

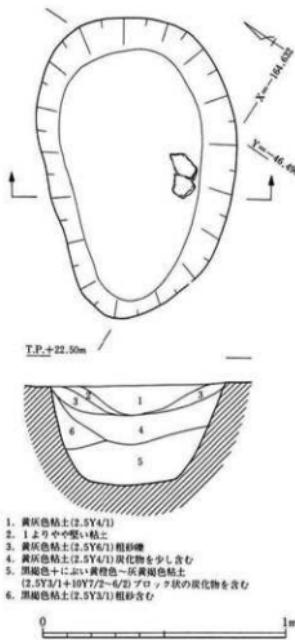
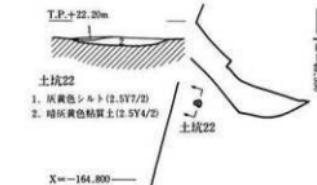


Fig. 332 F地区 土坑15平面および断面

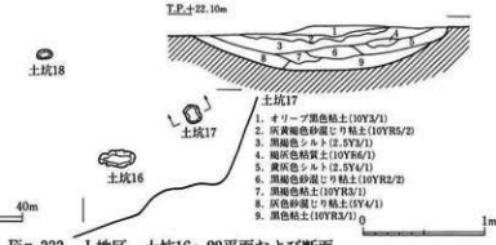
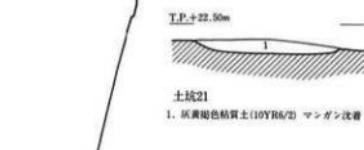


Fig. 333 I地区 土坑16~22平面および断面

**掘立柱建物4 F地区の3Fトレンチで検出された桁行2間×梁行1間の建物であるが、桁行南側の柱間の中央付近に東柱的な柱穴がある。桁行の方向はN-30°-W、面積は約7.6m<sup>2</sup>である。柱間は、桁行・梁行とも1.9~2.1mである。柱穴の大きさは、0.2m前後のものが多いが、中には0.12mほどの小さなものもある。中に根石を持つ柱穴が2基ある。**

柱穴内からは遺物が出土しなかった。そのため、建物の検出された遺構面が古墳時代前期から中世までの遺構を含む関係から、建物の時期を正確には決めがたい。

#### 4) ピット

C地区を中心として、建物としては復元できないものの、多數のピットが検出されている。時期は大半が不明であるが、おおむね平安~鎌倉時代に属するものようである。

#### 5) 土坑・落込み

古代に属すると考えられる土坑・落込みも各調査区で相当数検出されている。多くは性格不明であり、時期も特定できないものが大半である。

時期の明確な遺構としては、F地区の8Fトレンチで検出された土坑15がある。平面は梢円形で、長径1.2m、短径0.8m、深さ0.4m、底部は平坦である。埋土は黄灰色の粘土と粗砂の互層である。土坑内の最上層から奈良時代の土器器壺が出土している。

I地区の5I・10Iトレンチで主に検出された土坑16~22は、奈良時代と想定される水田面の下にあるため、遺物は出土していないものの、それ以前の時期のものである。形状・規模とも様々であり、埋

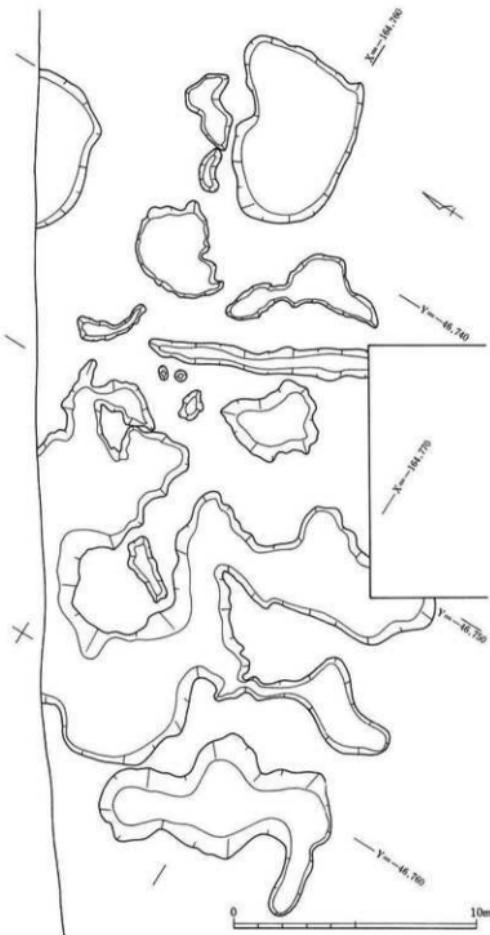


Fig. 334 D地区 落込み群平面

## 1. 遺構

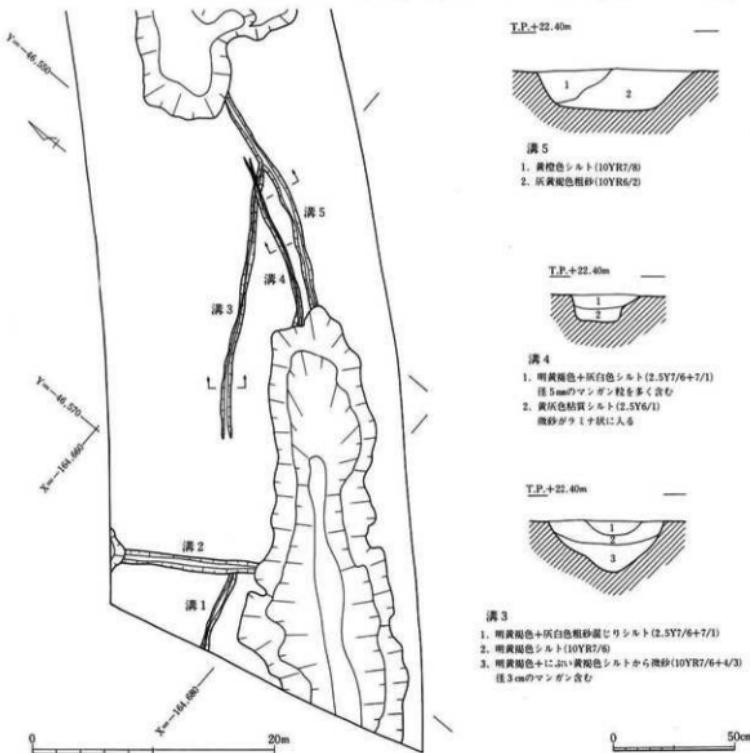
土も黒褐色粘質土や灰黄褐色粘質土などである。

D地区の5Dトレンチで密集して検出された落込み群は、不定形で深さも0.05~0.10m前後の浅いものである。埋土は暗灰褐色系の粘質土で、埋土内より奈良時代の土器が出土している。

### 6) 溝と暗渠

古代に属する溝もF・G地区を主として検出されている。F地区の15・16Fトレンチで検出された5本の溝群は、幅が1m前後かそれ以下で、深さも0.2m前後の浅いものである。上部が削平を受けているものと考えられる。埋没土は、黄褐色系のシルトや微砂が多いが、一部粗砂も混じる。谷状地形2に流入する3本の溝のうち、溝4・5は河川4とつながっていた可能性が高い。この溝は、河川4内に設置されていたダム状土盛りとしがらみを関連させて、オーバーフローする水を谷状地形2に排水する機能を有していた可能性もある。

G地区的主に11・12Gトレンチで検出された4本の溝は、相互につながっている。溝7・8・9は、



幅0.5~1.0m程度、深さは0.05~0.2mである。埋没土は、灰色や緑灰色シルトと灰色粗砂を主としたもので、自然堆積したものである。溝6は、幅1.5~2.0mほど、深さ0.1m前後であるが、中央部が高く、2本の溝が平行しているように見える。この高い部分で杭列が検出されている。溝の埋没土は、灰オリーブ色粗砂である。

この時期の暗渠そのものの検出はなかったが、暗渠に使用されていたと思われる木樋がF地区の2ヶ所で出土している。

2 Fトレーナーの木樋は、河川4内の下層の流水堆積層と上層の沼状堆積との境目付近のT.P.+21.8~21.9m前後で、他の木製品や自然木と一緒に面的に出土している。木樋に関連する木製品は計3点が縦に並んで出土した。内2つが「コ」の字形にくり抜かれた木樋が縦に半截されたもので、同一個体である。復元すると、長さ84cm、幅25cm、高さ19cmで、立ち上がり部は上半がやや内傾する。内面は平滑に仕上げられ、外面は丁寧に面取りされている。内外面共に幅3~4cmの工



Fig. 336 F地区 木樋出土状態

具痕が観察される。もう一つは板状のもので、長さ90cm、幅22cm、厚さ3cmで、直径5mm前後の穿孔が4ヶ所認められる。木樋と長さ・幅がほぼ同じであり、蓋と考えられる。

10Fトレーナーで出土した木樋は、古代河川4内の褐色粘土内で出土したもので、南東岸据部から川底にかけて流れに斜行して横たわっていた。上流側から流されてきて、この部分でひっかかり、そのまま埋没したものであろう。

現存長5.3m、直径約42cm、厚さは底部が12cm、側面が5~6cmである。一本をくり抜いたもので、底部外面は平坦となっている。

Fig. 337 F地区 木樋出土状態

## 1. 造構



溝 6

1. 深オーリーブ色粗砂(5Y6/2)～5mmの小礫含む、自然堆積か？
2. 灰色シルト(7.5Y5/1)粗砂・小礫を若干含む



溝 8

1. オリーブ色シルト(2.5GY5/1)と  
灰オーリーブ色粗砂(5Y6/2)の互層 シルト多し
2. オリーブ色シルト(2.5GY5/1)と  
灰オーリーブ色粗砂(5Y6/2)の互層 相砂多し
3. オリーブ色粗砂層にワニシルト(2.5GY6/2) 地山の  
薄い部分にワニシルト(2.5GY6/2)のブロック混入
4. 緑灰色シルト(10G5/1)
5. 緑灰色粗砂(2.5GY5/1) 個体にシルトが混入



溝 9-a

1. 灰色シルト混じり層粗砂(5Y4/1)
2. オリーブ色粗砂混じりシルト(2.5GY6/2) 地山の  
薄い部分にワニシルト(2.5GY6/2)の塊が非常に多い
3. 緑灰色シルト(10G5/1) 植物遺体は小さく均質
4. 灰オーリーブ色粗砂(5Y5/1)と  
灰色シルト(5Y5/1)の互層
5. 緑灰色シルト(10G5/1) 地山の崩落か？
6. 3と類似
7. オリーブ色シルト(2.5GY5/1)に  
3の砂が薄く混入し互層となす
8. 緑灰色シルト混じり粗砂(2.5GY5/1)  
植物遺体は細かい。変化物も含む



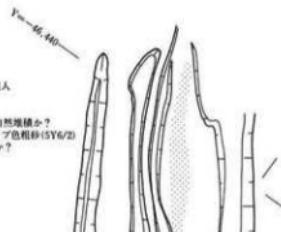
溝 9 と 9 の合流部

1. 緑灰色シルト(10G5/1)若干の植物遺体の  
混入が認められても均質
2. 灰白色粗砂(2.5Y7/7)下半部はやや  
粒径が大きく土が比較的均質
3. 灰色シルト混じり粗砂(10G5/1)
4. 2と類似
5. オリーブ色シルト(5GY5/1)と粗砂の互層  
上面付近は緑灰色シルト(10G5/1)が薄く置き
6. 灰色粗砂(10G5/1)同色シルトの薄層が  
挟まる。植物遺体や鉄器



溝 7

1. 灰色シルト(7.5Y5/1)粗砂混入  
植生跡による地化
2. 深オーリーブ色粗砂(5Y6/2)
3. 灰色シルト(5Y5/1)灰オーリーブ色粗砂(5Y6/2)  
とマーブル模様、自然堆積か？
4. 灰オーリーブ色粗砂(5Y6/2)  
粒径やや小さく均質



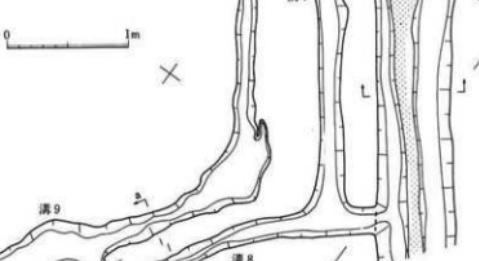
溝 6



1. 深オーリーブ色粗砂(5Y6/2)  
下半部に～1mmの塊が比較的頻度、  
上面付近に灰色シルトの薄層有り



溝 7



杭例



Fig. 338 G地区 溝 6.7.8.9 平面および断面

## 7) 水田

この時期の水田は、G地区の河川6内で検出されたものと、I地区で検出されたものがある。

## 河川6内水田

この水田は、断面観察で検出されたもので、平面的な拡がりは不明である。古代河川6がT.P.+21m前後まで埋没した段階で、その河床を利用して水田が作られたものである。河川の下部には厚い砂礫層が堆積しており、その上に粗砂や細砂、シルトの薄い互層が堆積している。この堆積は、北端部ほど厚く約0.6mになり、南側ほど薄くなっている最後にはほとんど見られなくなる。この堆積の上に水田が断面的には3面作られているが、北側ほど地盤が高いため、南に向かって0.1~0.2mほどの段を持って下がる。この段際に幅約0.5m、高さ0.1m程度の畦畔が作られている。砂の多い河床に作られているため、水田耕土は緑灰色極細砂で、植物遺体が含まれている。また、上部が土壤化を受けている。

この水田は、どの程度の期間耕作されていたかは不明であるが、再び厚い黄色粗砂により埋没してしまう。おそらく、一気の洪水に襲われ、水田は復旧されることなく放棄されてしまったのであろう。この埋没時期が平安時代末と考えられるため、水田もその時期のものである可能性が高い。



Fig.339 I地区 水田平面および旧地形推定コンタ図

## I 地区水田

I 地区の完新世段丘面で検出された水田で、東→西に流れる河川 8 の両岸に広がる。本来、伏尾丘陵下までの調査区南側の完新世段丘面にも全面に拡がっていたのであろうが、足跡は検出されたものの、畦畔は検出されなかった。また、南端部は、削平の影響が強く、足跡も検出されていない。この水田面は、黄褐色・灰白色系の粘土の上に作られており、地形的には河川上流左岸の伏尾丘陵側が約T.P.+22.55m、最も低い下流側左岸部が約T.P.+21.85mと、0.70m程度のレベル差がある。右岸部でも、上流側がT.P.+22.30m、下流側がT.P.+21.95mと0.35m程度のレベル差がある。また、微地形的に見ると、左岸部でも河川 8 側が若干高く、丘陵側との間に細長い窪地ができている。

水田区画は、こうした地形の傾斜を大きく損なうことなく、小区画に分割している。畦畔がT字形になる部分もあり、また左岸部の窪地もそれを残したまま幅の狭い区画が連続的に設けられているが、基本的には長方形に区分されている。畦畔は、上幅で0.2~0.6m、高さ0.05~0.1m程度のもので、残存状況はそれほど良くない。水路は検出されず、畦畔の所々で水口が検出されていることから、上流側の高い部分から順次水口を利用して下流側へ水を配分したものと考えられる。水口は、右岸側で多く検出されているが、検出された例からするとすべて畦畔の交点付近に設けられている。畦畔が田形に交差する場合には、その部分に集中して水口が設けられている。

水田面には、ほぼ全面に人と、牛と考えられる偶蹄目動物の足跡が検出されている。足跡は深いものでは10cmも沈んでおり、水田面が泥炭化していたことがうかがわれる。水田耕土は層厚10cm前後の赤褐色砂質土で、土壤化が進んでいる。畦畔も同様の土で盛られている。この赤褐色砂質土は、ベースとなる黄褐色や灰褐色系の粘土が耕作に伴う土壤化を受けたために形成されたものである。

T.P.+23.50m

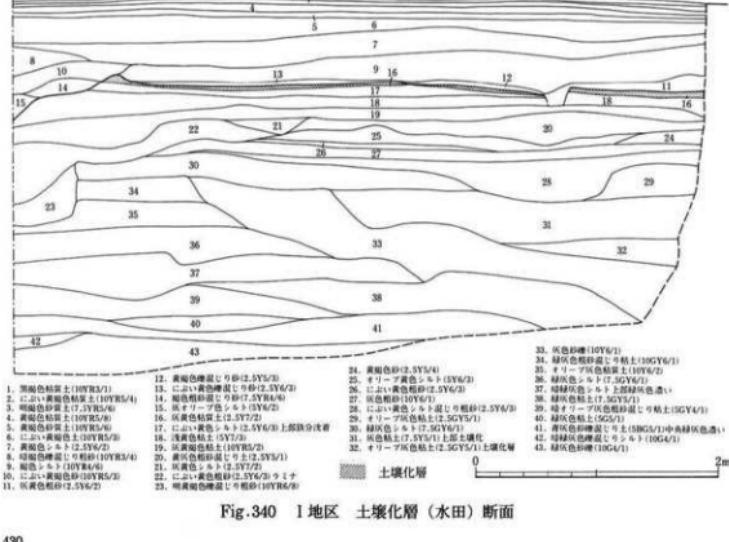


Fig.340 I 地区 土壤化層(水田)断面

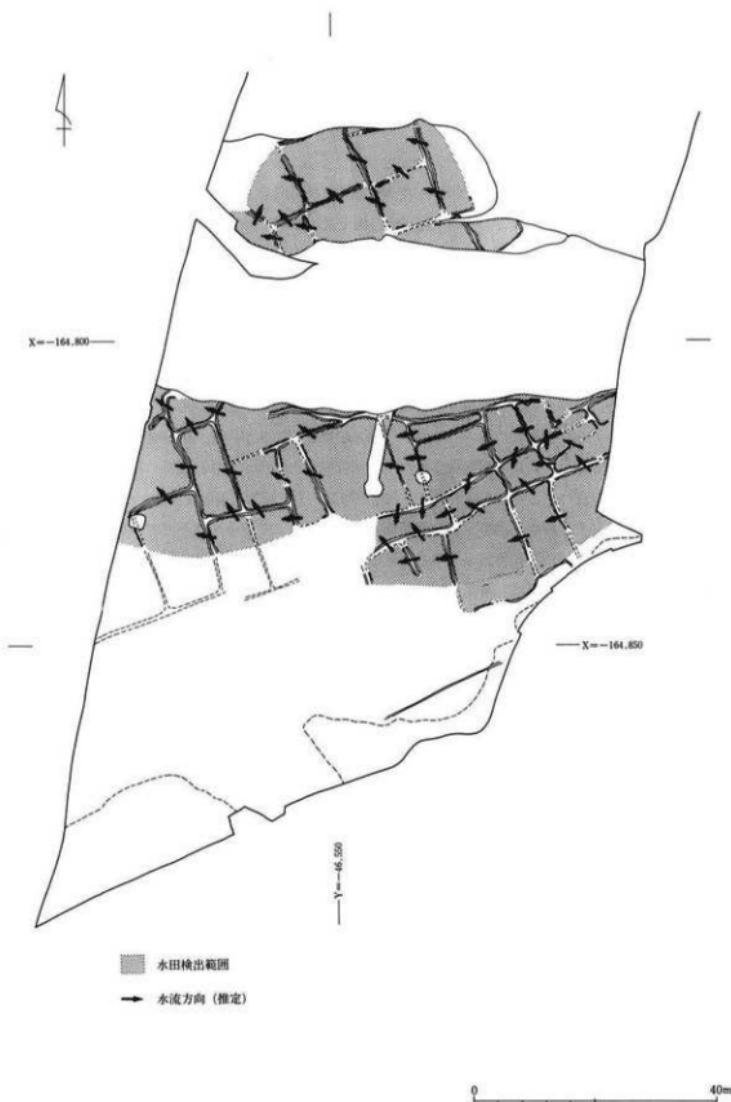


Fig.341 I 地区 水田検出状況

## 1. 遺構

水田の1区画の広さは様々であるが、広いもので100m強、狭いもので30m前後である。

ここで問題となるのは、畦畔の方向である。畦畔方向は、おおむねN-15°-WからN-20°-Wの間を指しており、比較的区画が良く残存している下流側左岸の畦畔でみるとN-16°-Wを指している。このN-16°-Wという方向は、小阪遺跡をも含む石津川中流域から下流域にかけて広範に施行されている条里水田の規軸線と同一のものである。これを偶然の一一致とするのか、あるいは現条里に先行する条里地割とみなしていいのかが重要な検討課題となる。

それを考えるには水田と河川8との関係が問題となる。河川8は、埋没最終段階で両岸に溢流し、水面を砂層で覆ってしまうが、この時期が河川内の出土遺物から8世紀末頃と想定されている。しかも、水田区画を見ると、左岸側では河岸に沿って畦畔が作られているが、方形を呈する他の水田区画とは異質な印象を受けるため、水田が削割された後に応急処置として作られたようである。右岸側では北側の段丘崖が水田の機能停止の中・近世河川1の削割により形成されたものであるが、河川8側の削割は、根拠としては弱いものの畦畔が途中で切かれていることと、左岸部の様相からして、水田が機能していた時点でのものと考えられる。河川8の河岸部が崩落していることは、川底に多数散乱する偽礫からも明らかである。それからすると、河川8は、水田が作られた段階では規模がもっと小さかったか、あるいは存在しなかったものと思われる。その後、この水田は、河川8が両岸への浸食作用を強めたため、その都度畦畔を修正しながら耕作が継続されたが、8世紀末の大洪水で砂に埋没したために放棄されたのであろう。以上の点からして、この水田の作られた時期は8世紀末以前とすることができる。しかし、その造成時期については確実に決めうる材料がないため、どこまで遡るかは不明である。

なお、河川8の埋没時期を8世紀末とする根拠は、河川8の上層の砂層から出土したミニチュアの竈と鍋からである。この竈と鍋は、河川検出面から0.3m程度下で出土したもので、10mほどの距離をおいて見つかりっている。出土した砂層は、水田面を覆う砂層と同一か、ないしはその直下に堆積していたもので、水田廃絶時かそれに近い時期の堆積である。竈と鍋は、竈の上部の窪みに鍋がびたりとはまるため、セットとしては間違いない。祭祀に伴う遺物であるため、同一の場所で使用、ないし投棄されたものが、流下する過程で10mほど離れて埋没したものであらう。磨滅をほとんど受けおらず、流下距離が長くないと判断されるため、この砂層の堆積時期を決めうる遺物と言える。この竈と鍋は、長岡京のSD10406<sup>11)</sup>等で出土しているもので、一応8世紀末に位置づけられると考えられる。なお、この他には水田の時期を決める遺物は出土していない。

そこで、問題の畦畔の方向についてであるが、河川8の両岸の畦畔が共通の方向性を示していることは間違いない。水田の造成時点では、河川8は存在しなかったが、もっと小さかったことからして、両岸の畦畔が小地域の共通の測量基準により設置されたとしてもなんら不自然ではない。しかし、複雑な起伏をみせる傾斜地を方形に区画していくという事は、その方向性に強い規制が働いていたとも考えられる。こうした方向性を規制するものとなると、条里制の施行と関連する可能性がある。

石津川中・下流域の現条里の方向は、N-16°-Wであり、石津川の最下流部を除く下流域の流路方向と平行関係にあり、磁北とは約10°の差を有している。沖積平野が狭く、小面積の条里地割が点在する泉州地方では、条里の方向は、大半が河川の流路方向と平行関係にある<sup>2)</sup>。この河川の流路に平行させるということは、言いかえれば開析谷の主軸に平行させるということである。石津川上流のN-23°-Wを指す条里も、石津川の流路が屈曲し、開析谷もその方向に曲がるためである。こうした条里地割の方法は、地形的にも地割と用排水が最も容易な方法であり、横幅の狭い地域に条里制を施行する際の

一方法と考えられる。

そうした点からすれば、石津川中・下流域の条里地割の基点は、開析谷の主軸に平行している下流域にあり、その規軸線を上神谷部分に延長してきたと言えるのではないか。そのため、陶器川流域にあるI地区の8世紀代の水田畦畔の方向が、そうした現条里の方向とほぼ一致するということは、偶然の所産とするよりは、条里地割の延長線上にあるとした方がより蓋然性が高いと考えられる。I地区の場合には傾斜地のため、その方向は踏襲しても、小区画に区分しなければならなかつたのであろう。また、I地区で地形改変が顕著に行なわれなかつた理由としては、陶器川左岸の用配水の起点部であり、水田区画を広げるために低く削ることができなかつた可能性も指摘できる。

このような条里水田でありながら小区画を有するものとしては、河内平野の冲積地に立地する八尾市久宝寺遺跡の例がある<sup>3)</sup>。水田の時期は、それ自身には決め手がなく、上下の遺構から7~11世紀の間に含まれるとされている。個々の畦畔には若干の方向の振れはあるが、基本的には正方位条里地割の範疇に入るものであり、現条里の坪境に一致する畦畔も存在する。ところが、その区画は、平坦地に立地しながら、一辺が10~20m前後の方形ないし長方形に区画されている。畦畔も下幅で0.5mから1.4mほどとやや規模の差はあるとはいえ、坪境といえども他と規模の違わない畦畔規模である。そうした意味では、I地区のみならず小阪遺跡周辺の条里地割が元々小区画であった可能性もある。

近年、弥生・古墳時代水田跡の検出例が増加しているが、多くは小区画水田である<sup>4)</sup>。このことは、当時の稲作技術の上では小区画に区切る必要性があったということであり、そうした技術上の問題がI地区的水田造成の段階でも克服できていなかつたということかも知れない。

ともあれ、I地区において、一応の留保つきながらも、8世紀代の条里水田が検出された意味は大きい。しかも、石津川下流域を基点とする条里が小阪遺跡にまで分布するということは、その間の広範な地域に8世紀段階で条里制が施行されていた可能性を強くするものであり、奈良時代における開発を考える上で重大な問題を提起したと言える。

從来、小阪遺跡周辺では、発掘調査の進展により、条里地割についての幾つかの知見が得られている。小阪遺跡の西に隣接する太平寺遺跡では、水田遺構そのものは検出されていないものの、1棟のみの検出であったが平安時代後期の掘立柱建物の桁行方向がN-16°-Wを指しており、条里地割との関連が指摘されている<sup>5)</sup>。石津川のやや上流に位置する大庭寺遺跡では石津川左岸部で鎌倉時代の集落が検出されているが、この集落は現条里の地割と一致する一辺約1町(108m)の溝に3方が囲まれていた<sup>6)</sup>。小阪遺跡の調査においても、確実な資料ではないものの、掘溝などの方向から条里地割が中・近世には存在していたことが判明している。

ただ、こうした散発的に検出される条里遺構は、必ずしも条里制施行の始源を示すものではない。先にも述べたように、この地域の完新世段丘面の大半が削平の影響を被っており、古い水田遺構が喪失している可能性が高いからである。I地区周辺でも、I地区南端の現条里の坪境となる伏尾丘陵側の里道を境として、丘陵側の開析谷部分では古墳時代の掘立柱建物群が検出されると共に、古墳時代の包含層も残っている<sup>7)</sup>。それに反し、I地区側の南端部は、里道部分で段落ちしており、掘立柱建物が1棟検出されたものの、柱穴の深さも0.2m前後と浅く、包含層も残っていない。当然、古代水田面もこの部分は残っておらず、明らかに削平を受けていることが分かる。

文献的には、石津川流域の条里制については、延喜22年(922)の「和泉国大鳥神社流記帳」に里名が幾つか記載されており<sup>8)</sup>、この時点では確実に条里制が施行されていたことがわかる。この記載による

## 1. 遺構

と、大鳥里・郡里・水合里などが里名として上げられているが、最も南に位置するのは石津川と和田川の合流地点を含む水合里である。水合里は、小阪遺跡から2kmほど下流にあたるが、10世紀初めの段階で少なくともこの地点までは条里制が南進していたことになる。

ただ、里名はあっても、虫食い的にしか開発が進展していない場合も考えられるため、この地域が単純に条里地割が施行されていたとは言い切れない。しかし、5世紀以降、石津川流域の北側では膨大な労働力を必要とする百舌鳥古墳群の造営が連続と続けられていた。こうした古墳造営に注がれた力が、7世紀以降、宮城や寺院建築などに振り向けていたとしても、古墳造営に費やした土木力をもってすれば、条里制に則った水田造成などたやすいものであったはずである。そのため、その地域において開発が行われるか否かは、労働力の確保と水が得られる地形であるかどうかにかかっていると言ってよい。その点からすれば、泉州丘陵では、須恵器生産にも労働力を微用されたはずであり、労働力の確保という点では条件的に厳しい面もある。また、用水がどれほど確保できたかについても、当時の水路が検出されていないため不明と言わざるを得ない。ただ、技術的にみれば、南河内で既に開削されていた古市大溝の例からしても、石津川や陶器川本流からの取水も容易であったはずである。

ともかく、I地区で検出された水田は、条里制施行地域の最末端であるがゆえに、削平を免れて残存したと言える。検出面積が極めて小さいため、果たして条里水田と断定できるかについてはいさかの危惧を禁じえないが、周辺地域においても、こうした凹地に残された古い条里水田の名残が検出され

ば、この問題に対する確たる回答  
が得られるであろう。

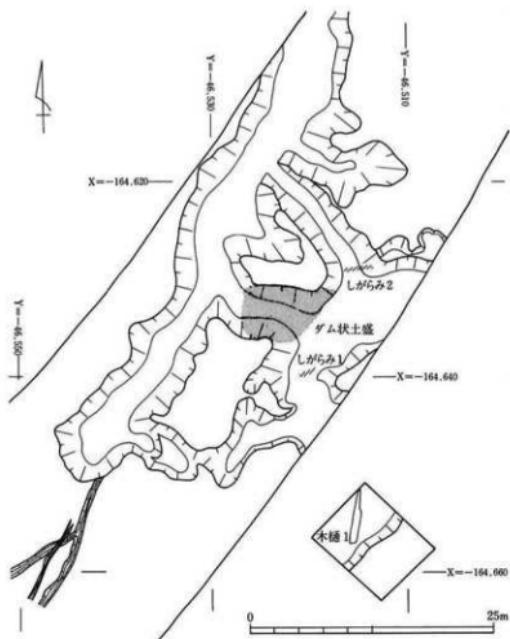


Fig. 342 F 地区 古代谷状地と水利施設

### 8) しがらみ・ダム状土盛り

陶器川の氾濫原には、旧陶器川とその支流が流路を幾度となく変遷させた痕跡が残されている。河川の埋没状況からは、洪水堆積により一気に流路が埋没してしまうものもあるが、徐々に埋没していくものも多い。徐々に埋没していく流路は、流れから完全に遮断されてしまって沼状の堆積物しか残さないものと、細流の残るものがある。F・G地区のそうした細流のある流路内で、しがらみやダム状土盛りが検出されている。

F地区で検出されたしがらみ1・

2、ダム状土盛りは、すべて古代河川4に設置されたものである。

河川4は、古墳時代河川7の名残の流路で、15Fトレーンチ部で3本

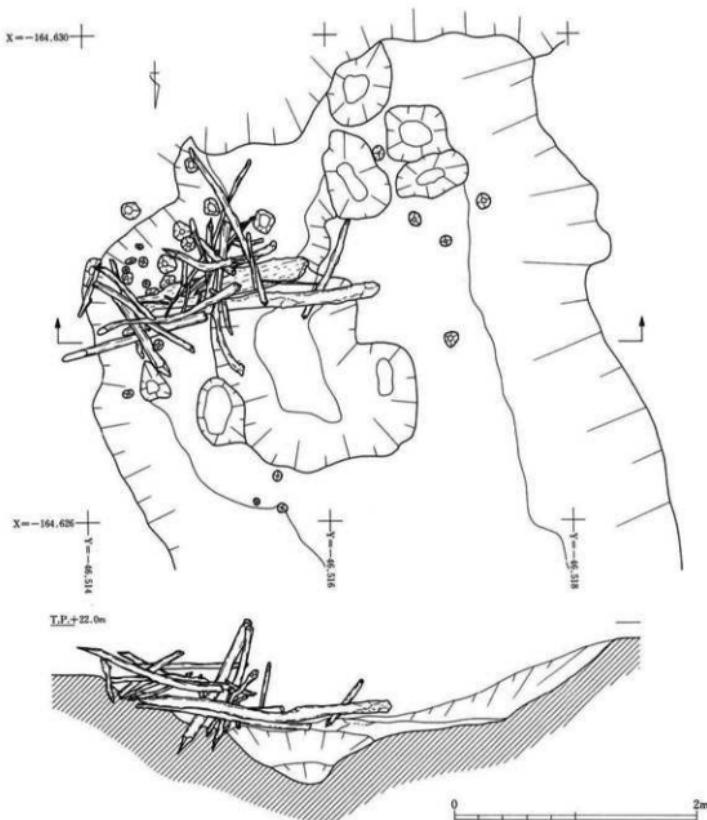


Fig.343 F地区 しがらみ2平面および断面

に分流しており、それぞれの間が島状高まりとして残されている。南側の流路は浅く、不定形で、流路の痕跡と言える程度のものである。中央の流路はダム状土盛りで閉鎖されており、北側の流路にしがらみ2が設置されている。この3本の流路は、再び南東側の15Fトレンチ南東端、および2Fトレンチ部で合流するが、さらに14Fトレンチから南流する古墳時代河川6の名残の流路とも合流し、さらに10F、12Fトレンチへと南流する。この合流する部分にしがらみ1が設置されている。

なお、河川4の流れの方向は、この地域の地形傾斜からして原則として北→南と考えられるが、複雑な流路形状としがらみとの関係から局部的にはどちらに流れているか確定しがたい。3者の関係は、調査担当者の見解によるとダム状土盛りが古く、その後、しがらみ1・2が併存していたとしている。時期的には3者とも奈良時代に属している。

1. 遺構

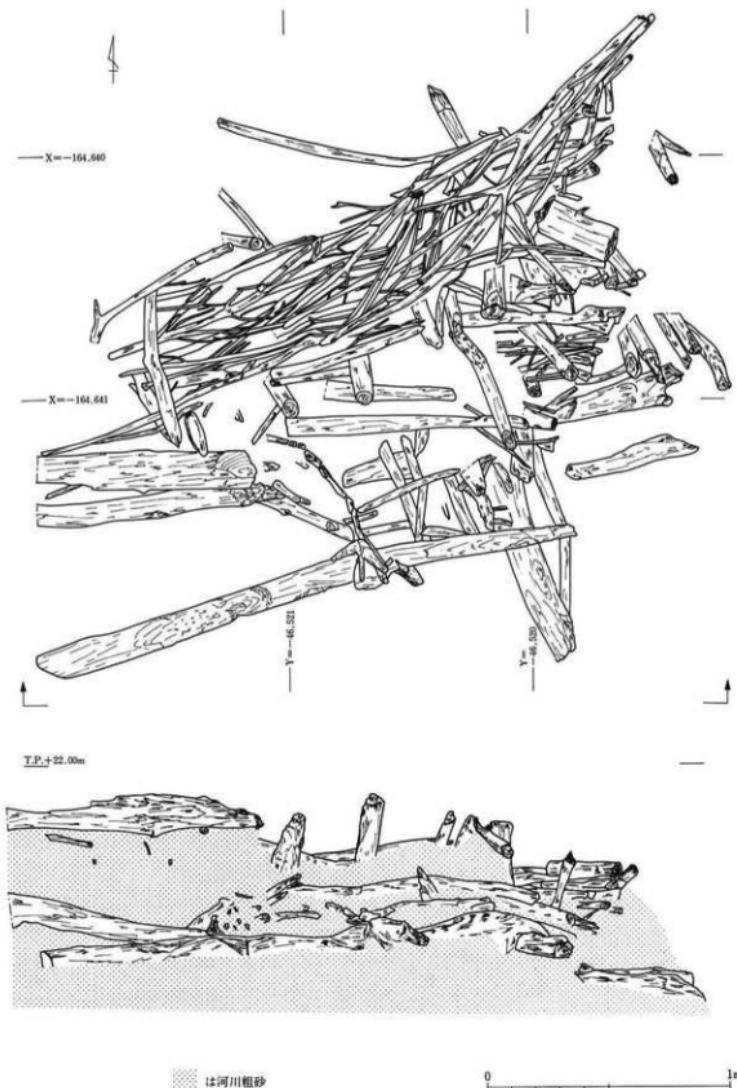
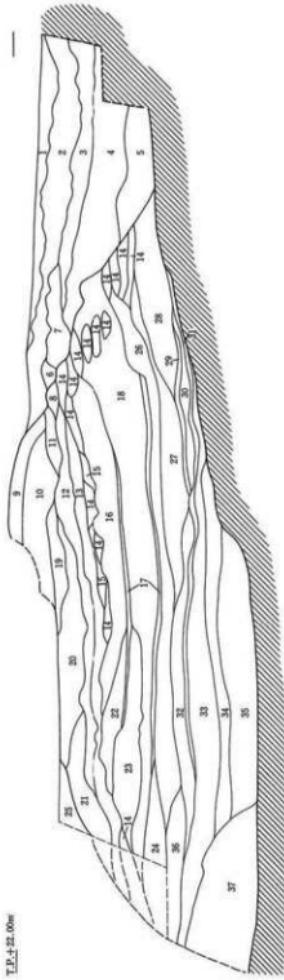


Fig. 344 F 地区 しがらみ 1 平面および見通し図



1. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、灰白色層、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
2. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
3. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
4. オリーブ色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
5. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
6. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
7. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
8. オリーブ色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
9. オリーブ色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
10. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
11. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
12. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
13. オリーブ色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
14. オリーブ色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
15. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
16. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
17. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
18. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
19. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。

20. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
21. オリーブ色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
22. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
23. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
24. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
25. オリーブ色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
26. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
27. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
28. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
29. オリーブ色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
30. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
31. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
32. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
33. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
34. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
35. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
36. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。  
37. 鮎色粘土 (5CY/1) 黄褐色地質、堅密・堅硬等々。部分的に細かなプロック有り。

上のプロックは礫石、下部のプロックは砂等でない

化されたもの有り、プロックはもつれたりしたものが有る

Fig. 345 F 地区 ダム状土塁り断面

## 1. 道 構

しがらみ1 2Fトレーナー河川4内の3本の流路が合流し、さらに古墳時代河川6の名残の流路の分流と合流する箇所に設置されたしがらみで、ダム状土盛りのすぐ南側に位置する。2つの島状高まり間を結んでおり、この箇所の川幅は約8mほどである。しがらみは、流路にやや斜行して設置されているが、杭列長約6m、最大幅1.4m、高さ1mほどのものである。しがらみの構造は、まず、直径7~8cmの杭を約50cm間隔で下流側に傾けてやや斜めに打設し、横木を何段か絡ませる。横木は、現状では2段のみ残っている。そして、横木を固定するための杭を必要箇所に斜めに打設しながら、杭間に粘土や草木を詰める。下流側で再度同じ作業を行い、その間も粘土と草木で詰める。さらに、上流側に長さ1~2m、直径2~3cmの小枝を密に横たえ、それを斜材で固定し、しがらみを強固なものとしている。

しがらみ2 15Fトレーナー河川4内の3本に分流した内の北側の流路の南東側出口付近に設置されたしがらみである。北側流路は幅4m、深さ0.8mで、断面が逆台形を呈している。しがらみは西半部が流失しており、残存していたのは流路東肩から中央部くらいまでで、約10本の杭と5本ほどの横木が検出されている。杭は北側に強く傾斜した状態で打設されており、横木はその北側に横たえられている。流失した際にバラバラになった一部木樋を含む材が北側に散乱している。なお、しがらみ内の横木にも木樋が転用されている。

ダム状土盛り 15Fトレーナーの3本に分流した内の中央流路を土盛りして埋め立てたもので、東西10m、南北5m、高さ2mほどの規模で埋め立てられている。築造の過程で、数回にわたり木枝を敷き詰めている。また、盛土は、緑灰色粘土、黒色や灰色の砂質土・粘質土などのブロック土の集積で、盛土の単位が明瞭に観察できるものであった。

しがらみ3 G地区2Gトレーナーの古代河川5内で検出されたしがらみである。河川5のしがらみの設置された付近は、川幅が22.5mほどに広がり、最深部も約2mほどになる。河川内には幾つかの小流路が見られるが、しがらみの検出されたのは、その内の北半部で東西方向に流れる幅10mほどの小流路内である。しがらみは、上半部のシルト層を除去した段階で検出されており、痕跡程度にしか残存していなかった。杭は、細いものが多く、乱雑に多数打ち込まれているが、基本的には流れに斜交して設置されている。西への分流を制御することを目的としていたようである。しがらみの築造時期の上限は、奈良時代中頃と考えられる。

## 註

- 1) (財)長岡市埋蔵文化財センター 1984 「長岡京跡右京第106次調査概要」『長岡市埋蔵文化財調査報告書第1集』
- 2) 大阪府 1990 「付図 大阪府下の条里制」『大阪府史第II卷』
- 3) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1987 『久宝寺北』
- 4) 日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 1988 「日本における稲作農耕の起源と展開資料集」
- 5) (財)大阪文化財センター 1984 「太平寺遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡調査発掘報告書I』
- 6) 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1989 「大庭寺遺跡(その4)発掘調査」『現地説明会資料24』
- 7) (財)大阪府埋蔵文化財協会 岡戸哲紀氏御教示
- 8) 服部昌之 1990 「第二章 8世紀の大坂 第三節 条里と交通路」前掲註2 461・462頁

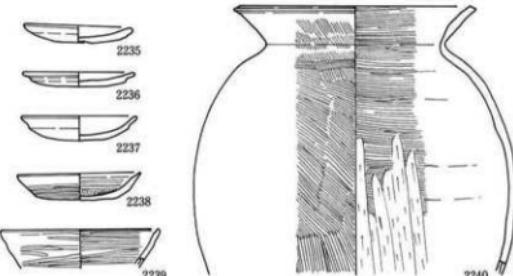
## 2. 遺 物

古代の遺物は、掘立柱建物・溝・水田等からわずかに出土しているが、その多くは、河川およびその上面の沼状堆積から出土している。他には、包含層から出土する。

### 1) 掘立柱建物

掘立柱建物のピットから出土する遺物は小片が多く実測可能なもののが少ない。

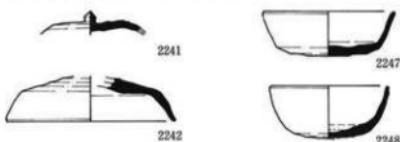
C地区の掘立柱建物3のピット2からは、土師器小皿が3点、隣接するピットからは黒色土器小皿が1点完形で出土している。



### 2) 溝

Fig. 346 C地区 掘立柱建物、I地区 溝10、G地区 水田出土遺物

溝10から出土する遺物は1点のみで、黒色土器の口縁部破片がある。斜め外方に開く口縁端部の内面に沈線文を1条巡らしている。内外面共に黒褐色をしており、横方向のヘラミガキを施す。



### 3) 水田

水田は、この時期ではG地区とI地区で検出されており、前者からは土師器の甕、後者からはこの時期以前の須恵器が覆土から出土している。甕(2240)は、底部を欠くもので、斜め外方へ伸びる口縁部の端部が凹面をもち、やや膨らむ体部をもつ。体部の調整は、外面ハケメ、内面ハケメ後へラケズリを施す。内外面に煤が付着する。

須恵器は新しいもので宝珠つまみを付ける蓋坏(2241)や、坏身(2247, 2248)があり、古いものでは静止ヘラケズリを施す坏身(2250)等がある。

古手の須恵器には、伏尾遺跡の谷部出土の遺物に類似性が認められよう。

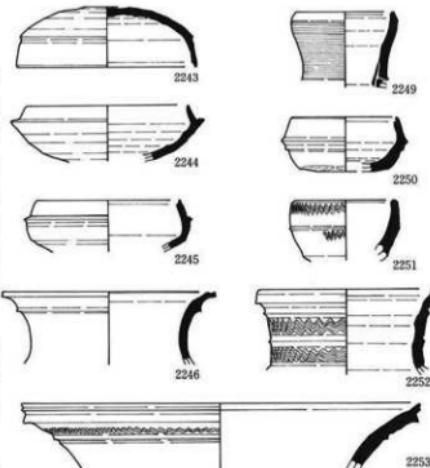


Fig. 347 I地区 水田出土遺物

## 2. 遺物

### 4) 河川

この時期の河川は8条ありそれぞれから、多少の遺物が出土している。

河川1出土遺物(Fig.348,349)

C地区の河川1からは、土師器皿および甕、軒丸瓦が出土する。

皿は(2254,2256)が完形であり、いずれのものも、わずかに開く口縁部の端部が丸みをもち、外面に強いナデおよび凹線文を施す。前者の底部外面には墨書きが施される。(2257)はやや大型で斜めに開く口縁部の端部が丸みをもち、口縁部外面に強いナデを施す。(2255,2258)は、大型でやや斜めに開く口縁部の端部は、前者が凹面をもち、後者が内面に凹面をもつ。

甕は(2259)が小型のもので、斜め外方に開く口縁部の端部がわずかに拡張し面をもつ。体部外面粗いハケメ、内面ヘラケズリを施す。(2260,2261)は、大型の

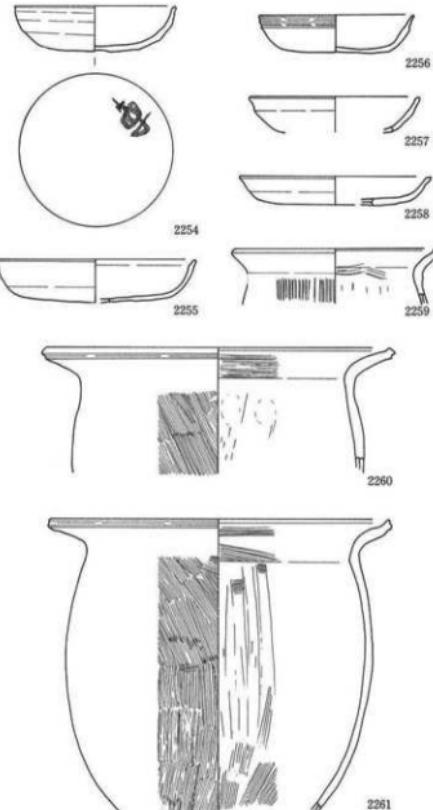


Fig.349 C地区 河川1出土遺物(2)

Fig.348 C地区 河川1出土遺物(1)

甕で河川の肩部に3個体が固まって出土したうちの2点である。いずれも、斜め外方に開く口縁部の端部がわずかに拡張し面をもつ。体部の調整は外面がハケメ、内面がヘラケズリである。いずれも、外面に煤が付着する。

河川2出土遺物(Fig.350)

E地区の河川2から出土した遺物はわずかであり、この時期のものは、青磁の小皿1点のみである。

他に、時期の古い須恵器蓋・甕が各1点ある。

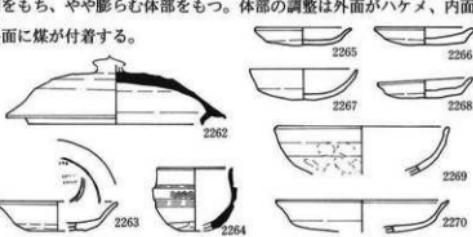


Fig.350 E地区 河川2出土遺物

Fig.351 E地区 河川3出土遺物

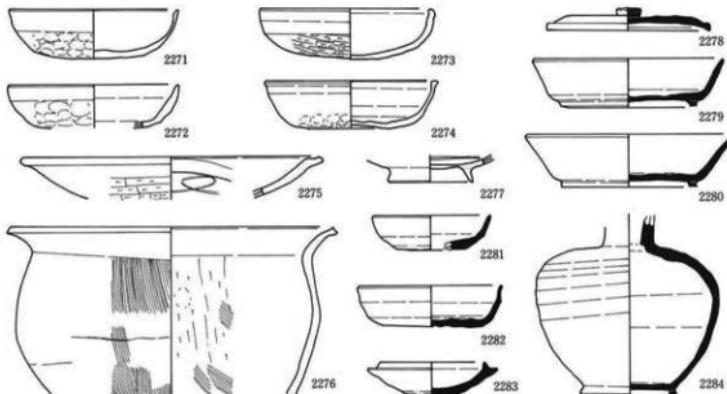


Fig. 352 F 地区 河川 4 出土遺物

## 河川 3 出土遺物 (Fig. 351)

E 地区の河川 3 から出土した遺物は土器のみがわずかにあり、(2269, 2270)の土師器皿が 2 点であり (2266, 2268) の瓦器小皿と、(2265, 2267) の土師器小皿が、河川上層の沼状堆積からの出土である。

## 河川 4 出土遺物 (Fig. 352)

F 地区の河川 4 から出土する遺物は、土師器・須恵器があり、他に黒色土器が 1 点のみある。土師器には、壺・高壺・甕があり、須恵器には蓋壺・壺がある。

土師器の壺身には、口径 14cm 前後のものがあり、(2271, 2272) は口縁端部が丸みをもち、(2273) が端部が丸みをもち、内面の端部下がわずかに凹み、(2274) が端部を内外方にわずかに拡張させ、上端面をもつ。底部外面の調整は、(2273) のみがヘラケズリを施し、他は指頭圧痕を残す。(2275) の高壺は、壺部のみを残存し、浅い壺部から短く外反しわずかに上方へ伸び外端面をもつ。外面にヘラケズリを施し、内面に螺旋状の暗文を施す。甕は、短く外反する口縁部の端部が上下にわずかに伸び凹面をもつ。ややふくらむ体部をもつ。外面にハケメを施し、内面にハケメ後ヘラケズリを施す。体部の外面に粘土紐の継ぎ目を残す(2276)。

須恵器の蓋は、口縁端部がわずかに垂下し面をもち、偏平な天井部の中央につまみを付ける(2278)。壺身には、斜め外方へ伸びる口縁部の端部が丸みをもち、平坦な壺底部に断面逆台形の高台を付ける(2279, 2280)、土師器の壺身を模した(2282)がある。壺は、口縁部を欠損(2284)し、筒状の頸部にやや肩の張る体部に、平坦な底部に断面逆台形の高台を付ける。

黒色土器は(2277)、底部のみを残存し、「ハ」の字形の高台を付け、内面に暗文を施す。内面が黒色で、外側が茶褐色である。

他に、時期の古い須恵器がわずかに出土している。

## 河川 5 出土遺物 (Fig. 353, 354)

F・G 地区の南東から北西へ流れる河川 5 から出土した遺物には、土師器、須恵器があり、飯蛸壺、土鍤がある。(2324~2333) の出土遺物は、上層の沼状堆積からのものである。

沼状堆積から出土した土師器には、壺身と皿、甕がある。壺身には、小型のもの(2324~2326)がある。

2. 遺物

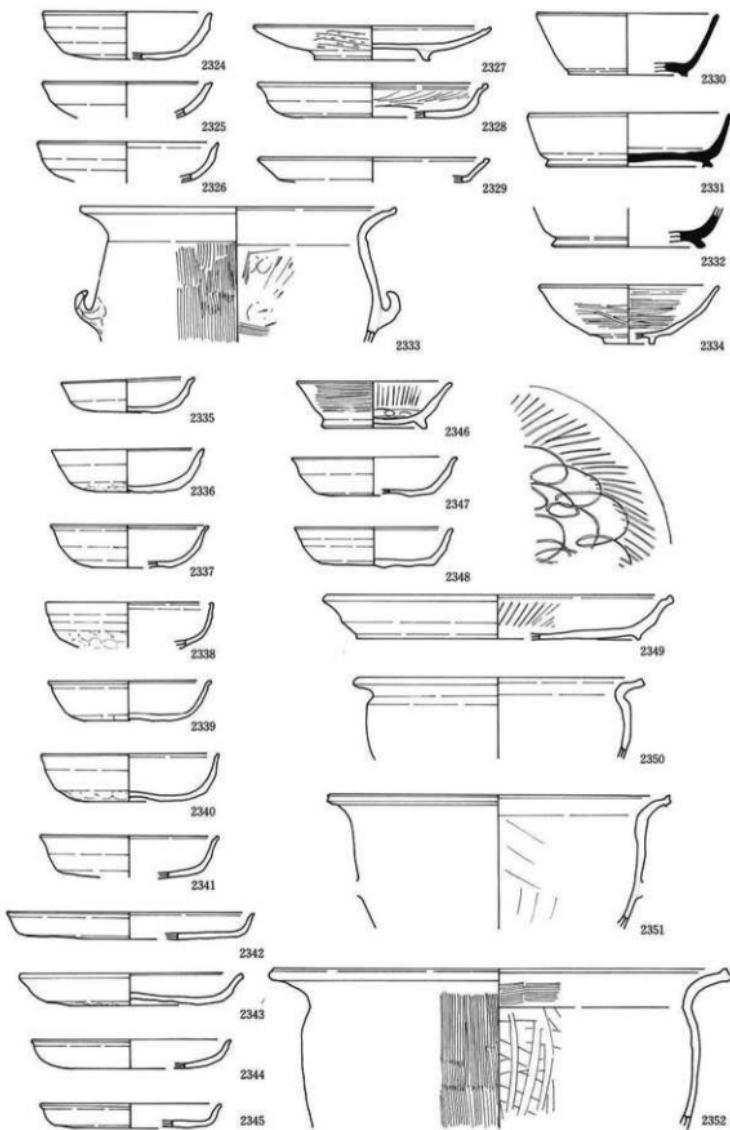


Fig.353 F・G地区 河川5出土遺物(1)

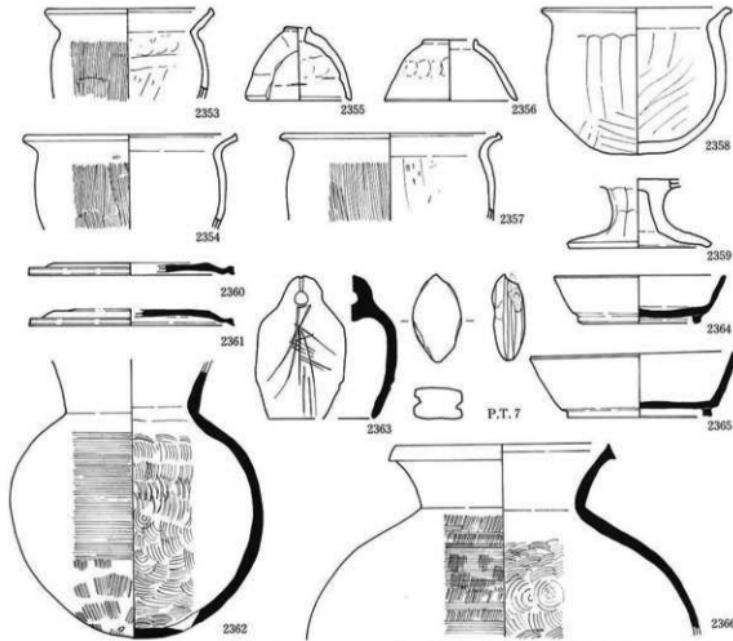


Fig. 354 F・G地区 河川5出土遺物(2) (P.T. 7は縮1/2)

皿には、やや大型のもの(2327~2329)があり、(2327)は高台がつき、外面にヘラケズリを施す。

(2333)は、短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。体部がややふくらみ、相対する2方に耳状の把手を付ける。体部の外面にハケメを施し、内面にハケメ後ヘラケズリを施す。外面に煤が付着する。

須恵器には、坏身がある。いずれも、高台をもつものである(2330~2332)。

下層の砂礫層から出土した土器には、坏身、皿、甕、高坏、ミニアチュアがある。

坏身には、小型のもの(2335~2339, 2346~2348)、やや大型のもの(2340, 2341)がある。(2346)には高台が付き、外面にヘラミガキが施され、内面に放射状および螺旋状の暗文が施される。皿には、小型のもの(2343~2345)と、大型のもの(2342, 2349)があり、(2349)には、高台が付き、内面に、放射状および螺旋状の暗文が施される。

甕には、小型のもの(2353, 2354, 2357, 2358)と、中型のもの(2350, 2351)、大型のもの(2352)がある。(2358)は、完形で短く外反する口縁部の端部が面をもち、ややふくらむ体部に丸底のもので、体部の調整は、外面ヘラケズリ状ナデ、内面指ナデを施す。内外面共に煤が付着する。(2351)は、短く外反する口縁の端部が上下にわずかに拡張し凹面をなし、裾すぼまりの体部をもつもので、相対位置に把手を付ける。

高坏は、脚部のみ残存し、中空の脚柱部から裾広がりにひらく脚台部の端部がわずかに垂下し面をも

2. 遺物

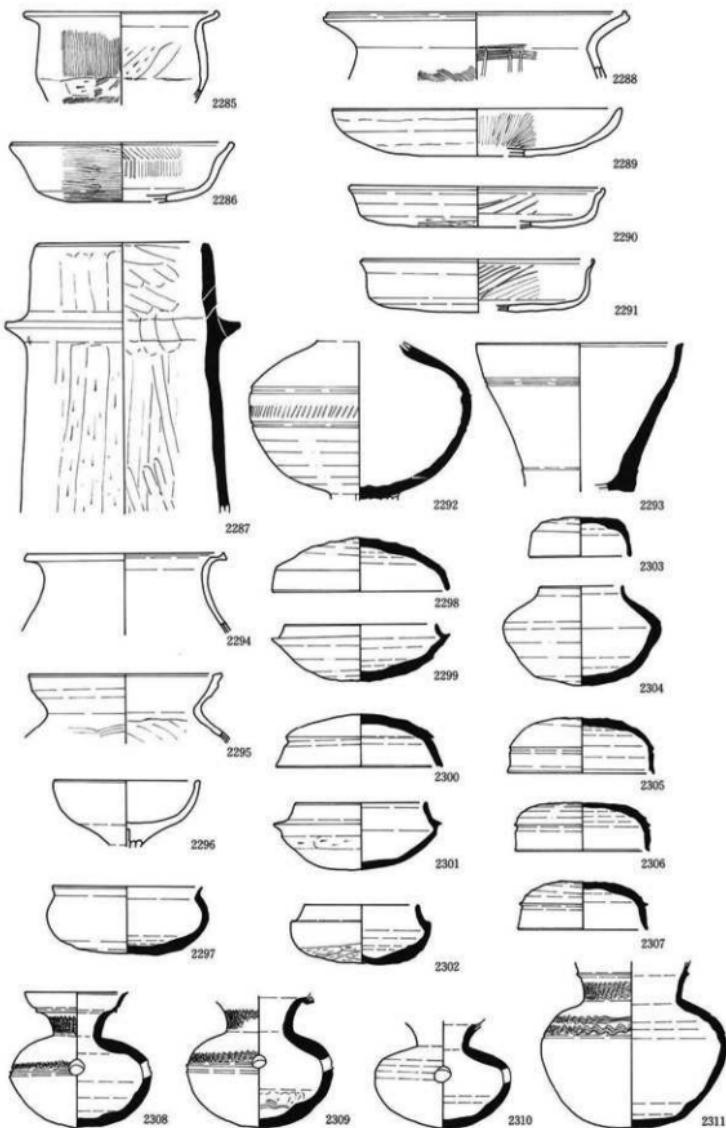


Fig. 355 G地区 河川6出土遺物(1)

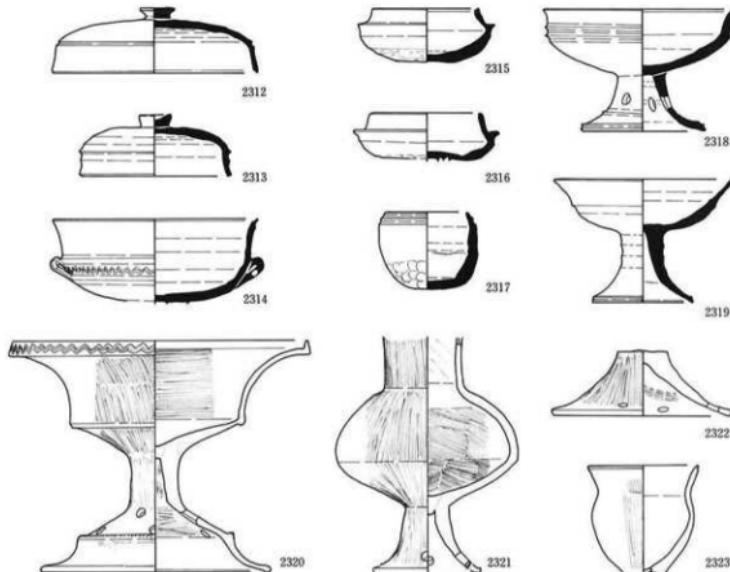


Fig. 356 G地区 河川 6 出土遺物 (2)

つ(2359)。

ミニアチュアには、竈がある(2355.2356)。小型の鉢を逆にした形で、口縁端部がわずかにつまみ上げられる。(2355)は、下端部の1/4を弧状に抉り取る。

須恵器には、蓋があり、蓋は、いずれも、つまみを欠損している(2360.2361)。坏身は、高台を持つもので、いずれも、完形である(2364.2365)。

なお、瓦器塗が1点のみ出土している(2334)。飯蛸壺は、須恵製の完形で、釣鐘型をし、外面に籠描きの文様が施される(2363)。土鍾は、土師質のもので、紡錘形で、側面を窪ませている。

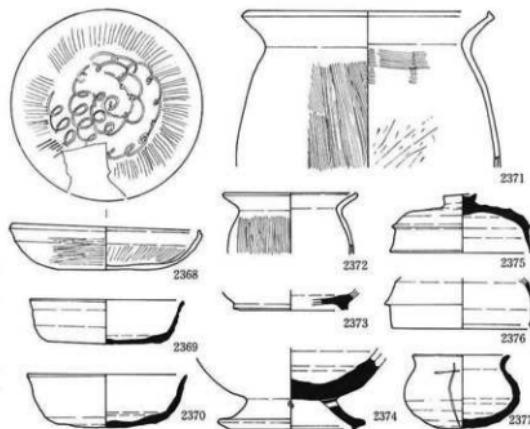


Fig. 357 H地区 河川 7 出土遺物

2. 遺物

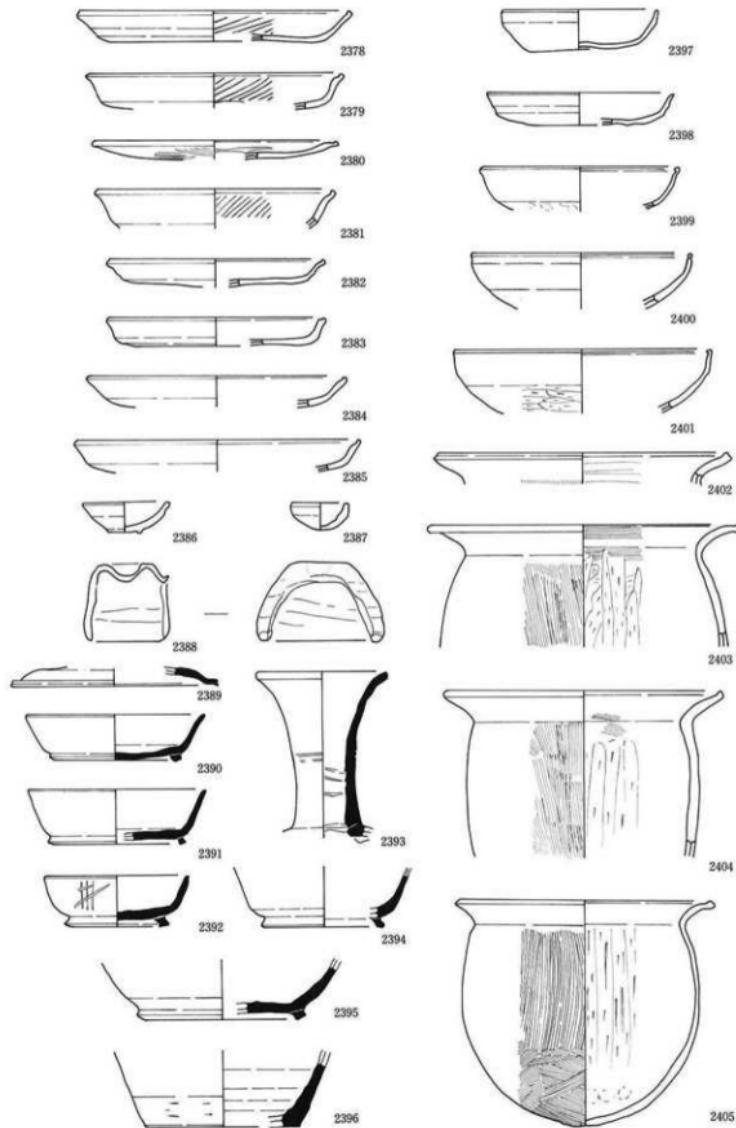


Fig.358 1地区 河川8出土遺物(1)

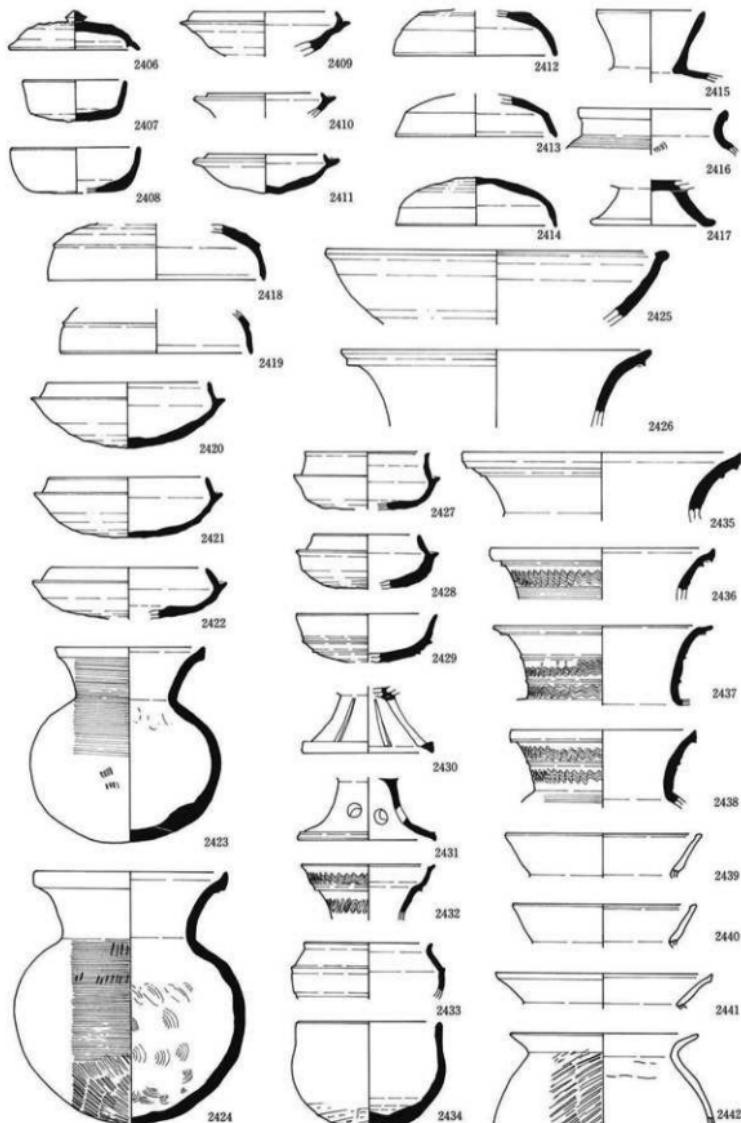


Fig. 359 I 地区 河川 8 出土遺物(2)

## 2. 遺物

他に、古墳時代の須恵器壺(2362)、甕(2386)がある。

### 河川 6 出土遺物(Fig.355,356)

G地区の北東で検出された河川 6 から出土した遺物は、土師器があり、他に、土管状土製品がある。

なお、古墳時代の遺物や弥生時代の遺物も多量に含んでいる。

土師器には、坏身、甕がある。坏身には、平坦な坏底部から屈曲して斜め外方に開く口縁部の端部が内方へわずかに肥厚し面をもつ(2286)、口縁部がわずかにつまみだされ、内面に沈線文 1 条を施す(2290.2291)、浅い坏部から斜め外方に開く口縁部の端部が丸みをもつ(2289)がある。(2286)は、外面にハケメ、内面に斜めおよび縱方向の暗文を施し、(2289.2290.2291)は、内面に放射状の暗文を施す。(2289)は、外面に粘土紐の離ぎ目を残す。(2285)は、小型の甕で、短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。体部の調整は、外面の上半がハケメ、下半がハケメ後へラケズリ、内面の上半がヘラケズリ、下半がナデである。内面に粘土紐の離ぎ目を残す。(2288)は、大型の甕で、短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり凹面をもつ。体部の調整は、外面がハケメ、内面がハケメ後粗いヘラミガキを施す。

土管状土製品(2287)は、須恵質のもので、下端部を欠損する。やや裾開きの円筒状と思われ、口縁部端部は面をもち、やや下がった所に断面三角形の凸帯を 1 条巡らす。外面に面取り状のヘラケズリを施し、内面に指ナデを施す。

他に、古墳時代中・後期の須恵器や土師器、前期の土師器(2320)、弥生時代後期の土器(2321～2323)等がある。(2300)の須恵器の蓋坏は、H地区の灰原出土のもの(1715)と類似している。

### 河川 7 出土遺物(Fig.357)

H地区的河川から出土した遺物は、土師器、須恵器があり、他に、古墳時代の須恵器がある。

土師器には、坏身、甕がある。坏身(2368)は、斜め外方に開く口縁部の端部がつまみ上げられ凹面をもつ。坏部の外面に、ヘラミガキを施し、内面に放射状および螺旋状の暗文を施す。

甕は、小型(2372)と、中型(2371)があり、いずれも、短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がりをもつ。体部の調整は、外面がいずれもハケメ、内面が前者がナデ、後者がハケメおよびヘラケズリである。

須恵器には、坏身、壺がある。坏身には、土師器を模倣したもの(2369.2370)と、高台をもつ(2373)がある。壺は、底部のみを残存し、「ハ」の字形の脚部を付ける。脚部の 2 方に円孔を穿つ。

### 河川 8 出土遺物(Fig.358,359)

I地区的河川 8 から出土した遺物には、土師器、須恵器があり、他に、ミニアチュアがある。

土師器には、坏身、皿、高坏、甕がある。坏身には、小型のもの(2397)、やや大型のもの(2399.2400)、大型のもの(2381.2401)等がある。やや大型のものは、斜めに開く口縁部の端部がわずかにつまみ上げられ、内面に沈線文を 1 条施し丸くおわる。(2381)は、斜め外方に伸びる口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。内面に放射状の暗文を施す。(2400.2401)は、塊状の坏部をもち、後者は外面にヘラケズリを施す。皿には、小型のもの(2398)と、やや大型のもの(2382.2383)、大型のもの(2378.2379.2384.2385)がある。(2378.2379)は内面に放射状の暗文を施し、(2383)は外面に「禾」偏のみ判読できる墨書きが施される。高坏は、坏部のみを残存し、浅い坏部からさらに外方へ伸びる口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。坏部外面に連弧状のヘラミガキを施し、内面に螺旋状の暗文を施す。

甕には、短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつもの(2403～2405)と、凹面をもつ

もの(2402)がある。いずれのものも、体部の調整は、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。

須恵器には、蓋坏、壺がある。蓋の(2389)は、つまみ部を欠損し、坏身は高台をもつもの(2390~2392, 2394)で、

(2392)には範記号が施される。壺は、長頸壺の口頸部(2393)と、底部のみを残存するもの(2395, 2396)がある。

ミニアチュアの土器には、塊(2386)、鍋(2387)、竈(2388)がある。竈の上部は押し凹され、底は矮小化している。内外面共に粘土紐の縦ぎ目を残す。

他に、古墳時代中・後期の須恵器や前期の土師器が出土している。

### 5) 落込み

A地区の落込みからは、須恵器のみが4点出土している。いずれのものも、坏身で、内方に伸びる口縁部の端部が尖りぎみにおわり、横方向に伸びる受け部の端部が鈍くおわる。坏底部は、平坦ぎみである。器壁が厚く一定しない。外面のヘラケズリは、粗雑に施される(2443~2446)。



Fig. 360 A地区 落込み1出土遺物



### 6) 谷状地形

C地区およびF地区の2か所で検出されたもので、陶器川の水流の影響



Fig. 361 C地区 谷状地形1出土遺物

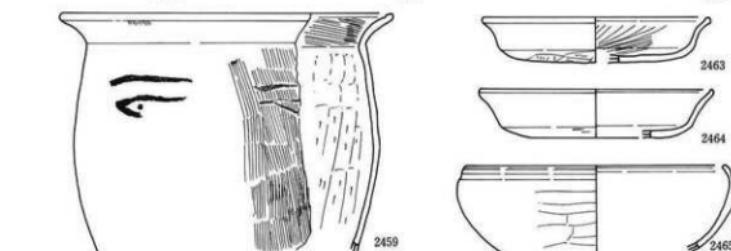
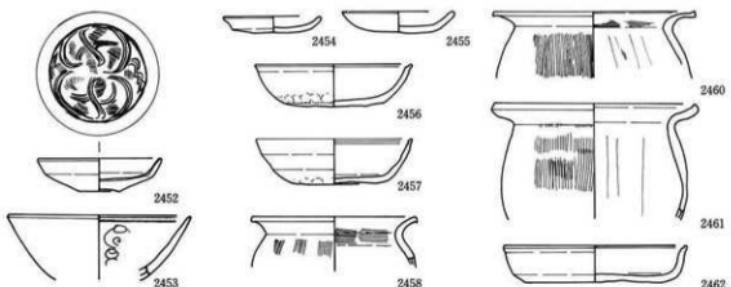


Fig. 363 G地区 包含層出土遺物

## 2. 遺物

で北西か南西に向けて切り込まれたもので、最終的に埋没するのは、中世に入ってからである。

### 谷状地形 1 (Fig. 361)

C地区の集落の北東にあたり、最下層からは古墳時代中期の須恵器の甕の体部破片が出土している。上層からは、瓦器(2447)、黒色土器(2448.2449)、須恵器(2450)が出土している。

瓦器は小皿で、斜めに伸びる口縁部の端部が丸みをもち、口縁部外面に強いヨコナデにより凹ませる。坏部外面に指印さえを残し、内面坏底部に一方方向のヘラミガキを施し、口縁部に横方向のヘラミガキを施す。

黒色土器は、いずれも底部を欠損する境で、前者の口縁端部は内傾するわずかな凹面をもち、後者は内傾する面をもつ。内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。

須恵器は、土師器の皿を模倣したもので、浅い皿状の坏部から屈曲して斜め外方に短く伸びる口縁部の端部が内傾する凹面をもつ。坏底部外面に回転ヘラケズリを施す。灰白色をした生焼けのものである。

### 谷状地形 2 (Fig. 362)

F地区的西端で検出されたもので、須恵器の坏身が1点のみ完形で出土している。坏身は(2451)、平坦な底部から屈曲して斜め外方に伸びる口縁部の端部が丸みをち、断面逆台形の高台をつける。高台の下面が凹面をもつ。

### 7) 包含層

当遺跡でのこの時期の包含層は、G地区で検出された以外では後世の削平を受けたためか顯著に残っておらず、わずかではあるが、E・F・I地区から遺物が出土している。

### G地区包含層出土遺物 (Fig. 363)

G地区的包含層からは、比較的にまとまって土器が出土している。土器には、青磁、土師器がある。

青磁は、小皿(2452)と壺(2453)があり、いずれも龍泉窯のものである。

土師器には、坏身、皿、壺、甕がある。(2456.2457)の坏身は、前者の口縁端部がわずかにつまみだされ凹面をもち、後者の口縁端部が丸みをもち内面の端部下に沈線文を1条施す。いずれも坏底部外面に指印さえを施す。(2454.2455)は土師器小皿である。(2462~2464)は皿で、(2463)の坏部内面には、放射状の暗文が施され、坏底部外面にはヘラケズリが施される。(2465)の壺は、内弯する口縁部をもち、口縁部の外面に強いヨコナデを施し、坏部の外面に粗いヘラミガキを施す。甕には、小型のもの(2458.2460.2461)と大型のもの(2459)があり、後者には、墨書きで眼と眉が描かれている。

その他に、E地区から出土した土師器の大型甕(2469)、F地区から出土した土師器の小型甕(2466)、I地区から出土した須恵器の坏身(2467.2468)等が、わずかにある。

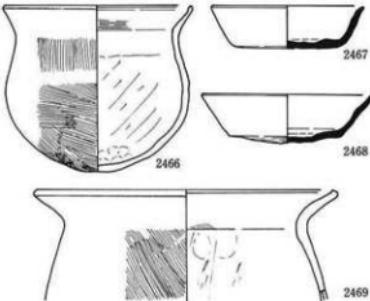


Fig. 364 E・F・I 地区 包含層出土遺物

### 3. 小 結

5世紀代より開始された泉北丘陵内の須恵器生産は、古代においても継続される。ただ、須恵器生産量は、8世紀に入つて再度隆盛を見たが、8世紀末には減少を見せており、9世紀代には細々と生産される程度になる<sup>1)</sup>。こうした須恵器生産の衰退は、内的・外的要因が複合して生じたものである。内的要因としては、燃料の枯渇が深刻になったことがあげられる。5世紀以降、燃料用の薪として膨大な樹木が伐採されたため、樹木の再生が間に合わなくなってくる。こうした薪不足に関する記録としては、「三代実錄<sup>2)</sup>」貞觀元年(859)に河内と和泉両国との間で薪を巡る争いがあつたことが記されている。

外的要因としては、最大の消費地であった平城京が長岡京・平安京へ遷都して輸送経路が長くなつたこと、それに連動して消費地に近い場所での須恵器生産が盛んになったこと<sup>3)</sup>、灰釉陶器や輸入陶磁器、金属器、漆塗り木製容器などが普及し、須恵器の需要が減少したことなどが考えられる<sup>4)</sup>。

陶邑における須恵器生産量の減少は、当然この地域の社会・経済に大きな影響を与えることになる。言わば、中央と密接に結びついた官営工業地帯から農業生産を基礎とする普通の地方へと回帰していくざるを得なかつたことになる。ただ、須恵器生産が盛んであった頃においても、農業生産は行われていたはずであり、須恵器生産が衰退したとしても、そのことによって地域社会が崩壊することはなかつたであろう。逆に、須恵器生産に振り向けられていた労力を農業基盤整備に投入することが可能となつとも考えられ、地域社会の再編を図りながら生活活動が継続されていったものと思われる。

この時期、農業基盤整備に伴う問題としては、班田収授法制定(652年)と条里制の施行がある。この条里制の施行に関しては、近年各地の発掘調査成果により、施行時期が当初考えられてきた7~8世紀ではなく、より新しい時期とする例が増えている。小阪遺跡の発掘調査においても、条里地割の残存する完新世段丘上のA~D調査区では古い条里の痕跡は検出されず、直接的には近世、傍証でも中世までしか遡れないとされてきた。しかし、I地区で検出された8世紀末以前と想定される小区画水田は、現条里地割と同一方向の畦畔を有するため条里水田である可能性が高く、従来の見解を大きく覆すものとなった。

I地区は、陶器川左岸部の条里地割分布の最上流部にあたり、傾斜のある地形となっている。そのことが幸いして、後世の水田再編時に伏尾丘陵側の高い部分は削平を受けたが、低い部分は削平を免れたものである。そのため、古い水田が検出されていないその1~4調査区においても、削平を受けたために水田が残っていない可能性が高い。この削平については、古墳時代包含層である特徴的な茶黒色粘質土がC地区などのごく一部にしか残しておらず、多くが縄文時代堆積層の上に直接中・近世の土層が乗ることから、ほぼ間違ないと考えられる。そうした点からしても、条里制施行時期については、検出された水田遺構だけで判断するのは危険であり、削平の有無やその程度なども考慮し、古い水田が消滅している可能性がないかどうかの検討も必要である。

石津川流域の現条里は、中・下流域に広範に施行されたN-16°-Wを指すものと、上流部のN-23°-Wを指すものがある。前者は石津川の最下流部を除く下流域の開析谷主軸に合致しており、小阪遺跡周辺の条里もこれに属している。条里地割の設定が下流域を基準に定められた以上、水田造成も下流域から始められたと考える方が自然である。I地区的水田造成時期が8世紀末からどこまで遡れるか不明であるが、少なくとも下流域から始められた条里制に則った水田造成が8世紀末までの段階で小阪遺跡周辺まで到達していたと言えるのではないか。そうした意味では、I地区という条里制施行地帯の末端

### 3. 小 結

に位置する場所で検出された水田は、8世紀、あるいは7世紀にまで遡るかもしれない石津川流域での大規模で組織的な水田造成を証明するものである可能性がある。

ただ、I地区の水田だけから、そのような大胆な推測を立てうることが許されるかは問題であり、結論を出すにはもう少し周辺の調査の進展を待たねばならないであろう。

この時期、この地方での農業基盤整備を裏づける資料としては、行基の溜池築造がある。行基年譜<sup>5)</sup>によると、石津川流域では茨城池（蜂田郷）、石津川支流の和田川流域で鶴田池（草部郷）と桧尾池（和田郷）が築造されている<sup>5)</sup>。行基は、計15の池を築造しているが、その内、和泉国内で8ヶ所を占める。和泉地方は、大河川が少なく、農業用水を得るために多数の溜池が作られている。行基年譜から、そうした溜池灌漑の方法が、和泉地方においても8世紀初期の段階には既に採用されていたことが分かる。こうした農業基盤整備に関しては、本来の律令制では国司を長とする行政側の責任であった。そのため、この地方においても、行政側の公的な溜池築造や用水路の設置も行われていたはずである。そうした痕跡を実際の発掘調査で裏付けることは困難であるが、この時期にある程度の開発の進展があったことは間違いないものと思われる。

8世紀代の水田開発に関する遺構としては、F・G地区で検出されたしがらみとダム状土盛りもある。F・G地区は、陶器川とその支流の原ノ池側の谷からの河川が合流する場所で、両河川の流路変更が繰り返された結果、複雑な凹凸を持つ地形を形成している。そうした場所のため、本格的な水田造成は中世以降になり、その水田も条里地割にはのらないものとなっている。8世紀代のしがらみとダム状土盛りは、細流の残る流路を制御するために設置されたもので、その目的は水田用水を得るためにある。このしがらみ、及びその周辺では木樋の部材も出土しており、10Fトレンチで出土した木樋は現存長5.3mもある。残念ながら、木樋がプライマリーな設置状態で検出されたものはないが、しがらみの部材として転用されたものもあり、この地域で相当数の木樋が使用されていたようである。

しがらみの用途であるが、それを推測するにあたっては、F地区のしがらみ1・2の底面のレベルがT.P.+21.2~21.5m前後であり、そこからどれだけダムアップしていたかが問題となる。ダム状土盛りの検出段階での高さがT.P.+22.0m前後であり、周辺の遺構面も同様の高さである。削平の影響を考える必要があるかも知れないが、おむねその程度の水位上昇はあったであろう。大規模な取水施設として考えれば、石津川と陶器川合流地点より下流の石津川右岸部の灌漑に使用されたとも考えられるが、右岸部の現地表面のレベルがT.P.+22.0m前後であり、勾配の点からその可能性は薄い。やはり、G地区の河川内で検出された水田のような小面積の水田に水を供給する施設であった可能性が高い。

ともかく、小阪遺跡では、古代以降、農村としての性格が強くなる。集落もC地区の散在的な掘立柱建物群を除けば、検出される遺構の大半が農業に関するものである。須恵器生産の衰退が、この地方を草深い純農村地帯へと変容させていったのであろう。

#### 註

- 1) 広瀬和雄 1990 「第2章第7節1 集落の諸相と産業遺跡」『大阪府史第2巻』大阪府 653~654頁
- 2) 「日本三代実録 前篇」『新訂増補 國史大系』吉川弘文館 22・27頁
- 3) 前掲註1 654頁
- 4) 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店 50~51頁
- 5) 続群書類從完成会 「行基年譜」『続々群書類從 第三 史傳部』 433・434頁

## 第5章 中～近世の遺構と遺物 —新田開発（乾田化）の時代



Fig. 365 周辺の地形と中・近世の遺構

## 1. 遺構

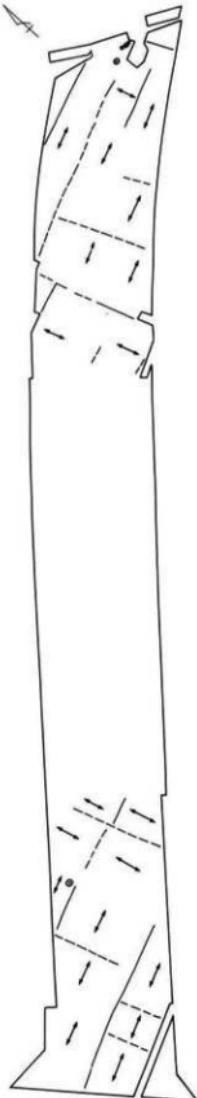


Fig. 366 中・近世河川と  
大畦畔・鋤溝の方向(1)

小阪遺跡における中～近世の遺構面は、この地域一帯でなされた大規模な水田改作に伴う削平の影響が大きい。古代の項で述べたように、C地区、およびG地区のごく一部に残されていた特徴的な茶黒色を呈する古墳時代の包含層は、隣接する太平寺遺跡の調査成果からしても、この地域一帯に広く分布していたはずである。その包含層が大半の地域で検出されないことは、削平規模の大きさを物語っている。しかし、この改作が一度に成されたのか、あるいは時期を変えて幾度も成されたのか、また、どれくらいの深度までおよんだのか等がこの時期の遺構を考える上で問題となる。ただ、この問題の解明は、非常に困難な側面を有している。それは、耕作による下への搅乱と、遺物の巻き上げにより、厳密な層序と時期の特定が難しいからである。

ともかく、この削平により小阪遺跡の多くの場所では、古墳時代以降中～近世までの遺構が鋤溝を除いて同一面で検出される状況を生んでいる。この水田改作は、陶器川旧流路の凹部を埋め立て、水田面を平坦化するものであり、水路網の完成と共に、長地形の区割を持つ現地表面に残された条里地割が完成する時もある。そうした意味では、上記の問題点を残しながらも、検出される遺構は大半が耕作に関係するものであり、近年まで残されていたこの地域の景観とそれほど齟齬しないものとなっている。

## 1. 遺構

### 1) 河川

河川1 陶器川右岸のE地区南端部で検出されたもので、中世段階での陶器川本流の右岸側にある。この地点での現陶器川の流れの方向は東南東→西北西であるが、5 E・6 Eトレーニチで検出された中世陶器川の右岸肩部もほぼ同じ方向を指している。河道内は、褐色系の砂礫を主に複雑な堆積状況を示しており、流路がポイントバー堆積の累積により徐々に現陶器川方向へ遷移していったようである。

各時点での河道幅は不明であるが、陶器川の本流である以上、相当の幅を持っていたものと思われる。右岸肩部から現陶器川右岸部までは30m以上あり、その間には左岸部の痕跡も検出されていない。河川の検出レベルはT.P.+20.0m前後である。川底は、さらに下層に別の河川の砂礫層が存在していて認定が難しかったが、遺物の有無、および部分的に残る青灰色粘土層を河川底とすると、T.P.+18m前後、深い部分では+17m近くまで達している。川底には偽礫が散乱していた。

出土した遺物は古墳～奈良時代の須恵器が多かったが、少ないながらも中世の瓦器塙や羽釜等が含まれていて、近世の遺物が混じらないため、この部分の河川の時期は中世の範囲内で収まるようである。

河川2 現陶器川左岸部のI地区北端部で検出されたもので、東→西方向に流れている。右岸部は不明であるが、川幅30m以上、深さも2mを超える所がある。南側の左岸部が完新世段丘崖を形成しており、段丘上と川底の比高差は3.8mにも及ぶ。埋没土は、褐色を呈する砂礫層を主としたもので、ポイントバー堆積である。最下層には偽礫も散在している。

遺物は、旧石器の翼状剣片や繩文土器、須恵器・土師器等の雑多な遺物と共に、15世紀くらいまでの遺物が出土している。河川1と状況が類似しており、同一河川の可能性が高い。

河川3 G地区の2・9・12Gトレーンチで検出された古代河川5の最終埋没段階のものである。流路の向きは、北東→南西であるが、緩やかにS字状に蛇行している。調査段階では平面的に検出していないため、幅は不明であるが、河川5よりは相当幅狭くなっている。断面図で見る限りでは、河川の切り込み面はT.P.+21.6m前後であり、両岸は極めて緩やかな傾斜をもって下がり、最も深い中央部でも0.6m前後の深さしかない。

埋没土は、灰オリーブ色シルトや灰白色粗砂等を主としたものである。また、中央部の主流路に堆積しているオリーブ黒色礫混じり粗砂層には、青灰色や灰色シルトのブロックを多く含み、不規則な堆積となっている。

遺物は、瓦器などが出土しており、中世の範囲に含まれる。

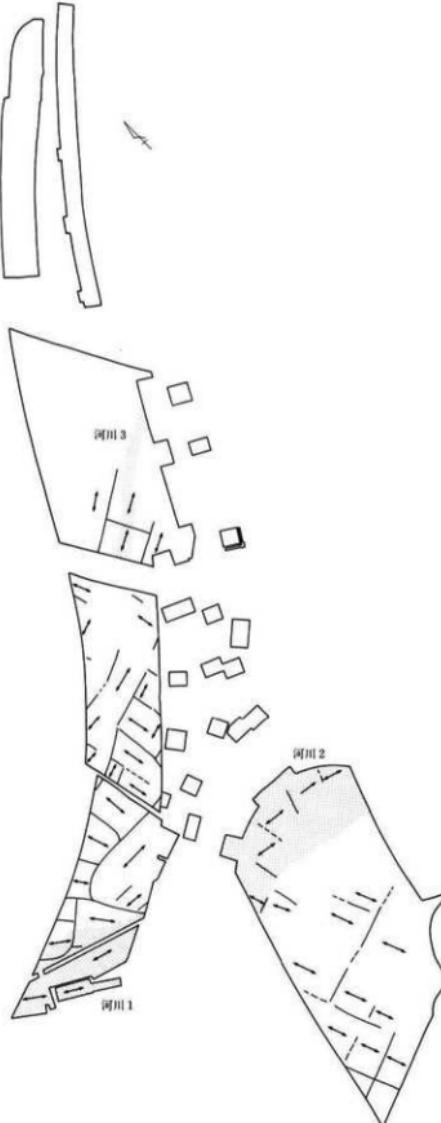


Fig. 367 中・近世河川と大畦畔・鋤溝の方向(2)

## 1. 遺構

### 2) 井戸

小阪遺跡の各調査区では、多くの井戸が検出されているが、大半が中・近世のものである。これらの井戸は、瓦積みや木枠組みのもの、検出段階では素掘りの状態のものまで様々な形態を持っている。埋没しているものだけではなく、使用可能状態のまま放置されているものもある。また、下は木枠等を使用しながら、最上部にコンクリート筒を被せているものもあり、修理しながら近代、あるものは現在まで使用されていたようである。こうした井戸は、農業用に掘削されたことは間違いないが、検出面からの深さが数十cmしかないようなものもあり、それらは肥溜や水溜であった可能性もある。

### 3) 粘土採掘坑

I地区 21トレンチで検出されたもので、計画的に粘土を採掘した跡である。採掘された粘土は、中・近世河川1がほとんど埋没した段階で、完新世段丘崖際に形成された長さ約30m、幅約15m程度の三角形状の非常に狭小な後背湿地にT.P.+20.6m前後まで堆積したものである。検出された採掘坑は計16

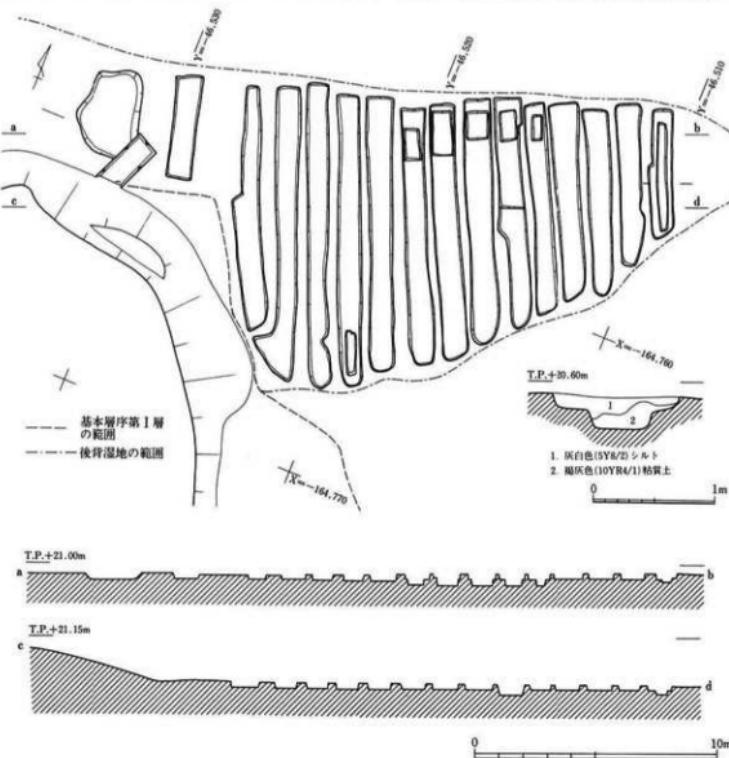


Fig. 368 I地区 粘土採掘坑平面および断面

であるが、粘土の堆積している部分にのみ分布している。採掘坑の形は、西端の1つを除いては長方形を呈している。幅は大半が1m前後で共通性があるが、長さは後背湿地の幅の最も広い部分で約12.5m、東端の狭くなった部分で約5mである。やや西側の離れた部分に存在する2つは、西端部のものが最大長3.5m、最大幅2.5mの長方形の一辺がふくられた形をしており、その東側のものは長さ約4m、幅約1mの長方形をしている。深さは、1回の掘削単位が約0.2mであることから、1段しか掘削されなかつた所は0.2m前後、さらに部分的にもう1段掘り下げられた部分は0.4m前後となっている。

採掘坑は、西端部の2つを除いて幅0.1m前後の削り残された壁によって区画されており、おそらくは繩張り等で区画が明示されていたものと考えられる。この1区画が一人の受け持ち単位であり、さらにもう1段下に掘削された場所のあるのは、粘土の足りない分を補ったものであろう。

粘土の採掘方法は、よく残された掘削痕から判断すると、刃幅20cmほどの偏平な鋤を使用し、ビート振りの要領で両端に切れ目を入れながら順次粘土を掘削していったものである。採掘坑の幅が1mのものが多いのは、5回横に移動したためである。また、掘削方向は、南から北へと進んでいる。

採掘坑の埋没土は、下層が淡灰色粘質土、上層が灰白色シルトである。採掘坑内で肥前焼系染付磁器の破片が出土している。

採掘された粘土の使用先であるが、採掘坑の北西側へ運ばれ、水田造成に使われた可能性が高い。北西側の中・近世河川1の埋没土である砂礫層の上には、ブロック状の粘土や土を敷きならした土層が存在し、そのブロック土の上では鋤溝が検出されている。そのことから、砂礫層の上に粘土を貼り、下への水の浸透を防ぐとともに、上半部を耕土として利用したのではないかと考え得るのである。粘土採掘坑の不足分を掘り足した個所が北側に多いことも、使用先が北側にあることを示唆している。

#### 4) 火葬土壙

I地区2Ⅰトレンチで検出された土壙で、火葬人骨が1体分検出された。検出面は、粘土ブロック混じりの整地層を除去した段階で現れる中・近世河川1の最終堆積層である灰白色砂礫混じり土上面である。

検出レベルはT.P.+20.4m前後であるが、西にやや下降している。全長1.2m、幅0.6m以上の隅丸長方形をしており、底部は2段掘りされているが、深さは約0.2mである。埋土は、上層がオーリーブ黄色ワラ灰混じり土、中層が灰白色ワラ灰、下層が灰白色ワラ灰に橙色焼土のブロックが多く混じったもので

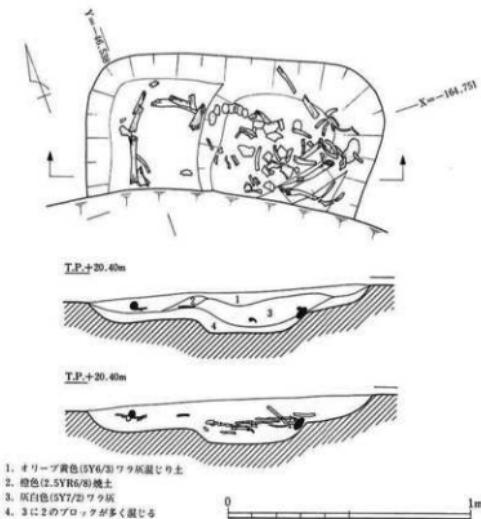


Fig.369 I地区 火葬土壙平面および断面と見通し図

## 1. 遺構

ある。壁面は赤褐色に焼けており、相当強い火力にあったことを示している。

人骨は中層に多く含まれており、よく焼けている。ほぼ1体分揃っているが、頭蓋骨が肋骨の下で破片となって検出されるなど人骨の配列には乱れがある。配列が乱れた原因としては、ワラ灰や焼土が特に土壤下部に堆積していることから、下にワラや柴などを厚く敷いた上に死体を置いて茶毬に付したために、骨が土壤底へ転落する過程で乱れた可能性が考えられる。土の混入が少ないと、土壤底面が赤化していることなどからして、土壤そのものが本来もう少し深かった可能性もある。

時期は、遺物が出土しなかったために特定しがたいが、ブロック土の整地層や粘土採掘坑よりも古いため、近世でも古い段階のものと考えられる。

### 5) 土坑

中・近世に属する土坑も幾つか検出されているが、多くは耕作活動に伴って形成されたものと思われる。不定形なものが多く、具体的な性格については特定しがたい。その中で、I地区101トレンチでは大小幾つかの土坑が検出されている。土坑1は、長径約3.6m、短径約2.4mの不定形なプランを有し、深さ約0.5mである。埋土は、上層が黒褐色粘質土、下層が黒灰色粘土である。南側に浅い不定形な土坑と接続している。土坑1の北側に近接して存在する土坑2は、長径約3.0m、短径約1.0mの不定形なプランを有し、深さが0.1mと浅く、埋土は黒褐色粘土である。

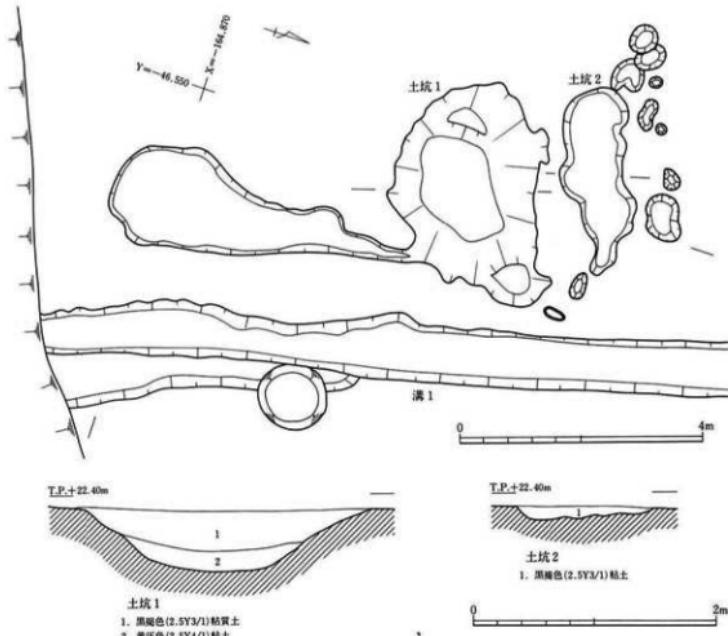


Fig. 370 I地区 溝1 土坑1.2 平面および断面

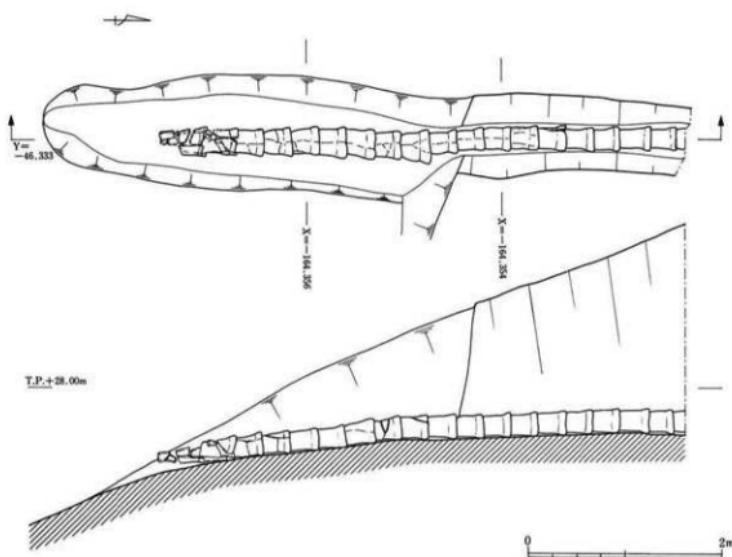


Fig.371 H地区 導水管平面および見通し図

## 6) 溝

中・近世に属する溝は、いわゆる堀溝（犁溝）と呼ばれる耕作に伴ってできる小溝群が無数に検出されるが、その他の溝となるとやはり用排水溝が大半のものとなる。ただ、こうした溝は、水田耕作に欠かせない重要な施設だけに常に手入れが行き届いており、改修も繰り返されている。そのため、溝開削時期を知る上で出土遺物の存在は欠かせないが、改修時に開削当時の遺物が掘り出されている可能性もあり、時期を決めがたいきらいがある。また、陶邑地域の特色として、陶邑開設以降の遺構には須恵器が混入している場合が多い。そのようなことから、各遺構の時期を特定するには困難が伴うが、そうした典型がI地区9Ⅰ・10Ⅰトレンチで検出した溝1である。

溝1は、幅0.6～1.0m前後、深さ約0.1m、埋土が灰黄色粘土である。この溝は、地表面の畦畔とはほぼ同一位置にあり、溝の方向もN-16°-Wと条里方向と一致している。地表面の畦畔は、今は他の畦畔と規模の差はないが、一応条里の坪境に当たっている。そのため、この溝も、本来は坪境の水路であったものが、水田の改作時に他の場所に付け替えられ、さらに入部が削平された結果、浅い溝として検出されたのであろう。ちなみに現在の水路は、2本西側の畦畔上に設置されている。

この溝の時期は、層位的にはI地区完新世段丘面上の遺構面1a面（近世）と1b面（14世紀頃）の間に位置付けられる。ただ、出土した遺物は、古墳時代須恵器や瓦器小皿、瓦質羽釜、近世陶磁器など多様な遺物が含まれている。そのため、一番新しい出土遺物を当該遺構の時期とすると近世に属すると言わざるを得ないが、条里坪境溝をその時期に限定できるかどうか問題を残している。

## 1. 遺構

### 7) 暗渠・導水管

小阪遺跡周辺においても、農業用に設置された暗渠が散在している。E地区の5E・6Eトレチで検出された暗渠は、「干」形に設置されており、幅30cm、深さ20cmで、底に径3cm程度の節を抜いた竹を1~4本並べ、その上に円礫を詰めていた。さらに、上面に板を敷いた後、暗灰色粘土を貼っていた。この設置された場所は埋没河川上で、南側の高台とは20cm前後の段差がある。そのため、暗渠は、一段低くて水の掛けにくい部分の排水を促進するために設置されたと考えられる。

H地区の2Hトレチ北端では瓦管を並べた導水管が検出されている。検出された場所は原ノ池の北岸部で、段丘斜面にある。段丘側は調査区外に出て不明であるが、検出長約5.5m、ほぼ段丘斜面に直交するように上幅約1m前後の溝を掘り、その底に管を敷設している。斜面部に設置されているため、北端部では溝底が2m以上の深さになっている。瓦管は計20個連結した状態で検出されている。瓦管の大きさは全長約30cm、基部径約24cm、先端部径約19cmであり、上流側に太い基部を配して連結している。管底部のレベルは、北端部でT.P.+27.5m、南端部でT.P.+27.2mと極めて緩やかな傾斜を有しており、瓦管の先端は斜面に口を出していた。この導水管の北側には小さな池が存在することから、この池から原ノ池へ水を落とすために設置されたものであろう。

### 8) 水田

小阪遺跡の範囲内では、陶器川左岸部にあたるA~D地区とI地区で条里水田がよく保存されている。それに反し、右岸部のE~G地区、および左岸部のI地区北端部では非条里水田が分布する。これは、前者が安定した完新世段丘面上に立地しているのに対し、後者が陶器川や原ノ池の谷からの流路が縦横に流入する不安定な地形であり、全面的な水田開発が難しく、開発時期が遅れたからであろう。

完新世段丘面の条里水田の始源については、I地区で検出された8世紀末以前に位置づけられる条里水田の拡がりが問題となるが、他の地区からは検出されなかった。その評価は難しいが、先にも述べたように古墳時代包含層が喪失していることからも、中・近世段階での大規模な水田改作に伴う削平を受けた可能性は高い。この削平のためか、完新世段丘上で検出される水田遺構は、大半が中・近世に属するものである。ただ、畦畔そのものが検出されることは少なく、大半が耕作に伴なういわゆる飼溝と総称される小溝群や人や牛の足跡である。畦畔が検出されないのは、多くは現畦畔と同じ場所にあったからと思われるが、飼溝群が畦畔に平行に検出される場合が多いため水田区画が推定される。I地区の1b遺構面の飼溝が現条里と同一方向を示し、その時期が14世紀代とされている所から、中・近世の水田は、一部例外はあるものの、条里地割にのっていることは間違いない。しかしながら、近世段階においても、I地区溝1のように条里的坪境溝の廃止と移転が行われており、最終的に現条里的景観になった時期については確定しがたい。

氾濫原の水田は、条里地割にはのっていない。これは、古代・中世段階でも旧河川が埋まりきっておらず、そこを全面的に水田化するには洪水の危険もあって困難を伴っためであろう。氾濫原の水田開発は、中世以降徐々に進められた可能性が高い。2Iトレチでは、近世段階で飼溝群が5面検出されており、水田面の嵩上げが図られている。また、5E・6Eトレチでも数次にわたって人為的に低地を埋め立て、耕作面の拡張・上昇を図った跡が検出されている。このように、窪地を埋め立てて平準化し、1区画の面積を広げるとともに、耕作面を上昇させて乾燥化を進め、水田の生産力を向上させる努力が続けられたのであろう。いわば、乾田化と圃場整備が不断に進められたということであろうか。

## 2. 遺 物

中近世の遺物には、河川出土のものが主に占め、他に、水田の埋土や包含層から出土している。

遺構から出土するものは、H地区の導水管に使用された瓦管があり、同じくH地区の土坑から曲物がある。他に、水田や畑の耕作土からわずかな遺物が出土するが、小片のため、実測不可能であった。

### 1) 土坑

H地区の土坑から出土した遺物には、曲物が1点ある。直径15cm、残存高7cmを測る。杓の身と思われる柄と底板を欠損する。側板の綴り合わせは2カ所あり、桜の皮で綴じ、その中央に長方形の柄孔を穿つ。側板の内面には、縦方向のケビキを数条施す。

### 2) 導水管

H地区の導水管から出土した遺物には、20個の瓦管がある。瓦管は、長径24cm、短径19cm、長さ30cmを測る。上方がわずかにふくらみ、上端部が面をもち、端部の内面の一端下がった所に段をもつ。下端は、わずかに据すばまりになり、端部が面をもつ。外面はヘラケズリ状のナデを施し、内面は布目圧痕を残す。

### 3) 河川

中世の河川には、E地区およびI地区を流れていたものがあり、土器が出土している。流れの方向や出土遺物の所属時期等から類推すれば、二つの河川は同一河川の可能性があろう。

#### 河川1出土遺物(Fig.374)

E地区の河川から出土した遺物には、土師器、瓦器、瓦質土器等があり、古墳時代後期の須恵器などを含んでいる。土師器には、甕、小皿、羽釜等がある。甕は小型のもので、底部を欠く。短く外反する

口縁部の端部が丸みをもち、内面に凹面をなす。

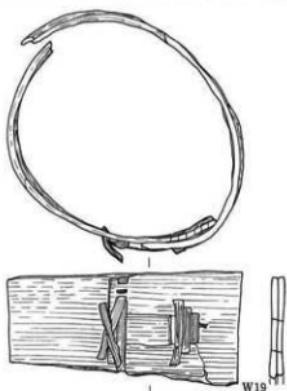


Fig. 372 H地区 土坑出土遺物

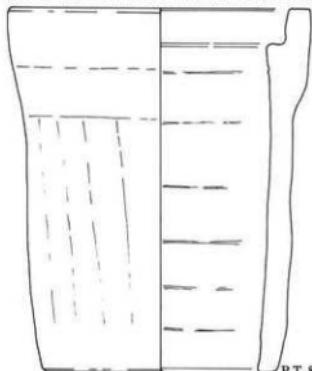


Fig. 373 H地区 導水管出土遺物

## 2. 遺物

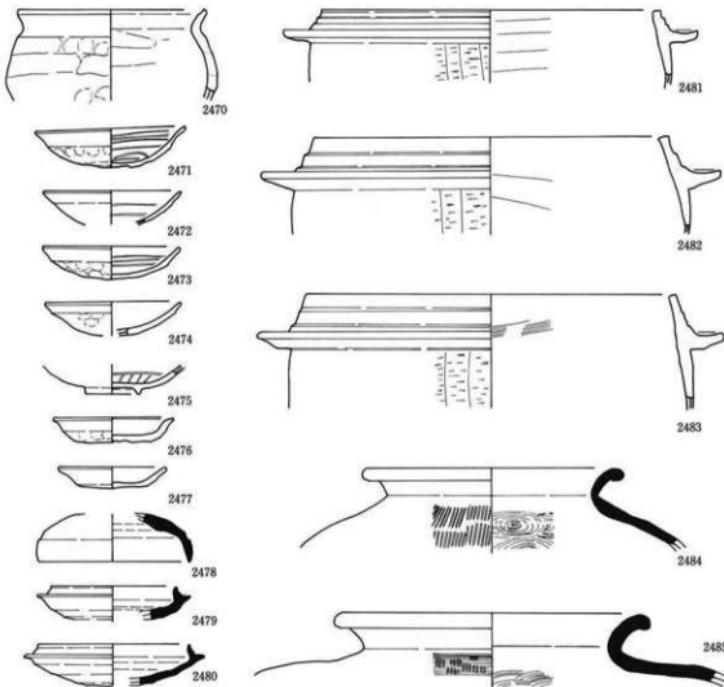


Fig. 374 E地区 河川1出土遺物

やや偏平な体部である。体部の調整は、外面に指押さえを施し、内面に指ナデを施す。内外面に粘土紐の難ぎ目を残し、外面に煤が付着する(2470)。小皿は完形のものが多く、平坦な底部から屈曲して斜め外方へ開く口縁部の端部で、(2476)が内傾する凹面をもち、(2477)が丸みをもつ。調整は、内外面ともに指ナデを施し、前者の底部外面には、指押さえが残る。

瓦器には、塊があり、断面逆台形のしっかりした高台がつくもの(2475)と、わずかな粘土紐を巡らして高台を付けるもの(2471)、やや小型で高台を付けないもの(2472~2474)がある。内面には、(2475)が底部に一方方向の暗文を施し、(2471)が螺旋状の暗文を施す。

瓦質土器には、羽釜があり、いずれも、口縁部破片である。内傾する口縁部の上端が面をもち、外面に段をもつ。鍔は、やや斜め上方に伸び、端部が面をもつ。体部外面に面取り状のヘラケズリを施し、内面にナデおよびハケメを施す。外面の鍔以下に煤が付着する。

他に、古墳時代の須恵器の蓋坏、壺等がわずかにある。

### 河川2出土遺物 (Fig. 375, 376)

I地区の河川2から出土した遺物には、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器等があり、他に、古代の土器や古墳時代の土器を多く含んでいる。

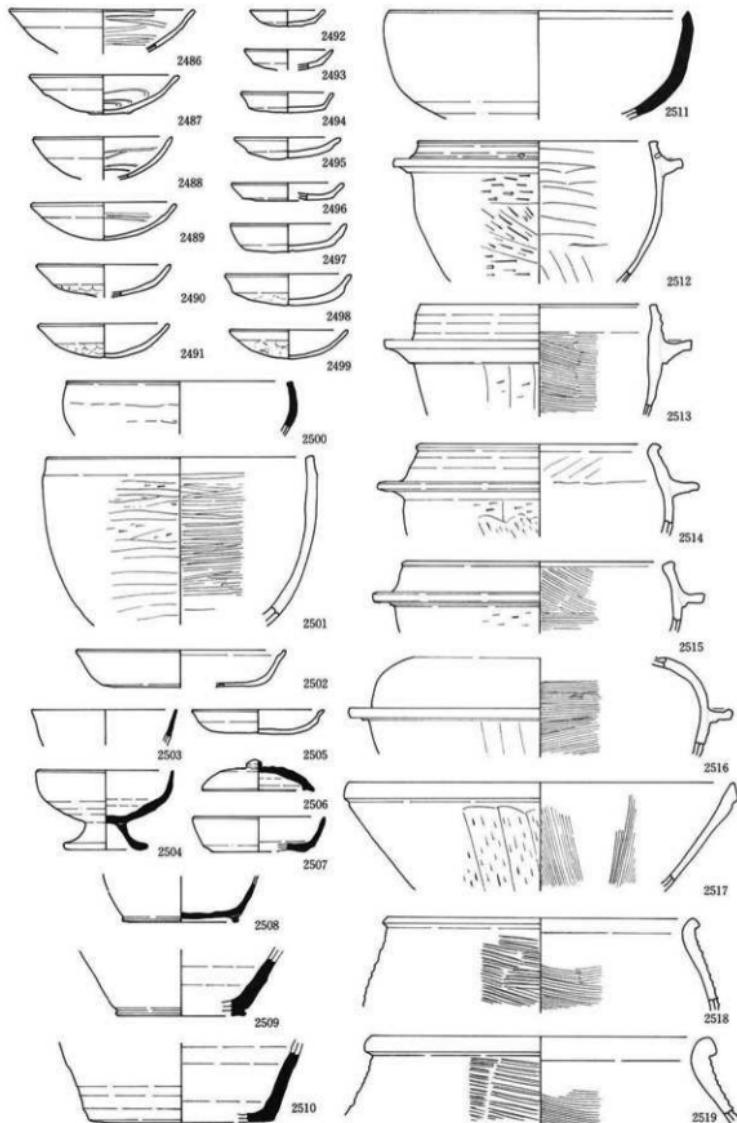


Fig.375 I地区 河川2出土遺物(1)

2. 遺物

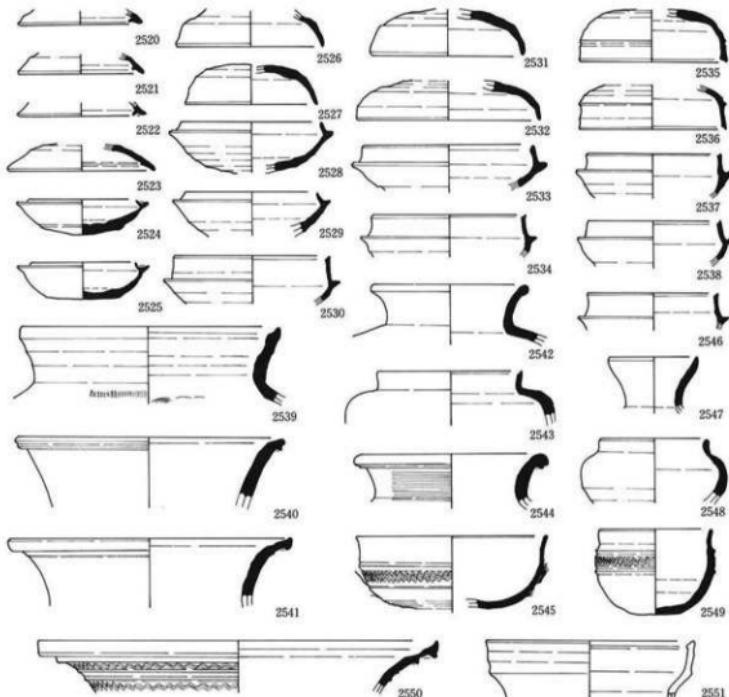


Fig.376 I 地区 河川2出土遺物(2)

土師器には、小皿、塊、羽釜がある。小皿には、小型のもの(2493~2495)と、やや大型のもの(2496~2498)がある。塊には、底部を欠損するが、直口のものがあり、口縁部の上端が面をもち口縁部の外面が強いナデにより凹面をもつ。体部の調整は、外面にヘラケズリ後粗いヘラミガキを施し、内面にヘラミガキを施す。二次焼成を受ける(2501)。羽釜は、やや小振りのもので、内傾する口縁部の端部が上端面をもつもの(2512.2513)と、わずかに外方へ肥厚するもの(2514)、わずかに内外に肥厚し上端面をもつもの(2515)がある。(2512~2514)の口縁部の外面には、わずかな段をもつ。鈎は、やや斜め上方へ伸び、(2514)が丸みをもつ以外は、面をもつ。体部の調整は、外面にヘラケズリ、内面に(2512.2514)が指ナデ、他は、ハケメである。体部外面にいずれも、煤が付着する。

瓦器には、塊と小皿がある。塊には、小型のものが多く、(2487)がわずかな粘土紐を1条付け足した高台をもち、(2488~2491.2499)が高台を持たないものである。(2486~2489)の坏部の内面に暗文を施す以外は、施されない。瓦器小皿(2492)は、やや小型のものである。

瓦質の羽釜には、口縁端部を欠損するものがあり(2516)、内弯する口縁部に、横方向に伸びる鈎の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。体部内面にハケメ、外面に面取り状のナデを施す。瓦質の摺鉢は、斜め外方に伸びる口縁部の端部が面をもつもので、内面に粗いハケメ、外面に面取り状のヘラケズリを

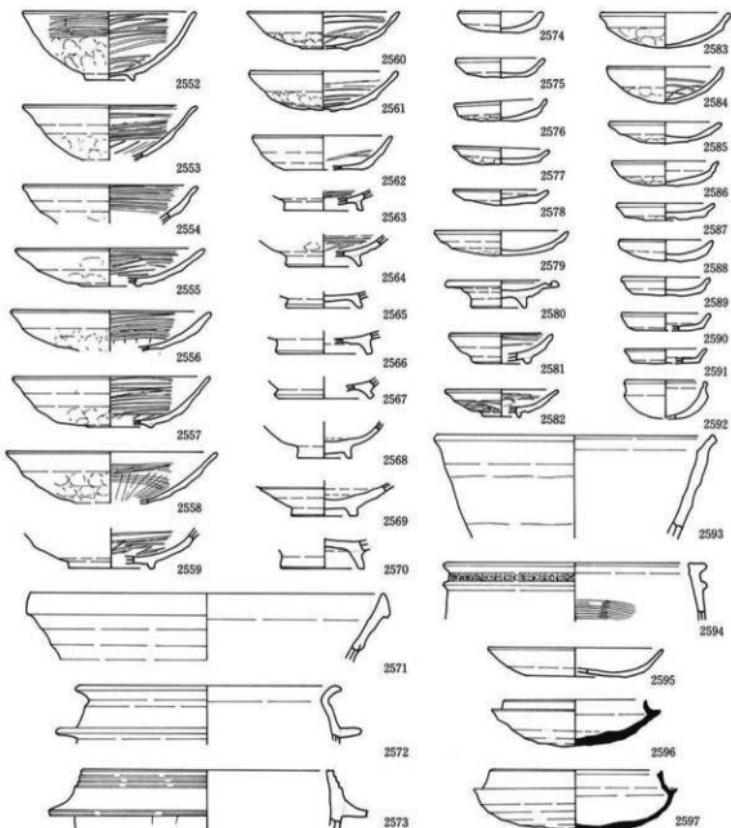


Fig.377 G地区 中世包含層（I-5層）出土遺物

施している。

漆焼きの甕には、土師質のものと(2518)、瓦質のもの(2519)がある。いずれも、短く外反する口縁部の端部が面をもつもので、体部の外面に粗い平行叩き目を施し、内面にハケメを施している。

#### 4) 包含層

中世の包含層は、G地区では顕著であるが、他の地区では耕作土の埋土として残っている場合が多く、磚溝等に瓦器片がわずかに含まれるが、実測可能なものが無い。

G地区の中世の包含層は、西半部分で大きく2層に分かれれる。下層のI-5層は、最下部では沼状堆積と判別が不可能な状況である。

I-5層出土遺物(Fig.377)

## 2. 遺物

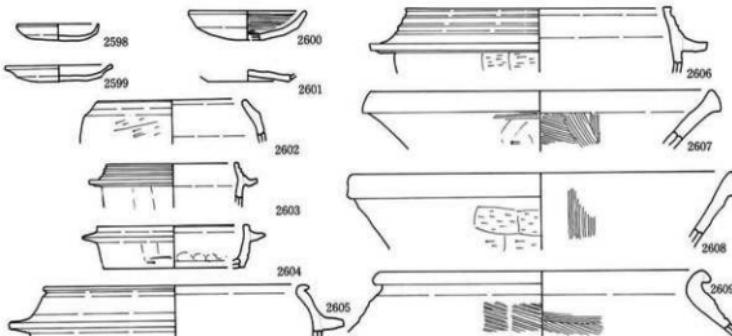


Fig. 378 G地区 中世包含層(I-4層)出土遺物

I-5層から出土した遺物は細片が多く、完形になるものは、小皿ぐらいの物である。遺物には、土器があり、土師器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、白磁があり、他に、古代の土師器や古墳時代の須恵器がある。

土師器には、皿、壺、鉢、羽釜等がある。皿は小型のもので、手づくねのものが多く(2574~2578)、(2579)は、やや大型で口縁部外面に強いヨコナデが2周する。(2580)は、高台が付くもので外方に開く口縁部の端部が丸みをもち、内面に沈線文を1条施す。(2593)の鉢は、口縁部が短く外反し、端部が面をもち、据すぼまりの体部をもつ。体部は、内外面ともにナデを施し、外面に粘土紐の雜ぎ目を残す。内外面に、煤が付着する。羽釜には、口縁部が短く外反し面をもち、鈎が横方向に伸び端部が丸みをもつもの(2572)と、内弯する口縁部の上端が面をもち、口縁部外面に段を施し、鈎が横方向に伸びその端部が凹面をもつ(2573)がある。いずれのものも、外面に煤が付着している。

黒色土器には、高台部を残すのみの壺があり(2565~2567)、(2566)のみが外面が淡褐色をしており、他は、内外面ともに黒褐色である。(2592)は小型のもので、半球上の体部に斜め上方に伸びる口縁部の端部が丸みをもち、口縁部の内外面に強い横ナデを施す。

瓦器には、壺と小皿がある。壺には、坏部の深いもの(2552~2554)と浅いもの(2555~2558)、やや小型のもの(2560~2562)等がある。(2559.2563.2564)は、高台部を残すのみであるが、しっかりした高台を付けるが、他は、わずかな粘土紐を1条施すのみのものが多く、(2562)は、高台を付けないものである。いずれも、内面に暗文を施し、坏部外面に指押さえを残す。(2581.2582)は、小型の壺で、高台を付けるものである。いずれも、内面に暗文を施し、後者は外面にヘラミガキを施す。小皿には、やや大型のもの(2583~2586)と、小型のもの(2587~2591)がある。

瓦質土器には、摺鉢、鉢、羽釜等がある。摺鉢(2571)は、斜め外方に伸びる口縁部の端部が下方へわずかに垂下し、面をもつ。小破片のため、内面のカキメが不明である。鉢は深鉢(2594)で、口縁部のみを残存し、やや内傾する口縁部の端部が外方へわずかに伸び上端面をもち、端部下に断面三角形の凸帯を1条施し、その口縁端部との間にX字形のスタンプ文を施す。体部の調整は、外面ナデ、内面にハケメを施す。

白磁には、底部のみを残存するものがある(2568.2569)。

I-4層出土遺物(Fig. 378)

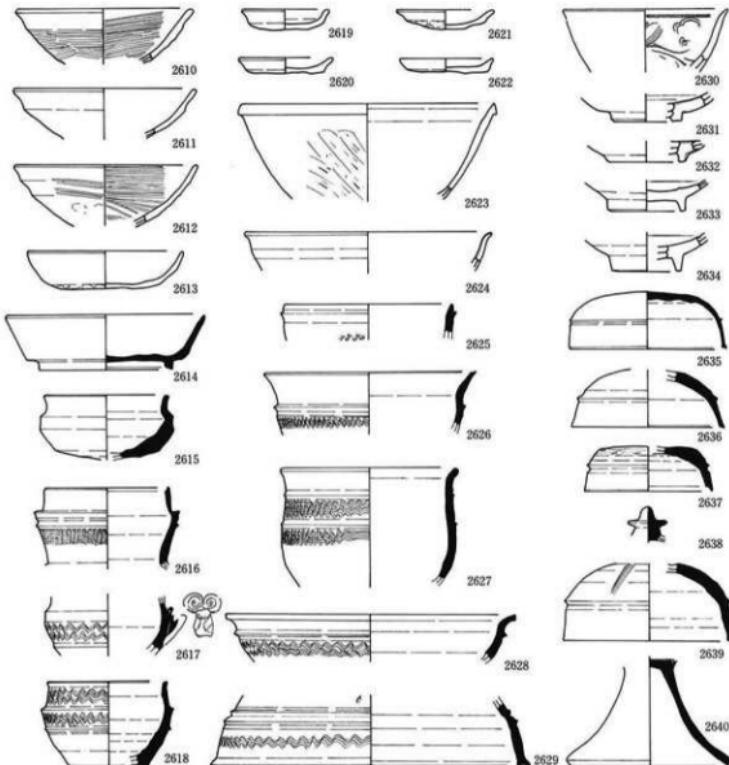


Fig. 379 各地区 中世包含層出土遺物(1)

I - 4 層から出土した遺物には、土師器、瓦質土器、青磁等がある。土師器には、皿、羽釜等がある。皿には、小皿があり(2598～2600)、(2600)はやや大型で、内面の底部に一方方向のハケメを施し、以上に横方向のハケメを施している。羽釜は、内傾する口縁部の端部がわずかに外方へつまみ出されるもので、鈎は横方向に伸び、端部が面をもつ。外面に煤が付着する(2605)。(2604)は小型のもので、直口の口縁部の上端が面をもち、鈎が横方向に伸び、端部が尖りぎみにおわる。体部はやや据すばまりの体部に、底部は平らである。外面に面取り状のナデを施し、内面の底側部に指押さえを残す。外面に煤が付着する。

瓦質土器には、鉢、羽釜、摺鉢、甕等がある。鉢は、口縁部が内傾し口縁部の端部が丸みをもつ。体部の外面にヘラケズリを施し、

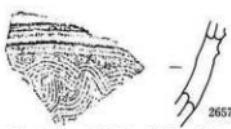


Fig. 380 各地区 中世包含層出土遺物(2)

## 2. 遺物

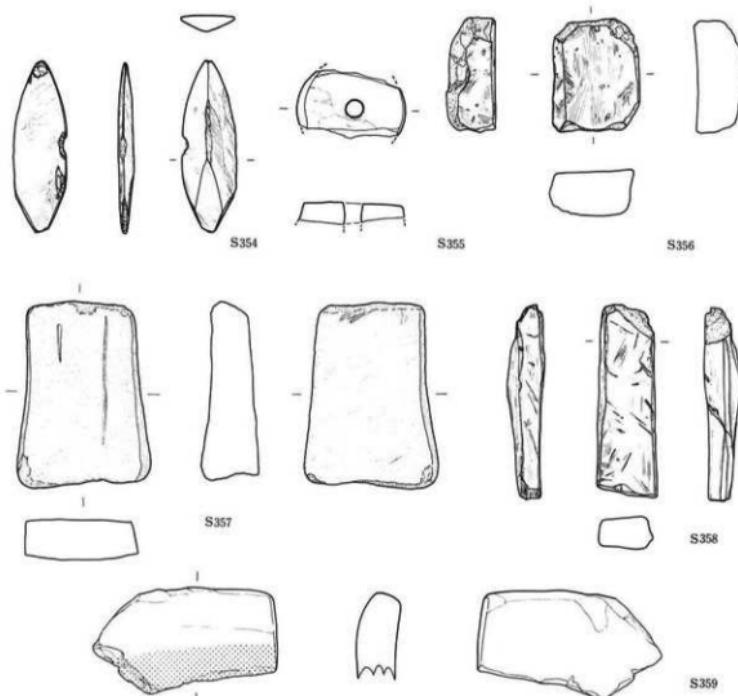


Fig. 381 各地区 中世包含層出土遺物(3)

内面にナデを施す(2602)。羽釜は、内傾する口縁部の上端が面をもち横方向に伸びる鈎の端部が面をもつ。外面にヘラケズリを施し、内面にナデを施す(2603.2606)。いずれも、外面に煤が付着する。摺鉢には、斜め外方に伸びる口縁部の端部がわずかに垂下し面をもつもの(2608)と、わずかに上下に拡張し面をもつもの(2607)がある。外面はいずれも、ヘラケズリを施し、内面は前者が粗いハケメを施し、後者が斜めおよび縱方向のハケメを施す。甕は湊焼きのもので、短く外反する口縁部の端部が面をもつ。体部の調整は、外面が粗い平行叩き目、内面がハケメを施している。

青磁は、底部のみを残存する小皿である(2601)。

各地区的包含層出土遺物(Fig. 379~383)

その他の地区から出土した中・近世の包含層の遺物には、土器、石器、鐵器等がある。いずれも、中・近世の遺物は少量で、それ以前の遺物が大半を占める。

土器には、瓦器塊(2610~2612)、土師器小皿(2619.2620.2622)、瓦器小皿(2621)、瓦質摺鉢(2623)、白磁(2624.2633.2634)、青磁(2630~2632)等が出土している。

(2656.2657)は、B地区の中世包含層から出土した古墳時代中期の須恵器であるが、いずれも器台と思われる外面に凸線文および備描の組紐文を施すものである。

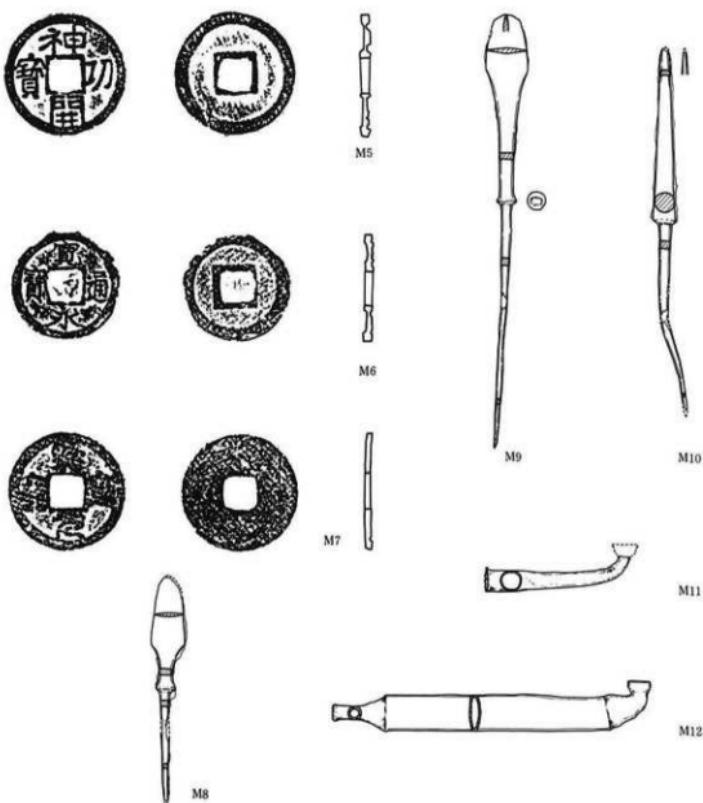


Fig.382 各地区 中・近世包含層出土遺物 (M5~7縦1/1、M8~12縦1/2)

石器には、滑石製模造品(S 354)、紡錘車(S 355)、砥石(S 356~358)、石鍋(S 359)等が出土しているが、いずれも、古墳時代の遺物と考えられる。

(S 354)は、剣形のもので、丁寧な研磨痕を残す。茎部に穿孔が見られず、未製品の可能性がある。

(S 355)は、一部を残すのみの破片で緑色片岩製である。

(S 356~357)は溶結凝灰岩製で、S -358は粘板岩製である。

(S 359)は、滑石製の口縁部破片で上端部が面をもち、外面口縁部下にわずかな段をもつ。外面がわずかに赤変しており、二次焼成を受けたと思われる。

鉄器には、鉄鎌(M 8~10)、貨銭(M 5~7)、キセル(M11~12)等がある。

鉄鎌は、いずれも、中子が長く中世以降のものと思われる。

貨銭には、神功開寶(M 5)や寛永通寶(M 6)等が出土している。

### 3. 小 結

キセルは、近世以降のものと思われる。

近世の遺物は、水田の耕土からや、旧陶器川の埋土に含まれるもので、わずかなものである。

遺物には、陶磁器類や瓦等が出土しているが、実測可能なものがわずかである。

(2642)は天目茶碗で、(2645)は伊万里の碗である。

(2655)は備前の摺鉢である。

なお、中世の羽釜や土師器等もわずかに含んでいく。

### 3. 小 結

中・近世における小阪遺跡は、旧来からの耕地の再編と新たな新田開発が行われる時期である。完新世段丘上では、条里水田の大改造が実施される。この改造により、旧米の水田区画が破壊され、現地表面に展開する水田区画がほぼ完成する。そのため、改造成時の水田区画と現水田区画が重なっており、改造の具体的な状況を知ることは困難である。ただし、現水田の床土下より、近世に位置づけられる鋤溝面が検出されており、それらの方向が現水田の畦畔方向と一致することから、近世段階には確実に現水田区画が完成していたことが判明している。

この水田区画は、条里制に則ったもので、坪内は長地型に細分されているものが多い。ただ、長地型でも10分割された定型的なものは少なく、分割数に規則性はない。また、畦畔間隔も不揃いなものが多い。これは、I 地区の 1 a 遺構面で近世水田の坪境溝が廃止され、他に移転している例が検出されていることからも、畦畔のある程度の改廢と移動が隨時行われていたためと思われる。

この水田の改造成的時期であるが、厳密には特定しがたい。I 地区の14世紀代と想定される 1 b 遺構面の鋤溝が、現条里と同一方向を示していることから、この段階には改造成が済んでいる可能性はあるが、8世紀末以前の水田も現条里と同一方向の畦畔を持っており、必ずしも決め手とはならない。C 地区の沼状堆積の完全埋没が中世であり、その後に水田化されていることからして、中世のある段階に改造成を受けた可能性が高いとしか言いようのないのが現状である。

F・G 地区、及び I 地区の氾濫原は、陶器川、および原ノ池側の開析谷からの流路の影響を強く受けしており、部分的な水田開発はあっても全面的な開発は遅れていた。この地域の全面的な開発は、時期は特定できないものの、中・近世にかけて凹凸を均し、水田区画を拡大する形で徐々に行われたようである。こうした全面的な開発が可能となったのは、原ノ池の存在が大きいと思われる。原ノ池の築造時期は不明であるが、堀上・南・北・平井・小阪・東の 6ヶ村53町余の灌漑を受け持つ大池である。この池が上流部にでき、この地域の洪水の危険性が減ったために、開発が可能となったのではないか。なお、原ノ池の築造の時期については、堤防に立削を入れたものの、残念ながら手掛かりは得られなかった。

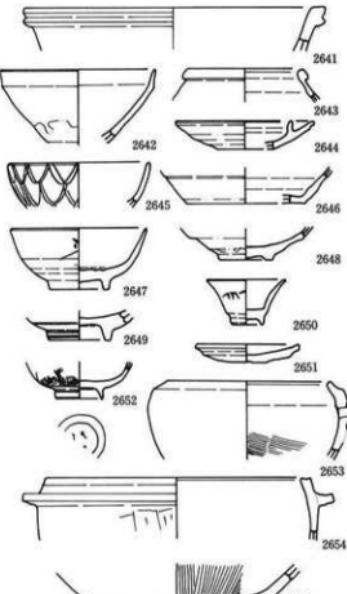


Fig. 383 各地区 近世包含層出土遺物

## 小阪遺跡本報告書

—近畿自動車道松原海南線・府道  
松原泉大津線建設に伴う発掘調査—

発行年月日	1992年3月31日 発行
編集著作 発行者	大阪府教育委員会 大阪市中央区大手前2丁目1-22 財団法人 大阪文化財センター 大阪市城東区蒲生2丁目10-28
印刷所	株式会社 中島弘文堂印刷所 大阪市東成区深江南2-6-8

WANNAHADDELLA, SRI LANKA, 1998

WANNAHADDELLA, SRI LANKA, 1998